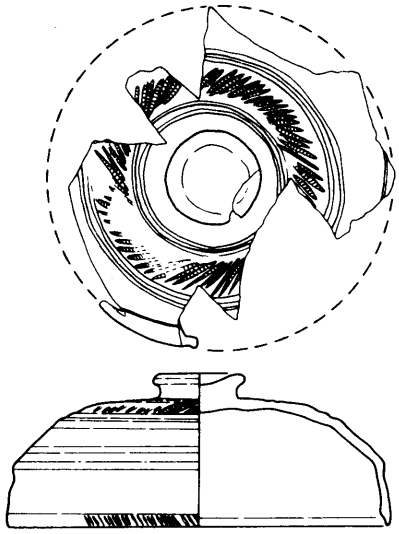
三重県埋蔵文化財調査報告 115-6

一般国道23号中勢道路(6工区)建設事業に伴う

南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告



1995・8

三重県埋蔵文化財センター

南谷遺跡全景

稲生遺跡全景

序

鈴鹿市の南部を東流して安芸郡河芸町で伊勢湾へと注ぐ２級河川中ノ川の流域には、古来より多くの遺跡が営まれてきました。とくに、古墳時代後期においては、徳居古窯址群と稲生古窯址群というふたつの須恵器窯跡群が存在し、当時としては三重県下最大の窯業地帯となっていました。

さて、今回報告する南谷遺跡・稲生遺跡は、一般国道23号中勢道路（６工区）建設に先立って調査されたもので、南谷遺跡では弥生時代後期の高地性集落の一端が、稲生遺跡では古墳時代後期の33基もの竪穴住居と多量の須恵器の出土が注目されました。

開発と埋蔵文化財の保存は古くて新しい問題ですが、少なくともこのような調査後やむなく破壊される多くの遺跡について、わたくしどもに課せられた重要な責務のひとつは、その膨大な記録を整理して報告書というかたちで世に公開することであると考えています。そして、それらをもとに、当該地域の歴史を少しでも明らかにすることができれば、ひいてはそれが埋蔵文化財の保護・啓蒙にかならずや結びつくと確信しております。

調査にあたり協力いただいた関係諸機関および地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

最後に、この報告書が、地域の歴史と文化に対するご理解の深まりの一助になることを願いますとともに、県民の皆様の文化財保護へのより一層のご理解とご協力を念願して序文といたします。

平成７年８月

三重県埋蔵文化財センター
所長　川　村　政　敬

例　　言

1．本書は、平成６～７年度に三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道23号第６工区（鈴鹿）建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書（第１～２分冊）のうち、南谷遺跡・稲生遺跡（第１分冊）の報告書である。

2．南谷遺跡は鈴鹿市稲生町字南谷に所在し、発掘調査は平成４年４月から同年６月にかけて実施した。稲生遺跡は、鈴鹿市稲生町字稲生山に所在し、発掘調査は平成４年４月から同年７月にかけて実施した。調査にかかる費用は、両遺跡とも建設省中部地方建設局の全額負担による。

3．調査は、次の体制で実施した。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

現地調査業務　〔平成４年度〕

調査第２課長　新田　洋

主査兼第３係長　駒田利治

主事　本堂弘之・小菅文裕

技師　穂積裕昌

主事　山口　格・中村光司（津市教育委員会より派遣）

調査補助員　中村慎太郎

藤田有紀・川崎志乃・竹内貴栄・山本千景（皇学館大学学生）

（室内整理員）

一木八千代・市川嘉子・小坂規美子・太田浩子

整理・報告書作成業務〔平成６年度〕

主幹兼調査第２課長　伊藤克幸

主査兼第３係長　河北秀実

主事　本堂弘之・山本義浩・中川　明

技師　穂積裕昌

主事　宮田勝功・中村光司（津市教育委員会より派遣）

〔平成７年度〕

主幹兼調査第２課長　伊藤克幸

主査兼第３係長　河北秀実

主事　宮田勝功・山本義浩

技師　穂積裕昌

主事　池端清行・米山浩之（津市教育委員会より派遣）

主事　筒井昭仁（鈴鹿市教育委員会より派遣）

現場作業　社団法人中部建設協会

4．現地調査については、第一次調査（範囲確認調査）を平成３年度に調査第２課第１係主事森川常厚（当時）が行い、第２次調査（本調査）については南谷遺跡を本堂弘之・小菅文裕が、稲生遺跡を穂積裕昌・本堂弘之・小菅文裕が担当した。

5．発掘調査ならびにその後の整理過程において、以下の方々のご指導・御教示を得ました。記して感謝の意を表します。(順不同・敬称略)
八賀　晋（三重大学教授）・斎藤孝正（文化庁）・坂　　靖（橿原考古学研究所）・近藤　伶（徳島県埋蔵文化財センター）・高橋　誠（佐倉市教育委員会）・藤原秀樹（鈴鹿市教育委員会）・新田　剛（鈴鹿市教育委員会）・伊藤友子（三重県立上野農業高等学校）

6．本書に掲載した写真は、航空写真以外の遺構写真は各担当者および駒田利治が、遺物写真は本堂弘之が撮影した。本書の編集は穂積裕昌が担当し、それぞれの執筆分担は目次および文末に記した。

7．当遺跡については、すでに『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財調査概報』Ｖとしてその調査概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。

8．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

9．本書で報告した遺跡の位置は国土座標第Ⅳ系に属している。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、真北は座標北のＮ０°21′Ｗ、磁北は座標北のＮ６°41′Ｗである。

10．本書で使用した遺構の名称・番号は調査時点での呼称を踏襲せず、新たに改称したものである。

11．本書で使用した遺構表示略記号は下記による。
ＳＤ：溝・大溝　ＳＨ：竪穴住居　ＳＫ：土坑　ＳＺ：不明・その他

12．　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．前言 …… （穂積裕昌）
1．調査に至る経緯 …… 1
2．６工区の範囲確認調査 …… 2

Ⅱ．位置と環境 …… （小菅文裕・穂積） 3

Ⅲ．南谷遺跡 …… （小菅）
1．はじめに
(1) 遺跡の立地と周辺の状況 …… 7
(2) 調査の方法 …… 8
2．発掘された遺構と遺物
(1) 基本層序 …… 12
(2) 遺構の概要 …… 12
(3) 各説 …… 12
3．結語 …… 18
遺物観察表 …… 23
写真図版 …… 25

Ⅳ．稲生遺跡 …… （穂積）
1．はじめに
(1) 遺跡の立地と周辺の状況 …… 29
(2) 調査の方法 …… 30
2．発掘された遺構と遺物
(1) 基本層序 …… 32
(2) 遺構の概要 …… 34
(3) 各説 …… 37
3．遺構・遺物のまとめと考察
(1) 遺構について …… 82
(2) 稲生遺跡にみる祭祀の状況 …… 85
(3) 稲生遺跡出土の須恵器について …… 87
(4) 終章 ―稲生遺跡出現の背景― …… 89
遺物観察表 …… 91
写真図版 …… 109

挿　図　目　次

第１図　中勢道路路線図
第２図　６工区範囲確認調査区位置図
第３図　拝原遺跡出土石鏃実測図
第４図　遺跡位置図
第５図　鈴鹿川・中ノ川流域の主要古墳分布図
第６図　鈴鹿川・中ノ川流域の主要古墳実測図

〔南谷遺跡〕
第７図　周辺の主な遺跡位置図
第８図　周辺地形図
第９図　地図割図・遺構図
第10図　調査区位置図
第11図　ＳＨ１・ＳＨ２・ＳＫ３実測図
第12図　ＳＨ１・ＳＫ３出土遺物実測図
第13図　ＳＤ４実測図
第14図　ＳＤ５・ＳＤ６実測図
第15図　各遺構・包含層出土遺物実測図
第16図　ＳＤ４出土鉄鏃

〔稲生遺跡〕
第17図　遺跡周辺地形図
第18図　調査区位置図
第19図　稲生遺跡小地区割図
第20図　稲生遺跡大地区割図
第21図　遺構配置等高線図
第22図　調査区東西方向（丘陵に直交）土層断面図
第23図　調査区東壁土層断面図
第24図　稲生遺跡遺構実測図
第25図　ＳＨ１実測図
第26図　ＳＨ１出土遺物実測図
第27図　ＳＨ２実測図
第28図　ＳＨ２出土遺物実測図
第29図　ＳＨ３実測図
第30図　ＳＨ３竈周辺遺物出土状況図
第31図　ＳＨ３出土遺物実測図
第32図　ＳＨ４実測図
第33図　ＳＨ４竈実測図
第35図　ＳＨ４遺物出土状況図
第35図　ＳＨ４出土遺物実測図
第36図　ＳＨ４～６実測図
第37図　ＳＨ５竈遺物出土状況図
第38図　ＳＨ５出土遺物実測図
第39図　同　上
第40図　ＳＨ６実測図
第41図　ＳＨ６竈実測図
第42図　ＳＨ６出土遺物実測図
第43図　ＳＨ７実測図
第44図　ＳＨ７竈実測図
第45図　ＳＨ７出土遺物実測図
第46図　ＳＨ８実測図
第47図　ＳＨ８出土遺物実測図
第48図　ＳＨ９～11実測図
第49図　ＳＨ９～11出土遺物実測図
第50図　ＳＨ11内土坑実測図
第51図　ＳＨ12～14実測図
第52図　ＳＨ12・14遺物出土状況図
第53図　ＳＨ12～14出土遺物実測図
第54図　同　上
第55図　ＳＨ15～17実測図
第56図　ＳＨ17竈実測図
第57図　ＳＨ15～17実測図
第58図　ＳＨ18～20実測図
第59図　ＳＨ20竈実測図
第60図　ＳＨ18～20出土遺物実測図
第61図　同　上
第62図　ＳＨ21～23実測図
第63図　ＳＨ23竈実測図
第64図　ＳＨ21～23出土遺物実測図
第65図　ＳＨ24実測図
第66図　ＳＨ24竈実測図
第67図　ＳＨ24出土遺物実測図
第68図　ＳＨ25実測図
第69図　ＳＨ25出土遺物実測図
第70図　ＳＨ26実測図
第71図　ＳＨ26竈実測図
第72図　ＳＨ26出土遺物実測図

第73図　ＳＨ27実測図
第74図　ＳＨ27竈遺物出土状況図
第75図　ＳＨ27出土遺物実測図
第76図　ＳＨ28・29実測図
第77図　ＳＨ29竈断面図
第78図　ＳＨ28・29遺物出土状況図
第79図　ＳＨ28・29出土遺物実測図
第80図　ＳＨ30実測図
第81図　ＳＨ30竈実測図
第82図　ＳＨ30遺物出土状況図
第83図　ＳＨ30出土遺物実測図
第84図　ＳＨ31実測図
第85図　ＳＨ31出土
第86図　ＳＨ32実測図
第87図　ＳＨ32出土遺物実測図
第88図　ＳＨ33実測図
第89図　ＳＨ33出土遺物実測図
第90図　ＳＫ34実測図
第91図　ＳＫ35・36実測図
第92図　ＳＫ37実測図
第93図　ＳＫ37出土遺物実測図
第94図　ＳＫ38実測図
第95図　ＳＫ38出土遺物実測図
第96図　ＳＺ39実測図
第97図　ＳＤ40実測図
第98図　ＳＤ40出土遺物実測図
第99図　同　上
第100図　同　上
第101図　各遺構出土臼玉類実測図
第102図　同　上
第103図　包含層出土遺物実測図
第104図　同　上
第105図　同　上
第106図　同　上
第107図　包含層等出土石鏃実測図

図　版　目　次

南　谷　遺　跡

ＰＬ１　遺跡全景・ＳＨ１、２、ＳＫ３
ＰＬ２　ＳＤ４遺物出土状況・ＳＤ５遺物出土状況
ＰＬ３　出土遺物
ＰＬ４　同上

稲　生　遺　跡

ＰＬ５　調査前全景・調査後全景
ＰＬ６　調査区北半完掘状況・調査区南半完掘状況
ＰＬ７　ＳＨ１・ＳＨ２
ＰＬ８　ＳＨ３遺物出土状況・ＳＨ３
ＰＬ９　ＳＨ４遺物出土状況・ＳＨ４
ＰＬ10　ＳＨ５竈支柱石の上を覆う須恵器杯身
ＰＬ11　ＳＨ７竈・ＳＨ７
ＰＬ12　ＳＨ９～11
ＰＬ13　ＳＨ15～17・ＳＨ18～20
ＰＬ14　ＳＨ21～23・ＳＨ24（右）、25（左）
ＰＬ15　ＳＨ26・ＳＨ27
ＰＬ16　ＳＨ30（左）、28～29（中央）、31（右下）
ＳＨ32（左）、33（右）
ＰＬ17　完成した中勢道路（右）と未調査のまま造成された稲生遺跡
ＰＬ18～31　出土遺物

Ⅰ　前　　言

1．調査に至る経緯

昭和58年４月に都市計画道路中勢バイパスとして鈴鹿市西玉垣町から一志郡三雲町までの33.8kmの区間が都市計画道路に決定された。

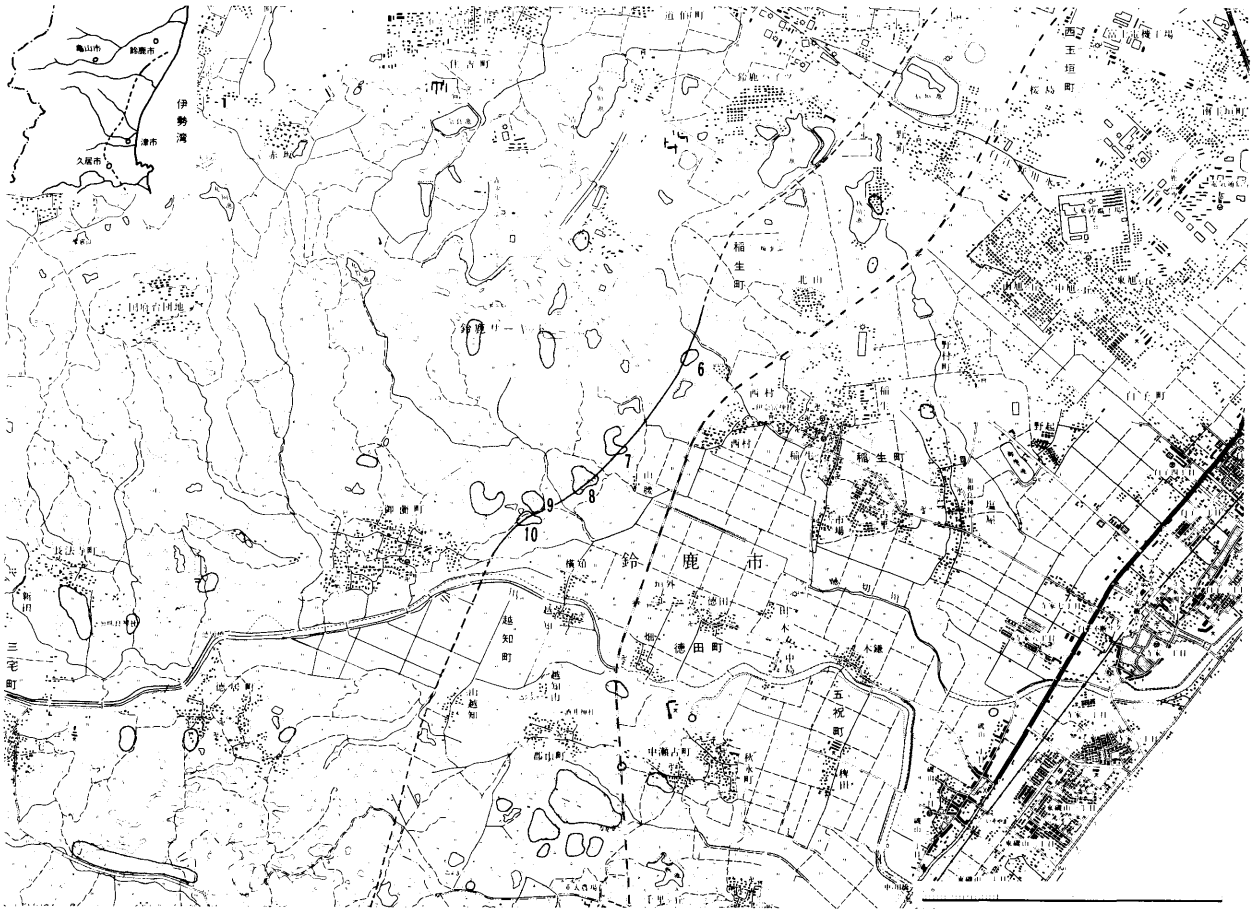
平成３年度までの調査は、工事計画に沿って９工区（津市）を優先させて実施してきたが、同じく平成３年度には鈴鹿市内６工区の工事計画が明らかにされたので、これを契機に中勢バイパス全線の埋蔵文化財の現地確認調査を実施した。この結果に基づき、鈴鹿６工区を中勢道路埋蔵文化財発掘調査事業の対象地域に組み入れた「変更協定書」を、平成３年11月12日付で建設省・三重県・中部建設協会の三者で締結し、今後の調査計画と道路建設事業の調整をはかった。

平成４年度には、鈴鹿６工区の工事計画が急がれることとなったため、先の現地確認調査によって新たに発見され、事業地内にも埋蔵文化財の存在が広がる可能性が生じた鈴鹿市南谷遺跡と稲生遺跡の範囲確認調査を急遽平成３年度末に実施した。この結果をもとにして最終的な調査対象範囲を確定し、同年度中に調査区内の伐採を終了した。

南谷遺跡・稲生遺跡の調査は、工事着手直前という緊急にせまった状況のもと、平成４年４月当初より調査準備を開始し、４月14日には同時に本調査に入った。

南谷遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居１基とその外側の丘陵を切断した３条の溝が発見され、今回の調査区の西側で平成２年度に鈴鹿市教育委員会が行った発掘調査所見ともあわせ、当該時期の高地性集落であることが明らかとなった。表土・腐蝕土の直下が地山・遺構検出面であったため調査は順調に進み、６月６日に発掘調査は終了した。最終の調査面積は、1,300㎡であった。

稲生遺跡では、古墳時代後期の竪穴住居33基・大



第１図　中勢道路路線図（実線が６工区，6：稲生遺跡，7：南谷遺跡，8：間瀬口遺跡，9：拝原遺跡，10：高井Ａ遺跡）（1：50,000）
（国土地理院 1：25,000鈴鹿・白子）

溝１条等の遺構が発見され、丘陵斜面に営まれた集落の状況が明らかとなった。当初予想していた以上に遺構検出面が深く、遺構の遺存状況や遺物の残存状況も極めて良好であったため、当初計画よりやや遅れて７月４日に発掘調査を終了した。最終の調査面積は、2,100㎡であった。なお稲生遺跡は、当初須恵器窯跡の可能性も想定されていたため遺跡の名称を「稲生Ｉ－４号窯」としていたが、調査地内には窯跡の存在しないことが明らかとなったので「稲生遺跡」と改称した。

両遺跡の竪穴住居・土坑の埋土は、すべて土嚢袋（約12,000袋）に収納してフルイ上で水洗いを実施し、多数の滑石製臼玉やガラス小玉・石鏃等を確認した。

２．６工区の範囲確認調査

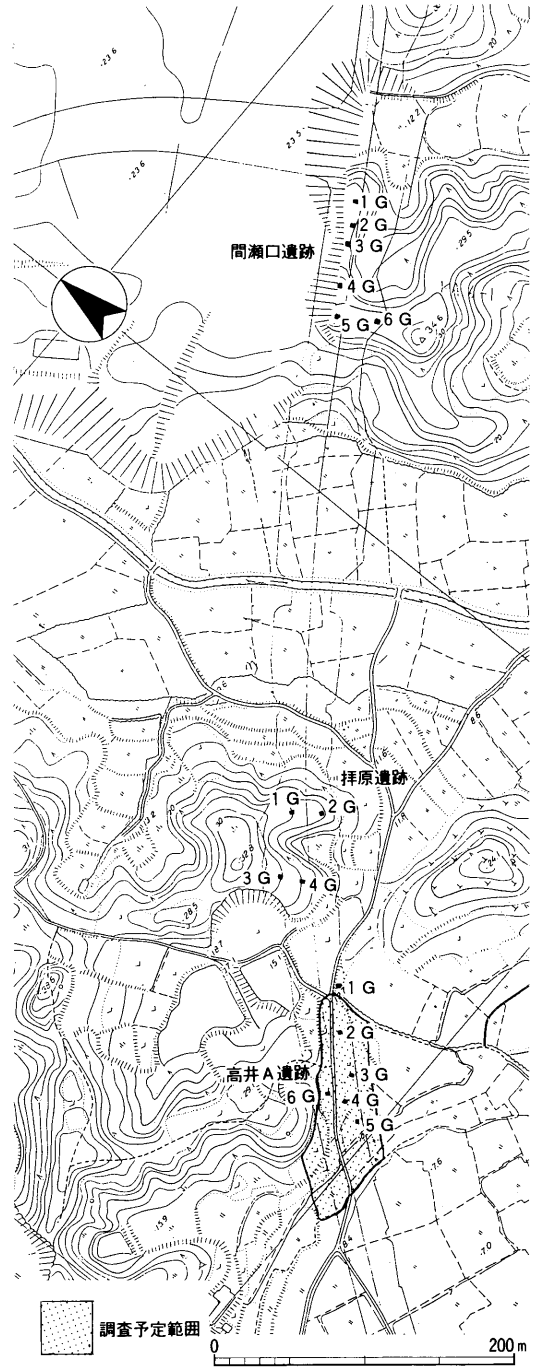
今後の６工区の工事計画との円滑な対応を図るため、南谷遺跡・稲生遺跡の調査に併せて、６工区で確認されていた残りの遺跡である間瀬口・拝原・高井Ａ遺跡の範囲確認調査も７月１日から８日までの期間で実施した。

上記３遺跡のうち、間瀬口遺跡と拝原遺跡は丘陵上もしくは丘陵斜面に所在して南谷遺跡と同様な立地を示しているのに対し、高井Ａ遺跡は丘陵端部に立地している。

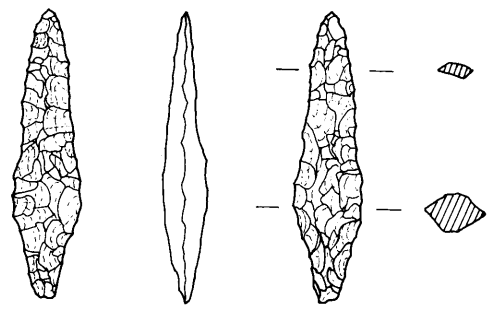
調査は、４ｍ×４ｍのグリッドを適宜設定するかたちで実施した。

この結果、間瀬口・拝原遺跡では明確な遺構は全く検出できず、遺物も極めて希薄であったため、少なくとも事業地内には遺跡の広がりはないものと判断された。ただ、拝原遺跡においては、１Ｇから弥生時代に属すると思われる石鏃１点が出土しており周辺部には南谷遺跡のような遺跡が存在していた可能性も予測される。

これに対し、高井Ａ遺跡では、設定した６か所のグリッドのうちの５か所で遺構が確認されたのをはじめ、すべてのグリッドで遺物が認められた。出土遺物から、高井Ａ遺跡は平安～鎌倉時代を中心とする遺跡であると考えられ、最終的に4,700ｍの調査が必要であるとの判断に達した。　　（穂積裕昌）



第２図　６工区範囲確認調査区位置図（1：5,000）



第３図　拝原遺跡出土石鏃実測図（２/３）

Ⅱ　位置と環境

〔地理的環境〕

鈴鹿市は、伊勢平野の北部に位置し、西方に鈴鹿山脈の連峰を仰ぎ、東は伊勢湾に臨む。市内のほぼ中央を１級河川鈴鹿川が、南側を２級河川中ノ川が東流して伊勢湾へと注ぎ、それぞれの流域には平野が開けている。

両河川が開析した平野と平野の間には、鈴鹿市国府の台地から続く丘陵が割って入っており、その丘陵が途切れる鈴鹿市玉垣町付近では、伊勢湾を臨んで南北の平野がひとつに繋がっている。

通常、伊勢平野と呼称される北は木曽三川から南は伊勢市朝熊山まで続く平野は、細かくみればそれぞれ広狭はあるものの、このように小丘陵や河川によって分割され、それぞれがある程度の地理的まとまりをもっている。

今回報告する南谷遺跡・稲生遺跡は、鈴鹿山脈錫丈ケ岳を源とする中ノ川が開析した沖積地を南に臨む北側丘陵の南端に立地し、行政上は鈴鹿市稲生町にあたる。この地は、国府の台地がら続いてきた丘陵が終わりかける部分にあたり、中ノ川が開析した平野を南北の丘陵に挟まれた狭い扇状の地形と捉えると、扇端部左端部分に相当する。

いま、中ノ川流域を地形に沿って区分すると、北から北側丘陵及びそれに続く台地・中ノ川を挟んだ北岸沖積地と南岸沖積地・南側丘陵及びそれに続く台地とに区分される。南側丘陵は、津市北部まで続くかなり広い丘陵であるが、その間を東西に貫流する田中川によってさらに南北に分けられ、中ノ川との関連が深いのは当然その北側部分である。

〔歴史的環境〕

中ノ川流域での人間活動の痕跡は、旧石器時代末まで遡る。南北の丘陵・台地を中心として、ナイフ形石器や掻器、縦長剥片等の採集された地点が点在しており[1]、小規模ながらも丘陵上を舞台とした集団の存在が確認できる。本格的な調査は行われていないが、地元産のチャートとともに、非在地産のサヌカイトや下呂石製の石材も流入していることが知られており[2]、今後の調査研究に期待がもたれる。

縄文時代になっても、活動の中心は低地部へは降りず、南北の丘陵上およびその端部を中心としたものであったようだ。中ノ川右岸の南側丘陵台地上に所在する郡山遺跡群西川遺跡では、中期末の竪穴住居２基が発掘されているし[3]、同じ郡山遺跡群に属する末野Ａ遺跡でも縄文期の竪穴住居が確認されている[4]。この他、流域の丘陵・台地上では、小規模な縄文時代遺跡が点在している[5]。

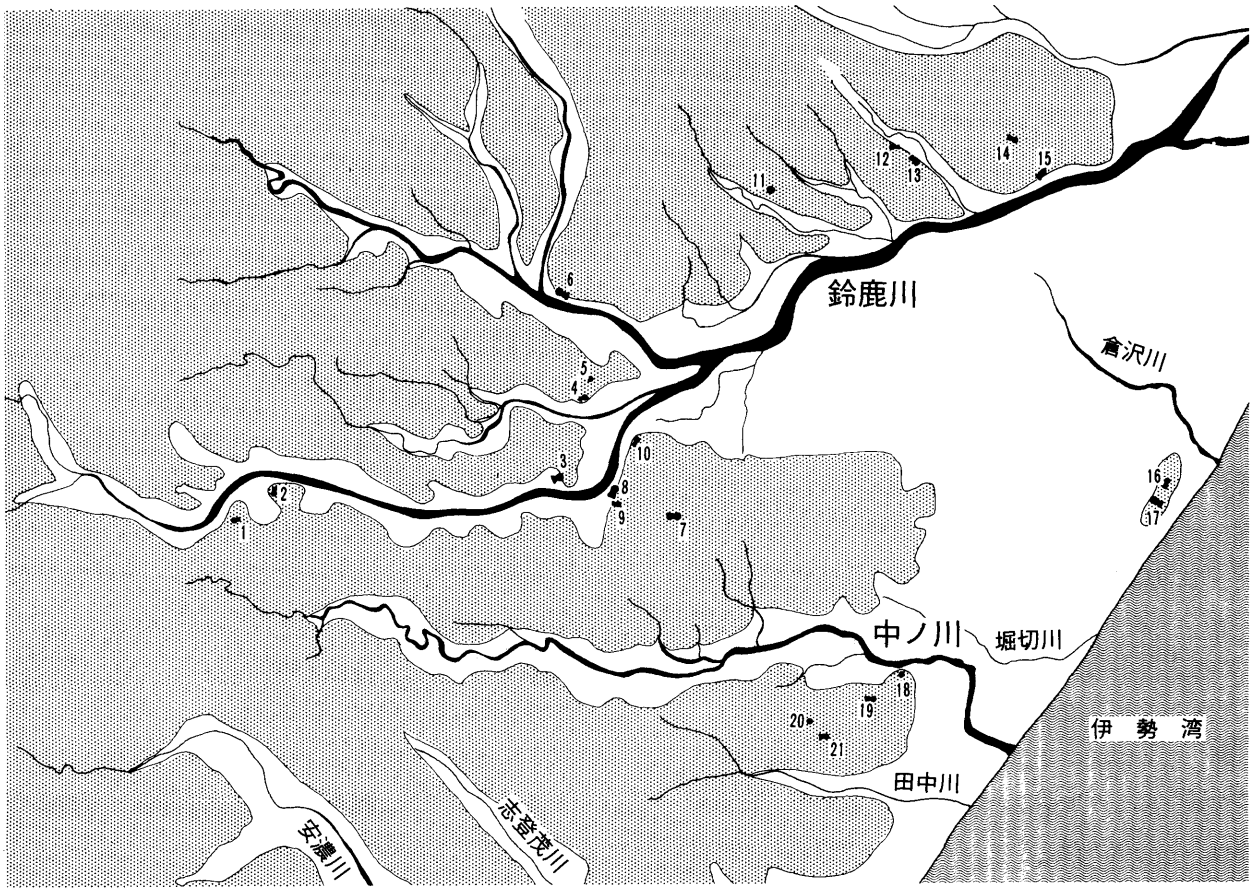
しかし、中ノ川流域での縄文時代資料は、鈴鹿川中上流域（亀山市域も含む）の諸遺跡と比較すると多分に断片的である。鈴鹿山系から続く広大な丘陵・台地を有し、支流も含めると入り組んで複雑な河川体系をもつ鈴鹿川流域に比べ、中ノ川流域の丘陵では狩猟・採集に基礎を置く限りにおいては生活基盤として弱かったものと思われる。ただ、今後より中ノ川河口域の海浜部での調査研究が進展した場合には、海産資源というまた違った生活基盤をもった集団による活動の跡が確認されるかもしれない。

伊勢地域の弥生時代の開幕は、雲出川流域の中ノ庄遺跡の出現をもって開始する。三重県内をみた場合、遠賀川系の初期弥生文化の伝播は、まず平野部の大規模な遺跡を中継の核として飛び石状に伝播して、その遺跡を拠点として定着した後、周辺部の諸遺跡へ分村等の形態をとって拡散していく、という傾向がみられる。伊勢地域でのこうした拠点的な遺跡は、南から中ノ庄遺跡・安濃川流域の津市納所遺跡・鈴鹿川流域の鈴鹿市上箕田遺跡がある。

中ノ川流域で確認できる弥生時代の諸遺跡[6]は、こうした初期の流れからはかなり遅れ、中期でも後半に入ってから低地に面した丘陵・台地の縁辺部で遺跡の形成が進むようである。これらは、上箕田遺跡[7]や、竪穴住居34基が検出された扇広遺跡[8]を始めとする大小の遺跡が濃密に分布する鈴鹿川流域に比べると全体に遺跡規模が小規模で、分布もはるかに疎らである。それでも、中ノ川左岸の海浜部に程近い磯山黒丸遺跡[9]では、中期の外縁付紐式銅鐸が出土しており、周辺部に大規模な集落が存在したことが予想されるとともに、地域集団のある程度の統

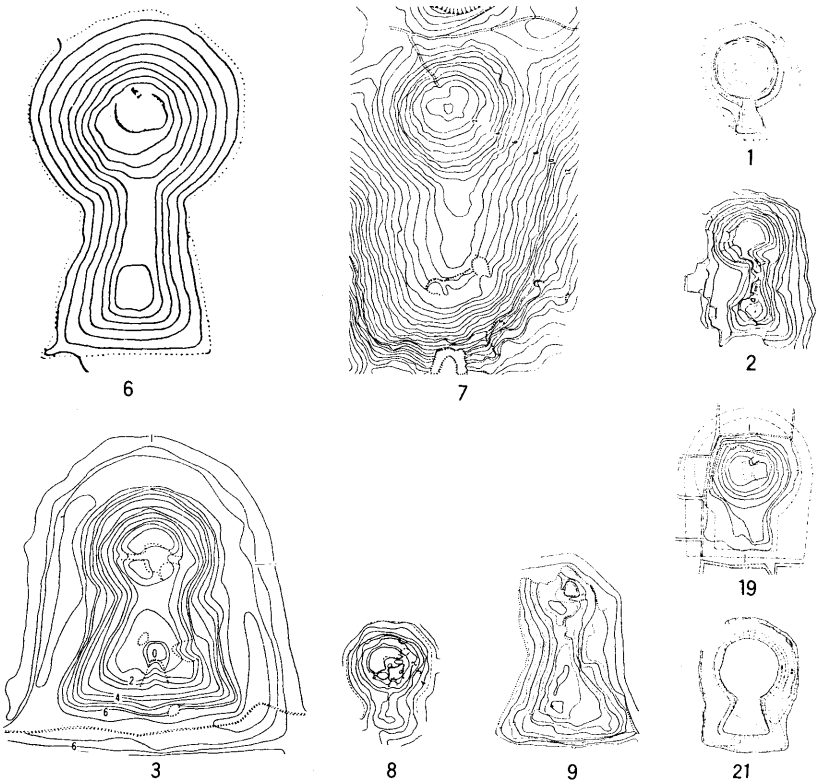
1．南谷遺跡　2．稲生遺跡　3．大新田遺跡　4．祓山遺跡　5．北野遺跡
6．今村Ａ遺跡　7．山脇遺跡　8．野田遺跡　9．池ノ下遺跡　10．乙部遺跡
11．西川遺跡　12．追谷遺跡　13．磯山(黒丸)遺跡　14．拝腹遺跡　15．塚腰遺跡
16．松山遺跡　17．畑遺跡　18．赤郷塚古墳　19．経塚古墳　20．西高山１号墳
21．石塚遺跡　22．西高山２号墳　23．寺谷古墳群　24．伊奈冨遺跡　25．長畑遺跡
26．長法寺４号墳　27．加和良古墳群　28．茶臼山古墳群　29．大野古墳群　30．徳居１号窯
31．徳居17～25号窯　32．稲生古窯跡　33．金井場窯　34．徳居32・33号窯　35．西毛谷遺跡
36．久知野遺跡　37．西高山Ａ～Ｃ遺跡　38．末野Ａ～Ｃ遺跡　39．高井Ａ遺跡　40．高井Ｂ遺跡
41．敷田遺跡　42．橋門遺跡　43．三宅西条城跡　44．三宅城跡　45．稲生城跡
46．長法寺城跡　47．愛后山１号墳　48．西ノ野１号墳(王塚)　49．保子里２号墳

第４図　遺跡位置図（1：50,000）　　(国土地理院1：25,000鈴鹿・白子)



第５図　鈴鹿川・中ノ川流域の主要古墳分布図（１：14,000）

三重県埋蔵文化財センターほか『一般国道１号線亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅵ』1990. の第２図を元に改変・加筆



第６図　鈴鹿川・中ノ川流域の主要古墳実測図（１：1,000）

	古墳名	墳形	墳丘長	備考
1	木ノ下	帆立貝	30.5	獣帯鏡・埴輪
2	山下	前方後円	39	円筒埴輪・形象埴輪等
3	井尻	〃	53.5	
4	城山	〃		円筒埴輪列
5	井田川茶臼山	不明	不明	横穴式石室、冠・画文帯神獣鏡・馬具等
6	能褒野	前方後円	90	鰭付朝形埴輪
7	愛后山	〃	66	円墳説もあり
8	西ノ野１号（王塚）	〃	63	
9	西ノ野11号（椀塚）	〃	50	
10	保子里１号（車塚）	円２基 or双円	50	耳飾・馬具等
11	白鳥塚	円	78×60	県下最大の円墳
12	北野	前方後円	13	
13	乗鞍	〃	44	
14	富士山１号	〃	50	
15	寺田山１号	〃	70	
16	岸岡山21号	〃	33	
17	岸岡山22号	55		
18	赤郷塚	円	不明	三角縁神獣鏡
19	経塚	前方後円	35.7	粘土槨、鉄器類
20	西高山１号	円	30	家型埴輪
21	西高山２号	前方後円	25.5	円筒埴輪・形象埴輪

所見及び実測図は、鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市遺跡地図』1987,三重県教育委員会ほか『亀山の古墳』1988,三重大学歴史研究会『ふびと』32号1975に拠る

合化の進展が窺える。

弥生時代後期になると、今回報告する南谷遺跡のように、南北の丘陵上に立地する小規模な遺跡が散見できるようになり、当時の緊張関係を暗示するものと思われる。

古墳時代に入ると、中ノ川流域では、三角縁神獣鏡の出土した赤郷古墳[10]や粘土槨を内部主体とした径35.7mの前方後円墳である経塚古墳[11]等の前中期古墳が築造された。小規模ながらも当地域での首長墓の系譜として、弥生時代以来の発展の一定の到達を示すものと評価できるであろう。しかし、この時期でも、前期から後期に至るまで連綿と前方後円墳が安定して築造され、伊勢を代表する古墳集中地帯である鈴鹿川の流域地帯と比較すると、生産基盤の狭小性にも起因してかその劣勢は明らかで、常にその影響下にあったものと推定される。

こうした状況に変化がみられるのは、古墳時代後期に入ってからである。この時期になると、首長墓クラスの古墳では、中ノ川南岸の丘陵台地上に所在する小規模な前方後円墳である西高山2号墳[12]程度で相変わらず必ずしも有力とはいえないが、中小の古墳や群集墳は非常に充実するようになり[13]、集落についても稲生遺跡をはじめとして新たに大規模な集落の形成が行われたり、郡山遺跡群のように前代からある集落の拡大・再編がみられるようになる。

そして、この時期には、中ノ川北岸の丘陵では稲生古窯址群、田中川に挟まれた南岸の丘陵には三重県下最大の徳居古窯址群という須恵器生産窯跡群が操業されるようになる。前述の古墳時代後期以降の中ノ川流域の諸遺跡発展の背景には、当然のことながら当時としての最先端技術である窯業生産の動向と密接な関連があるものと思われる。

ところで、当該時期（後期）の古墳について、円筒部をもつ埴輪の技法に着目すると、西高山2号墳や寺谷古墳群[14]では、底部に段をもついわゆる「淡輪技法」による底部の製作[15]を行っている。これは、同時期の鈴鹿川流域の諸古墳の埴輪でも特徴的に見出される技法であり、埴輪というすぐれて政治的といえる遺物において、中ノ川流域と鈴鹿川流域の古墳は一体のものとして捉えることが許されよう。そして、後期のこうした状況は、埴輪技法の共通性という目に見えるかたちでは発現しないものの、両者の密接な関係は、さらに古い時期へも遡及するものであろう。

古墳時代後期に急速な発展をみせた中ノ川流域は律令期へ入ってもそのまま引き継がれる。南側丘陵台地上の郡山遺跡群末野A・B・C[16]や、北側丘陵端部の高井B遺跡[17]では、大規模な掘立柱建物群が確認されている。

こうした中ノ川流域の発展の様子は、稲生町に所在する式内社伊奈富神社（稲生神社）の社格にも表れている[18]。旧奄芸郡の式内社の首位に列し、鈴鹿市域では椿大神社とともに「国史見在社」でもある。平安時代の『日本三代実録』によると、貞観7(865)年には、従四位下を授けられている。ちなみにこの時、椿大神社は正五位下を授けられており、従四位下を授けられるのは26年後である。このように、伊奈富神社の社格の高さにもその地域の発展のあとをみることができるとともに、これを奉斎した集団の実力を示しているものと思われる。

（小菅文裕・穂積裕昌）

〔註〕

(1) 鈴鹿市教育委員会『中ノ川流域の考古学』1983年
(2) 前掲註(1)に同じ
(3) 中森成行『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』鈴鹿市教育委員会 1983年
(4) 前掲註(1)に同じ
(5) 前掲註(1)に同じ
(6) 三宅西条遺跡、畑遺跡等が存在する。
(7) 大場範久・真田幸成ほか『上箕田弥生式遺跡第2次調査報告』鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会　1970年
(8) 鈴鹿市教育委員会「扇広遺跡（鈴鹿市高岡町字扇広）」『鈴鹿市文化財だより9　1990年
(9) 前掲註(1)に同じ
(10) 『鈴鹿市史』第1巻　1981年
(11) 真田幸成「経塚古墳」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市　教育委員会　1967年
(12) 前掲註(3)に同じ
(13) 寺谷古墳群・茶臼山古墳群・大野古墳群等が存在する。
(14) 前掲註(1)
(15) 坂靖・穂積裕昌「『淡輪技法』の伝播とその問題」『木ノ本釜山（木ノ本Ⅲ）遺跡』同志社大学考古学研究室編　1989年
(16) 前掲註(1)に同じ
(17) 前掲註(1)に同じ
(18) 以下、神社についての記述は、前掲註(10)による。

Ⅲ　鈴鹿市稲生町字南谷　南谷遺跡

1．はじめに

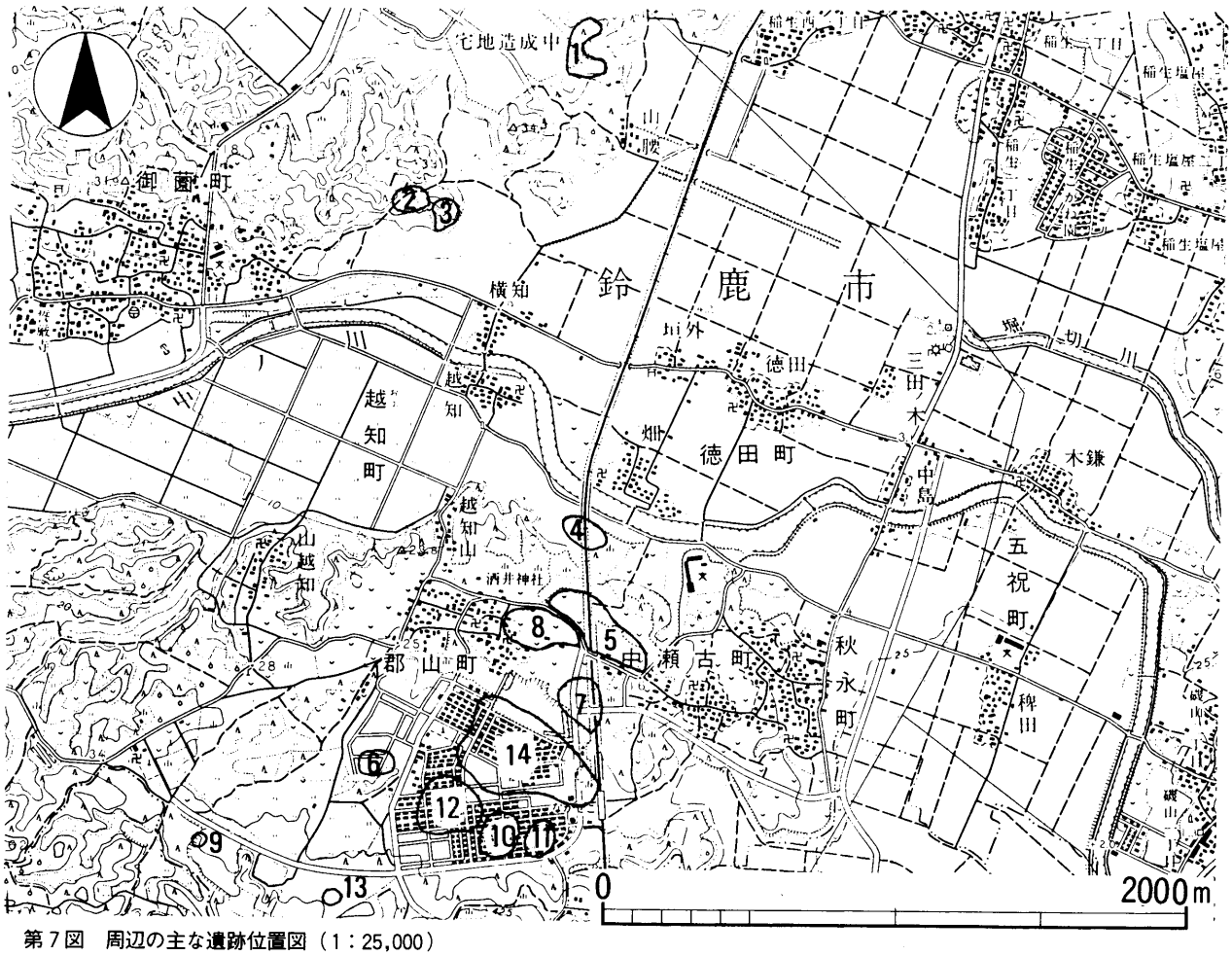
（1）遺跡の立地と周辺の状況

中ノ川左岸には、第3紀層からなる丘陵が、東の平地部との境に、櫛の歯状に小さな尾根と谷を形成しながら存在する。そのうちのひとつ、東にのびる尾根上に南谷遺跡（1）は立地する。標高約36m、低地との差は約30m。東には稲生の集落をのせる低位段丘が広がる。

弥生時代を中心として、周辺の状況を見るなら、南谷遺跡から南西約600mの所に、高井A遺跡（2）・高井B遺跡（3）がある。高井B遺跡は、その一部を鈴鹿市教育委員会によって調査されており、独立丘陵西の平地N地区から弥生時代中～後期の遺物が出土した土坑3基が確認されている。同丘陵南の平地のS地区からは、奈良時代の住居址や弥生時代～鎌倉時代にかけての遺物（弥生土器・円筒埴輪・須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶椀等）が確認されており、弥生時代から長期にわたる拠点的な集落であったことを窺わせる。また、高井A遺跡でも、中勢道路建設に伴い、1992年に範囲確認調査を行い、緑釉陶器をはじめ、灰釉陶器・黒色土器・土師器などの遺物や、掘立柱建物を形成すると思われるピットを確認している。

南谷遺跡からほぼ真南、1.6km～2.2kmにかけての中ノ川右岸の河岸段丘では、多量の後期弥生土器が発見された畑遺跡（4）のほか、染野遺跡（5）でも弥生土器片が見つかっており、中ノ川を臨む段丘や台地縁部に後期の集落が点在する。

この背後に位置する郡山町から中瀬古・秋永町に



第7図　周辺の主な遺跡位置図（1：25,000）

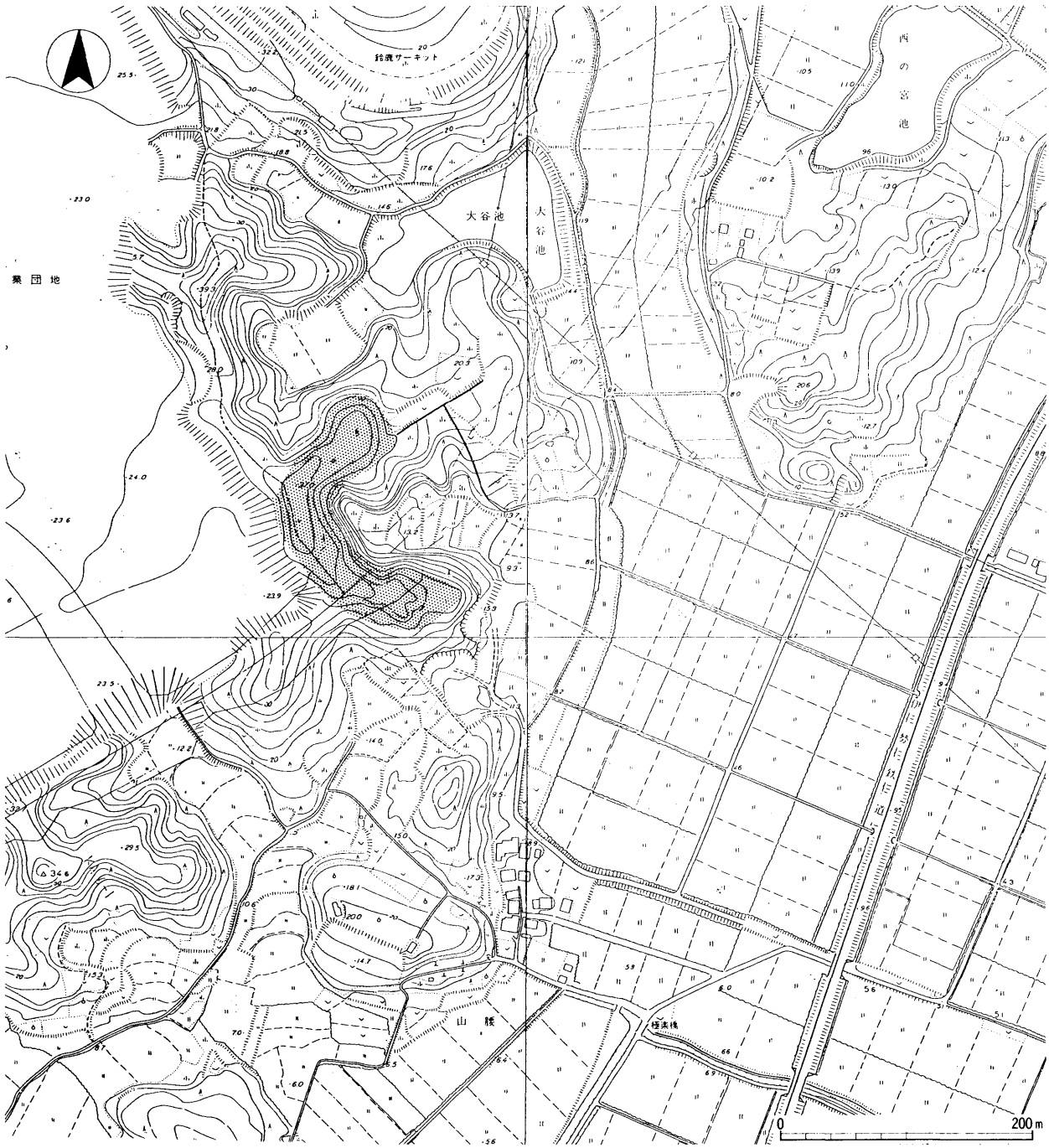
またがる広い台地は、古くから開発され、縄文時代中期から後期の遺物や住居跡の確認された西川遺跡（6）、方形周溝墓が検出された松山遺跡（7）・塚腰遺跡（8）、漢式鏡や円筒埴輪の出土した西高山1号墳（9）をはじめ、古墳時代から鎌倉時代までの西高山A遺跡(10)・同B遺跡(11)・同C遺跡(12)・同D遺跡（13)・末野遺跡（14)・西川遺跡など総して郡山遺跡群と称せられる数多くの遺跡があり、一大先進文化地域を形成している。

（2）調査の方法

調査区の設定は座標軸に従い、100m区画の正方形を設定して大地区とし、さらにその内部を25等分して4mの方眼区画の小地区とした。それぞれの表示は、大地区・小地区ともに北西隅を表示の頂点とし、小地区は南北を北からA～Yのアルファベットを、東西を西から1～25のアラビア数字を与えた。

丘陵尾根であるため、検出面までの深さがわずか0.1～0.2mであり、発掘は樹木の伐採後、すべて人力で行った。

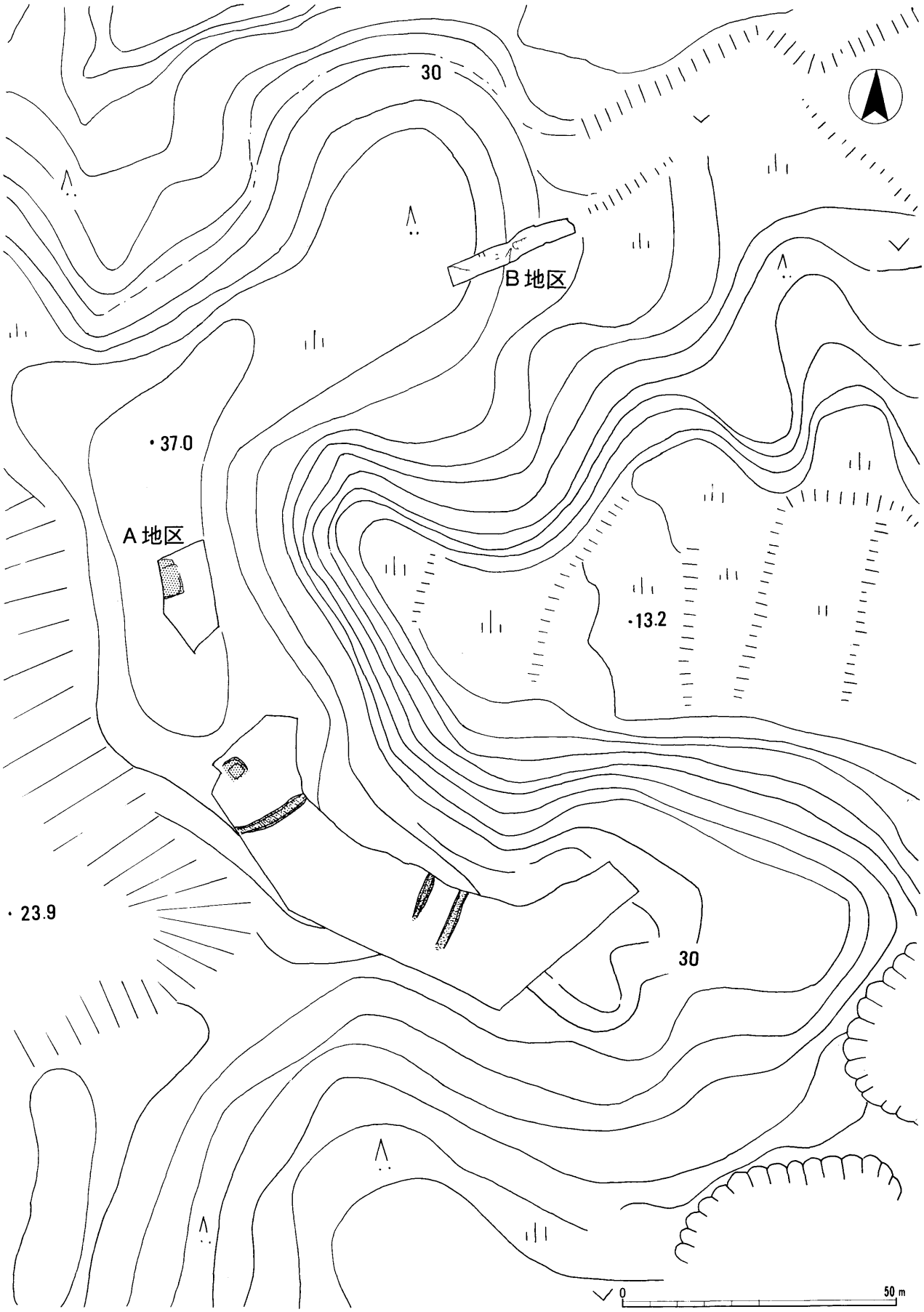
遺構カード（S＝1/40）は、小地区ごとに作成し、



第8図　周辺地形図（1：5,000）

地区割図（1：1,000）

第９図　地区割図（1：1,000）・遺構図（1：300）



第10図　調査区位置図（1：1,000）

A・B地区は鈴鹿市教育委員会調査範囲

略図を記入した。

遺構名称は、ピットのみグリッド毎の通し番号を付したが、他の遺構は調査区全体のなかでの通し番号を与えた。

実測は、土層図や遺物出土状況図等必要に応じて1/10や1/20図を作成したほか、遺跡全体の実測は1/50作図の航空写真測量を実施した。

遺構等の写真は6×9（ウィスタ）をはじめ、35mm判（ニコン　F401）を使用し、モノクロネガとカラーリバーサルの両方の記録を行った。

2．発掘された遺構と遺物

（1）基本層序

調査区が丘陵尾根に存在するため、表土（0.1～0.2m）を除去すると、すぐ検出面の黄褐色粘質土ないし灰白色粘質土である。

（2）遺構の概要

調査区は西から東へのびる尾根上にあり、調査区南西部は、頂上部の比較的平らな所へと続く穏やかな面である。この当調査区の標高の高いところから竪穴住居2棟（建て替え）、土坑1基を検出したのをはじめ、東の方に9m下がったところで溝（濠）を1条、さらに調査区中央で溝（濠）を2条、計3条の溝（濠）を、尾根を切断するかたちで検出した。出土遺物は、弥生時代後期前半のものである。

（3）各説

③　竪穴住居

ＳＨ１　調査区の北東、標高約36mの所に位置する。平面形は、わずかに隅が丸いものの、ほぼ方形を呈する。南東側と南西側が斜面になって流失しているため、全体の規模は不明である。北西辺には幅10～15cm、深さ3cmの周溝が掘られ、北東辺にも1m程まわりこむ。検出時にＳＨ２のプランが現れなかったことや、土層断面から判断して、ＳＨ２より新しい竪穴住居と捉えた。甕の口縁部（2）や壺の底部（3）・有稜高杯（4）などの弥生土器が出土している。

出土遺物　ＳＨ１から出土した土器のうち図示し得たものは、壺2点、甕1点、高杯2点の僅か5点という小数で、また保存状況も良くない。

壺（1・2）　1は広口壺で、ラッパ状にわずかに開いた口縁をもち、端部は丸い。頸部に突帯がめぐる。2は底部で、体部最下に縦のハケ調整がみられる。底部から体部によく開いていく様相を呈する。

甕（3）　頸部で鋭角に折れ曲がった口縁部が、やや内湾気味に立ち上がる。口縁端部をつまみながらなでることにより、端部が上方にやや尖りぎみである。端部のナデは内側の方がやや強い。また頸部の屈曲部内面はナデによりやや平坦な面をなしている。

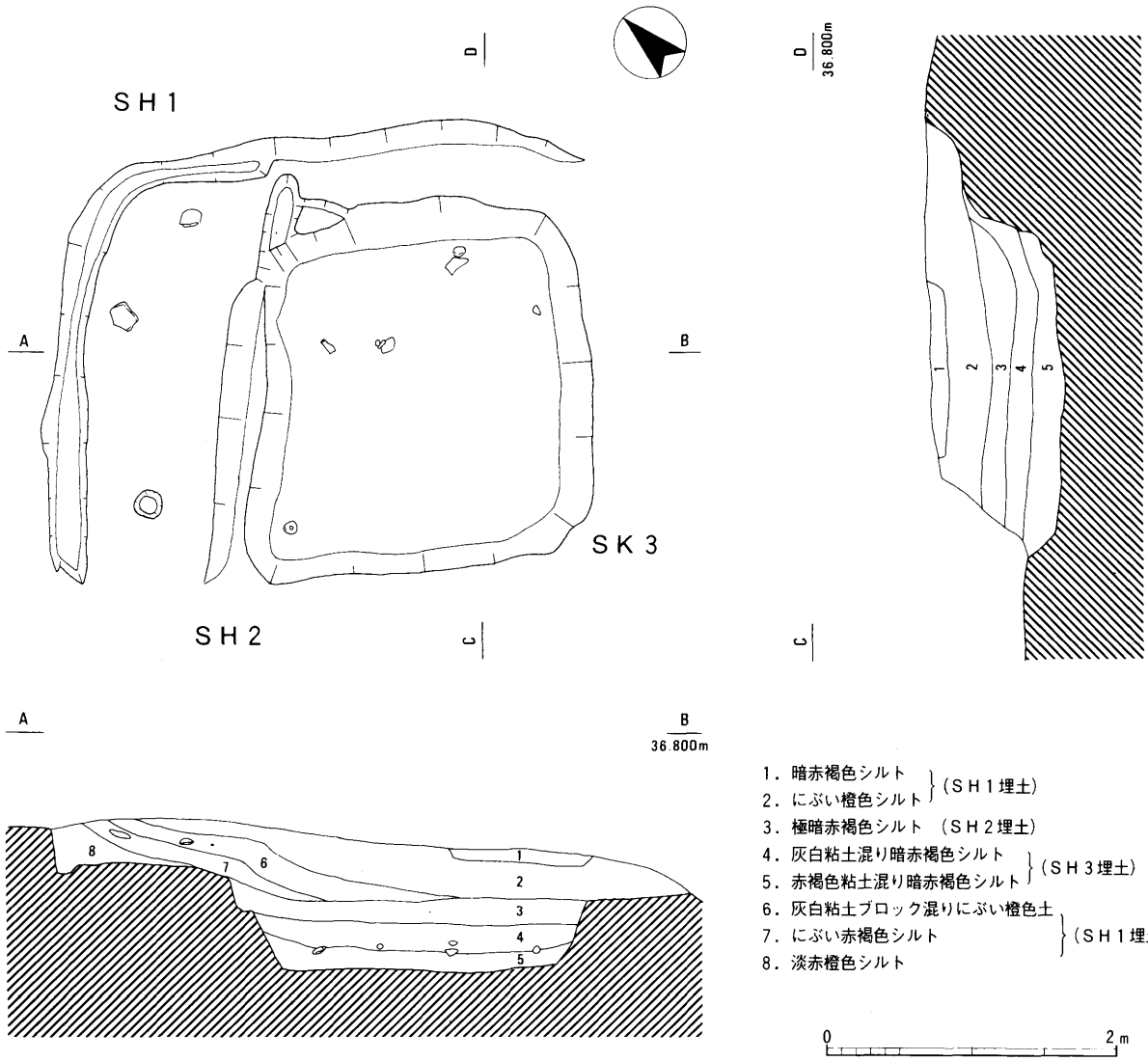
高杯（4・5）　4は、杯部には、稜をもち、それより上半は外反する。磨滅がはげしく、調整は不明だが、端部はナデにより幅の狭い面をなす。杯部下半の器壁が薄い。5は、脚部のみで、風化が著しく調整は不明。外面のフォルムは比較的円柱ぎみであるが、内面は上部1点から下に広がる円錐形のフォルムを呈する。内面に絞り痕が見られる。

ＳＨ２　北のコーナーから北西辺にかけて検出されたもので、残りは非常に悪い。ＳＨ１に先行する竪穴住居と考える。方形の土坑ＳＫ３と辺の向きを同じくする。この住居のものと確定しうる遺物はないが、この住居よりさらに先行するか同時期と思われるＳＫ３から出土した遺物はＳＨ１とほとんど時期差はなく、よってこの住居もＳＨ１、ＳＫ３とほとんど時期差のないものと考える。

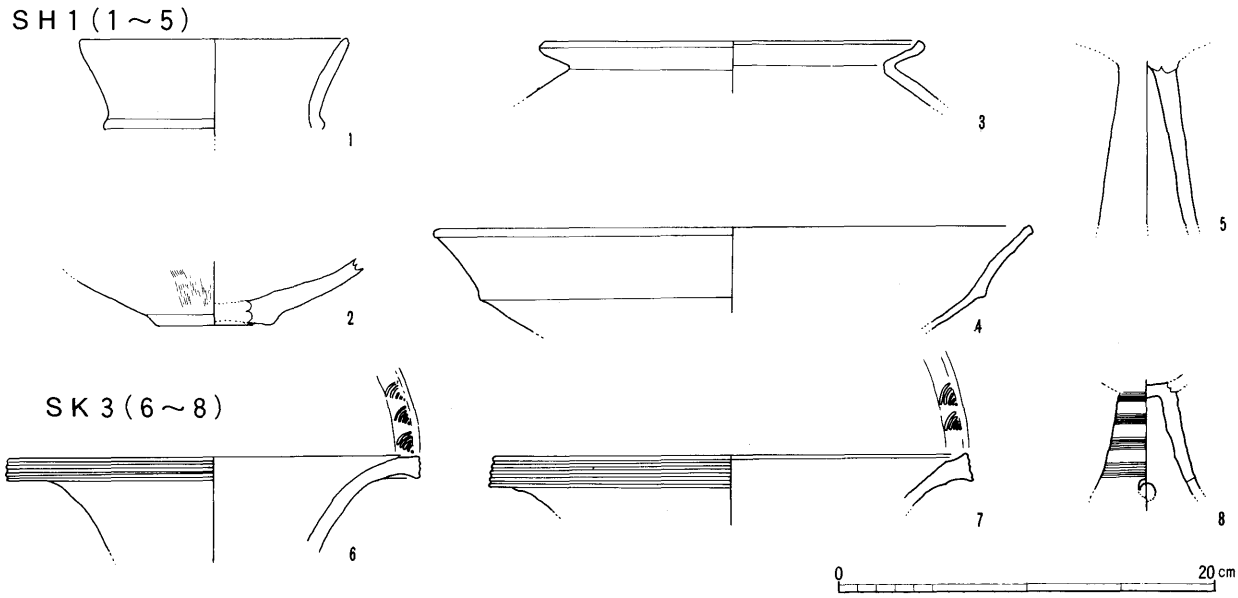
②　土坑

ＳＫ３　2.6m×2.2m、深さ40cmの土坑で、広口壺の口縁部（6・7）が出土しており、竪穴住居ＳＨ１・２と著しい時期差はないものと考えられる。しかし土層でみるとＳＨ２に先行するものと捉えられるが、ＳＨ２やＳＨ１と辺の向きを同じくすることもあり、竪穴住居に伴う可能性も否定できない。

出土遺物　加飾広口壺（6・7）　どちらも口縁端



第11図　SH1・SH2・SK3実測図（1：50）



第12図　SH1・SK3出土遺物実測図（1：4）

部が肥厚し、外側に幅広の面をもつ。その面に、6は3条、7は4条の細かい凹線がめぐる。口縁内側には櫛による扇形の文様が付される。

高杯（8）　磨滅がひどく、辛うじて4条の平行直線文が観察できた。下によく開き気味のやや小型の脚部で、脚内面上部は1㎝程の円面をなす。透孔は4方向か。

③　溝（濠）

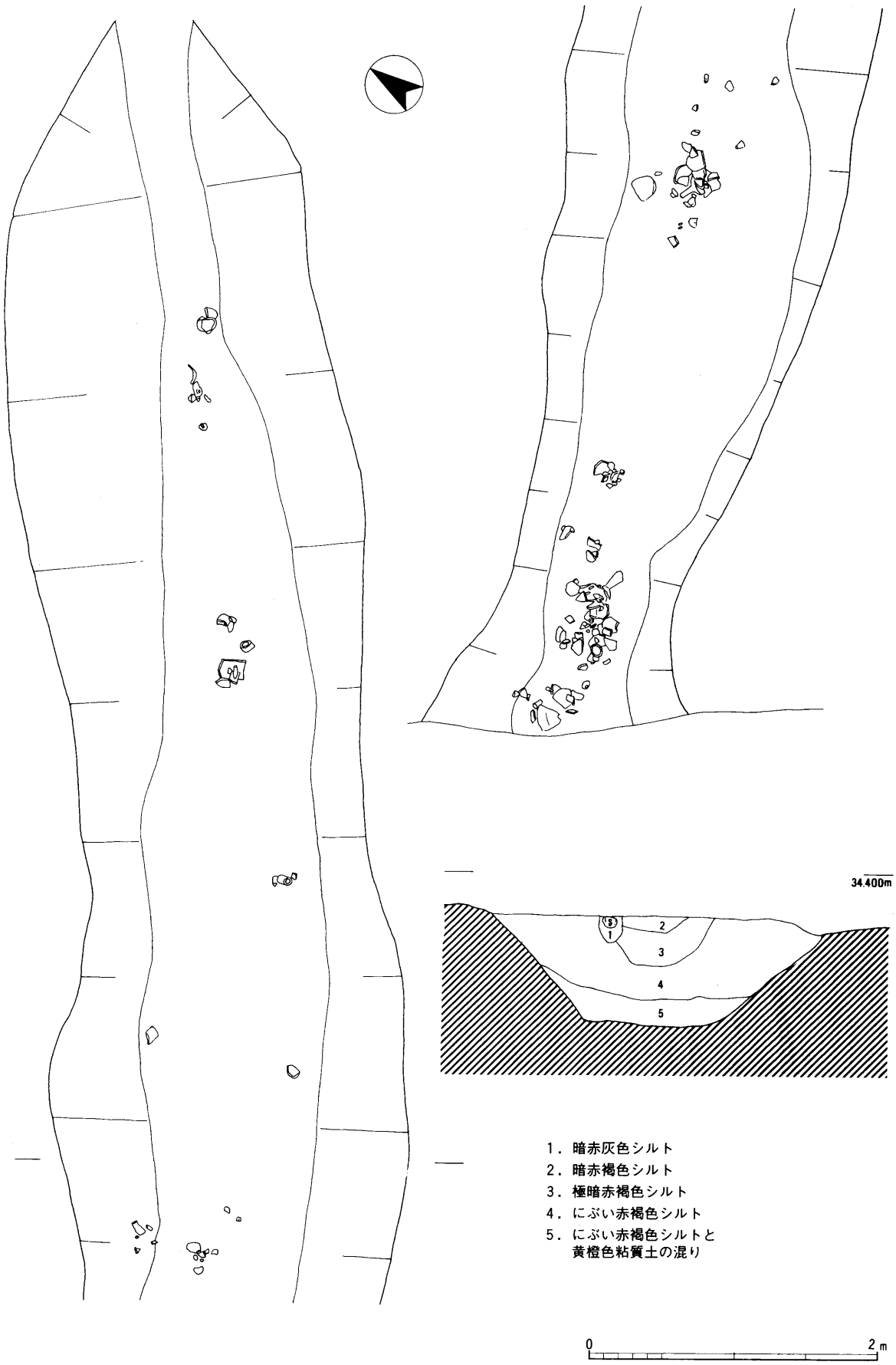
ＳＤ４　ＳＨ１・２、ＳＫ３から南東に９ｍ程下がったところで尾根を切るように検出された。中央部で幅2.3ｍ、深さは北西の高い斜面側で0.8ｍある。溝の両端は深さが0.4ｍと浅くなるが、斜面による土の流出によるものと考えられ、本来の姿は１ｍ程の深さの溝で尾根を切断していたと考えられる。結語で述べる本遺跡の性格を加味すると、「溝」より「濠」とするのが的確であろう。埋土の層位としては、土層観察面では4層に分けられたが、実際の遺物取り上げに際しては、出土遺物の大半が、掘りの残りが悪い（つまり浅い）南西部に集中したため、明確な埋土の層別区分が難しく、底に近接して出土した土器を「下層」と注記するに留まった。また、明らかに上層とする遺物に恵まれず、どの出土遺物にも明確な時期幅は見られず、最下層（第13図５）がその土質から溝（濠）機能時に形成され、その上層が弥生時代後期に埋まり、あと上層へと自然堆積されていったもと推定するにすぎない。そして、丘陵上部であることからも、定住的な人間活動の場にならず埋まっていったものだろう。

出土遺物　溝の南西端部で土器が集中して出土したが、意図的なものでなく地形によるものであろう。この溝から出土した遺物が当遺跡ではもっとも多い。なお、土器以外にも鉄鏃（34・35）が出土した。

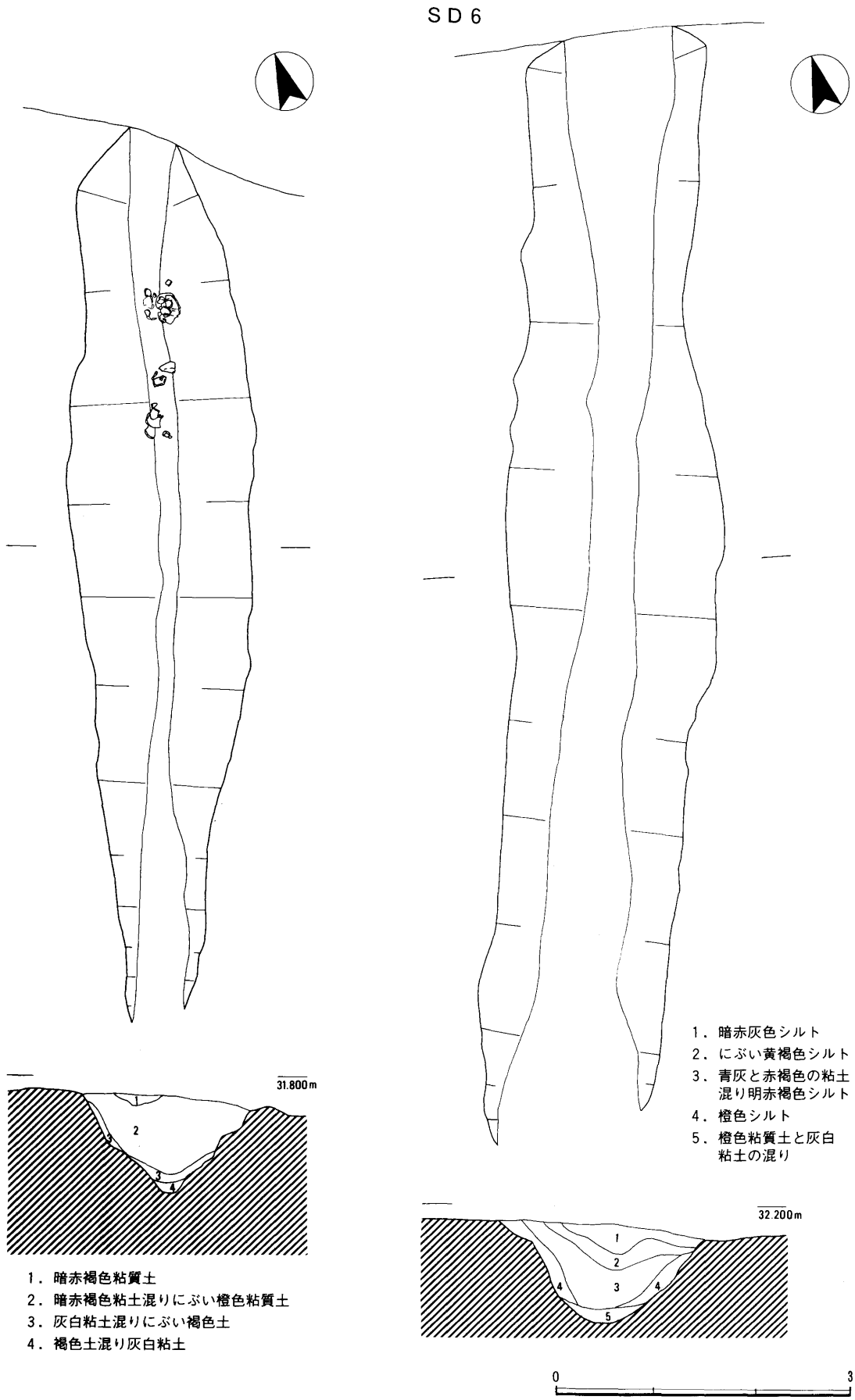
壺（９～12）　９は加飾性がつよい広口壺で、口縁端部は面をなす。かすかにハケ調整の痕跡がみられる。口縁内面は、横方向のハケ調整のあと羽状刺突文が2段に施され、さらにその下に2重の円形竹管文が付けられる。頸部内面には斜めのハケメがわずかに認められた。外面は磨滅がはげしく調整は不明。口縁端部はもう少し垂下していたようである。10は口縁部が体部から「く」字状に折れ、外反する。頸部がやや厚く、口端に向かいやや薄くなり丸くおさまる。頸部外面は縦方向にハケ調整が行われる。11は胴上部が平行直線文と波状文によって飾られている。胎土も非常によく、色調も淡いオレンジ色（浅橙）を呈する。12は胴下半から底部にかけて、かなり球状を呈し、底部は突出する。底部上部外面にハケメが認められる。

甕（13～17）　13は、浅い受口状を呈するもので口縁部外面はナデの後、刺突文が付される。その下方は縦方向のハケ調整がされている。14は、口縁部への屈曲がさらに強く、口縁部外面、屈曲の段上にかすかに刻み目がみられる。体部上部外面は縦方向にハケ調整され、５条櫛描平行直線文で飾られる。内面は横方向である。15～17は、台付甕である。15は体部下半から台部にかけての資料で、体部は外面縦方向、内面横方向のハケ調整である。台部は僅かに内湾する。16は、僅かに外反気味の台部で、縦方向のハケ調整が認められる。17は、やや内湾気味の台部で磨滅により調整は不明である。

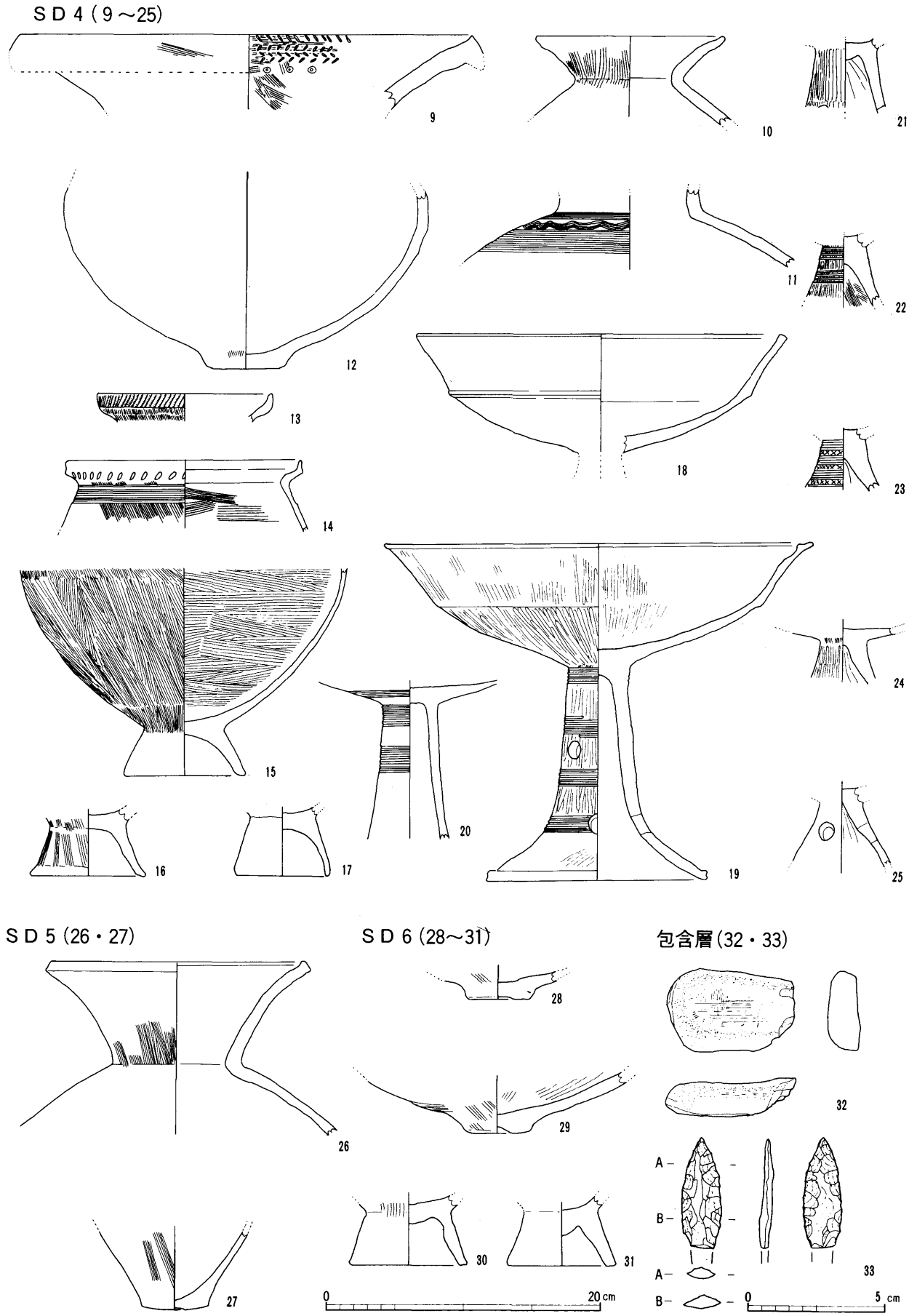
高杯（18～25）　杯部の形状がわかるものは18・19の２点のみだが、どちらも稜をもち、その上部は外湾し、下部は内湾する。口縁端部は、18が幅の狭い面をなすのに対し、19は面を持たず、ナデにより口縁内側が突帯状になる。杯部外面は縦方向のヘラミガキが行われるが、磨滅により上部の文様は確認できなかった。杯部内面は、18はナデ調整で、19ははっきりしないまでもタテミガキと思われる。なお、20も一部杯部が残る。その杯部下部外面に八条の横線が巡っている。脚部は比較的円柱状のもの（18・19・20・21）と小型で円錐状のもの（22～25）がある。円柱状のものでは、19がその全体がわかりえるもので、上部外湾下部内湾の杯部から柱状に伸び裾部で大きく開く。脚部の外面は縦方向にヘラミガキされ、６条の横線文が４段施され、上から２段目と３段目の間に１孔、４段目の横線上に１孔の円形透かしが確認できる。このほか、20では横線文が、21では縦のヘラミガキと３方向の透孔が認められる。円錐状のものは、その全体像（特に上部）が確認できるものはないので一概に高杯の脚部とは言えない。台付壺形土器の台部や小型器台形土器の可能性も残る。また、ワイングラス形の高杯の脚部も想定できる。外面は縦方向にヘラミガキが認められるも



第13図　ＳＤ４実測図（1：40）



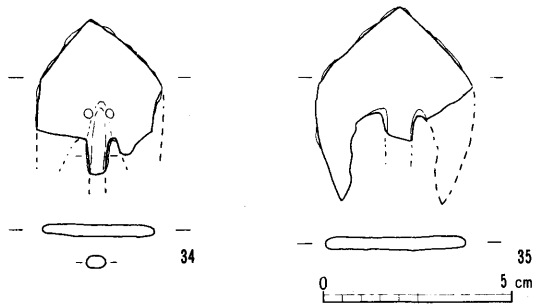
第14図　ＳＤ５・ＳＤ６実測図（1：60）



第15図　各遺構・包含層出土遺物実測図（1：4ただし33は1：2）

の（22・24）や横線文が認められるもの（22・23）、斜格子文を有するもの（23）がある。25の透かしは３方向に確認でき、22もそのわずかな痕跡から３方向と判断する。なお22は内面にハケメが認められる。

鉄鏃（34・35）　溝の南西端部から出土したもので、どちらも有茎腸抉三角形式に分類されるものである。34は現存長40㎜、幅32㎜、厚さ４㎜を測り、35は現存長49㎜、幅40㎜、厚さ３㎜を測る。34は、Ｘ線撮影により、２つの孔が確認でき、双孔着装であったことを知る。茎のほうに僅かに木質が残る。断面形はどちらも偏平である。



第16図　ＳＤ４出土鉄鏃（1：2）

ＳＤ５　ＳＤ４から東南東にさらに27ｍ程尾根づたい下ったところで検出されたもので、竪穴住居から当溝の肩の部分の標高差は約４ｍである。両端とも斜面で流失しているが、現存するところで、幅1.8ｍ、深さ１ｍ程あり、断面Ｖ字形でかなり鋭く地山をえぐっている。本来は尾根を完全に切る形で濠が掘られていたと考えたい。

出土遺物　26は広口壺の口頸部で、体部から「く」字状に折れ外反して口縁に向かう。口縁端部は面をなす。頸部外面にハケメがかすかにみられるが、他は磨滅がはげしく調整も不明である。27は壺の底部で細く直線的に立ち上がる。外面はハケ調整される。この他、図示してないが磨滅が著しい高杯も出土した。

ＳＤ６　ＳＤ５より５ｍ程東に離れ、ほぼＳＤ５と平行して掘られている濠で、ＳＤ５同様両端が斜面により流出している。幅2.2ｍで深さは１ｍと、ほぼＳＤ５と同程度の規模である。

出土遺物　壺（28・29）はいづれも底部のみで、やや突出している。外面にハケメがみられ、29は内面にもみられる。

台付甕（30・31）は、脚台部のみで、脚台部上面（甕底部内面）は黒く煤がかかる。

④　その他の出土遺物

当遺跡は、表土直下が検出面であるため、基本的には遺物包含層は存在しない。従って遺構に伴う遺物以外の遺物の出土は極めて少なかった。ただ、落ち込みなど地面の起伏によって、土が堆積するところもある。その中から、わずかな遺物が出土したが図示しえるものは極めて少なかった。

砥石（32）は、一部欠けているものの、平坦面を中心に使用痕が認められる。

石鏃（33）は、茎の有無は、その部分を欠くため着柄法は判明しない。現存長40㎜を測る。断面は三角形（～菱形）で、刃部はかなり鋭い。側面はやや反っている。縄文・弥生時代前期にはほとんどないタイプと思われ、当遺跡の遺構出土の遺物と同時期に使用されていたものとも考えられる。おそらく素材は、横長の剝片に調整を加えて石鏃に仕上げたものと思われるが、風化が進み、観察は困難である。サヌカイト製。

4．結　　語

南谷遺跡は、今回の調査1,300㎡と鈴鹿市教育委員会によって行われた調査262㎡（Ａ地区148㎡＋Ｂ地区114㎡）とを併せて1,562㎡が調査されたことになり、本遺跡の性格がかなり明らかになってきた。

以下、鈴鹿市教育委員会の調査結果と併せて、若干の考察を試みたい。

まず、南谷遺跡の時期について考えてみよう。今回の調査では、ＳＤ４を除くと、出土遺物に乏しく、その大半が破片で、磨滅も著しく、調整も不明瞭なものが多い。しかしながら、杯部の形状が判明する高杯が３点出土している。１点はＳＨ１からの出土（第12図４）で、２点はＳＤ４からの出土（第15図

18・19）である。これらは、口縁端部の違いこそあれ杯部に稜を持ち、稜より上部が外反するという特徴を有する。また脚部に、横線文が施されているのが認められる土器が多い。伊勢湾西岸における弥生後期の土器編年は、高杯形土器を指標に上箕田（Ⅵ）→西ケ広→高松といった変遷が25年前に提示されている[8]。この編年に従えば、先の高杯は上箕田Ⅵ式のものに近く、時期を後期前半に求められよう。また、当特徴をもった高杯は、尾張においては「山中期[9]」に該当する。近年、赤塚次郎氏は「山中期」の設定基礎になった一宮地域出土の資料を基本に、その資料批判から「山中式土器」の設定とその細分を提示された[10]。これに基づくと南谷遺跡ＳＤ４出土の高杯（19）は、透孔の方法が２段互違ということや、径深比率[11]が24.7を測るところなど、山中式後期（４段階）に比定できる。ＳＨ１やＳＤ４のその他の遺物を見ても、当時期に著しく外れるものはないと考えられる。よって、溝という遺構の性格からくる不安要素を内包しつつも、この遺構の活動時期の狭さは、確実であり、一括資料に近い様相を呈すると言える。次にＳＫ３については、高杯の杯部の形状は分かりえないが櫛描横線文が認められる脚部と、肥厚した口縁の外面に凹線がめぐり、内面に扇形文が施される広口壺が出土しており、ＳＨ１との時期差は感じられない。また、ＳＤ５、ＳＤ６については広口壺と甕・壺の底部のみで時期的な位置づけは困難が伴うが、同時期としても問題ないものと考える。

さて、鈴鹿市教育委員会によって行われた調査では、どうだろうか。ＳＸ１から同期の高杯が出土しており、またＳＢ１も高杯形土器の検討により複数時期の可能性も指摘しつつもほぼ同時期を想定されている[12]。つまり、南谷遺跡は、未調査の部分もあるが、弥生後期のごく短期間に営まれた遺跡ということが推定できよう。

ところで、遺跡の時期を考える場合、勿論高杯形土器だけで判断することはできないが、少なくとも当時期における高杯の型式的変化は、広く認められるところであり、その有効性も否定できない。この「山中期」の特徴をもった高杯が出土している遺跡は、鈴鹿市内では上箕田遺跡[13]や南山遺跡[15]があげられる。伊勢湾西岸に目を広げると、北勢地方では植松遺跡[15]・永井遺跡[16]・五百山遺跡[17]、中南勢地方では大ケ瀬遺跡[18]・平栄遺跡[19]・尺目遺跡[20]・高松弥生墳墓並びに高松Ｃ遺跡[21]・柳谷遺跡[22]・橋垣内遺跡[23]・多倉田遺跡[24]・草山遺跡[25]・湧早崎遺跡[26]・阿形遺跡[27]などで出土している。このように県内の広い範囲で所謂「山中期」の特徴を有する資料が蓄積されつつある。これらの報告を検討し、弥生時代後期土器の器種構成や成形・調整技法、地域的特徴[28]などを明らかにすることが今後の課題となろう。資料的価値の高い残りの良好な一括遺物の出現を期待するところである。

次に、本遺跡の性格について考えてみる。南谷遺跡は、現在のところ、丘陵の頂上部の２ヶ所で竪穴住居が確認されている。そのどちらも建て替えが認められるという共通点がある。その短い時期幅を考え合わせると、２基ずつの存続であった可能性が考えられる。頂上部分の未調査のところは、比較的平らで、あと３基分くらいのスペースはある。住居の規模を明らかにするには、今後の調査を待たなければならないが、多くとも数基で構成される比較的小規模な集落の様子が窺える。

さて、鈴鹿市の弥生文化の伝播をみるに、雲出川流域の中ノ庄遺跡を経て、北上して伝わった弥生文化は、鈴鹿において上箕田遺跡を形成することとなる。この遺跡は鈴鹿川の自然堤防上（標高約４ｍ）に位置し、海岸線まではわずか２㎞ほどである。この上箕田を起点とし、中期には西方の須賀遺跡、高岡山の東丘遺跡、国府町の八野遺跡、さらに鈴鹿山麓近くの東庄内Ｂ遺跡へと広がり、後期には神戸周辺、木田付近から高岡山、海岸線の北若松、岸岡山に、また南方では磯山・畑遺跡など中ノ川流域に広がる[29]。このような中期以降の遺跡の増加は、南谷遺跡のように丘陵上（高所）にその分布を広げる一方で、上箕田遺跡など平野部でも、なおその活動は続けられるのである。

この弥生時代後期における集落の立地の多様性・分散現象は、鈴鹿だけでなく、四日市市域・津市域にもみられ、古くから研究の対象になっている。特に安濃川流域についての研究が進んでおり、谷本鋭次氏は、上箕田Ⅳ期の遺物が出土した高松Ｃ遺跡に

ついて、「墳墓であるとは考えがたく」としたあとで、小集落の可能性を示唆し、「津市内に於ける弥生遺跡の殆どが、沖積地もしくはそれを臨む丘陵の裾部に営まれており、かような高所の例はない。」とその「高所」立地に注目された[30]。その後も、頂部標高約30mの丘陵斜面標高約15～17m（比高約8m）に3基の住居址が検出され、「丘陵性集落」と報告された平栄遺跡[31]や、標高30m前後（比高25m前後）の尾根上に4基の住居址が検出された柳谷遺跡[32]、さらには、尺目池の谷を望む丘陵、標高約33mの尺目遺跡でも2基の住居址が確認されている[33]。これらはすべて「上箕田Ⅳ期」に位置づけられる土器が出土しており、「4～5棟の住居址を単位とし、1～2世代というきわめて短期間いとなまれたもの[34]」と考えられている。伊藤久嗣氏は、この安濃川流域の様相を「中期後半まで平野部に存在した拠点的集落が、後期に至って分解したかのごとく周辺丘陵部に占地する」ととらえ、「第4様式の段階で、共通した凹線文土器の広範な分布範囲に、戦斗的状態ではあるが、一つのゆるやかな地域的な同盟関係の存在の想定に同意する」としたうえで、後期遺跡の分散現象を「その枠を破るかごとき」と修飾し、「前代の連合関係を突き崩す新たな緊張状態に突入したことの反映と想定せざるをえない。」と述べられた[35]。

先に述べた鈴鹿市域での中期以降の分散現象も、同様に考えることが可能であろう。ここに、南谷遺跡の性格が深く関与されることになる。ここで、今一度南谷遺跡の概要を整理すると、東から南東に低位段丘もしくは沖積平野が広がり、さらには伊勢湾までも見渡せるという丘陵の尾根付近に位置し、尾根には濠を有し、多くとも竪穴住居数基から成る小集落を形成し、そこからほとんど時期差のない弥生時代後期の土器と石鏃、2個の鉄鏃が出土したということになる。鉄鏃については、遺物のところでも触れたが、大村直氏の分類[36]でいうところの、有茎腸抉三角形式Ⅰ類にあたる。同氏は「畿内第Ⅳ様式～第Ⅴ様式併行期において、石鏃はしだいに減少していくが、この段階において、無茎三角形式Ⅱ類、有茎腸抉三角形式など、石鏃とは異なる、素材を生かした2次的な変化が認められる。」とされた[37]。

また、銅鏃の重さの平均値が3gと石鏃のそれと変化がないこに対し、鉄鏃のそれは5g以上で「その効力の相違は明らかである[38]。」と述べる。南谷遺跡出土の鉄鏃は、完形でないため明確にはいえないが重さは7g程度と推定できる。また、逆刺が比較的深いながらも布留式併行期にみられるほど長くなく、また当遺跡の活動時期の幅の狭さから考えても、「上箕田Ⅳ期」（山中期）の所産と考える。しかし、溝出土遺物ということと、「鏃」の機能を考えあわせると非常に危険が伴うことはいうまでもない。近年、奥野正男氏は、弥生時代の鉄鏃・銅鏃の地域別出土数を表にまとめられているが[39]、それによると近県での当時代出土の鉄鏃は奈良県2点・滋賀県0点・愛知県0点であり、さらに静岡・東京・埼玉・神奈川にも鉄鏃の出土例をみない。三重県は今回の調査で2点となったわけである。さて、先の大村氏は、これら弥生時代の鏃について次のように述べられる。「弥生時代において、鏃は対人的な「武器」として発達する。」[40]

鉄鏃の出土をこのように「対人的武器」として捉えることが許されるなら、この南谷遺跡の性格は、明確に位置づけることができる。つまり、①弥生時代後期であり、②現在の農村集落と重複していなく、③見張・通報・防塞にふさわしい位置と環境を有しており、④濠という防御施設と鉄鏃という武器的遺物が存在する、この南谷遺跡は、「狭義の高地性集落[41]」ということができる。

いままでに、県内で、このような「狭義の高地性集落」とまではいえないにしても、いわゆる「高地性集落」を示唆された遺跡は、若干数存在する。例えば、南谷遺跡のさらに西方、中ノ川をのぼった右岸、標高44mほどの、遠く伊勢湾を眺望できる丘陵上に位置する三宅西条城跡では、弥生中期の住居址と遺物が出土しており、さらに丘陵上の未調査の部分に数基の住居址があることを想定され、「断定し得ない」としながらも、「高地性集落」を匂わされた[42]。鈴鹿川左岸丘陵上の扇広遺跡では、中期～後期の30数基の住居址や5基の方形周溝墓とともに、幅約2m、深さ約1mの「濠」が調査されており、防禦的な性格も考えられている[43]。この扇広遺跡をはじめ、高岡山の丘陵上には数多くの弥生遺跡が知

られており、また、海岸地帯でも岸岡山の丘陵上に弥生遺跡の存在が知られている。鈴鹿市史では、これらを「稲作農耕が広くゆきわたり、沖積平野だけでなく、狭少な谷あいの低地をも水田に変えていった結果」としながらも「このような高地性集落」は、「防禦的な意味があったとする説もある。」と記述している[44]。津市に目を移すと、半田丘陵の高松C遺跡で、30を越す住居址が確認されたが、調査担当者は、「その立地、時期から高地性集落の問題へと発展しかねない要素を含んでいると見るのは、やはり極論にすぎるであろうか。」と述べている[45]。また、平栄遺跡で「丘陵性集落」という言葉を使われたことは先述した。

もっとも、これらの遺跡は、時期の違い・規模の違い（住居址の数や比高・標高の違い）・性格の違い（つまり、一般的な集落か軍事・戦闘的な集落か）などを有し、南谷遺跡でいうところの「高地性集落」とは同レベルで扱えないとも思われ、分類の必要も感じるが、今後の発掘報告を待たなければならない。また、高地性集落は、「倭国大乱」に結びつけて、論じられてきたが、「狭義の高地性集落」のなかでも時期の違い（つまり、「倭国大乱」に直接係わる時期か否か）など、さらに分類しなければならないだろう。この点において南谷遺跡は、山中式後期併行であり、当期を赤塚氏は、「西暦２世紀後葉になり、まさに「倭国大乱」の時代と符合するようである。」とされている[46]。また、同氏は「熊野灘ルート」を確認し、主戦場が瀬戸内から大阪湾沿岸地域が中心の大乱も、「熊野灘ルート」を通じて情報がもたらされ、またなんらかの影響をうけたであろうと述べている[47]。南谷遺跡をもって、この大乱は伊勢湾沿岸地域を巻き込んだものと早急に言うつもりはないが、その可能性は秘めている。

「熊野灘ルート」のごとく海上の道の存在は、さらに東への交流にも用いられる可能性は充分にある。知多半島でも弥生時代後期に、あらたに丘陵上に立地する遺跡が数多く出現するようになるし、山中式期に形成が開始され、次期の欠山式期に中心をおき、この期以後廃絶する傾向を持つ。標高38ｍ前後（比高32ｍ前後）で７基の住居址がある中ノ池遺跡Ｂ地点（なお約250ｍ北の支陵上に弥生後期の焼土坑あり）や標高30ｍ前後（比高26ｍ前後）、丘陵上の台地を遮断する長さ20ｍ、幅３ｍ、深さ2.7ｍの濠状遺構が検出された大狭間遺跡などがある[48]。知多半島におけるこのような遺跡について、杉崎章氏は「高所性遺跡」とよび、平野部には本拠地集落があり、これと一体をなすもので、水田の見張りと管理を含めた防禦的機能をもった集落としている[49]。なるほど南谷遺跡も上箕田遺跡という拠点的遺跡は遠すぎるとしても畑遺跡と一体をなす可能性は有する。眼下には水田が広がっていたことは充分に考えられる。とはいえ、水田の見張り自体が高地（高所）に住居を構える主原因とは考えにくく、この知多半島のいわゆる「高所性遺跡」のなかの幾つかは、濠や焼土坑の存在から、やはり何らかの争乱の渦中にあったものととらえたい。つまり、狭義の「高地性集落」も含む可能性がある。さらに目を東に進めて、静岡の様相をみてみると、比高約30ｍで、Ｖ字溝１条や住居址４基が検出され、後期末葉の極めて短期間の集落と考えられている一色前田遺跡や原新田遺跡、中芝原遺跡、宇刈Ｉ遺跡などが狭義の高地性集落として考えられている[50]。これらは後期後葉～古墳時代初頭に中心時期があり、北陸地方の状況と一致する。畿内から北陸または畿内から東へと緊張状態がもたらされたと捉えるとスムーズに理解できる現象であろう。

さて、この緊張状態とは、いったいどの集団が何に対しての防御の必要性を要したのであろうか。先に挙げた例を、繰り返し見るならば、「畿内」を中心とした政権形成に関わる戦いとも考えられる。それにしては、伊勢湾西岸の狭義の高地性集落は、現在のところ、この南谷遺跡だけであり、当地域全域が弥生後期に極度の軍事的動乱をむかえていたとは捉えにくい状況である。濠ももたず、高所にも居を構えない弥生後期の集落の存在は、なにも当地域のことだけではない。しかし、今回の発掘は、まさしく戦闘の存在を肯定すべき調査例であり、その対象となる勢力を追求しなければならないところだが、推測の域をでない。外部勢力に対するごく一部の集団（集落）の抵抗または反乱なのだろうか。

かつて、伊藤久嗣氏は、安濃川流域で出土した神戸鐸（外縁付紐２式・流水文）と野田鐸（突線紐式

・三遠式）に目を付けられ、「製作時期の違いをそのまま配付時期の違いを考える場合と、後期に共存したと考える」場合の２通りの解釈をおこない、すくなくとも二つの勢力（畿内と東海系）を想定された[51]。鈴鹿市域では磯山鐸（外縁紐式・三対耳四区袈裟襷文）があり、近年、銅鐸を製作した工人集団の実態について考察された春成氏は、この磯山鐸と先の神戸鐸が「同じ工人」又は「系統的に極めて近い」ことを述べられている[52]。このことは、現段階では南谷遺跡に直接関わりがないが、鈴鹿市域は、この他銅鐸型土製品が２点（上箕田遺跡・一反通遺跡）出土していることもあり、さらに、銅鐸が発見される可能性を有した地域であるといえることからも、銅鐸の面から、ある一定勢力の推察が可能になってくるのではなかろうか。今後の資料の増加と研究の充実を期待する。

伊勢湾西岸の高地性集落に関して、若干の考察を試みたが、狭義の高地性集落の当地域の資料の蓄積がなく、また、筆者の浅学のため、充分な考察ができなかった。今後の調査例に負うところが多いが、今回の報告をまとめるにあたって気づいたことに、地形的に高地性集落の可能性を有する弥生遺跡が充分な調査を得ないまま土採りなどですでに消滅してしまっていることがあった。残念なことである。

（小菅文裕）

〔註〕

① 1990年鈴鹿市遺跡調査会発掘調査　「鈴鹿市埋蔵文化財だより　10」　1990　による
② 三重県埋蔵文化財センター『一般国道２３号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報Ｖ』　1993
③ 仲見秀雄「畑遺跡」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』1966　鈴鹿市教育委員会
④ 中森成行編『鈴鹿市遺跡地図』　1987
　遺跡番号　市５９３　県６２６９
⑤ 鈴鹿市教育委員会『郡山遺跡群発掘調査報告Ｉ』1983
⑥ 近藤玲氏（同志社大学院生）の御教示による
⑦ 新田剛『南谷遺跡』鈴鹿市教育委員会1992
⑧ 谷本鋭次「６.西ケ広遺跡（５.遺物　Ｂ弥生時代の遺物）」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会　1970
⑨ 大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』ＸＬＶⅡ　1968
⑩ 「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集1992）
　ちなみに、赤塚氏は西ケ広遺跡のＳＢ２１出を山中式後期（５段階）に相当するものとしている。
⑪ 杯部深さを口縁部径で除し、100を乗する。（前掲註⑩）
⑫ 前掲註⑦に同じ
⑬ 真田幸成・大場範久・仲見秀雄『上箕田弥生遺跡第二次調査報告』1970
⑭ 新田剛『南山遺跡・南山６号墳』鈴鹿市教育委員会1991
⑮ 伊藤洋「三重県北勢部の弥生時代遺跡について」『三重考古第２号』三重考古学研究会1978
⑯ 児玉道明・伊藤洋他『永井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会1973
⑰ 『四日市市史』第二巻　史料編考古Ｉ　四日市市1989
⑱ 伊藤久嗣「Ⅳ　大ケ瀬遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ｉ』三重県教育委員会1973
⑲ 伊藤久嗣「Ⅴ　平永遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ｉ』三重県教育委員会1973
⑳ 萱室康光『尺目遺跡発掘調査報告』津市教育委員会1975
㉑ 谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市教育委員会1970
㉒ 浅生悦生他「(4)　３．柳谷遺跡」『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会1974
㉓ 「Ⅳ．橋垣内遺跡－Ａ地区」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター1991
㉔ 早川裕己『多倉田遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会1981
㉕ 『草山遺跡発掘調査月報』松阪市教育委員会1982～
㉖ 福田昭『湧早崎遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会1992
㉗ 福田哲也ほか『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター1992
㉘ 例えば、伊賀上野地方での弥生時代後期の土器が多く出土している遺跡として、才良遺跡（西森平之『才良遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会1983及び倉田直純「才良遺跡・澤田遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書－第１分冊－』1990）などあるが、当然のことながら伊勢湾沿岸の様相とはかなり違いを見せ、その独自性は特に別に把握しなければならない。しかしながら、脚部に櫛描横線文が施される高杯など、伊勢湾地域の影響もみられる。勿論ここでいう地域性とは、この伊勢湾西岸部と伊賀上野地方との地域性にとどまらず、伊勢湾西岸部内のさらに細かい特性を指す。
㉙ 『鈴鹿市史』第一巻　鈴鹿市教育委員会　1980　Ｐ88
㉚ 前掲註㉑に同じ
㉛ 前掲註⑲に同じ
㉜ 前掲註㉒に同じ
㉝ 前掲註⑳に同じ
㉞ 前掲註⑳の報告書　Ｐ５
㉟ 伊藤久嗣「三重県における弥生時代の諸問題」『三重考古第２号』三重考古学研究会1978　Ｐ28～29
㊱ 大村直「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第３号　1983
㊲ 大村直「４　戦い　2.鉄・銅の武器　Ｅ．鉄鏃」『古墳時代の研究　９　弥生人の世界』1986　Ｐ90
㊳ 前掲註39に同じ
㊴ 奥野正男『鉄の古代史　弥生時代』白水社1991　Ｐ270
㊵ 前掲註39に同じ　Ｐ91
㊶ 小野忠熙「高地性集落論」『三世紀の考古学』中巻1981
㊷ 本堂弘之他『三宅西城跡発掘調査報告』三重県教育委員会1983　Ｐ６
㊸ 1990年鈴鹿市遺跡調査会発掘調査　『鈴鹿市埋蔵文化財だより　９』1990による
㊹ 前掲註㉙に同じ
㊺ 長谷川博「津市半田丘陵の考古学的位置について－高松Ｃ遺跡を中心として－」『高田中学校高等学校研究紀要』第２号1984
㊻ 赤塚次郎「山中式という名のデザイン」『考古学フォーラム３』1993　Ｐ30
㊼ 前掲註46に同じ　Ｐ17
㊽ 立松彰「知多地方における弥生時代遺跡の分布」『マージナル　Ｖ８』愛知考古学談話会　1988　による
㊾ 杉崎章・立松彰『愛知県東海市中ノ池遺跡群発掘調査報告書』東海市教育委員会1982
㊿ 松井一明「静岡県における囲郭集落と高地性集落について」『マージナル　Ｖ８』愛知考古学談話会　1988　による
(51) 前掲註35に同じ　Ｐ27～28
(52) 春成秀爾「銅鐸の製作工人」『考古学研究』第39巻第２号1992

遺物観察表

遺物番号	登録番号	遺構(出土位置)	器種	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	残続度	備考
1	013-03	A-K10 SH1	弥生土器 壺	口径14.0	口縁部内面ナデ外面磨滅により不明	灰白色 7.5YR8/2	並1mm程砂粒含	口縁1/6	
2	012-03	A-K10 SH1	弥生土器 壺底部	底部径 6.0	体部下部外面タテ方向のハケ内面乱方向のハケ	赤黒 7.5R2/1	ほぼ良	底部1/6	
3	013-02	A-J10 SH1	弥生土器 甕	口径 (20.0)	口縁部ヨコナデ	にぶい橙 7.5YR7/3	やや粗4mm程長石含	口縁1/8	
4	013-05	A-K10 SH1	弥生土器 高杯	口径 (32.0)	口縁部ヨコナデ 他は磨滅はげしく調整不明	浅黄色 7.5YR8/3	良	口縁1/8	
5	013-04	A-K10 SH1	弥生土器 高杯		磨滅はげしく調整不明 脚部内面しぼり痕	灰白色 7.5YR8/2	ほぼ良1mm程砂粒含	脚上部のみ	
6	013-01	A-K10 SK3	弥生土器 壺	口径 (22.0)	口縁外面凸線3条内面櫛状工具回転による扇形文	橙 5YR7/6	粗4溯程小石多含	口縁2/3	
7	012-01	A-K10 SK3	弥生土器 壺	口径 (25.0)	口縁外面凸線4条内面櫛状工具回転による扇形文 磨滅はげしい	浅黄色 7.5YR8/4	良	口縁1/8	
8	012-02	A-K10 SK3	弥生土器 高杯		脚部4条4段櫛描平行直線文 透しは4方向か？	浅橙 5YR8/4	良	脚上部のみ	
9	010-01	A-K11 SD4	弥生土器 壺	口径 (33.0)	口縁外面ハケ内面ハケ後2段羽状刺突文2重円形竹管文	灰白色 7.5YR8/2	並1mm程砂粒含	口縁1/8	口縁下垂か？
10	008-02	A-L12 SD4	弥生土器 壺	口径 (14.0)	頭部外面タテハケ 肩部はヨコハケか？	橙 5YR6/6	良	口縁1/6	
11	009-04	A-L12 SD4	弥生土器 壺	頭部 (6.8)	肩部外面横線文とその間に波紋状 内面及び頭部ナデ	浅橙 5YR8/4	精良	肩部1/5	
12	008-01	A-K11 SD4	弥生土器 壺	底径 4.8	体部下外面にわずかにハケメみられるが磨滅はげしい	橙 5YR7/6	やや粗4mm以下小石含	底部4/5	
13	009-03	A-K11 SD4	弥生土器 壺	口径12.8	口縁外面ナデ後ハケによる刺突文 頭部外面タテハケ内面ナデ	褐灰 5YR8/3	並1mm程砂粒含	口縁1/3	
14	010-02	A-K11 SD4下層	弥生土器 壺	口径16.8	体部上部上面5条櫛描平行直線文 口縁内外面ナデ 体部外面タテ内面ヨコハケ	にぶい橙 7.5YR7/3	粗4mm以下砂粒多含	口縁1/2	
15	007-02	A-K10 SD4下層	弥生土器 台付甕	底径 8.9	体部下半外面タテハケ内面ヨコハケ	浅黄色 7.5YR8/3	良2mm以下砂粒少含	胴部下半2/3	
16	006-02	A-K11 SD4	弥生土器 台付	底部 8.4	台部外面タテハケ内面ナデ	赤灰 10R5/1	やや粗2mm程砂粒少含	台部1/5	
17	006-01	A-L13 SD4上層	弥生土器 台付甕	底部 6.8	磨滅により調整不明	赤橙 10R6/8	並1mm程砂粒含	台部4/5	
18	004-01	A-K10 SD4下層	弥生土器 高杯	口径26.6	有稜 杯部内外面ナデ	浅黄橙 10YR8/3	や良1mm程砂粒少含	口径1/4	
19	005-01	A-K10 SD4下層	弥生土器 高杯	口径30.8 器高24.4 底径15.9	口縁端部内外面ヨコナデ杯部内外面タテのヘラミガキ 脚部外面タテのヘラミガキ 6条櫛描横線文 2段透孔	橙 5YR7/6	良	2/3	
20	007-01	A-K11 SD4下層	弥生土器 高杯		杯部外面下部櫛描横線文 脚部外面櫛描横線文	浅黄橙 10YR8/4	良	脚上部のみ	
21	009-02	A-K10 SD4下層	弥生土器 高杯		脚部外面タテのヘラミガキ 内面絞り痕 3方透孔	橙 2.5YR7/8	良	脚上部のみ	
22	006-07	A-K12 SD4	弥生土器 高杯		脚部外面ヘラミガキ後4条横線 内面ハケメ 3方透孔か？	浅橙 5YR8/4	良	脚上部のみ	
23	006-06	A-K10 SD4下層	弥生土器 高杯		脚部外面4条の櫛描横線とその間に斜格子文 内面絞り痕	明褐灰 5YR7/2	良 石英極少量含	脚上部のみ	
24	009-01	A-L12 SD4	弥生土器 高杯		杯部外面ナデ杯脚接合部外面ハケ脚部外面タテのヘラミガキ 内面絞り痕	にぶい橙 5YR6/4	良	脚上部のみ	

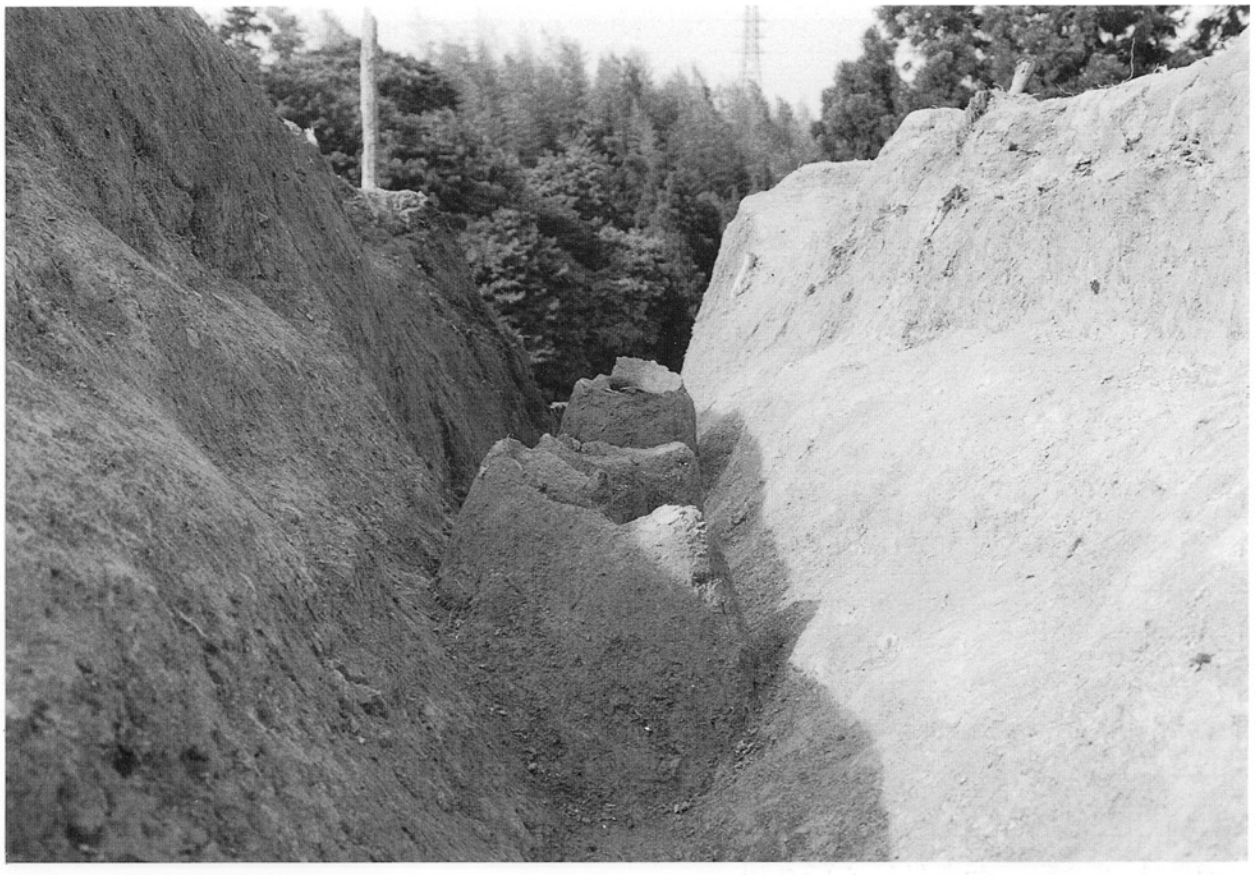
遺物番号	登録番号	遺構(出土位置)	器　種	法量(cm)	調整技法の特徴	色　調	胎　土	残続度	備　考
25	006-05	A-L12 SD4	弥生土器 高杯		脚部外面タテへのヘラミガキ？ 内面絞り痕　3方透孔	橙 2.5YR6/6	良砂粒極少	脚部2/3	
26	002-01	A-P18 SD5	弥生土器 壺	口径18.4	口縁部ヨコナデ頭部タテハケ	浅橙 5YR8/4	粗7mm以下小石多含	口縁部完形	
27	003-01	A-P18 SD5	弥生土器 壺	底径 5.0	磨滅はげしいが外面わずかにハケの痕跡	橙 7.5YR7/6	並　3mm 程石英含	底部のみ	
28	001-03	A-P20 SD6	弥生土器 壺	底径 4.4	外面ハケメ　内面ナデか	にぶい橙 7.5YR7/3	やや良3mm程砂粒少含	底部のみ	
29	002-03	A-Q20 SD6	弥生土器 壺	底径 4.8	内外面ハケメ	橙 2.5YR7/6	やや良3mm程小石極少含	底部1/2	
30	001-01	A-Q20 SD6下層	弥生土器 台付甕	底径 8.5	台部接合部わずかにタテハケ	にぶい橙 5YR7/4	粗3mm程小石多含	脚台部ほぼ完形	台部上面煤有り
31	001-02	A-P20 SD6	弥生土器 台付甕	底径 7.6	台部接合部わずかにハケの痕跡	浅橙 5YR8/3	やや良3mm程砂粒少含	脚台部ほぼ完形	台部上面煤有り
32	006-04	A-K13 包含層	砥石		表面に使用痕	暗青灰		約2/3	
33	011-01	A-S18 包含層	石鏃	現存長 4.0				約4/5	
34	011-02	A-K10 SD4	鉄鏃	現存長 4.0 厚さ 0.3	有茎腸抉三角形式			約2/3	
35	011-03	A-K10 SD4	鉄鏃	現存長 4.9 厚さ 0.3	有茎腸抉三角形式			約2/3	

遺跡全景（南西上空から）

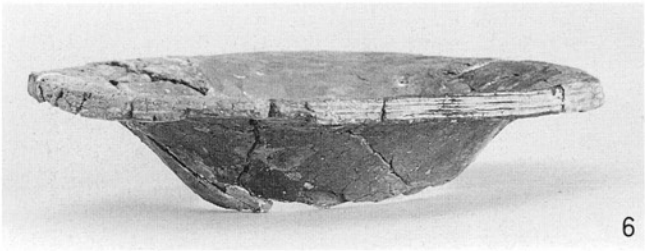
ＳＨ１・２、ＳＫ３（南東から）

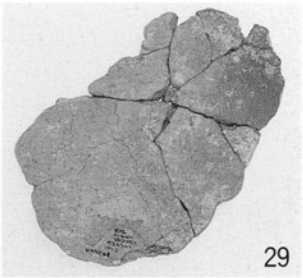
PL 2

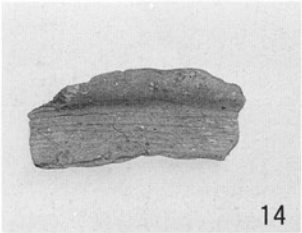
SD 4 遺物出土状況（南から）

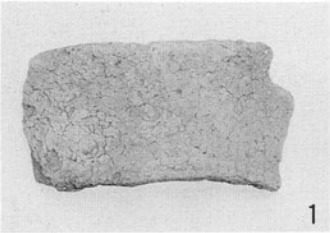


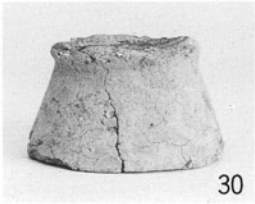
SD 5 遺物出土状況（南から）

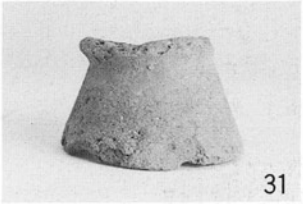


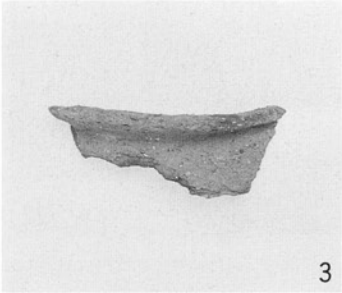


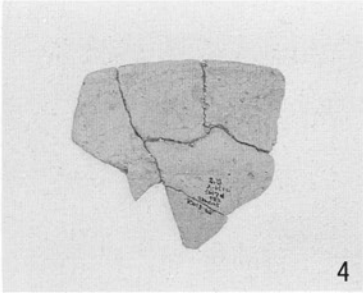


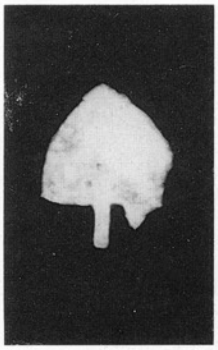




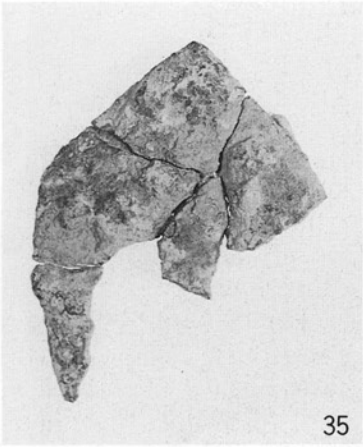






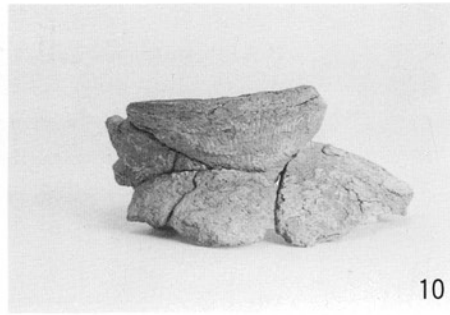


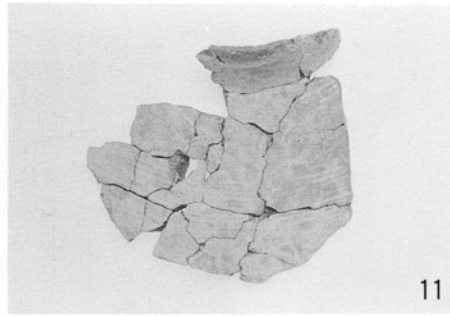
33

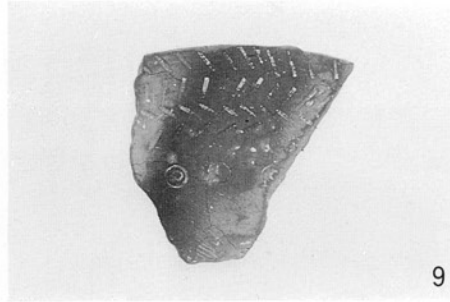


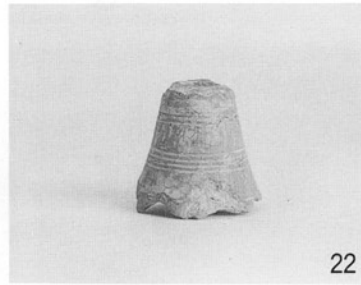
出土遺物（1：3）ただし、33～35は1：1 右下２点Ｘ線

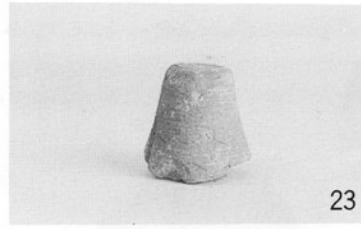
PL 4











出土遺物（1：3）

Ⅳ　鈴鹿市稲生町字稲生山　稲生遺跡

1. はじめに

（1）遺跡の立地と周辺の状況

鈴鹿市南部の国府の台地からはじまる丘陵は、南側に中ノ川が開析した沖積地を望みながら東側へ続く。その丘陵の縁辺部は低位丘陵となり稲生町付近まで延びるが、先端に行くにしたがって丘陵としてのまとまりはなくなり、より低い部分から小規模な開発が繰り返された結果もあって、微高地部分は小さな独立丘陵として点在している。稲生遺跡も、最高所の標高が19.7mというこうした独立丘陵の西側斜面に立地している。

周辺部の遺跡でも、古墳時代の遺跡や遺物散布地についていえば、稲生遺跡同様の低い独立丘陵の斜面に立地しているものが多く、発掘調査が行われた伊奈富遺跡①や、良好な古墳時代後期の土器群が採集されている伊奈富神社遺跡②も例外ではない。

こうした集落（とくに稲生遺跡）の消長と直接的あるいは間接的に大きく関係していると思われるのは、同時期の須恵器焼成窯である稲生古窯跡群の存在である。稲生古窯跡群は、稲生遺跡の北西約850mの低丘陵に存在しており、稲生遺跡から視認できる

第17図　遺跡周辺地形図（1：5,000）

位置にある。7世紀を中心とするものであるが、少量ながら5世紀末に遡ると考えられる遺物も出土しており[③]、周辺の集落跡の出現も、ほぼその操業開始時期と軌を一にするようである。現在までに3基が確認されているだけであるが、6世紀代のものは空白となっており、未確認のものやすでに消滅している可能性を考えると、いま少し存在していた可能性もある。

稲生遺跡が立地する独立丘陵には、東西方向に小さい谷が入っていて、丘陵を南北に分断する形となっている。遺跡もこの地形と無関係ではなく、発掘調査の結果、この谷筋には大溝の存在することが判明した（ＳＤ40）。また、遺跡前面（西側）は後世の削平を受けており、本来的に遺跡はさらに西側へ広がっていたものと思われる。

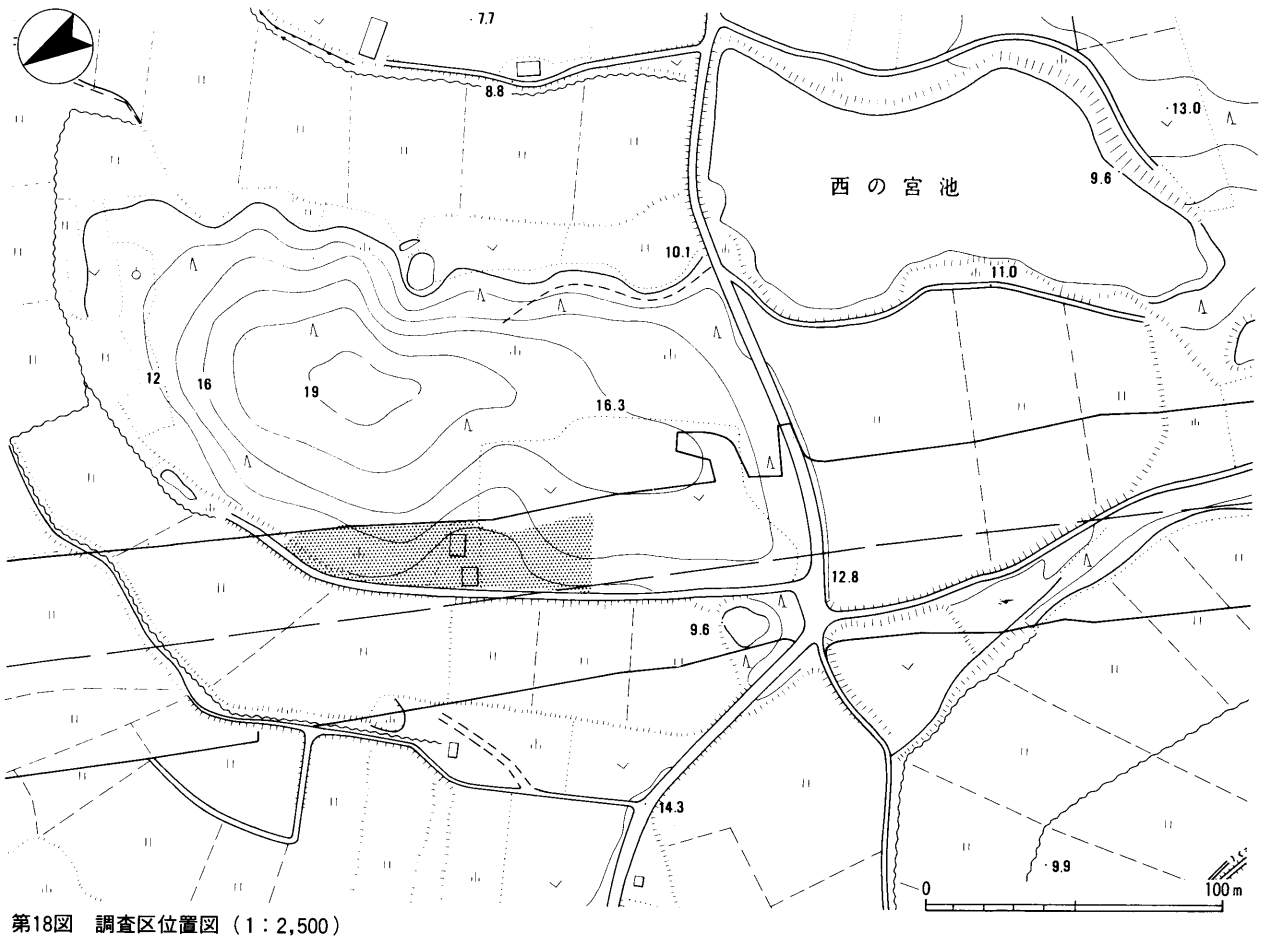
（２）調査の方法

調査区の設定は座標軸に従い、100ｍ区画の正方形を設定して大地区とし、さらにその内部を25等分して４ｍの方眼区画の小地区とした。それぞれの表示は、大地区・小地区ともに北西隅を表示の頂点とし、小地区は南北を北からＡ～Ｙのアルファベットを、東西を西から１～25のアラビア数字を与えた。

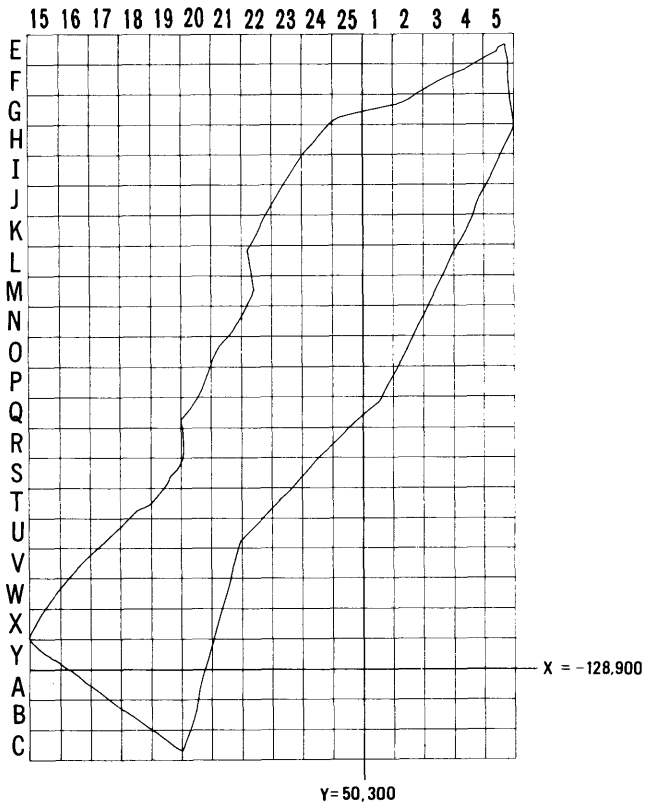
第１次調査では遺構検出面がいまひとつ不明確な部分があったことと、表土においてもかなり遺存状況の良好な遺物を包含していたことから、発掘は樹木の伐採後、すべて人力をもって行った。

遺構名称は、ピットのみグリッド毎の通し番号を付したが、他の遺構は調査区全体のなかでの通し番号を与えた（ただし、住居跡の同一地点での重複のため、現場では枝番号を付したものもあるため、当報告ではすべて新たに付け直したものである）。

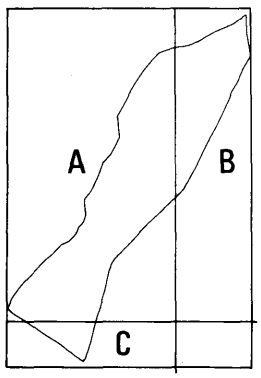
実測は、土層図や遺物出土状況図等必要に応じて1/10や1/20図を作成したほか、遺跡全体の実測は1/50作図の航空写真測量を実施した。



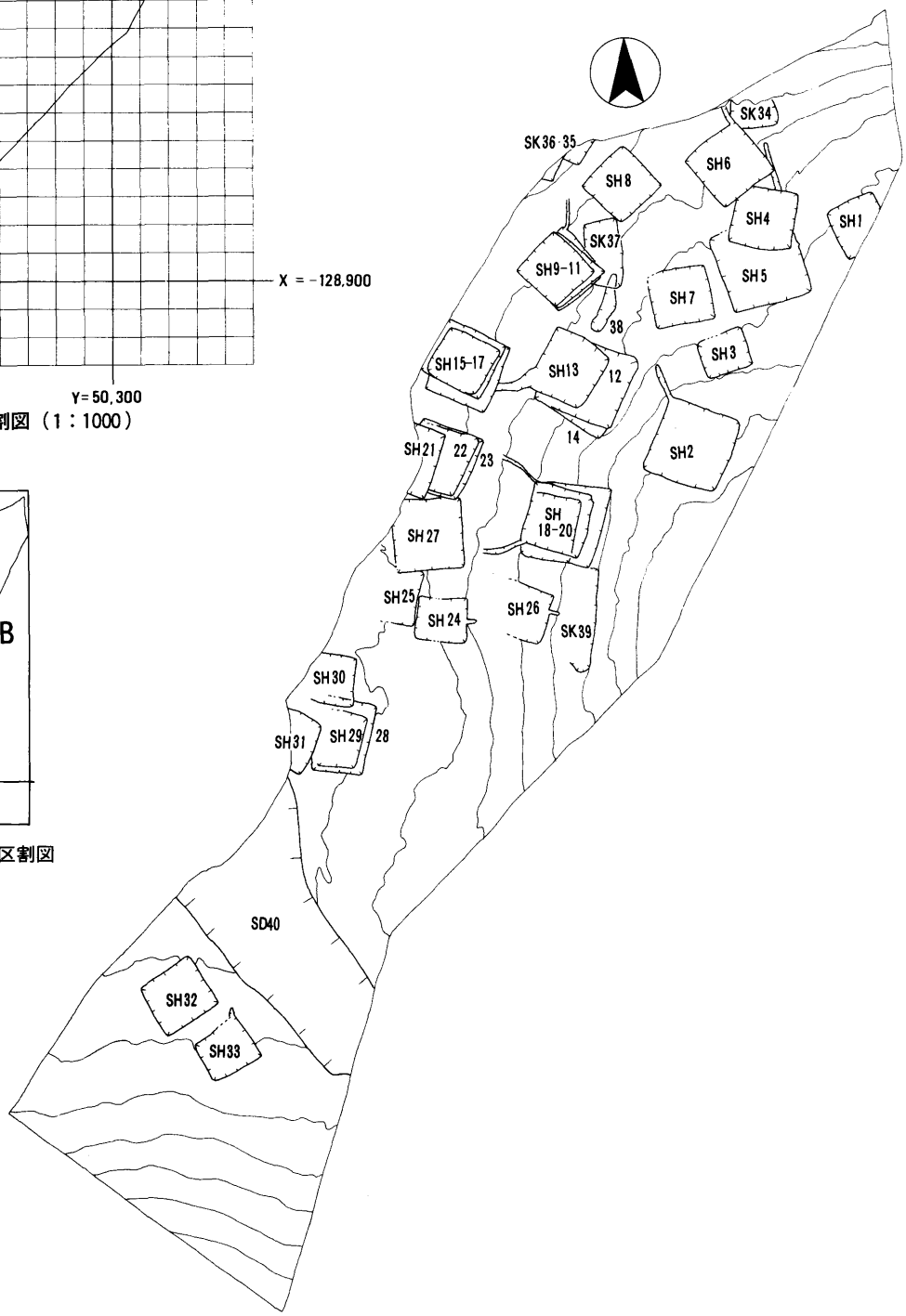
第18図　調査区位置図（1：2,500）



第19図　稲生遺跡小地区割図（1：1000）



第20図　稲生遺跡大地区割図



第21図　遺構配置等高線図

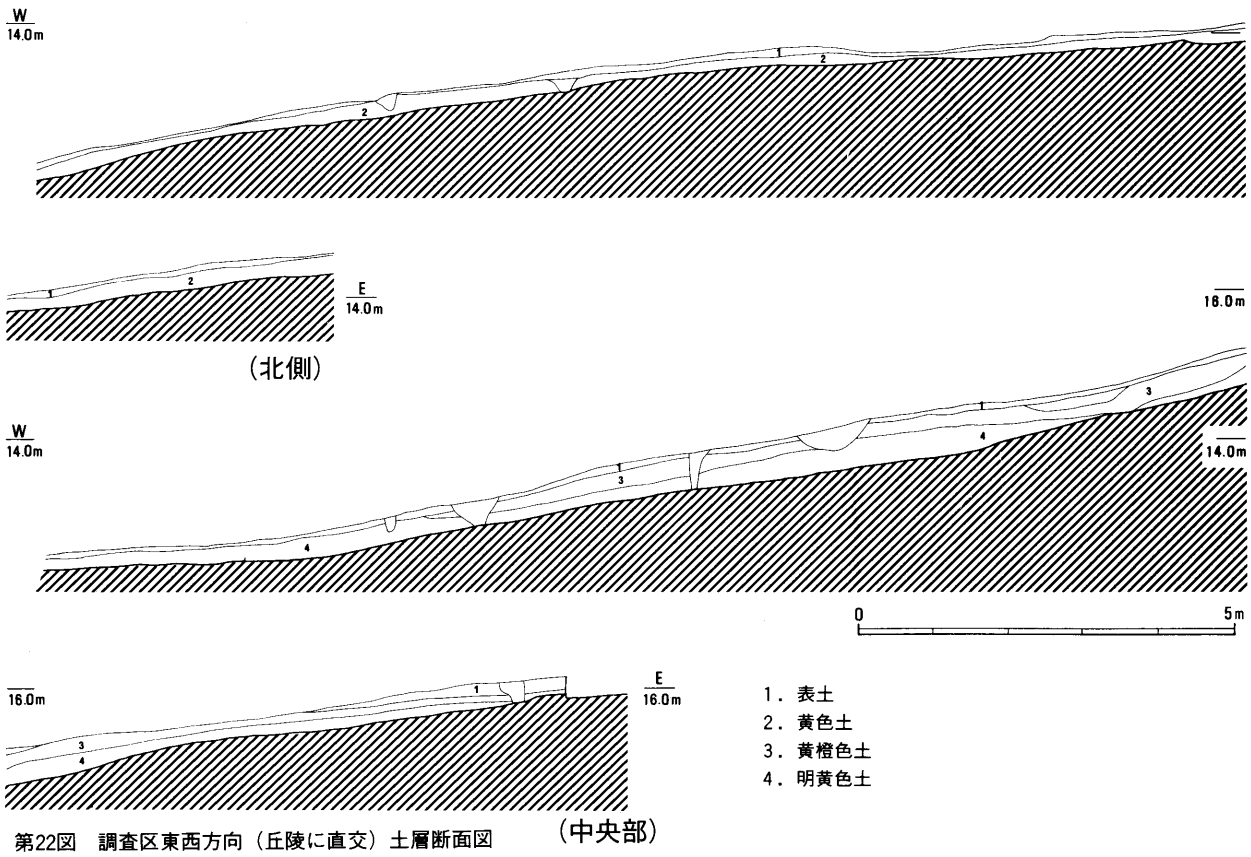
2．発掘された遺構と遺物

（1）基本層序

調査区が南北に細長い独立丘陵に存在し、またその間に小さいながらも谷が入っているという起伏に富んだ地形であることから、調査区全体で一定した層序というものは存在しない。また、後世の植林等に伴うと考えられる全く締まりのない客土の存在などによって、沖積地ではない丘陵性の遺跡のわりには堆積層が厚く、表土から検出面までの厚さは、平均で50～60㎝、深いところでは１ｍにも及んだ。そうした状況ではあるが、個々の差異は取りあえず措くとして、調査区の層序全体を大きく捉えた場合、以下のようにまとめることかできるであろう。

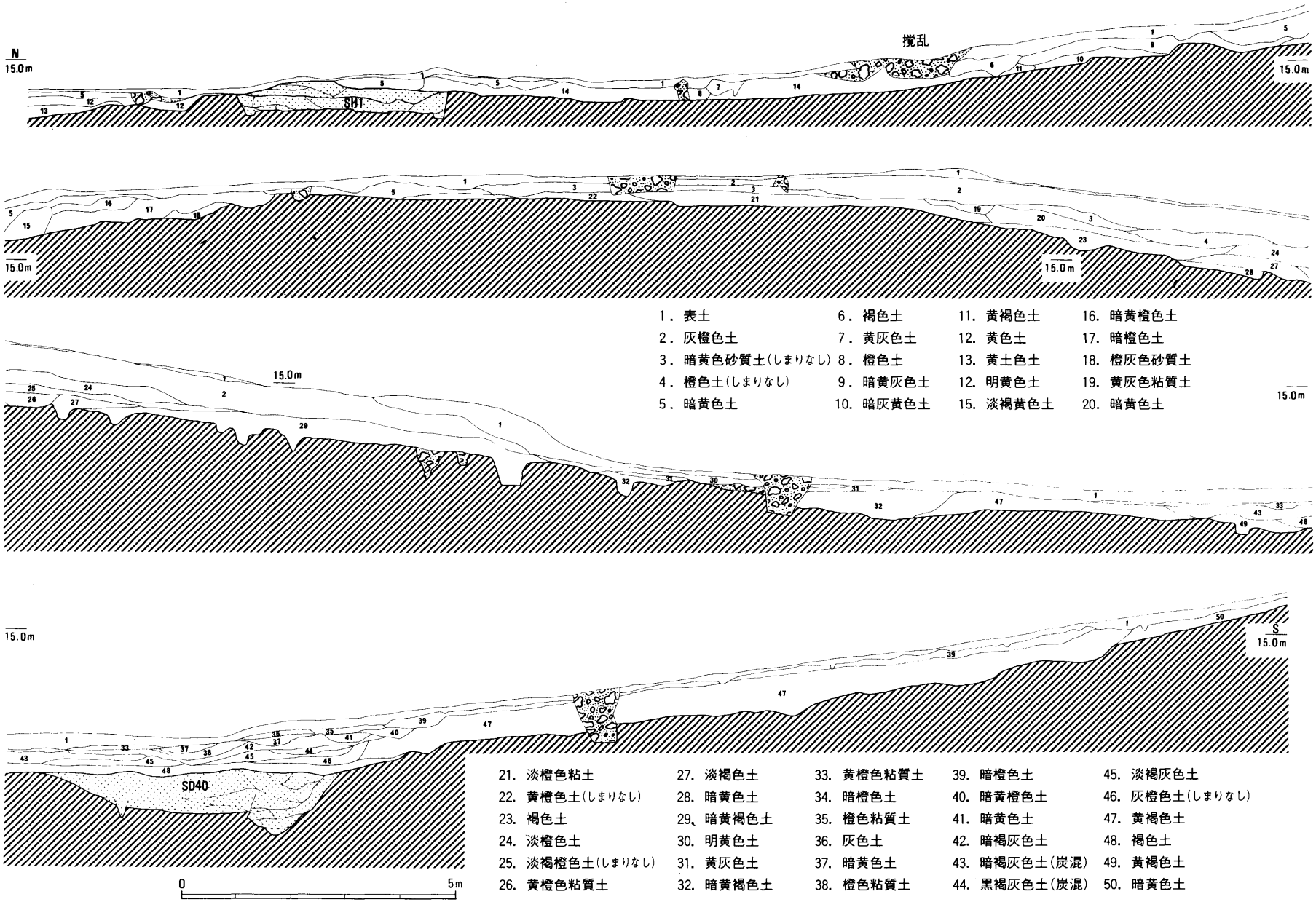
調査区北端から、南に向かって高くなっていく東西にＳＨ２－ＳＨ12～14－ＳＨ15～17が存在するあたりまでは、比較的通常の堆積状況を示す部分である。すなわち表土から検出面までには、遺物包含層として、明黄色土・黄色土・淡黄色度・黄土色土といった土が堆積しているが、それらは黄色系の土として一括することが可能であり、その下が遺構検出面となる。この辺りの検出面は、橙色土であるが調査区内の最高所であるＳＨ２付近は黄灰色砂質土である。表土・包含層ともに５～６世紀の須恵器を中心とした遺物が良好に包含されており、包含層は基本的にはさらに上位部分から流出してきたものと思われる。

最高所のＳＨ２よりも南側となる部分、すなわち谷筋に相当する部分は、最低地に大溝（ＳＤ40）が走っている。この部分の包含層は、前述の北寄りの部分で見られた黄色系の土が、暗黄色土・黄褐色土・暗黄褐色土等といったより汚れた黄色系の土に漸移的に変わる。その下が遺構検出面であることは北側部分と同様であるが、包含層と表土との間には遺物をあまり含まない橙色土・灰橙色土・淡橙色土と



第22図　調査区東西方向（丘陵に直交）土層断面図

第23図　調査区東壁土層断面図



いった橙色系の土が厚く貫入する。この土は、遺構検出面の土と類似しており、土自体が全く締まりのないものであることから、調査区外から植林等に伴って谷を埋めるために持ち運ばれてきた客土と思われる。

調査区の最も南側の部分では、標高も再び高くなってきて、谷筋へ運ばれてきた客土も存在せず、表土－暗黄色土（遺物はほとんど含まない）－橙色粘土（地山）という調査区内では最も安定した層序を示している。

（2）遺構の概要

発掘された遺構は、時期不明のものを除き全て古墳時代の須恵器を含む時期に属するもので、包含層からの出土遺物も石鏃と極く新しいものを除くと当該時期ばかりであった。主要な遺構には、竪穴住居33基（重複を含む）のほか、大溝（ＳＤ40）と若干の土坑があるが、多数検出されたピットはとくに掘立柱建物としてまとまるものはなかった。

南北に細長い調査区の南寄りの部分を東西に走る大溝（ＳＤ40）は、丘陵に入り込んだ谷地形に沿うものである。稲生遺跡の主要遺構である竪穴住居の多くは大溝の北側を中心に広がっており、大溝の南側では遺構密度が薄く竪穴住居２基が確認できただけである。大溝には区画溝的な性格があったようである。

大溝の北側にひろがる竪穴住居群は、調査区内では最高所に位置するＳＨ２を中心として、地形に沿って扇状に分布する。この場合、仮に現状での最高所であるＳＨ２の立地部分を上段とすると（地形的には調査区東側へ丘陵斜面がさらに高く続いていく）、中段がＳＨ１・３～７・12～14・18～20・26、下段がＳＨ８～11・15～17・21～25・27、最下段がＳＨ28～31となる。最下段の竪穴住居は、調査区から西側が削平を受けていたため４基が確認されただけであるが、現状の遺構の広がりからはさらに西側へ続いていたことが考えられる。

現状での竪穴住居の存在形態には、

ａ類．単独で存在するもの（ＳＨ１～３・７・８・26・32・33）

ｂ類．隣接地へ切り合いを重ねていくもの（ＳＨ４～６を代表とし、ＳＨ24～25・30～31もこの可能性がある）

ｃ類．ほぼ同一地点での建て替えと思われるもの（ＳＨ９～11・12～14・15～17・18～20・21～23・28～29があり、ＳＨ28～29については先にｂ類としたＳＨ30・31もこれに含めて考えることもできる）

の３類がある。ただし、ｂ類については、ａ類の偶然の累積結果とみることも可能で、類型の設定の可否を含めてさらなる検討が必要である。ｃ類としたものについては、基本的に３回の重複を認めることができる。したがって、33基の竪穴住居のうち、同時存在は10基もいかないであろう。

全体に竪穴住居の遺存状況は良好で、いずれも北もしくは東側に竈をもつものである。床面はいずれも平面ではなく、地形にそって低い側へ若干の傾斜をもたしている。

住居の向きについてみると、特に一定の法向を指向するということはなく、基本的にコンターラインに沿うかたちで、高所を要として扇状に広がっている。ただし、大溝よりも南側の２棟（ＳＨ32とＳＨ33）については、住居の向きがコンターラインに沿わず、大溝の流路の主軸と一致したものとなっている。

土坑では、ＳＫ34～36が竪穴住居の可能性も残すものである。しかし、後述のように、周溝の存在もなく、確定できなかった。混入ではなく、確実にその遺構に遺物を埋納なり、投棄なりを行ったと判断できる土坑はほとんどなく、わずかにＳＫ38がその可能性をもつものである。

溝は、大溝（ＳＤ40）以外では竪穴住居の排水溝や明らかな現代溝（ＳＨ28・29・31を切っている溝）が存在する程度で、丘陵地という地形もあってか人工的なものは少なくとも調査区内には存在していない。

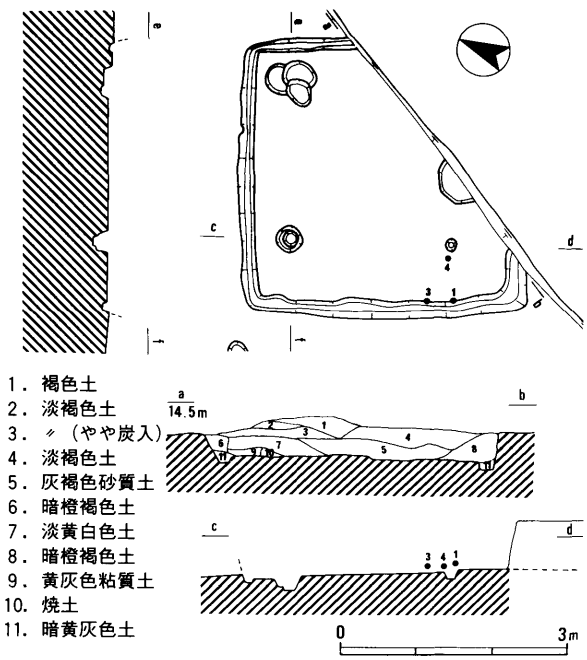
第24図　稲生遺跡遺構実測図（1：200）

0　10m

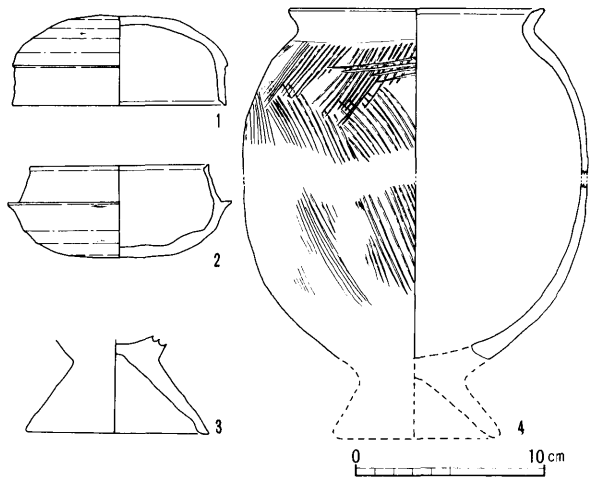
（3）各説

① 竪穴住居

ＳＨ１　東側の一部は調査区外へ延びるが、東西3.7ｍ×南北3.7ｍの正方形プランをもつ小規模な竪穴住居である。平面では確認できないが、ちょうど調査区の壁に竈の焼土が現れており、東側に竈をもつことが確認される。調査区外の部分もあるが、現況では重複は認められず単独で存在する。主柱穴は明瞭であるが、補助柱穴はもたないようである。周溝は、竈の下となる部分も含め、全周する。このことは、竪穴住居構築にあたり、まず地面を掘削した後に四周に周溝を穿ち、さらにその後に竈を作り付けたことを示している。



第25図　ＳＨ１実測図（1：100）



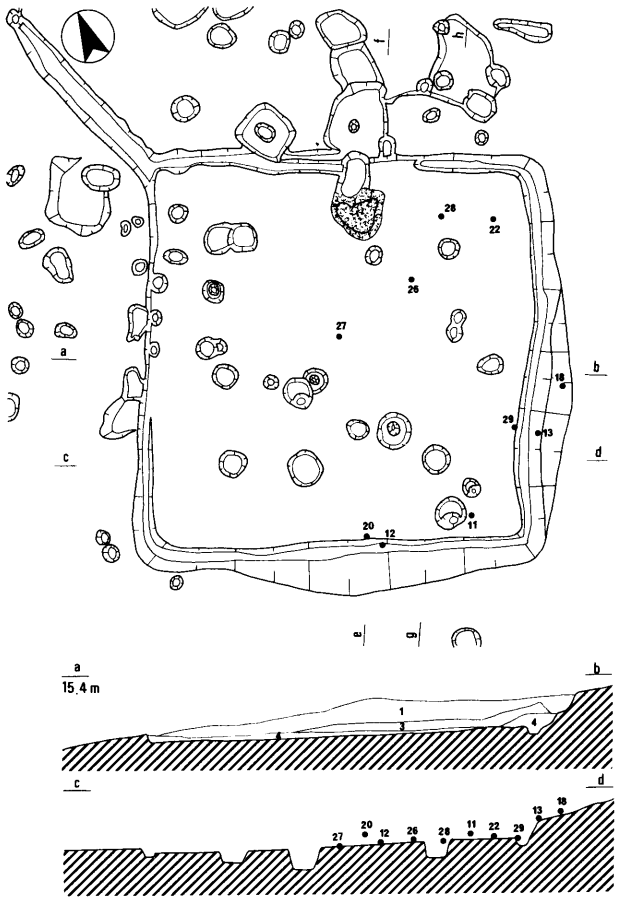
第26図　ＳＨ１出土遺物実測図（1：4）

遺物出土状況　埋土出土のものも含め、本址出土の遺物はさほど多くないが、主要遺物は竈とは反対側の周溝近くで一括出土した。１・３～４は、厳密には床面ではないが、床面近くのほぼ同レベルから出土しており、実際の生活上の床面であった可能性は高いものと思われ、そうした場合、本址の所属時期決定の資料となるものであろう。２は埋土出土である。

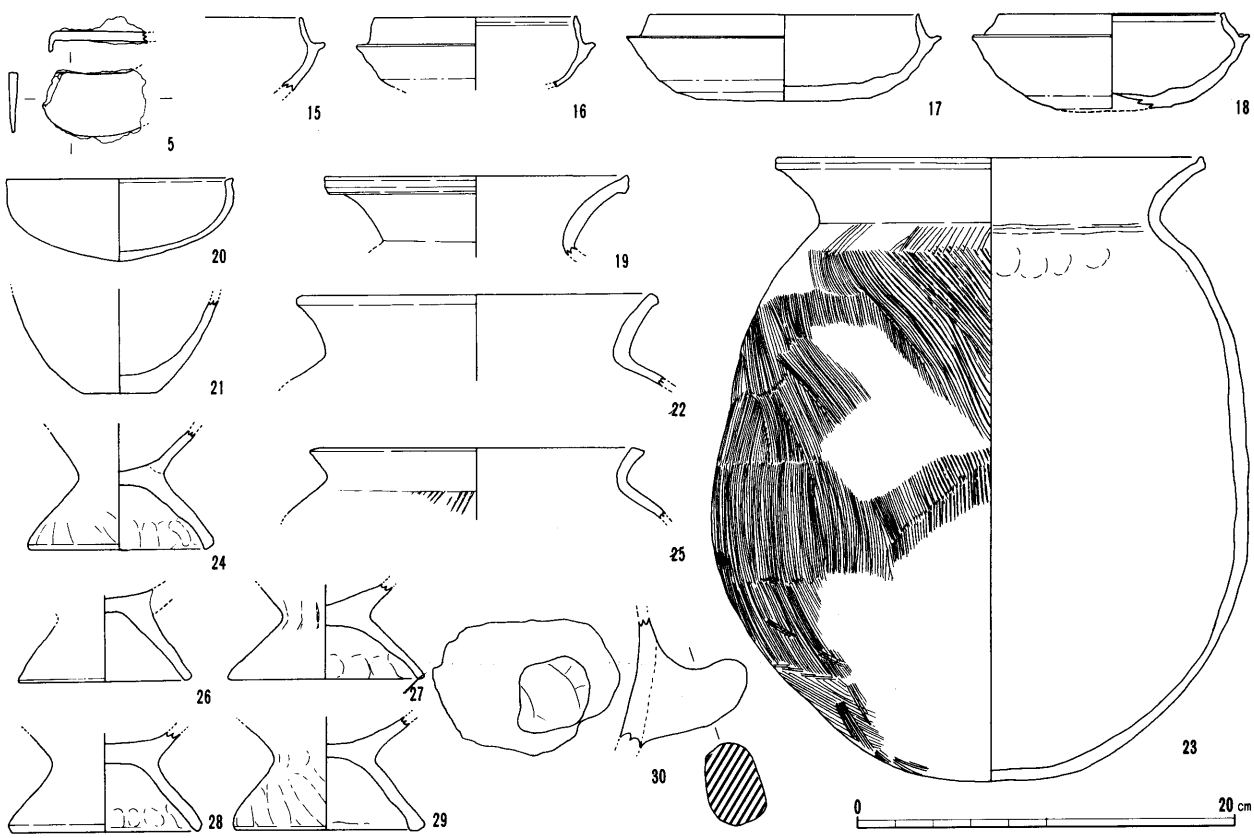
出土遺物　須恵器杯蓋(1) と杯身(2) は、床面出土と埋土出土という差はあるものの、ともに外面を3/4以上ロクロケズリされており、口縁端部等の細部の特徴からも同時期の所産とみてよく、ＴＫ47型式併行期[④]に相当するものと思われる。土師器Ｓ字状口縁台付甕形土器（以下、Ｓ字甕と略）である３と４は、接合こそしなかったものの同一個体である可能性が高い。口縁部はまだ太くて短く、肩部上面にはヨコハケも見られる。埋土のフルイ掛けにより、滑石製臼玉２個が発見された（フルイ掛け出土の臼玉・ガラス玉類は後節で一括記述、他の竪穴住居出土例も同様）。

ＳＨ２　東西5.6ｍ×南北5.8ｍのほぼ正方形プランをもつ稲生遺跡では最大規模の竪穴住居で、調査区内では最も高所（上段）に位置する。土層観察の所見からは本址が一度使用された床面上に再度土を入れ直して整地され、二次使用された可能性があるが、検出及び掘削の段階では確認できなかった。床面は、東壁際から地形に沿って全体に西側へ緩やかに傾斜しており、その傾向は想定での二次床面により顕著である。北側中央に竈をもつが、遺存状況は悪く、袖部は全く残っていない。竈は屋内壁際に存在し、すぐ外側（屋外）に浅いピット状の落ち込みがみられるが、これは削平を受けて上半部は遺存していないものの煙道であった可能性がある。主柱穴の４本はほぼ正方形に並ぶ。床面に存在するそれ以外のピットが本址に伴う柱穴かどうかは不明である。周溝は、竈の下以外は全周し、北西コーナーから排水溝が2.5ｍ程住居外へ延びている。

遺物出土状況　前述のように、土層観察からは本址が２回利用された可能性もあるが、遺物取り上げ



第27図　ＳＨ２実測図（1：100）

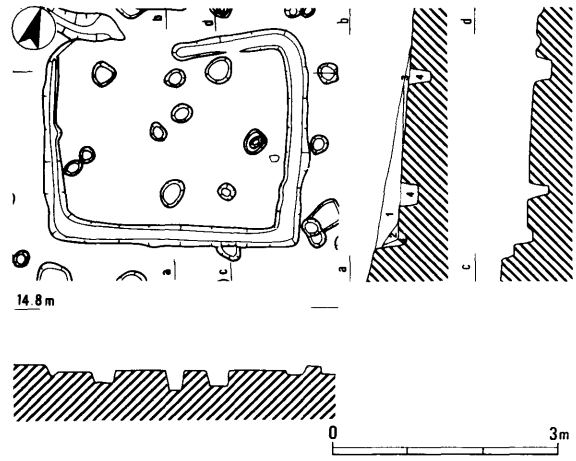


第28図　ＳＨ２出土遺物実測図（1：4）

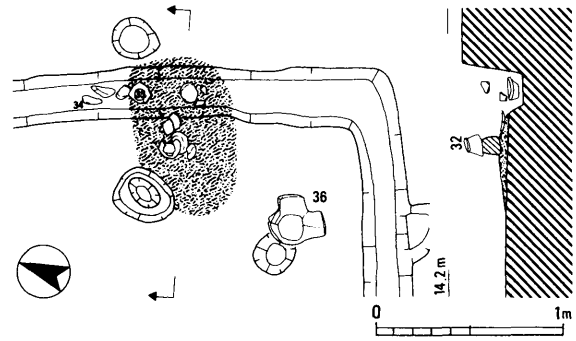
では遺物を峻別することはできなかった。ドットを落として図示したものが床面もしくはそれに近い位置での出土であるが、13や18を含め多くは覆土からの出土である。7は最後の床面断ち割りの際に出土したもので、床面（一次）整地土に含まれていたものである。23は、覆土でもかなり上部での出土であり、別遺構出土の個体とも接合したことから、本址での使用を物語るものではなく、住居廃絶後に流入したものと考えたい。

出土遺物　須恵器付蓋は、明瞭な稜を残すもの（7～8）、僅かに稜を残すもの(9～11)、沈線化するかほとんど痕跡的になるもの(12～14) の3類があり、杯身は前2者に対応するものとして16が、後者に対応するものとして15・17～18がある。杯身口縁部の形態をみると、端部を丸く収める15・17と、端部からやや下がった部位に沈線を入れる二者に分けることができる。このほか須恵器には、有蓋高杯蓋 (6)、壺(19)があり、図示できなかったが甕片も存在する。土師器には、杯(20)、壺(21)、S字甕(24～29)、S字甕以外の甕(22・23)、甑(30)がある。このうち、甕(23)は、当該時期の所産とするには疑問の残るものであり、前述の出土状況とも矛盾しない。須恵器の時期は、少なくとも2時期程度に分けることは可能であるが、そうした場合本址の使用時期は、床整地土出土の7や床面出土の9・11に示されるTK47～MT15型式併行期が当初の床面に伴い、埋土出土として取り上げたうちの12～15、17～18に示されるTK10型式併行期が想定の二次床面もしくは住居廃絶後の覆土に伴うものと思われる。鉄製遺物(5) は、通常内湾部にある刃部が当例では外湾部にあるため鎌とすれば手鎌、または鍬類の可能性もある。埋土フルイ掛けにより、滑石製臼玉19個が発見された。

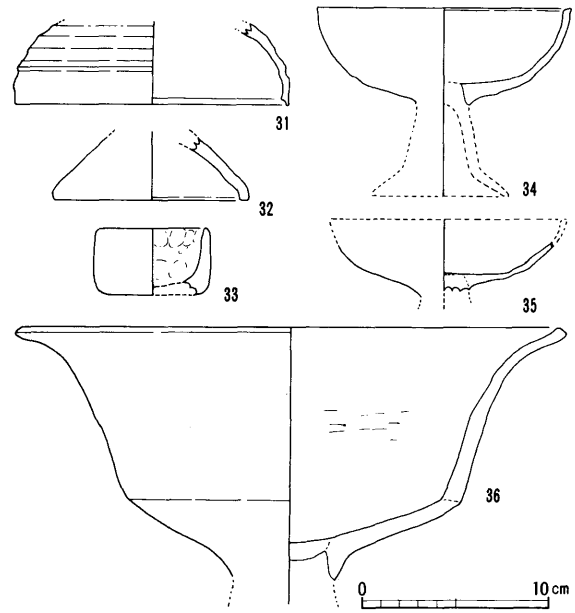
SH3　東西3.5m×南北3.0mのやや長方形を呈した稲生遺跡では最も小規模な竪穴住居である。東壁中央内側に竈をもつ。遺存状況はいまひとつよくなくて袖部はすべて取り払われているが、支柱石は残る。斜面立地のため、丘陵高所側となる南壁は45cm遺存しているが、北壁の立ち上がりはない。主柱穴は4本と思われるが、南西側の柱穴は検出できなかった。竈の手前のピットは、性格不明ながら本址に伴うものかもしれない。周溝は全周する。



第29図　SH3実測図（1：100）



第30図　SH3竈周辺遺物出土状況図（1：40）



第31図　SH3出土遺物実測図（1：4）

遺物出土状況　竈とその周辺、竈付近の周溝を中心に出土したが、遺物量はさほど多くない。周溝出土のものは竈破壊時に入ったものと思われる。遺存遺物は、南東側主柱穴脇の床面上で出土した36や竈支柱石に乗った状態で出土した32も含め、竪穴住居廃絶時の状況を示しているものと思われる。

出土遺物　土師器高杯には、杯部が内湾しながら立ち上がる34・35と、深くて法量が大きくて外湾しながら立ち上がる36がある。36は一見古そうな外観を呈するが、前代との系譜の有無はとりあえず措くとしてこの時期にも少量こうした形態の高杯が存在することを示している。須恵器杯蓋(31)は、口径が比較的広く、稜が痕跡的に残るか沈線化しているという特徴から、ＴＫ10型式併行期の所産と考えられ、住居の廃絶年代もこの時期と思われる。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉２個が発見された。

ＳＨ４　切り合いながら３基が存在する竪穴住居ＳＨ４～ＳＨ６のなかで最も古い住居である。東西4.4ｍ×南北4.3ｍのほぼ正方形プランを呈し北側中央よりやや西寄りに竈をもつ。竈の遺存状況は比較的良好で、袖部の一部と支柱石が残り、竈本体は住居外へは出ない。床面は地山を掘り込んだ後に５～10㎝程度の灰白色粘質土で整地されている。主柱穴は４本であるが、竈の両脇にも本址に伴う可能性のあるピットが存在している。周溝は、ＳＨ６によって切られている部分を除き、全周する。

遺物出土状況　本址からは多量の土器が出土しているが、床面や床面近くの部位から出土した遺物は比較的少なく、多くは埋土からの出土である。本址廃絶時には存在していたと考えられる遺物は図示できたものでは46や51程度であるが、それ以外にも土師器甕２個体程度が原位置で存在した。須恵器高杯(43)や(45)は埋土からの出土である。埋土の堆積が１層のみであることや、すぐ重複してＳＨ５が建てられていることから、本址は廃絶後あまり時をおかず人為的に埋められたものと思われ、全体的な出土量の多さも自然堆積のものではなく、意図的に住居廃絶後に遺棄されたもののように思われる。

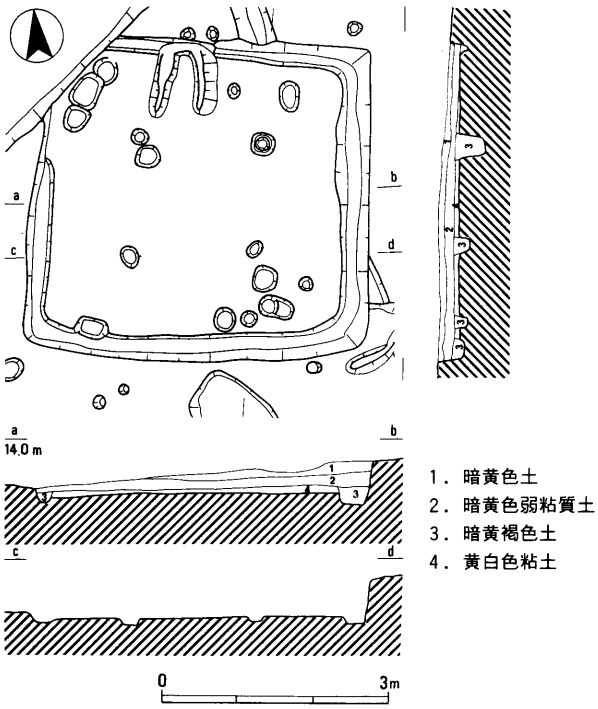
出土遺物　前述のように出土量は多いが、厳密には一括遺物とはいえない遺物群である。しかし、住居廃絶後にあまり時をおかず埋められたと考えられることから、混入品とみられる遺物も存在するものの、時期差はあまりないものと思われる。須恵器瓿(45)は古い所産であろう。土師器には二重口縁壺(51)、小形甕(52)、甕(53～54・61～62)、Ｓ字甕(55～60)、手捏ね土器(65～66)、甑(63～64)があり、風化のため取り上げ時に壊れ図示しえなかったがさらに甕が２個体以上出土している。鉄製遺物(67～68)は、細片のため詳細不明であるが、67は刃部があって刀子状のものである可能性もあろう。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉24個が発見された。

ＳＨ５　ＳＨ４と重複するが、東西5.7ｍ×南北5.7ｍの正方形プランの竪穴住居で、ＳＨ２と並んで稲生遺跡では最大の規模を誇る。住居の北側は流出のため遺存状況は悪い。東壁中央よりもやや北寄りの部分に竈をもつ。竈先端は、わずかに住居外へ出る。竈の遺存状態は比較的良好で、袖部も部分的に遺存していたほか、支柱石も原位置のまま残存していた。床面中央には浅い落ち込みが見られたが、特に焼土等は認められなかった。主柱穴は４本で、そのうちの２本はＳＨ５床面で検出されたものである。周溝は、ＳＨ５との重複部分、遺存状況の悪い部分と竈の下以外は全周し、北東隅から北側へは排水溝が真っ直ぐに延びる。

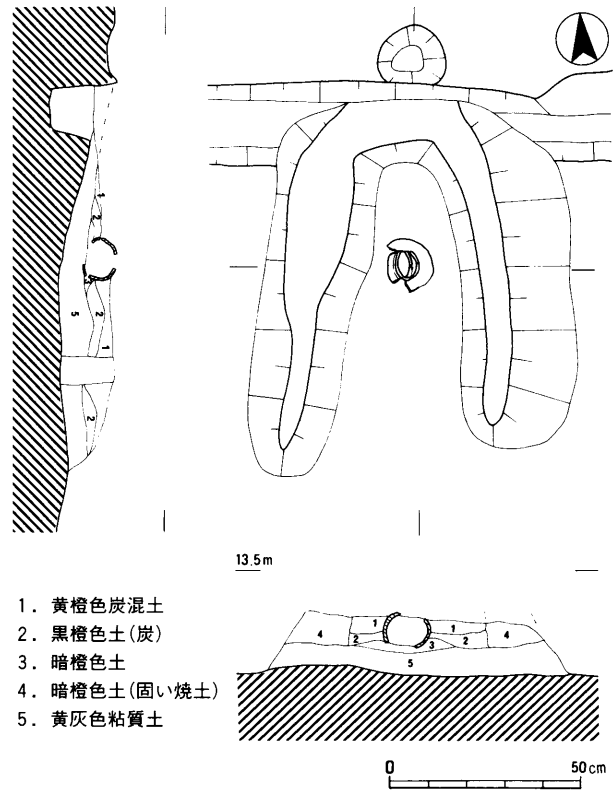
北側の遺存が悪かったため切り合い関係ではいまひとつ明瞭でなかったＳＨ４との関係は、出土遺物の新旧関係からＳＨ５のほうが新しく、ＳＨ４廃絶後あまり時をおかないうちに南隣にＳＨ５が構築されたものと思われる。

遺物出土状況　本址で最も注目できるものとして須恵器杯身(73)が竈支柱石の上で伏せられた状態で置かれていたことがあげられる。これは、竪穴住居廃絶に伴って竈の活動を停止し、ひいては竈を「封印」するという多分に精神的な目的をもって行われた竈祭祀に係わる行為と思われる。全体的に土器の出土量は多いが、床面から出土したものはさほど多くなく、須恵器杯類では69・74がある程度で、やや浮いた状態で出土したものとして70がある。土師器類ではＳ字甕の脚部(87)も床面出土で、壺(90～91)等も床面に近い部分の出土である。須恵器甕(93～94)を含むその他の遺物の多くは覆土からの出土である。なお、土師器甑(95)は、排水溝から出土したものである。

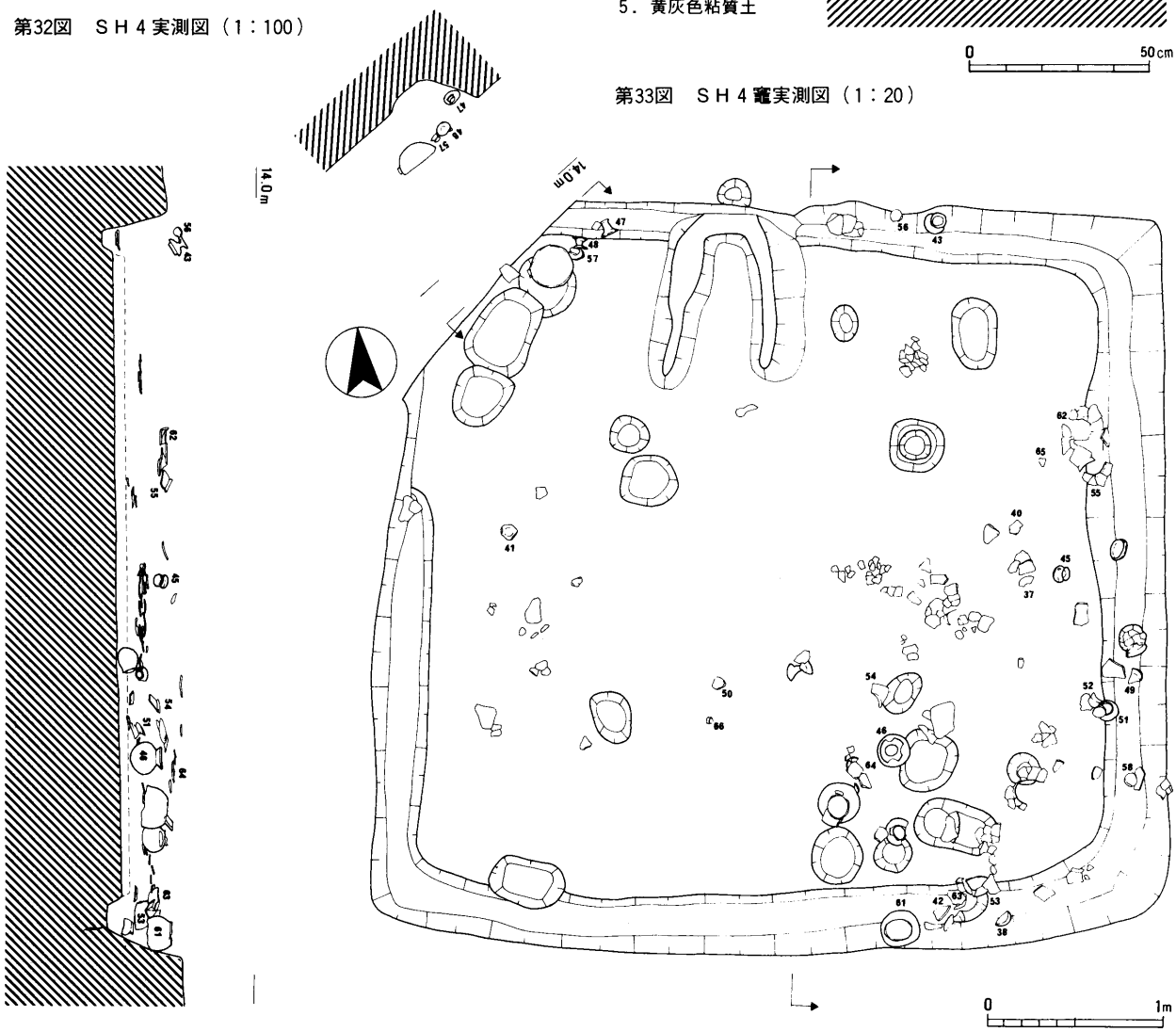
出土遺物　上述のように、本址出土遺物は床面もしくはそれに近い部分出土のものと、覆土出土のものに分けることができる。須恵器で見た場合、両者には明らかな時期差が認められる。すなわち、竈祭祀に係わって明らかに本址の廃絶時期を示すと思わ



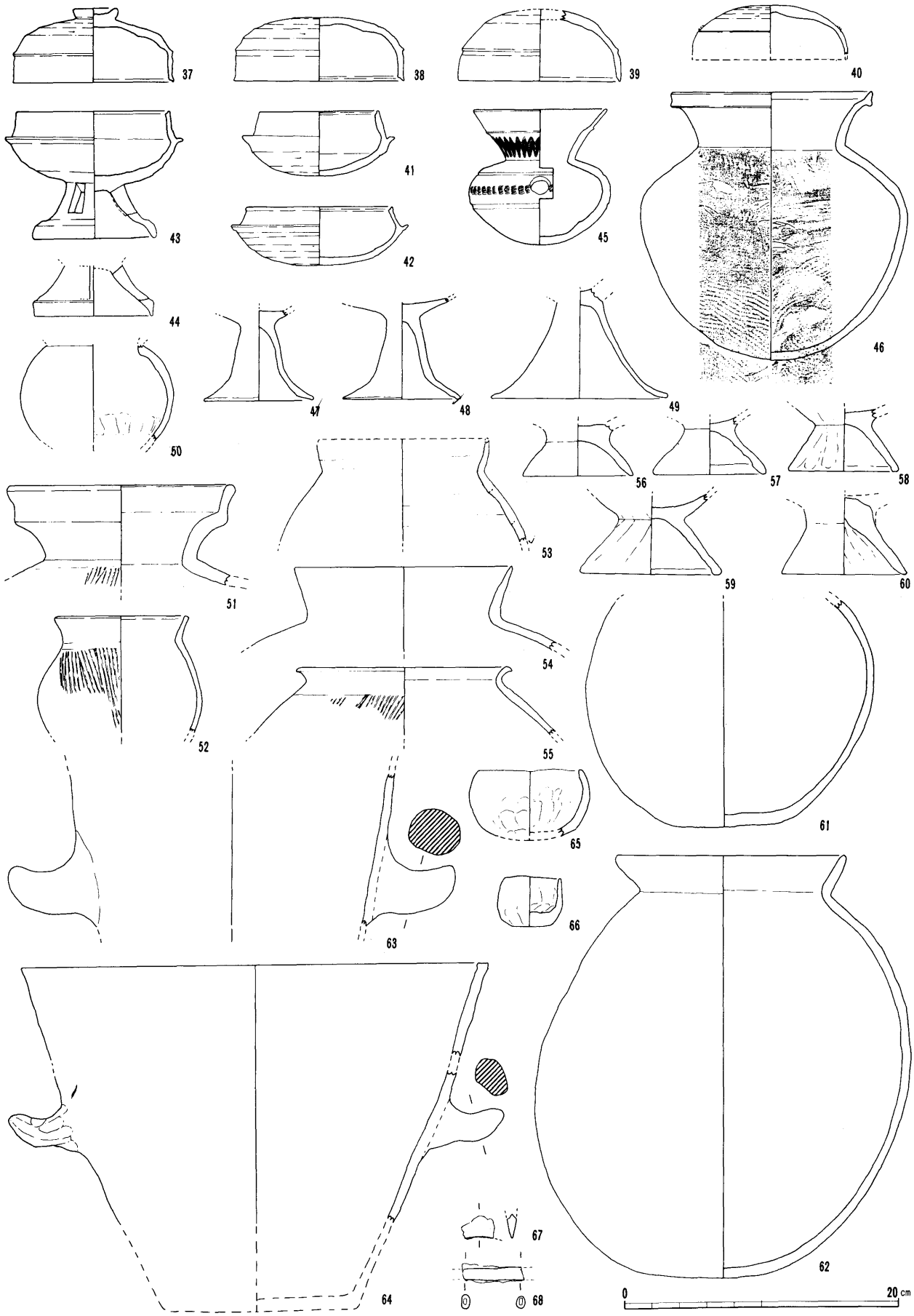
第32図　ＳＨ４実測図（１：100）



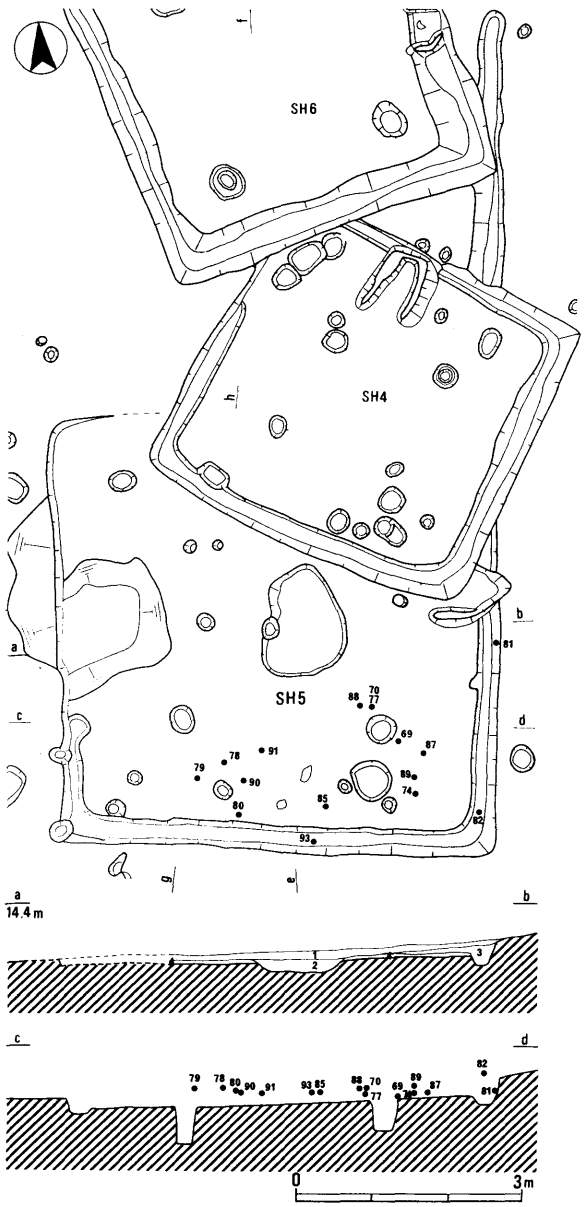
第33図　ＳＨ４竈実測図（１：20）

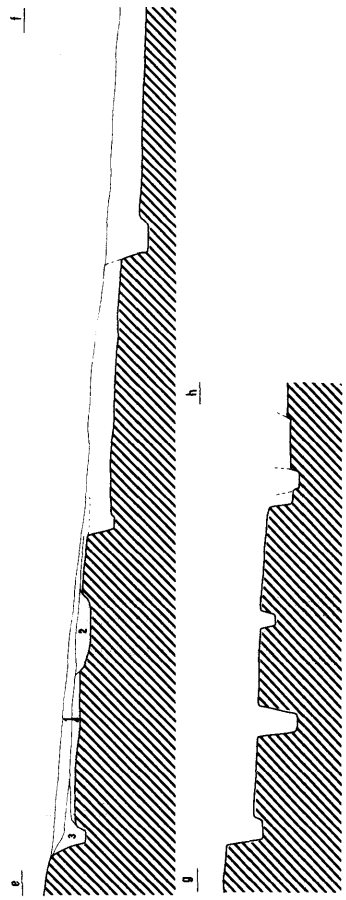


第34図　ＳＨ４遺物出土状況図（１：40）



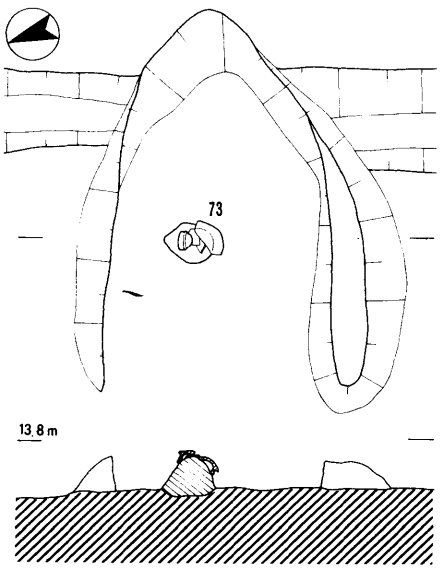
第35図　ＳＨ４出土遺物実測図（1：4）



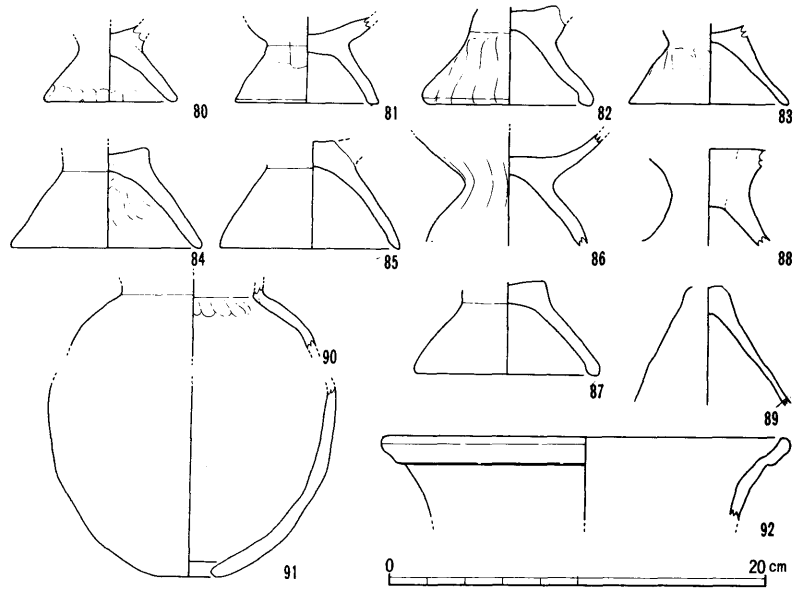


1．灰褐色土
2．灰褐色粘質土
3．灰黄色土
4．黄橙灰色粘質土

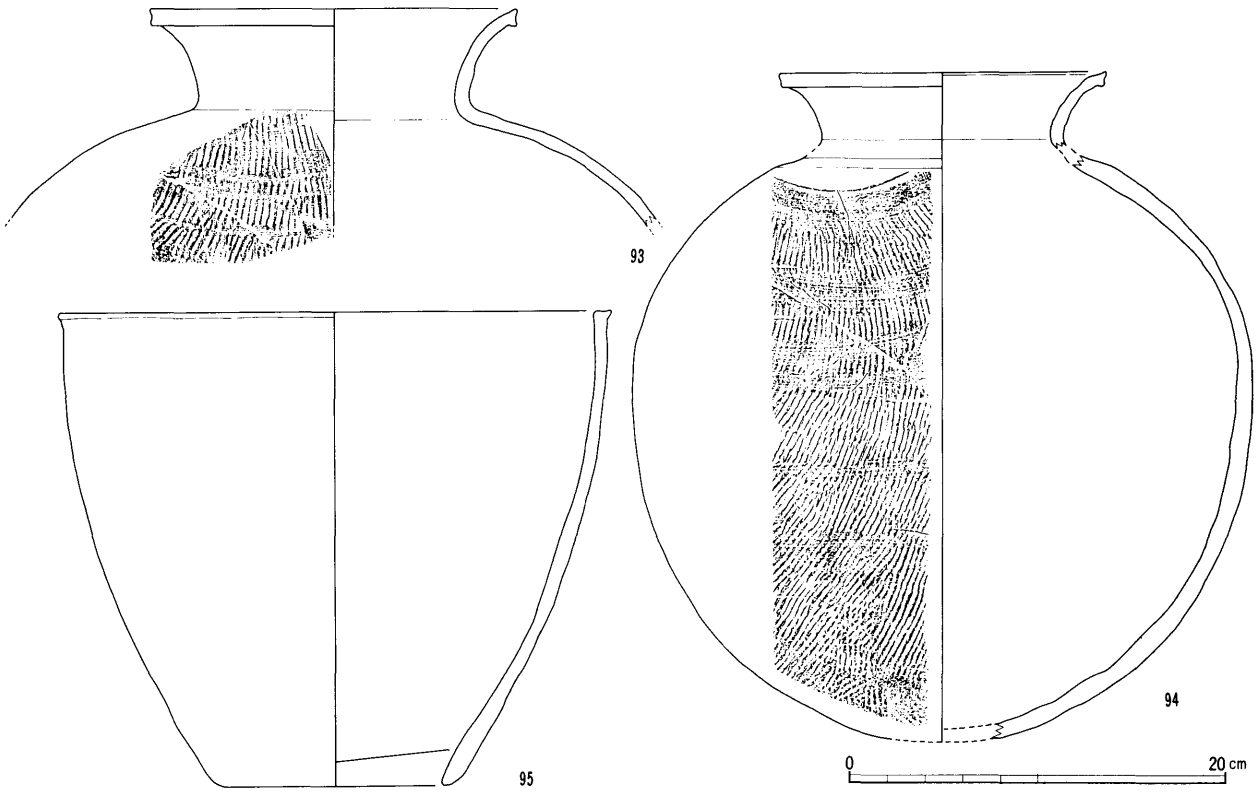
第36図　ＳＨ４～６実測図（１：100）



第37図　ＳＨ５竈遺物出土状況図（１：20）



第38図　ＳＨ５出土遺物実測図（１：4）



第39図　ＳＨ５出土遺物実測図（１：４）

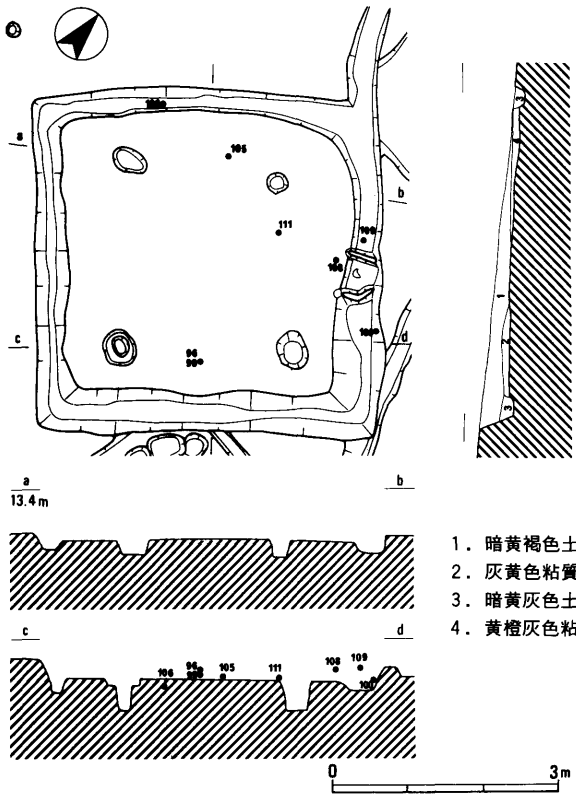
れる73や床面出土の69・74は、器形が全体に丸く、稜もまだ残るＴＫ47型式併行期のものに限られるのに対し、その他の杯類はＭＴ15型式～ＴＫ10型式併行期のものを含んでいる。ただし覆土出土のものでも、須恵器甕（93～94）は内面がナデ消されていてやや古い所産であろう。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉８個が発見された。

ＳＨ６　３棟並んだＳＨ４～ＳＨ６のなかでは、切り合い関係からも出土遺物からも最も新しい竪穴住居である。4.6ｍ四方の正方形で、北側に竈をもつ。竈本体は住居外へは出ず、袖部及び支柱石が残る。床面での柱穴は主柱穴４本が見られるのみである。周溝は全周し、北西側へ排水溝が延びる。

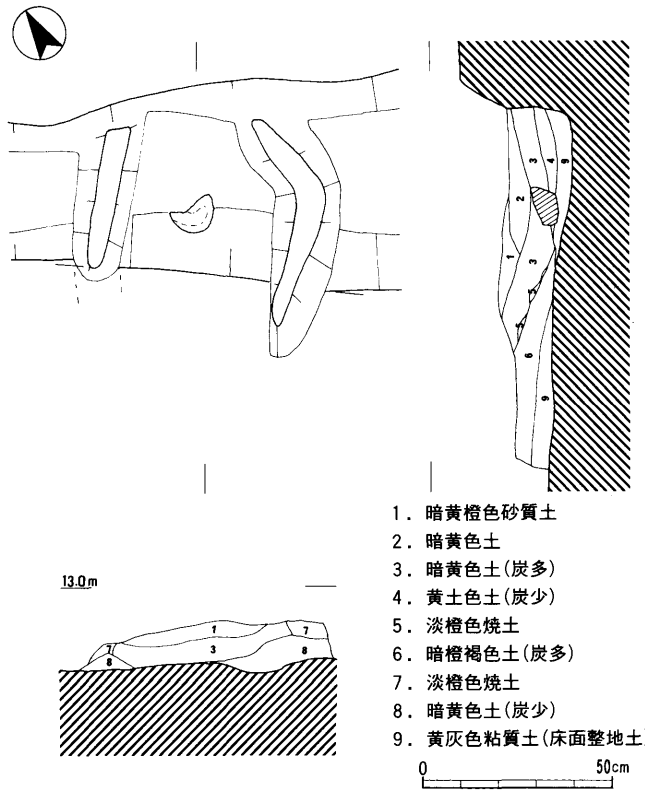
ＳＨ５と、ＳＨ４から延びる排水溝を切って構築されている。

遺物出土状況　覆土出土のものを含めても、遺物量は全体的に少ないが、完形もしくは大形の破片は床面や周溝内、床面近くから出土しており、本址は住居廃絶時の状況を比較的良好に残しているものと思われる。床面では、須恵器杯身・蓋（96・99）は身と蓋が重なった状態で遺存していた他、土師器Ｓ字甕(105・111)が存在した。竈では、Ｓ字甕が使用されていたようであり(108)、周溝に転落した状態で須恵器杯身(100）や土師器Ｓ字甕(106、近くには107もあり、両者は同一個体の可能性が高い）が出土した。また、手捏ね土器(104)が排水溝から出土した。その他の遺物は基本的に覆土出土であり、本址に使用されていたものであるかどうかは不明であるが、少なくとも古相を残す須恵器杯身(101）は、本址覆土出土の破片と包含層出土の破片が接合し、埋没の過程で混入したものとみられる。

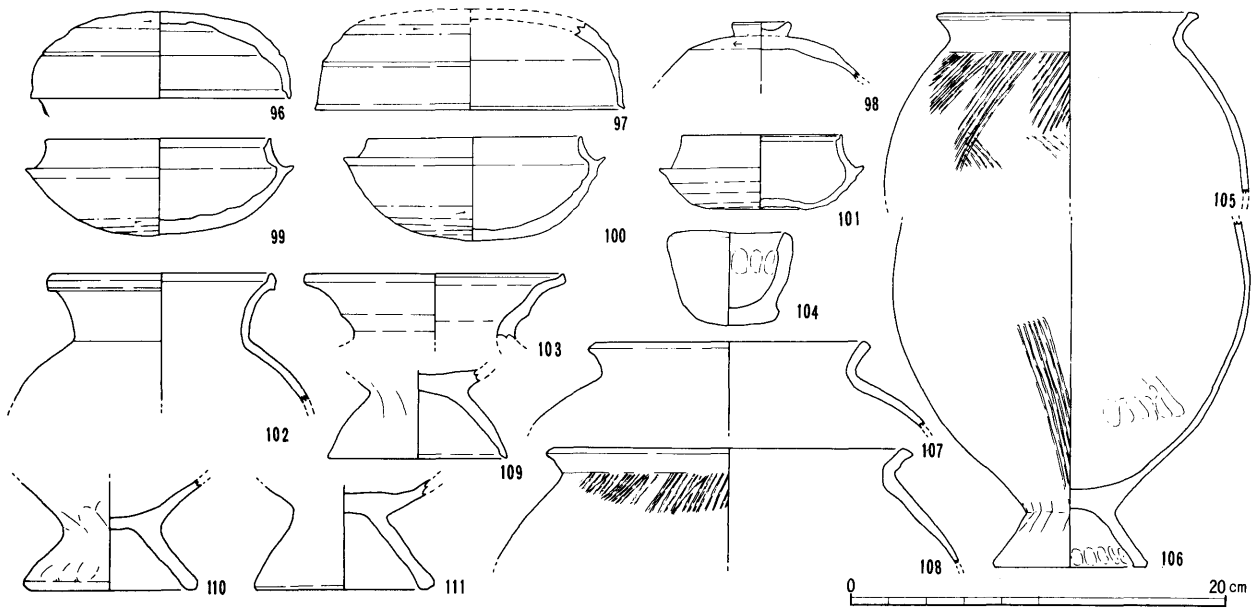
出土遺物　他の住居跡と比べ、器種組成的には須恵器杯類（96～101）・壺(102）・土師器二重口縁壺(103）・Ｓ字甕(105～111)・手捏ね土器(104）と単純である。確実に本址に伴うと思われる須恵器杯類（96・99～100)の特徴は、器形的には丸みを呈するが、蓋の稜は沈線化し、身の立ち上がりは短く、ＴＫ10型式併行期の特徴をもつものである。須恵器壺(102）は、内外をロクロナデで仕上げている。土師器では、二重口縁壺(103）は器形が小さく口縁部をつまみ上げするものであり、Ｓ字甕口縁部の形状をみると太くて短いもの(108）と、長くて細いもの(105）の両形態がある。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉17個が発見された。



第40図　ＳＨ６実測図（1：100）



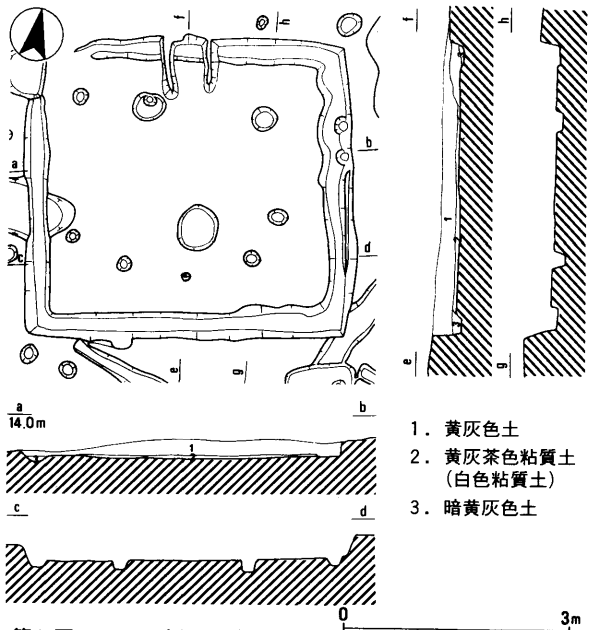
第41図　ＳＨ６竈実測図（1：20）



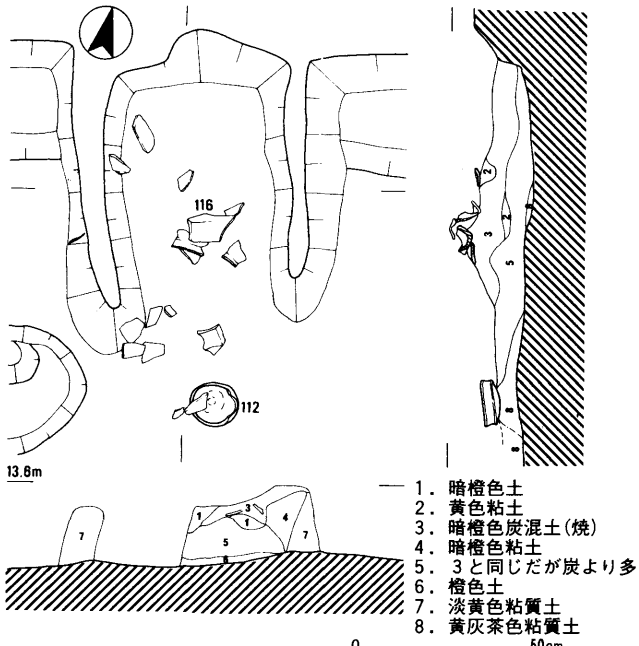
第42図　ＳＨ６出土遺物実測図（1：4）

ＳＨ７　東西5.0ｍ×南北4.6ｍのやや長方形を呈した竪穴住居で、北壁中央に竈をもつ。竈の遺存状況は比較的良好である。主柱穴の４本は明瞭であるが、北西側の柱穴は竈と近接した位置に存在している。さらにその西側にも小さいピットが存在し、補助柱穴の可能性も残る。中央部やや南側に存在するピットは柱穴というよりは浅い落ち込み様のものであるが、とくに焼土等は確認できなかった。北西コーナー部分は欠損するものの、周溝は全周する。

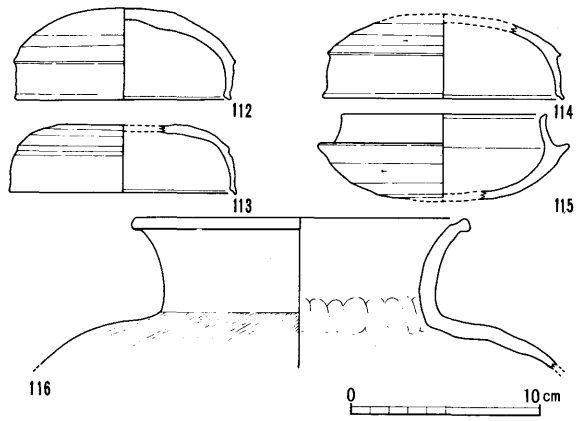
遺物出土状況　全体に遺物量は少なく、とくに床面からは図示しうる遺物の出土はないが、竈では非常に興味深い出土状況を示す。竈は、天井部が崩落した状態で出土したが、それに混じって竈で使用されたと思われる土師器壺(116) が出土した。焚き口部には、須恵器杯蓋(112) が明らかに置かれたような状態で、逆位で出土した。



第43図　ＳＨ７実測図（1：100）



第44図　ＳＨ７竈実測図（1：20）



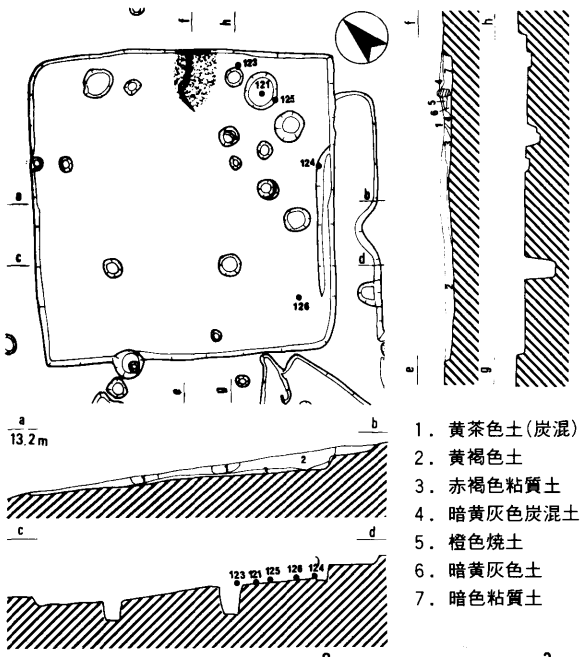
第45図　ＳＨ７出土遺物実測図（1：4）

出土遺物　竈出土の遺物が住居の廃絶時期を示すものである。竈焚き口部出土の須恵器杯蓋(112) は球形の形状を呈し、天井部のヘラケズリは風化のため不明瞭ではあるが3/4以上は施されているようであり、法量が小さく、ＴＫ47型式併行期のものと思われる。土師器壺(116) は、一見須恵器のような形状をなすが、肩部外面はハケ調整され内面にはユビオサエ痕跡の残るもので、口縁部は肥厚する。覆土出土の須恵器杯類(114～115)は、112よりも型式学的にはやや古相を呈する。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉11個が発見された。

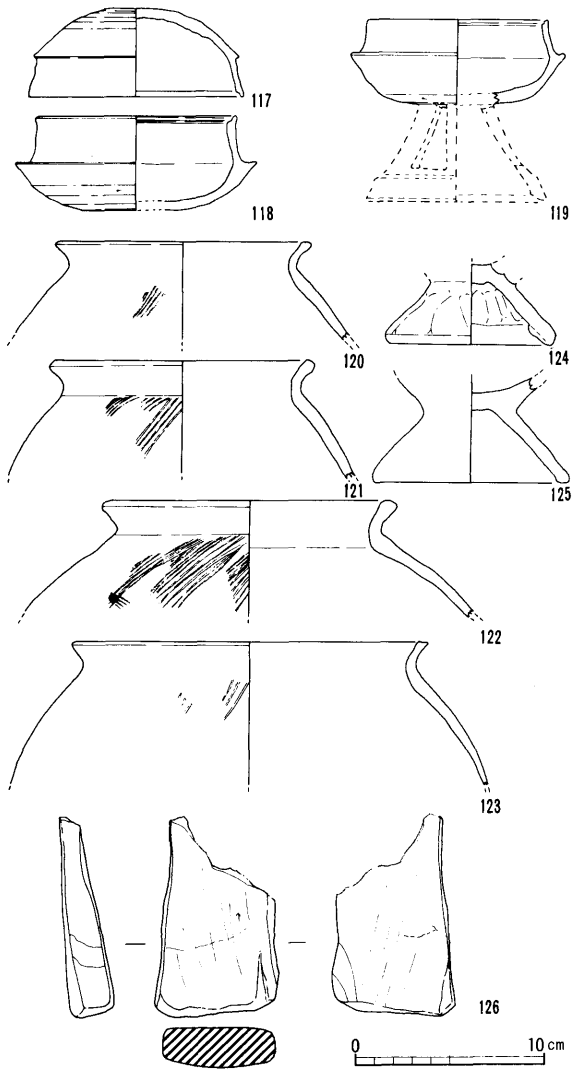
ＳＨ８　東西4.1ｍ×南北4.0ｍのほぼ正方形プランの竪穴住居で、北壁中央に竈をもつ。竈の遺存状況は悪いが、支柱石は残存していた。主柱穴の４本中３本は明瞭であるが、北西側の柱穴は確認できなかった。ＳＨ４の場合と同様、竈の両脇に浅いピットがあるが、本址にに伴うかどかは不明である。床面は、地形に沿ってかなり傾斜する。周溝は現状では遺存状況の良好な東側にのみみられるだけであるが、本来的には全周していたものと思われる。

遺物出土状況　床面で認識できた個体は、遺存状況が良かった住居内東側で出土した土師器Ｓ字甕と砥石であるが、須恵器類(117～119)も出土状況図には入ってないものの本址に伴う遺物と考えて良いものであろう。破片のため詳細図は出土状況・遺物実測図ともに掲載できなかったが、竈支柱石上に土師器Ｓ字甕の脚部が乗った状態で出土した。これは、廃絶時の状況を示しているものと思われ、本址の竈ではＳ字甕が使用されていたことが窺える。

出土遺物　出土量は少なく、器種組成的にも廃絶時のままかどうかはともかく、須恵器杯身・蓋・高杯・土師器Ｓ字甕と単純で、ほかに砥石が出土した程度である。須恵器杯身(118) は、立ち上がりが高く、底部も比較的偏平で、3/4以上をヘラケズリしており、杯蓋(117) や高杯(119) ともどもＴＫ23型式併行期のものと思われる。土師器Ｓ字甕の脚部をみると、底部の端部をそのまま収めるもの(125) とともに、本遺跡では珍しく底部を内側へ折り返して収めるもの(124) の両形態が認められる。砥石(126) はやや欠損しているものの本遺跡出土のもののなかでは大形で、残存部のほぼ全面に使用痕が認められ



第46図　ＳＨ８実測図（1：100）



第47図　ＳＨ８出土遺物実測図（1：4）

る。埋土のフルイ掛けからは、滑石製臼玉３個が発見された。

ＳＨ９～11　同一地点で３回の重複が認められる竪穴住居で、切り合いが最も新しいＳＨ11以外は北辺（厳密には竪穴住居主軸が真北に対して振れているので東北辺）がわずかに残る程度である。以下、個別に記述する。

ＳＨ９　３基のなかでは最も古い竪穴住居で、両者に切られ、北側と東側の一部が遺存するにすぎないが、東西4.5ｍ×南北4.3のほぼ正方形プランが確認できる。竈は、遺存状況が悪く、袖部は残っていないが、東壁中央付近の焼土の存在と、その部分の周溝が途切れていることから、東竈であったことが窺える。周溝は、南及び西側は重複のため不明であるが、北及び東側は竈部分を除いて存在し、北西コーナーから北側へ排水溝が付く。

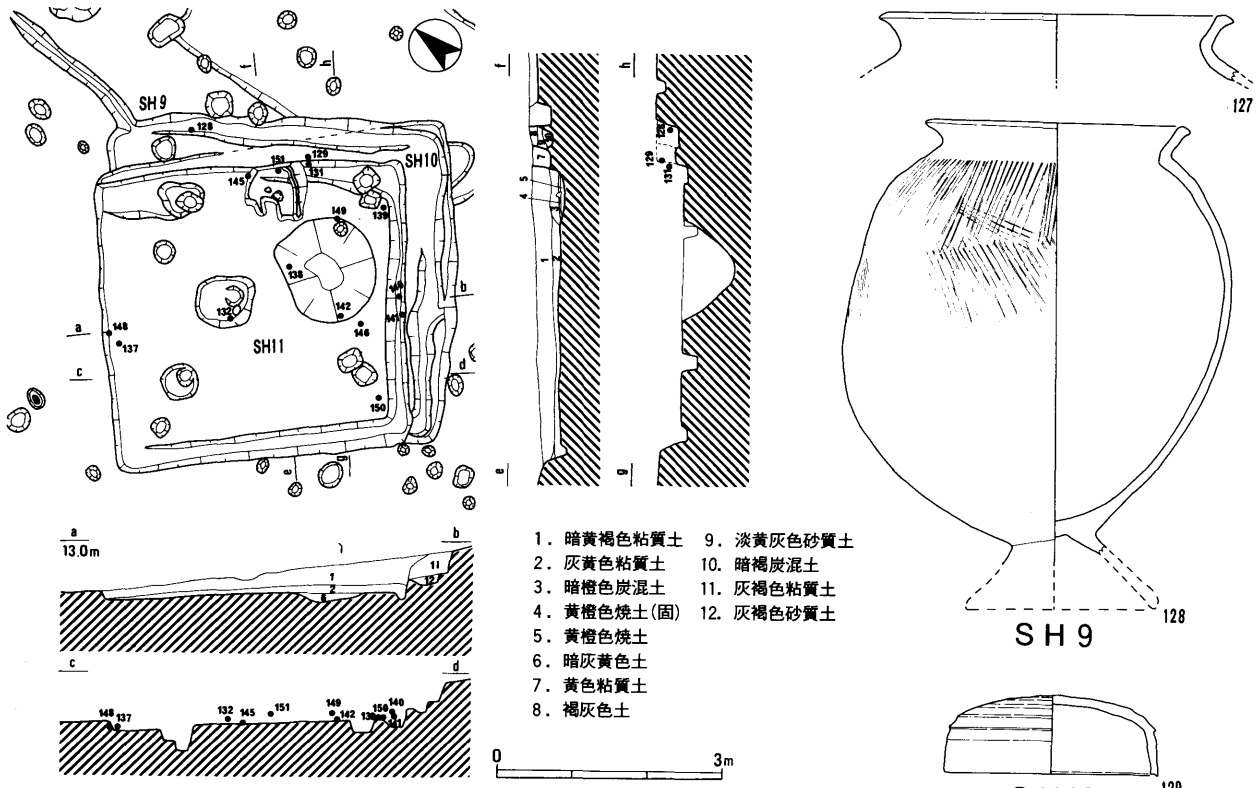
遺物出土状況　図示しうるものとしては土師器Ｓ字甕(127～128)が出土した程度である。158は北側周溝に転落した状態で、127は覆土から出土した。また、土師器Ｓ字甕の140と141はＳＨ11出土のものではあるが、周溝埋没後に入った覆土出土の土器であり、場合によってはＳＨ９の竈で使用されていたものが埋没の過程でＳＨ９に混入した可能性はある。

出土遺物　遺存状態の良好な128をみると、外面のハケにはやや横方向を意識したらしいものも見られ、口縁部は比較的太く、しっかりしている。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉１個が出土した。

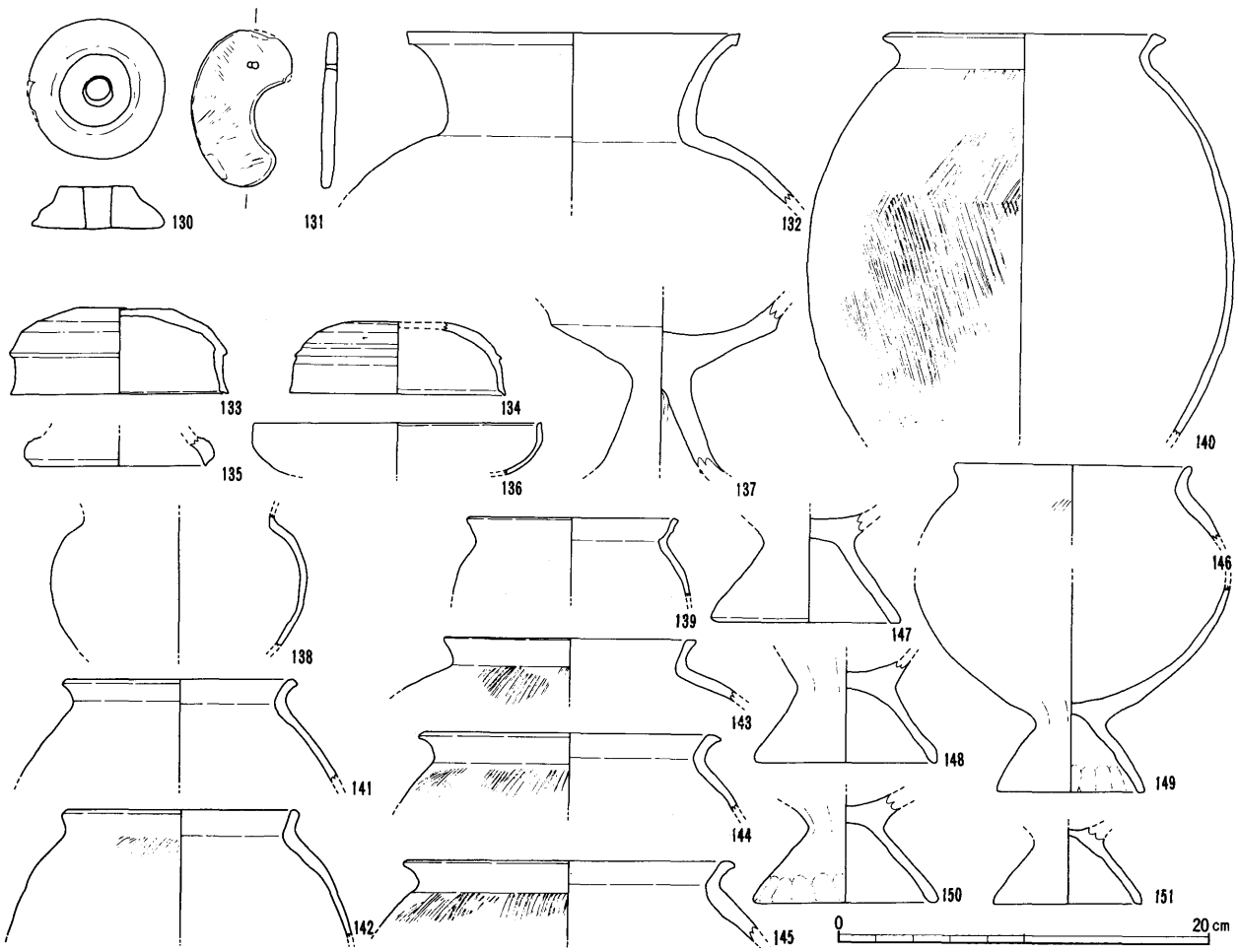
ＳＨ10　ＳＨ９よりは新しく、ＳＨ11に切られる竪穴住居で、ＳＨ11との重複のため住居プランのほとんどは不明である。ＳＨ11の北側でわずかに検出されたもので、ほぼＳＨ11とそのまま重複する。壁際の焼土の確認から、北竈の可能性がある。周溝は明確でない。

遺物出土状況　本址に伴うものとしては、わずかに覆土出土の須恵器杯蓋(129)１点が認識できただけである。

出土遺物　須恵器杯蓋(129)は、天井部の3/4以上をロクロケズリするもので、稜も明瞭に残っており、ＴＫ23型式併行期の所産であろう。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉１個が出土した。



第48図　ＳＨ９～11実測図（1：100）



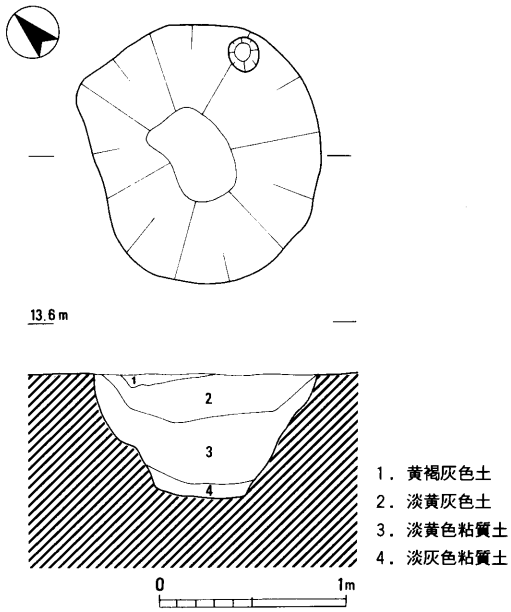
第49図　ＳＨ９～11出土遺物実測図　（130・131のみ1：2，その他は1：4）

ＳＨ11　３基のなかでは最も新しい竪穴住居で、東西4.1ｍ×南北4.0ｍのほぼ正方形プランを呈する。竈は、北壁中央内側に存在し、支柱石と袖の一部が遺存していた。床面の北東側には、直径1.3ｍ程度の円形の土坑が存在するが、４本ある主柱穴のうち北東側の柱穴がこの土坑を切っているため、竪穴住居の存在以前の遺構と考えられる。床面のその他の柱穴は、ＳＨ９もしくはＳＨ10に伴うものと考えられる。周溝は、最も低い西側を除く３方に存在するが、竈の下には見られないようである。

床面では、径1.4ｍの円形の土坑が検出された。ＳＨ11に伴う貯蔵穴の可能性もなくはないが、土坑埋土はＳＨ11埋土とは全く異なったものである。出土遺物は全く無く、その性格は不明であるが、竪穴住居埋土や包含層からの石鏃の出土等も考慮すると縄文時代の陥し穴の可能性も考えたい。

遺物出土状況　須恵器で床面近くから出土したものは壺(132) のみで、他のものは覆土出土である。土師器類は、比較的床面で出土したものも多い。また、滑石製勾玉(131) は覆土、滑石製紡錘車(130) は住居跡上面から出土した。

出土遺物　床面及び覆土からのＳ字甕の出土が多い(140～151)のがひとつの特徴である。須恵器杯蓋(133～134)はともに覆土出土であるが、ＳＨ10出土の129に比べて全体にやや丸みを帯びている。ＴＫ47型式併行期に相当しようか。135は破片ながら、短脚一段透かし高杯の脚底部片と思われる。土師器にはＳ字甕のほか、杯(136) ・高杯(137) ・小形壺(138) ・小形甕(139) があり、比較的バリエーションは豊富である。そのなかで高杯は、厚手で杯部の稜が明瞭で、脚部内面にはシボリメが認められるものである。滑石製品のうちの紡錘車(130) は、断面台形であるが、上端はややアクセントをつけて作り出している。勾玉(131) は、厚みが薄化したものである。その他、滑石製品として、埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉15個が出土した。

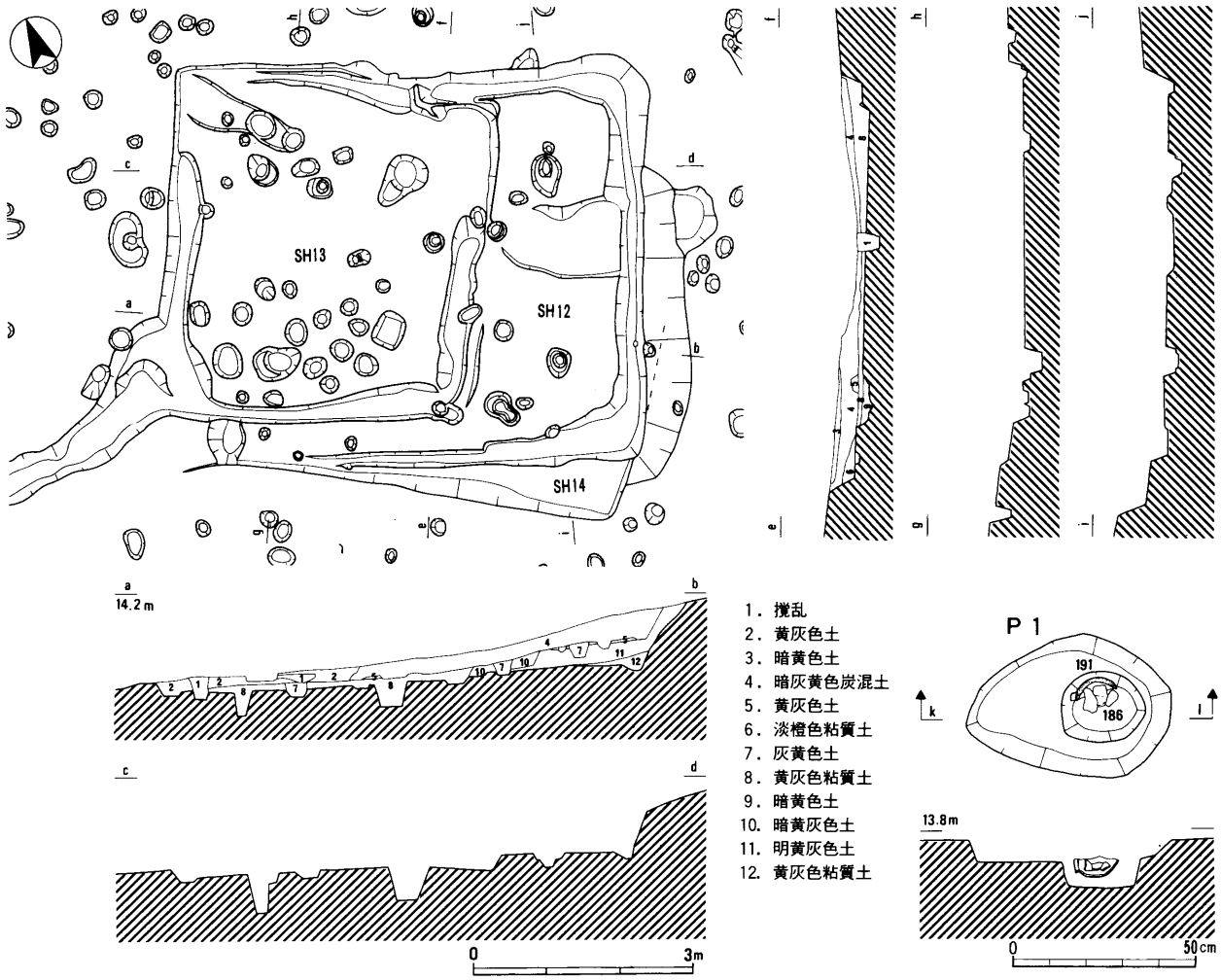


第50図　ＳＨ11内土坑実測図（1：40）

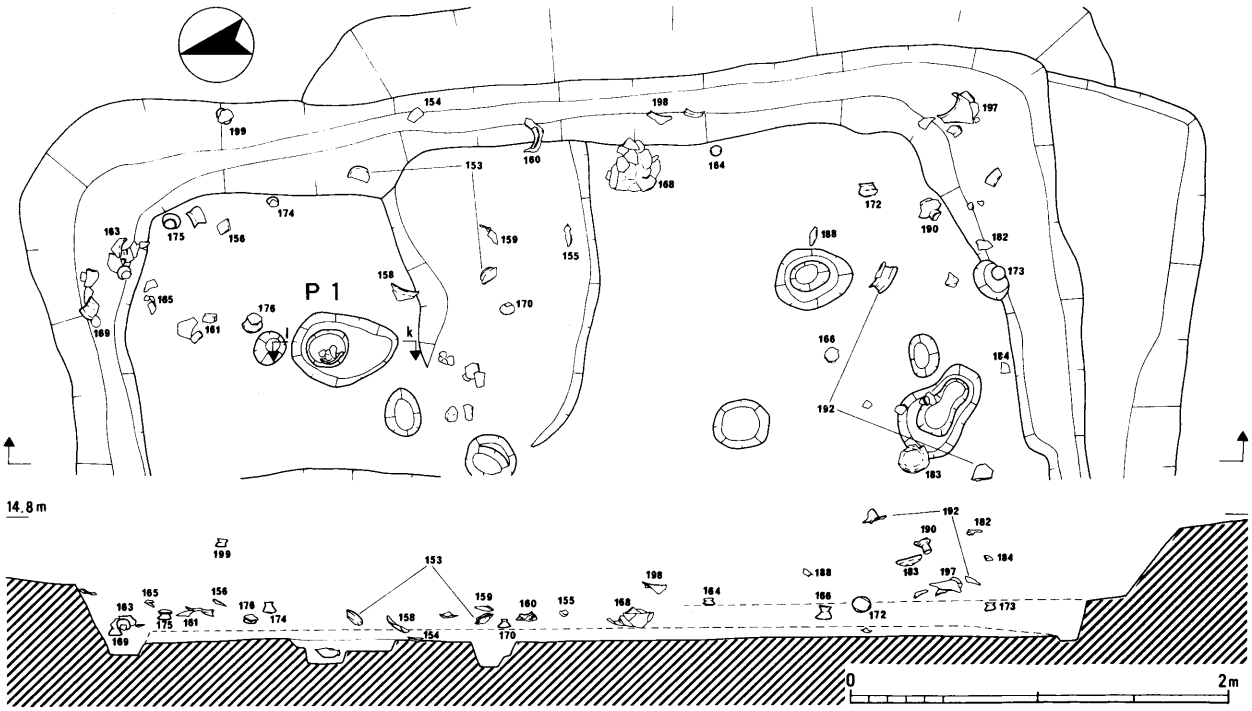
ＳＨ12～14　３基が同一地点で重複する。最も新しい住居はＳＨ14であるが、南辺の一部を除いて検出時にプランを押さえることができず、最終的に土層断面によってその存在を確認した。以下、個別に記述することとする。

ＳＨ12　３基が重複するＳＨ12～14のなかでは最も古い竪穴住居で、ＳＨ13との重複と、低くなる西側が流されているため明確な規模は不明であるが、東西５ｍ以上×南北5.5ｍを測る。遺存状況の良い東側では、床面からの壁の高さが約90㎝残る。竈は明確なかたちで遺存してなかったが、北壁に沿って焼土の固まりが認められ、北竈かとも思われる。ただ東側に残る主柱穴２個の間にある極めて浅い落ち込みは、焼土こそ残ってないものの粘土が充填されていて竈の基礎部分と考えることも可能で、その場合はそのすぐ外側で住居壁に沿って検出されたピットが煙出し孔となる可能性がある。もしこれが竈の存在を示す痕跡とすれば、竈本体は住居廃絶に伴って取り払われたことが考えられるのであるが、前述のように北竈の可能性もあるので、確定はできない。周溝は、低くなって飛ばされている西側を除き、北竈・東竈の如何にかかわらず、全周する。

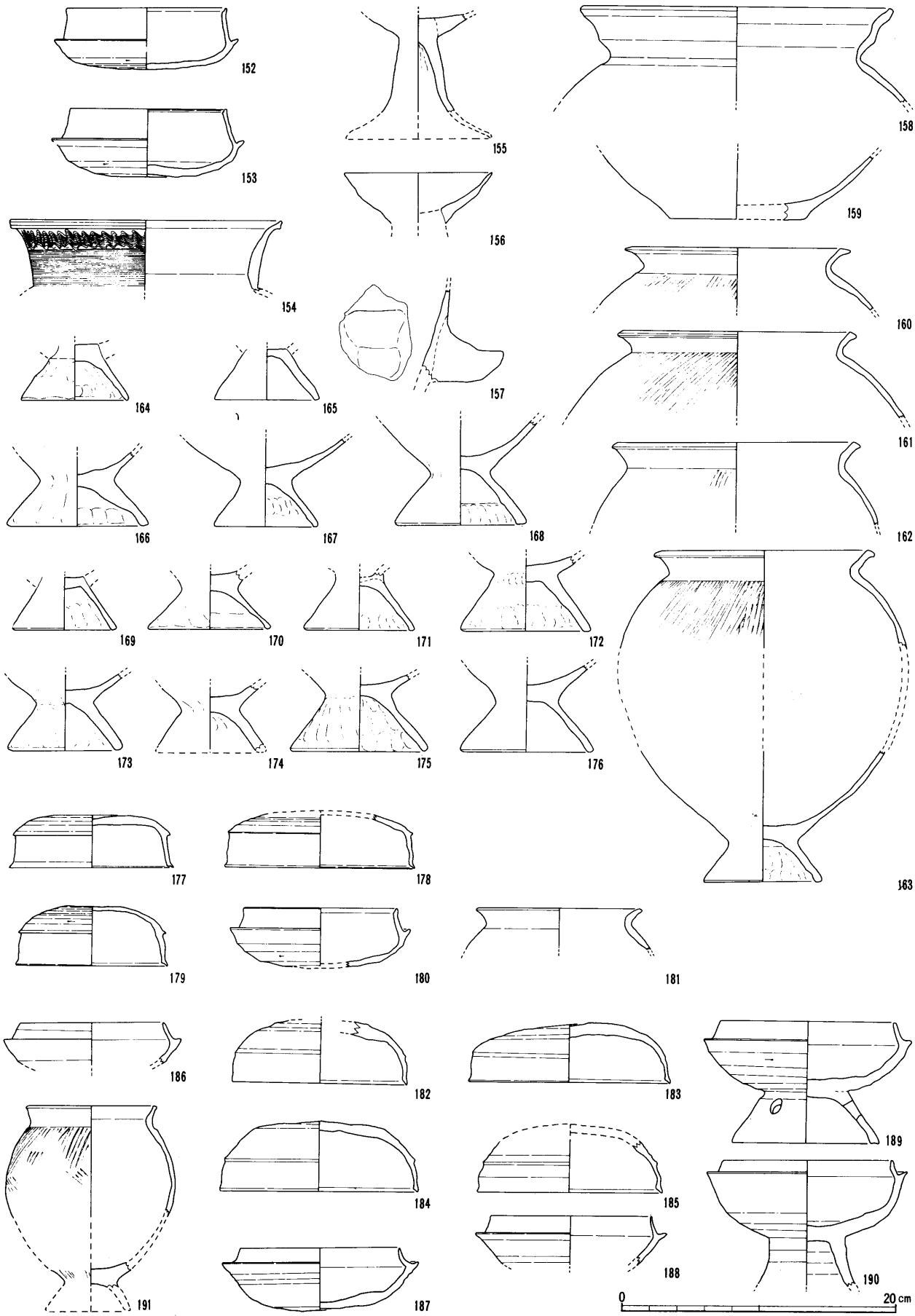
遺物出土状況　住居東半を中心に、多数の遺物が出土している。遺物出土状況の見通し図では多くの遺物が浮いているようにも見えるが、実際には床面が東側から西側にむかって低く傾斜しているため、それぞれの地点毎にみるとそれほど浮いているわけでもない。しかし、厳密な意味での床面出土土器と覆土出土土器との峻別は難しい。覆土の上部は、同一地点で切り合っているＳＨ14に伴うものであり、その土器群は時期的にも新しい。



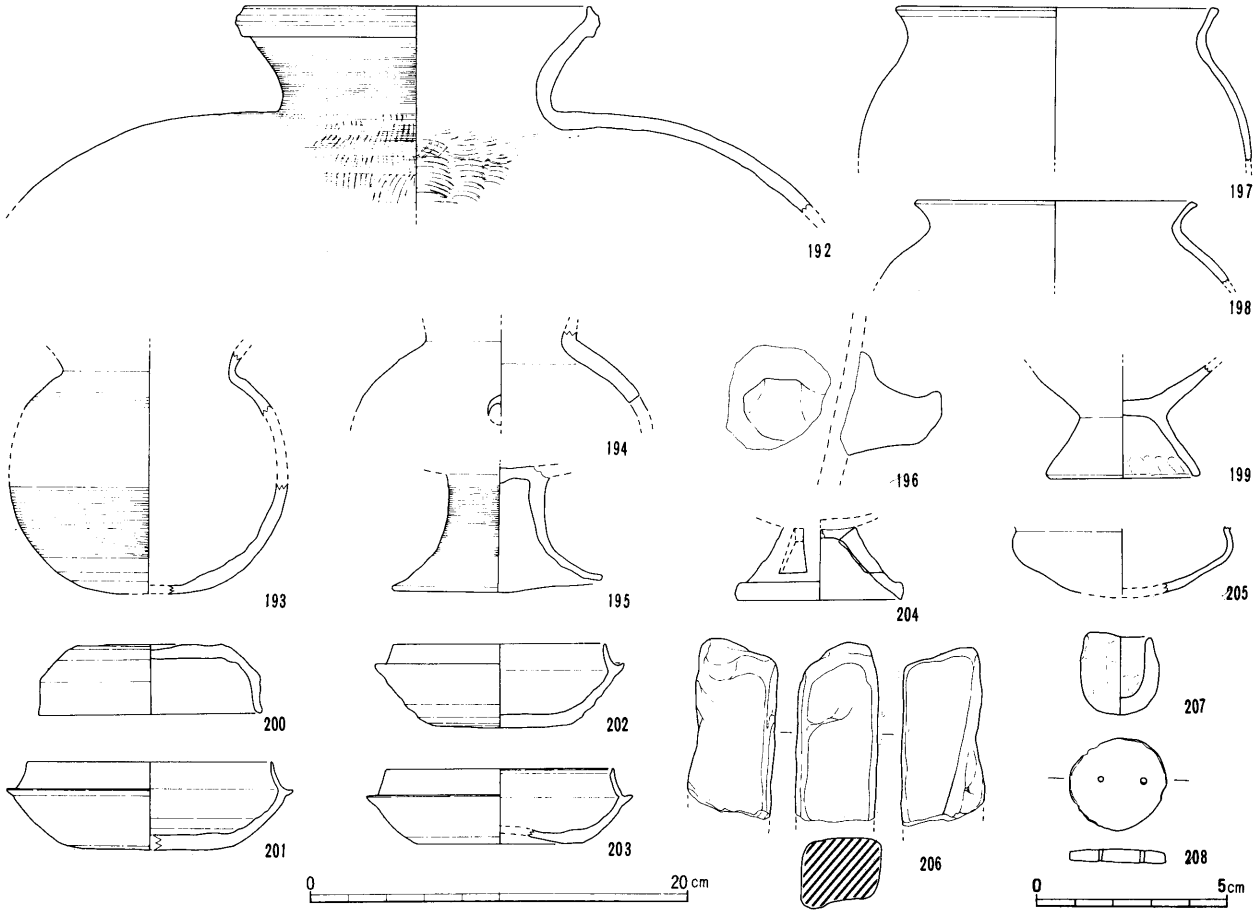
第51図　ＳＨ12～14実測図（1：100）



第52図　ＳＨ12・14遺物出土状況図（1：40）



第53図　ＳＨ12～14出土遺物実測図（152～176；ＳＨ12，177～181；ＳＨ13，182～191；ＳＨ14）　（1：4）



第54図　ＳＨ12～14出土遺物実測図(192～199；ＳＨ14,200～206；ＳＨ12～14,207～208；ＳＨ12～14上面)(208のみ１：２,その他１：４)

出土遺物　破片も含め、出土量に占める須恵器の比率が小さく、土師器の出土が多い。須恵器杯身(152・153)は、口縁部の立ち上がりが大きく、底部は偏平なもので、壺(154)は口縁下に波状文が施され、その下にはカキ目の入るものである。杯身と壺は、時期的にはややアンバランスな感もあるが、同時期とするとＴＫ23型式併行期くらいに相当しようか。土師器はバリエーションが豊富で、二重口縁壺(158)・壺底部(159)・高杯(155)・器台?(156)・甑(157)・Ｓ字甕(160～176)があり、Ｓ字甕の出土量が多い。

ＳＨ13　ＳＨ12に替わって建てられた竪穴住居で東西4.5ｍ×南北5.0ｍのやや長方形プランを呈する。遺存状況は悪いが、東竈のようである。床面には多数のピットが存在し、本址に伴う主柱穴のほかＳＨ12に伴う西側の主柱穴等も存在する。削平の激しい東北隅の一部を除き、周溝はほぼ全周し、南西コーナーから排水溝が外側へ延びる。

遺物出土状況　遺物の出土は少なく、なかでも床面からは図示しうる程の遺物は出土しなかった。周溝から須恵器杯蓋(177～178)・杯身(180)が出土したほかは、覆土出土の179と、ＳＨ13に伴うと考えられる柱穴から出土した181がある。いずれも使用状況を示すとは考えられず、住居廃絶後に埋没の過程で入ったものと見られる。

出土遺物　須恵器杯類は、177や178は天井部がかなり偏平で、ＳＨ11出土の杯身に近いものであるが、179や180はやや丸みを帯びてきており、型式学的には新相を呈するものであろう。181は、Ｓ字甕ではなく、口縁部が外反する小形甕である。

ＳＨ14　ＳＨ12～14のなかでは最も新しい竪穴住居である。そのなかではレベル的に最も高かったにも係わらず、床面を押さえることができずに抜いてしまったものであるが、南側でＳＨ12の外側にも竪穴住居の掘り込みが確認できること・土層断面図の作成時に明らかな上位での掘り込みが認められたこと・ほぼその面にそった上位層での遺物の出土があったこと、等によって、ＳＨ12・13よりも新しい竪穴住居の存在が明きらかとなった。ＳＨ12よりも外

側に存在する部分のみが辛ろうじて残るが、その部分には周溝は認められない。明確な規模は不明であるが、東西５ｍ前後、南北は不明である。

遺物出土状況　上述のような状況であり、土層断面図作成時に認識できた遺物と、辛ろうじて残った南側の床面よりも上位のレベルで出土した遺物を本址出土遺物としてＳＨ12出土遺物のなかから分離した。したがって、「本址出土」とするには他の住居跡出土遺物に比べて多分に恣意的な面があることを銘記しておきたい。また、186と191は、ＳＨ12の主柱穴でもあるＰ１出土の遺物であるが、その柱穴は切り合いがあるため、出土遺物の年代観が新しいことも勘案し、切り合いの新しいほうが本址に伴うものとみた。

出土遺物　ＳＨ12出土遺物とは異なり、出土量全体に占める土師器の割合が低下し、反比例して須恵器の割合が増加している。須恵器杯類(186～188)は天井部もしくは底部のヘラケズリが1/2以下で、杯部の立ち上がりが小さく、蓋の稜は痕跡化したものである。高杯には、短脚で小円孔を有する189と、おそらく長脚になると思われる190がある。189は若干古いものと思われるが、その他は総じてＴＫ10型式併行期くらいに相当するであろう。その他、須恵器には、甕(192)・壺(193)・瑯(194)・高杯脚部(195)があり、瑯は通常よりも若干大形で、文様のないものである。土師器には、Ｓ字甕(191・197～199)・甑(196)がある。Ｓ字甕は、198に顕著であるが口縁部が薄くて長くなる傾向があり、退化した形態を採るものであろう。また191は、通常よりも小形である。

ＳＨ12～14埋土出土遺物　３基のうちのいずれの住居出土かを特定できず、ＳＨ12～14と大雑把に把握した遺物を提示した。したがって、直接住居に伴わず、埋没の過程で混入した遺物も多いものと思われる。そのなかでも、須恵器杯類(200～203)は、いずれも新しいもので、伴うとすればＳＨ14の可能性が高い。206は砥石で、偏平ではなく角柱状の形態をなす。手捏ね土器(207)と滑石製双孔円板(208)は、上面からの出土である。また、埋土のフルイ掛けにより、ＳＨ12～14全体(個々の把握はできなかった)で、ガラス玉１個・滑石製臼玉29個が出土した。

ＳＨ15～17　３基が同一地点で重複する。検出の段階で、ＳＨ15がＳＨ17によって切られていることが判明しており、当初２基による重複と判断していたが、ＳＨ17を床面まで下げるとＳＨ17よりもひとまわり小さいもう１基別の竪穴住居の周溝を確認した（ＳＨ16)。ＳＨ16とＳＨ17の関係は、竈部分の切り合い関係から、ＳＨ16のほうが古い。ＳＨ15とＳＨ16との関係は不明であるが、ＳＨ16を一部拡張して建て替えたのがＳＨ17と考えられることから、ＳＨ15→ＳＨ16→ＳＨ17の順序で建て替えられたものと思われる。

ＳＨ15　３基のなかで最も古い竪穴住居で、東西4.7ｍ×南北5.1ｍの僅かな長方形を呈する。主柱穴はその後の重複で飛ばされているが、南西側の柱穴は辛ろうじてＳＨ16・17の柱穴と重複しつつも確認できる。ＳＨ17との重複のため不明の北側を除いて周溝は全周する。後の住居との重複のためプランは不明であるが、北竈のようである。

遺物出土状況　本址出土の遺物は非常に少ない。211が周溝から出土した以外は覆土出土である。

出土遺物　いずれも破片資料である。口縁部の残る須恵器杯身(210)は、やや深めの器形を呈すると思われ、口縁端部を丸く収める。

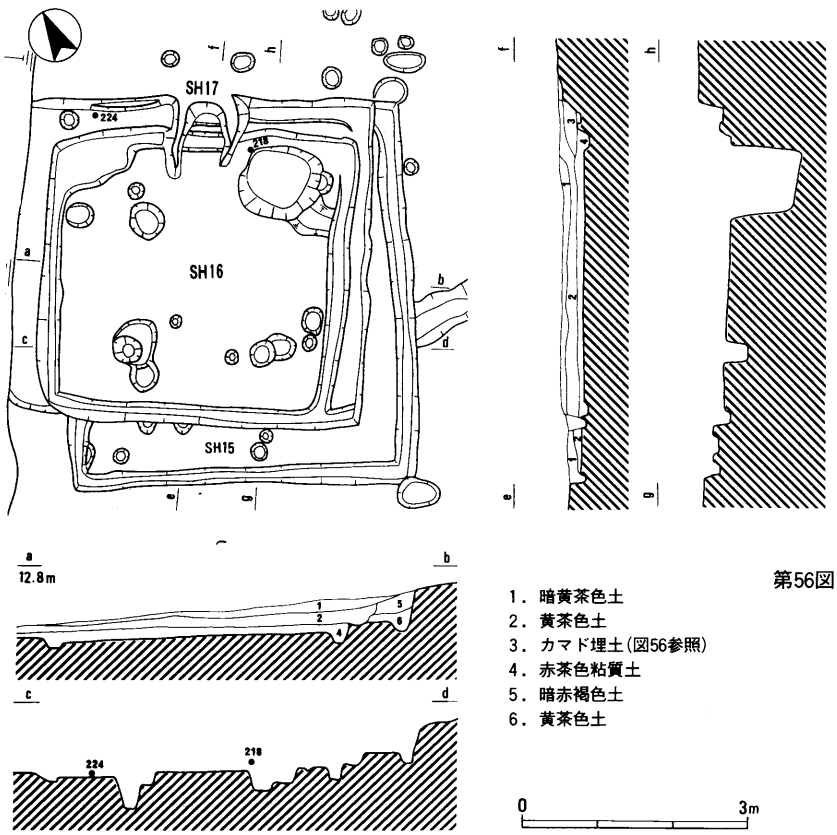
ＳＨ16　東西4.1ｍ×南北4.0ｍのほぼ正方形を呈し、重複する３基のなかでは最も小さい竪穴住居である。南壁はＳＨ17と共通しており、ほぼ同プランをとるといってよい。主柱穴は、性格不明の土坑が存在する北東側を除いて検出できたが、南側ではＳＨ17のものと重複する。周溝は、遺存状況の悪い部分を除き、竈の下も含めて全周する。

遺物出土状況　ＳＨ16とＳＨ17は、当初１基の住居跡として発掘していたため、両住居跡出土のものを一緒に取り上げてしまった。したがって、確実にＳＨ16から出土したといえる遺物は、床面から出土した216(出土状況図には未記）と、周溝出土の221・225程度である。その他の多くはより新しい住居であるＳＨ17に伴うか、その覆土のものと考えるのが妥当であろう。

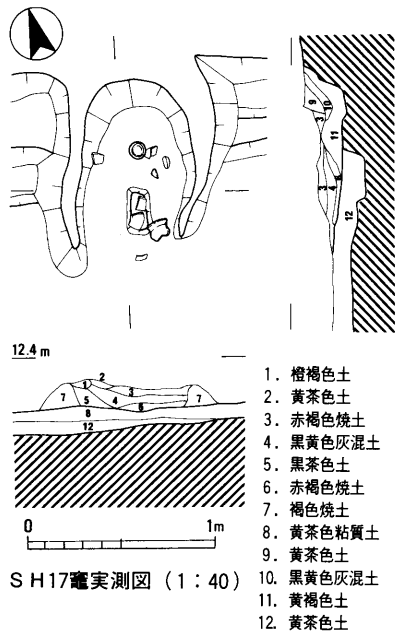
出土遺物　須恵器杯身(216)のみ、ＳＨ16床面で出土した遺物で、本址の時期決定にも重要な資料である。法量が小さく、立ち上がりはかなり真っ直ぐ

上方へ延びるのは古い要素であるが、丸みを帯びた底部外面のヘラケズリの範囲がやや狭いのは本遺跡出土品を通してみると新しく、ＭＴ15型式併行期あたりに相当しようか。

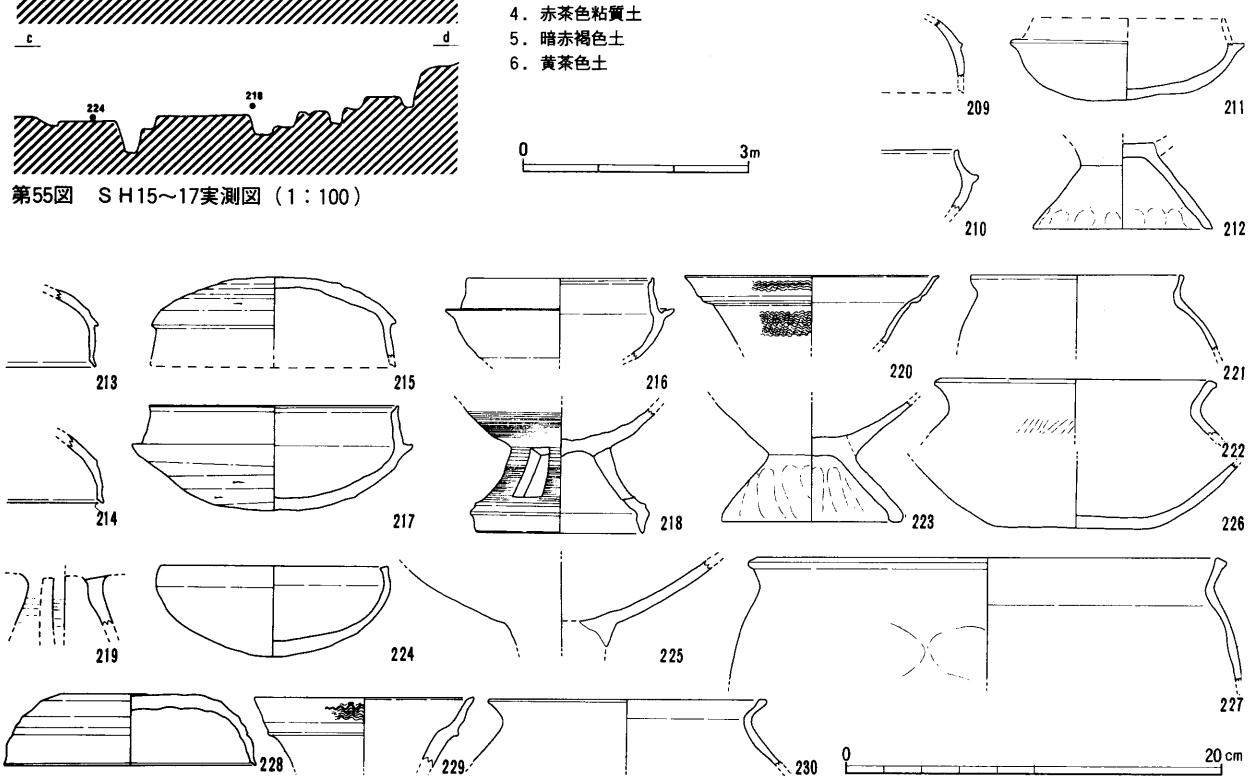
ＳＨ17　ＳＨ15～17のなかでは最も新しい竪穴住居であり、東西4.7ｍ以上×南北4.5ｍの規模を有する。南壁及び南側周溝は、ＳＨ16のそれと共通しており、ＳＨ16を三方に拡張するとともに、ＳＨ16床面に新たに土を乗せ直してＳＨ17の床面としたものである。竈は北壁中央内側に存在し、支柱石と袖部の一部が残存していた。また、掘り上がり時には明瞭でなかったが、検出時には明らかに後述のＳＨ24やＳＨ26と同様の煙道が竈から60㎝程度北側へ延びていた。ＳＨ16と17の切り合い関係は、周溝や埋土の土質からはいまひとつわからなかったが、ＳＨ17の竈がＳＨ16に壊されず、逆にそこへ乗っかってい



第55図　ＳＨ15～17実測図（1：100）



第56図　ＳＨ17竈実測図（1：40）



第57図　ＳＨ15～17実測図（209～212；ＳＨ15，216・221・225；ＳＨ16～17，その他；ＳＨ17）　（1：4）

たことからＳＨ17のほうが新しいと判断された。主柱穴は、４本と思われるが、北東側は確認できなかった。周溝の遺存状況は悪いが、竈の下にも確実に存在する。

遺物出土状況　確実に床面で押さえることができた遺物は、図示したもののなかでは土師器杯(224)のみである。竈からは、土師器甕(223・227)・壺(226)が出土している。また、213・214・217は、床面で確認した土坑から出土した遺物である。さきにＳＨ16に伴うとした遺物以外は基本的に本址の覆土から出土したものと理解される。ただし、須恵器杯身(217)は、上面出土である。

出土遺物　須恵器には、杯類・瓹・高杯があり、土師器には杯・Ｓ字甕・壺がある。須恵器の時期はＭＴ15型式～ＴＫ10型式併行期に相当するものと思われ、ＳＨ15～17は短期間の建て替えによるものと思われる。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉16個が出土した。

ＳＨ18～20　３基が同一地点で重複する。最も大きいＳＨ18が最も古く、その後、ＳＨ19→ＳＨ20と推移するようである。以下、個別に記述する。

ＳＨ18　３基重複したＳＨ18～20のなかでは最も古い竪穴住居である。5.5ｍ×南北5.9ｍと僅かに長方形を呈し、ＳＨ２・ＳＨ５と並んで稲生遺跡の竪穴住居のなかでは最大規模を誇る。竈は、焼土の存在から北竈と思われる。ＳＨ19～20の重複によって内部の詳細は不明であるが、北及び東側には周溝が残存している。主柱穴は不明であるが、ＳＨ19～20の東側に存在する柱穴は本址に伴うものの可能性がある。また、南西隅から外側へ延びる排水溝は、本址に伴うものであろう。

遺物出土状況　住居の大部分は後で建てられたＳＨ16～17によって床面がとばされているが、重複を受けていない住居の東側と北側の一部で本址に伴う遺物の出土をみた。233が周溝へ転落した状態で発見された他は、基本的に床面からはやや浮いた状態で発見されてはいるが、基本的には本址の廃絶時を示す遺物とみて良いであろう。

出土遺物　須恵器杯身(231)は、底部外面3/4以上ヘラケズリを行った丁寧な作りである。232は、遺存した個体には胴部の円孔は認められないが、文様等の特徴から大形瓹であることが窺える。土師器甕(234)は器形的には壺にも近く、口縁部は大きく外側へ開き、体部外面をハケ調整するものである。須恵器杯の特徴や、大形瓹の存在から、ＴＫ208型式～ＴＫ23型式併行期の所産と思われる。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉２個が出土した。

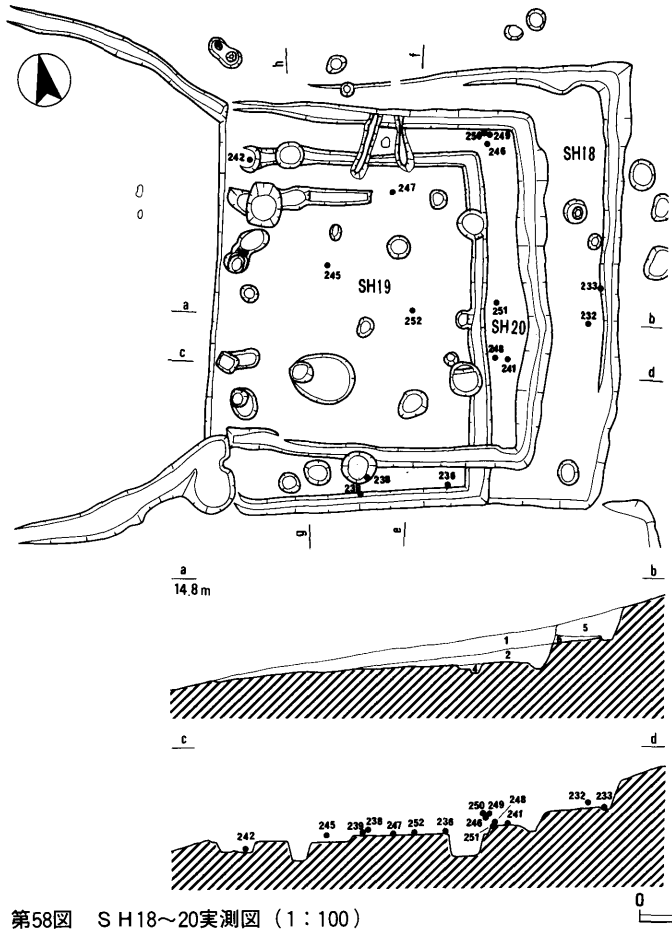
ＳＨ19　西側が流れており、全体規模は不明であるが、東西3.5ｍ以上×南北4.5ｍの竪穴住居で、北側に竈をもつが遺存状況は悪い。主柱穴は４本であるが、西側主柱穴２本の位置関係から、本来西壁はさらに西側へ広がっていたものと思われる。低くて詳細がわからない西側を除いて周溝は全周する。

遺物出土状況　床面の大部分が後で建てられるＳＨ20の重複を受けているため、本址出土遺物として認識できたものは、わずかに南壁際に存在したものと周溝出土の遺物のみである。そのなかでも、須恵器杯(236)等は床面出土遺物として認識できるものであろう。

出土遺物　数は少ないながらも良好な須恵器資料があり、本址の時期決定にはこと足りるであろう。須恵器杯蓋(235)は、天井部の3/4以上をヘラケズリしてやや丸みを帯びた器形をなし、立ち上がりが大きい。杯身(236)は、底部外面を3/4以上ヘラケズリし、シャープな作りであるが、立ち上がりはやや短くなる傾向にある。これらは、総じて、ＴＫ47型式併行期とみて良いものである。237は、特異な器形を呈するが、椀的なものであろう。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉18個とガラス玉３個が出土した。

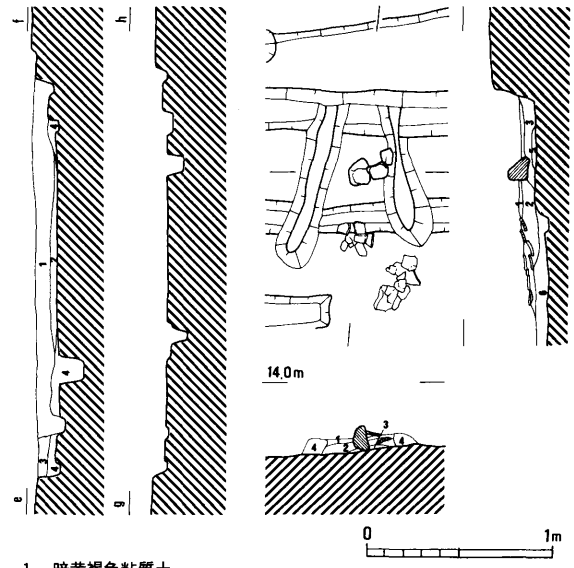
ＳＨ20　ＳＨ18～20のなかで、最も新しい竪穴住居であることが切り合い関係からわかる。東西4.5ｍ×南北4.7ｍのほぼ正方形プランで、北壁中央内側に竈をもつ。竈は、支柱石と袖部の一部が遺存しており、比較的残りは良い。主柱穴は４本で、ほぼ正方形状に並び、内２本はＳＨ19東周溝を切って存在する。遺存の悪い西側を除いて周溝が全周し、途中ＳＨ19東周溝を切る。北東コーナーから排水溝が外側へ３ｍ程延びる。

遺物出土状況　３基のなかでは最も新しいために新しい時期の重複を受けず、比較的良好な出土状態を示した。４点出土した須恵器杯類のうち、確実な床面出土は241のみである。土師器類は多くが床面



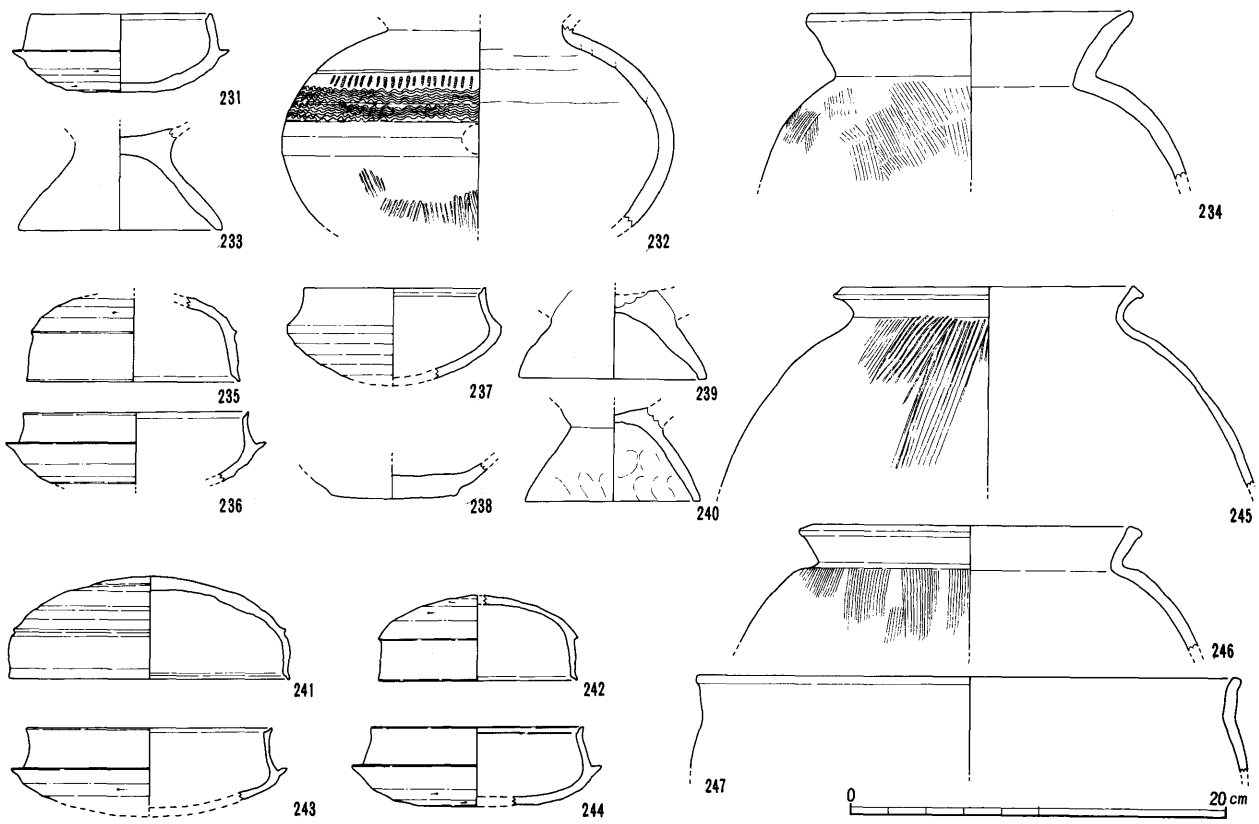
1．暗黄褐色粘質土
2．〃（やや粘性強）
3．黄褐色砂質土
4．黄色粘質土
5．黄褐色粘質土
6．黄褐色粘土

第58図　ＳＨ18～20実測図（1：100）

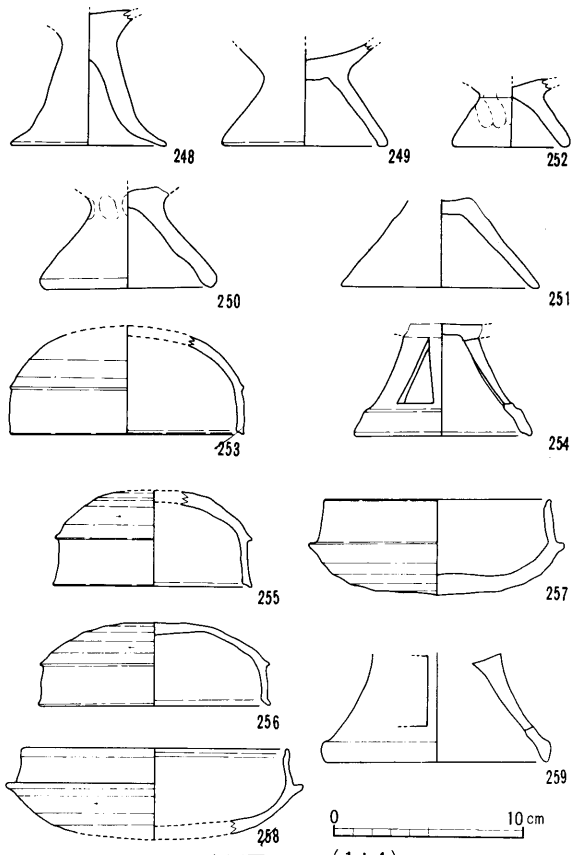


第59図　ＳＨ20竈実測図（1：40）

1．赤褐色土(固)
2．焼土混炭
3．黄褐色土
4．赤褐色焼土
5．赤茶色土
6．黄色粘質土



第60図　ＳＨ18～20出土遺物実測図（231～234；ＳＨ18，235～240；ＳＨ19，241～247；ＳＨ20）　（1：4）



第61図　ＳＨ18～20実測図　（1：4）
（248～251；ＳＨ20，253～259；ＳＨ18～19）

やそれに近い部位からも出土しているほか、竈周辺部では甑(247)が出土した。

出土遺物　床面出土の須恵器杯蓋(241)は、法量が大きくなり、天井部が偏平で、口縁部と天井部の境の稜が鈍くなっており、ＭＴ15型式併行期に相当するものと思われる。242～244は、型式学的に241よりも古いものであるが、重複や埋没の過程で本址へ混入したものと思われる。Ｓ字甕の脚部には、大形の通有のもの(249～251)と、小形のもの(252)の二者が存在する。土師器高杯(248)は、裾部があまり開かない形態をなす。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉８個とガラス玉１個が出土した。

ＳＨ18～19出土土器　出土竪穴住居を特定できず３基全体として取り上げたものを一括する。このうち、253と254は住居内の同一のピットから出土した。その他の須恵器は覆土出土である。ＴＫ23型式～ＭＴ15型式併行期に相当するものであろう。

ＳＨ21～23　３基が同一地点で重複する。ＳＨ21とＳＨ23は当初からＳＨ23のほうが新しい切り合い関係として認識していたが、ＳＨ22はＳＨ23を床面まで下げた段階でもう１本内側を走る周溝が検出でき、その存在を確認できたものである。ＳＨ22とＳＨ23の前後関係は明確ではないが、竈はＳＨ23での最終使用状況を示していると思われることから、ＳＨ22を拡張してＳＨ23を建てたものと思われる。

ＳＨ21　３基重複したＳＨ21～23の竪穴住居のうち最も古いものである。西側は後世の削平のため欠損しているが、現状で東西2.5ｍ以上×南北5.0ｍを測る。その後に建てられたＳＨ21・22よりも一段低く掘り込まれている。竈は、東側部分には存在しないため現状では確認できないが北側に存在したものと思われる。主柱穴は、東側２個が辛ろうじて遺存していた。遺存部分には周溝が全周している。

遺物出土状況　床面で出土した遺物はなく、数少ない遺物はすべて覆土出土のもである。ただ、埋没層が１層で、自然堆積というよりも人為的に埋められたものと思われるので、それらの遺物は住居の廃絶時期を示すものと思われる。

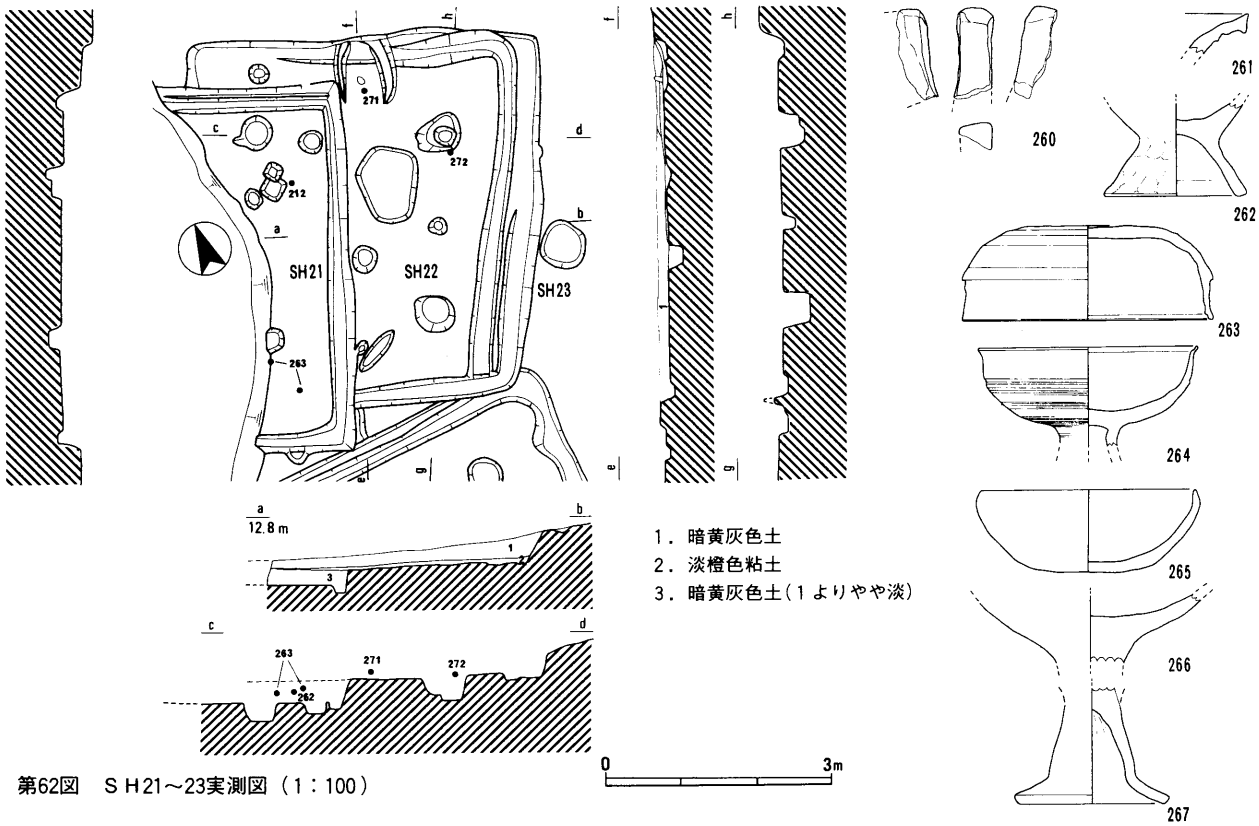
出土遺物　わずかに４点が図示できたに止まる。260は砥石で、欠損部はあるものの本址出土砥石のなかではやや小振りである。須恵器杯蓋(263)は、天井部の3/4程度がロクロケズリされたものであるが、ややシャープさを失っており、ＴＫ47型式併行期に相当するものであろうか。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉７個とガラス玉１個が出土した。

ＳＨ22　ＳＨ23の発掘時、床面まで到達した段階で東壁の内側にもう１本別の周溝が検出できたため２基の竪穴住居の存在が明確となった。東西4.5ｍ×南北4.9ｍの僅かに長方形を呈する。東側の壁・周溝はＳＨ23と共通し、北竈のようである。主柱穴も、ＳＨ23と同一場所で重複する。

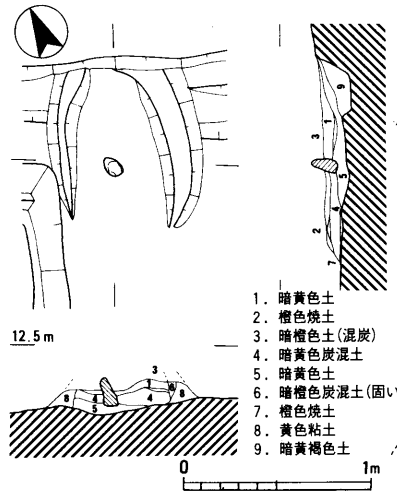
遺物出土状況　ＳＨ23の重複のため、出土遺物は確認できなかった。

出土遺物　なし。

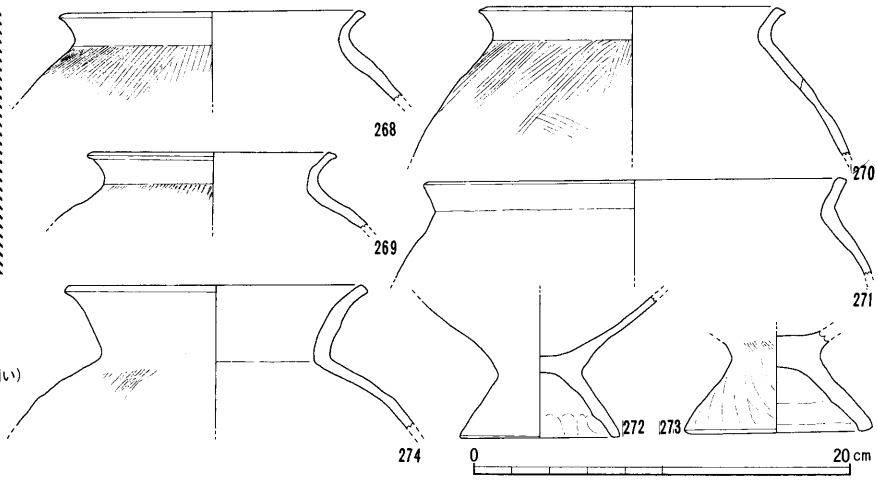
ＳＨ23　ＳＨ21～ＳＨ23のなかでは最も新しい竪穴住居で、さらに南東隅の一部でＳＨ27を切る。東西4.8ｍ×南北5.0ｍのほぼ正方形を呈する。竈は北壁中央内側に存在し、支柱石と袖部の一部が遺存する。主柱穴は、後世の削平のため欠損している南西側以外の３本が残るが（このうち北西側の柱穴はＳＨ21床面で検出)、いずれもＳＨ22の主柱穴と重複



第62図　ＳＨ21～23実測図（1：100）



第63図　ＳＨ23竈実測図（1：40）



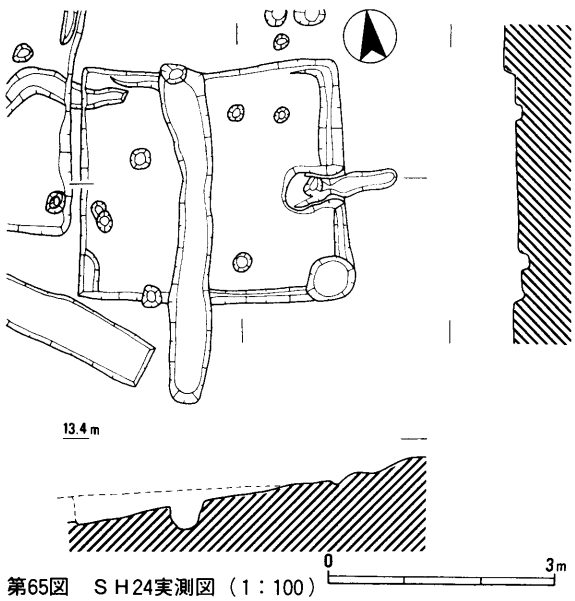
第64図　ＳＨ21～23出土遺物実測図（260～263；ＳＨ21，264～273；ＳＨ23）（1：4）

する。周溝は、欠損部分を除き全周するが、東側はいまひとつ遺存状態は悪い。

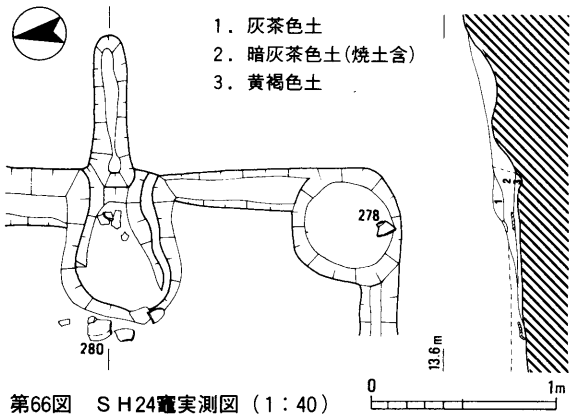
遺物出土状況　遺物稜はあまり多くないが、竈上面には須恵器高杯(264)が、竈内からは土師器甕(271、甑の可能性も残る)と高杯片(266)、周溝からは土師器杯(265)が出土した。台付甕(272)は床面からの出土である。その他の遺物も含め、住居廃絶時に残されたり、廃棄されたものと考えてよいものであろう。

出土遺物　須恵器類の良好な遺物はないが、土師器では杯・壺(274)・高杯(266～267)・台付甕(268～270・272～273)、甕もしくは甑がある。このうち、土師器杯は、内湾気味に立ち上がってきた体部が、口縁部で丸く内側へ折れ曲がる。須恵器高杯は、杯部下部から脚上部にかけてカキメがみられるもので、おそらく長脚になるであろう。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉21個が出土した。

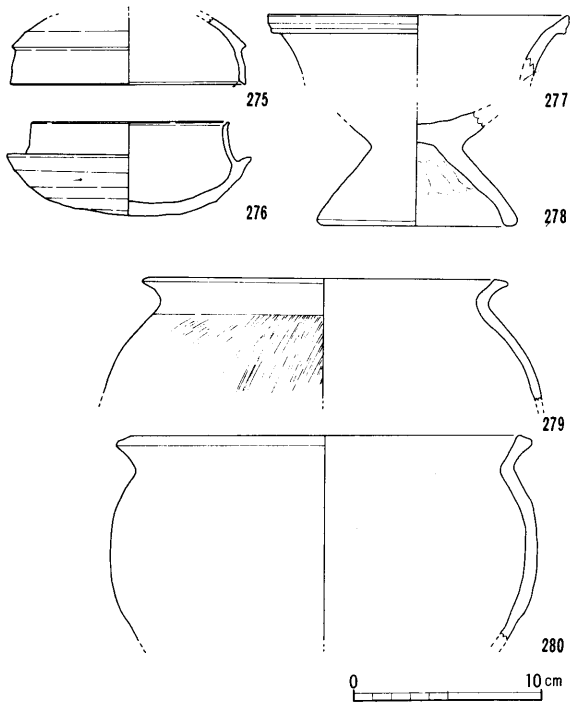
ＳＨ24　東西3.5ｍ×南北3.2ｍの小規模の竪穴住居で、東壁中央に竈をもつ。竈は、竈本体が住居の内面に存在し、そこから煙道が70cm程度外側へ延びる。煙道は現状では細い溝状のものになっているが、本来はトンネル状の煙道であったと思われる。主柱



第65図　ＳＨ24実測図（1：100）



第66図　ＳＨ24竈実測図（1：40）



第67図　ＳＨ24出土遺物実測図（1：4）

穴は、東側２本は明瞭であるが、西側については明確でない。周溝も、遺存状況がよいのは東壁付近のみである。竈の右側となる住居南東コーナー部には周溝を拡大するかたちで浅い土坑が存在する。住居中央を分断するかたちで、南北に溝状の土坑が走る。

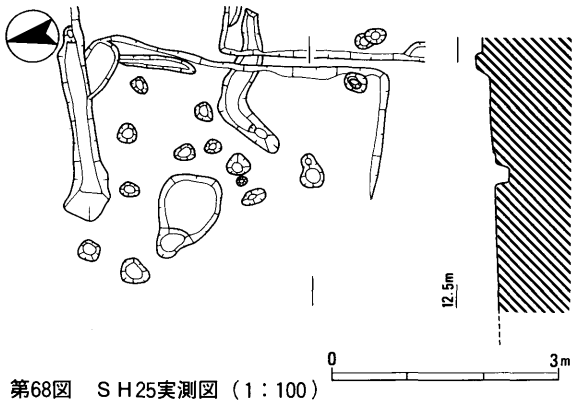
遺物出土状況　土師器台付甕(278)が上述の土坑から、甕(280)が竈から出土したほかは、遺存状況の良かった住居内の南東部分の覆土を中心に出土した。須恵器杯身(276)のみは住居の上面からの出土である。

出土遺物　須恵器杯蓋(275)は、天井部の3/4以上をロクロケズリし、明確な稜をもつ。杯身は、口縁部の立ち上がりが大きく、底部のロクロケズリも丁寧である。ＴＫ47型式併行期に相当しよう。竈出土の甕は、口縁形態はＳ字甕である279と同じであるが、ずんぐりとした形態をなし、外面のハケも認められないものである。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉４個が出土した。

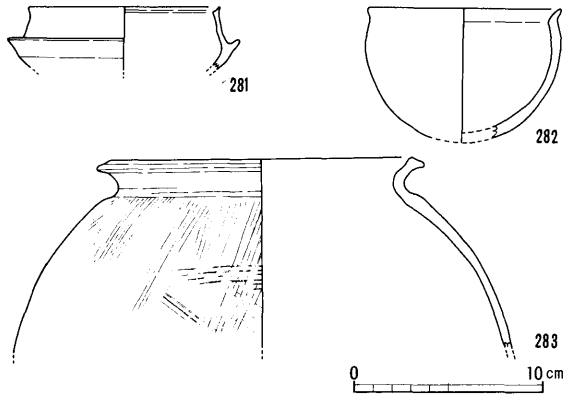
ＳＨ25　ＳＨ24の西側に存在する竪穴住居であるが低くなっていく西側が流されており、遺存状態は悪い。南北は4.1ｍを測るが、東西は東壁から1.8ｍが遺存したのみである。床面はかなり西に向かって傾斜している。東側と北側に焼土が存在したが、竈の位置がいずれであるかは明確にしえなかった。適当にピットは存在し、いずれかが主柱穴となるのであろうが、南東側には主柱穴として対応するピットはすでにとばされたためか確認できなかった。周溝は、東側のごく一部に痕跡的に確認できたことから、本来的には存在していたと考えるのが妥当であろう。北側の一部が、ＳＨ27の南側と接するが、両者の切り合い関係は明確でない。

遺物出土状況　確実に床面等で押さえることのできた遺物はなく、いずれもプランがあまり明瞭でなかった本址を削り込んでいく過程で出土した遺物である。

出土遺物　須恵器杯身(281)は、口縁部の立ち上がりが大きく、全体にシャープな作りで、底部外面を3/4以上ロクロケズリした土器で、ＴＫ23型式併行期のものと思われる。282は土師器の小形鉢で、口縁部が短く外折する。Ｓ字甕は、肩部に横方向のハケも認められるものである。埋土のフルイ掛けか



第68図　ＳＨ25実測図（1：100）



第69図　ＳＨ25出土遺物実測図（1：4）

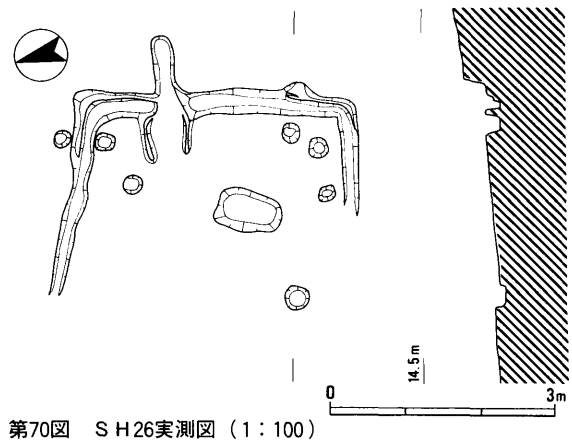
ら、滑石製臼玉２個が出土した。

ＳＨ26　ＳＨ25同様、西側が流出のため欠損しているが、東西2.8ｍ以上×南北3.9ｍの竪穴住居で東壁の内側でもかなり北寄りに竈をもつ。竈の位置がこれほどまで壁中央から外れる竪穴住居は、稲生遺跡ではみられない。竈は、竈本体が住居内側にあり、そこから外側へ70㎝程度煙道が延びる。床面は西に向かってかなり傾斜しているが、これは流出した部分も大きいであろう。床面に存在するピットが本址に伴うものとすれは、その位置関係はやや歪んだものとなる。周溝は、流出している西側を除き、全周している。

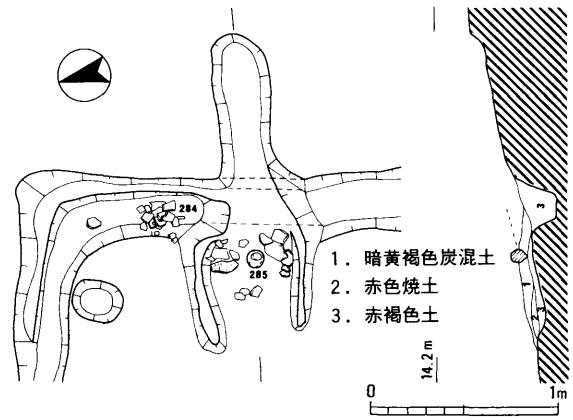
遺物出土状況　住居自体の遺存状況が悪いこともあり、出土遺物は極めて少ない。わずかに台付甕が溝と竈から出土したのと、須恵器短頸壺?(286)が出土したのみである。

出土遺物　286は、偏平な体部で体下半分をロクロケズリした土器である。短頸壺もしくは甑になるものであろうか。また、埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉４個が出土した。

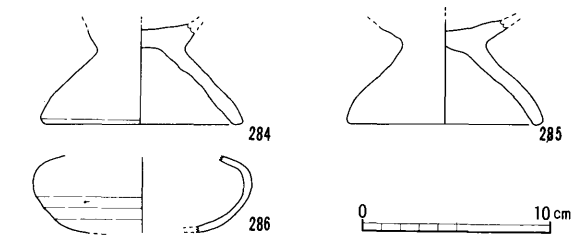
ＳＨ27　北東隅をＳＨ21～23によって切られている。



第70図　ＳＨ26実測図（1：100）

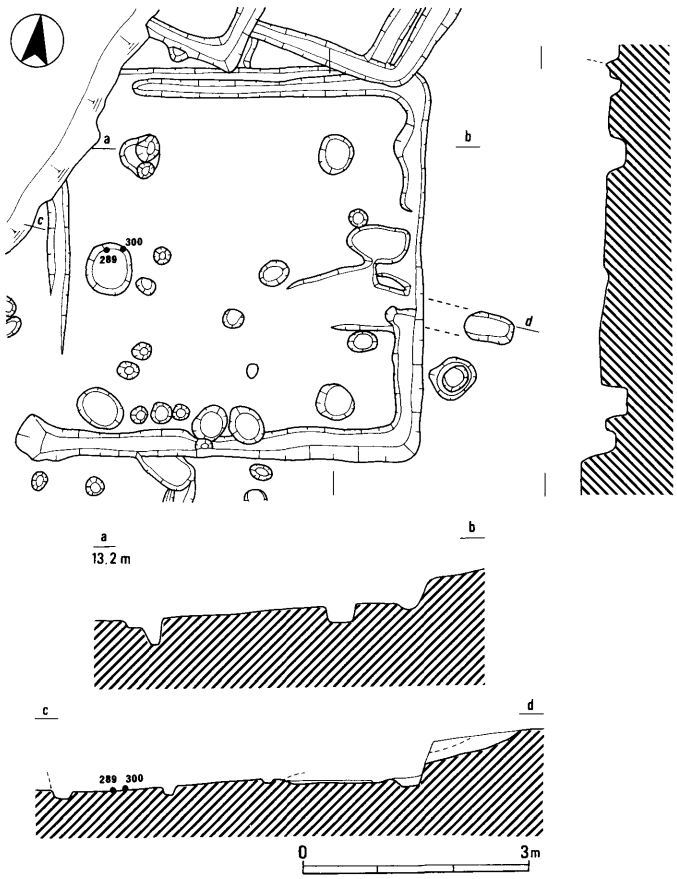


第71図　ＳＨ26竈実測図（1：40）

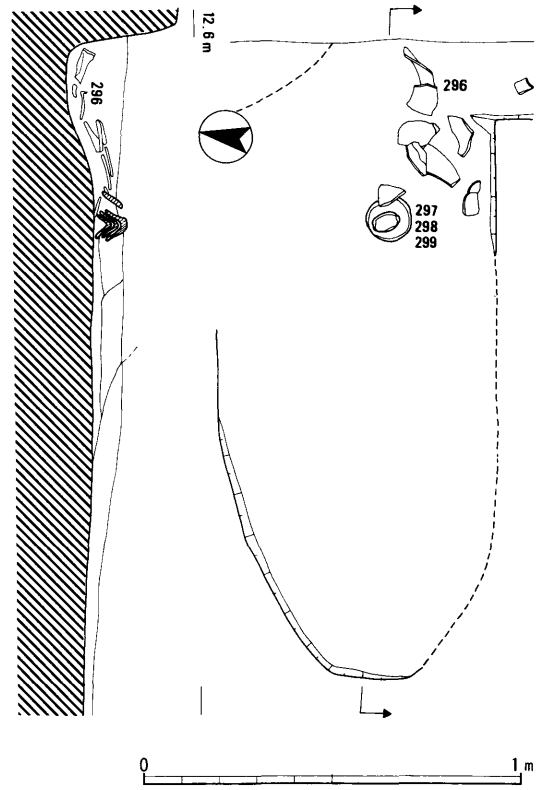


第72図　ＳＨ26出土遺物実測図（1：4）

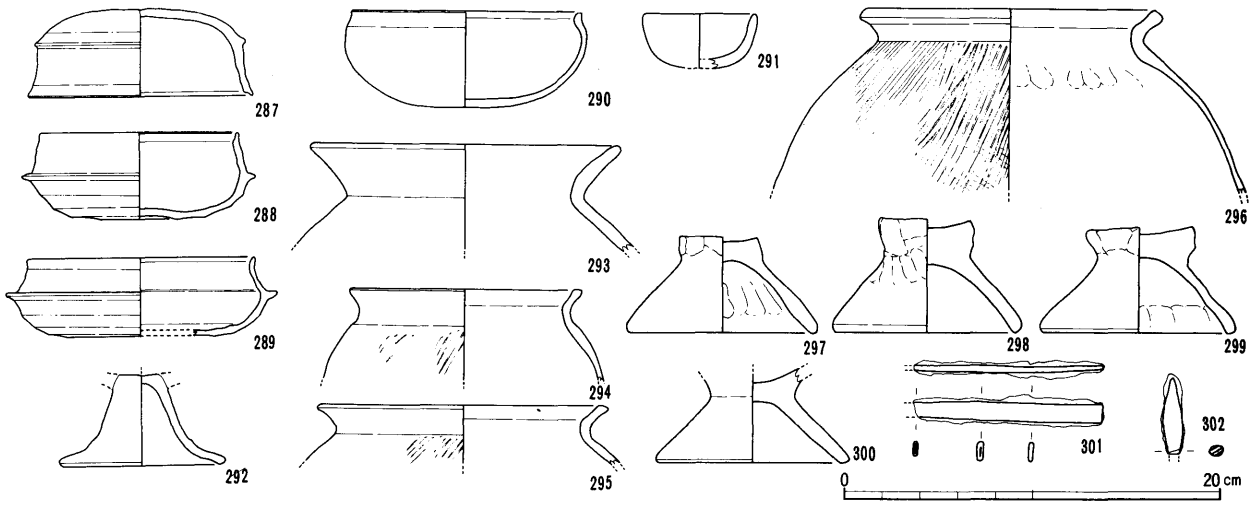
るが、東西5.2ｍ×南北5.2ｍの正方形プランの竪穴住居である。住居中央にも焼土が存在するが、東壁中央に竈をもち、そこから煙道が外側へ穿たれていた。煙出し孔の先端は、壁から１ｍ東に存在する。竈の遺存状況は悪く、袖部も遺存せず竈床の焼土面の範囲で大きさがわかる程度である。竈には、支柱石はなかったがその代わりとして台付甕の脚台部を３個重ねて支柱としていた。また、竈とは別に、住居中央部に焼土が認められ、床が焼けていた。住居東側では、検出面から70㎝程度の高さが遺存し、住居床面はそこから西側にいくにしたがって地形に沿って若干低く傾斜していく。主柱穴は、４本と思われるが、南側はかなり南壁に近い。そうした場合、



第73図　ＳＨ27実測図（1：100）



第74図　ＳＨ27竈遺物出土状況図（1：20）



第75図　ＳＨ27出土遺物実測図（1：4）

西側の２本の主柱穴の間にあるピットも、主柱穴もしくは補助柱穴になる可能性がある。周溝は、竈の下部分を除き、全周する。

遺物出土状況　竈では、上述のように台付甕の脚台部を３個重ねて支柱としていたほか、Ｓ字甕(296)が出土した。床面で確認できた遺物には図示しうるほどのものはない。周溝からは土師器杯(290)が出土した。須恵器杯身(289)と台付甕(300)は、住居西側のピットから出土しており、混入品の可能性も残る。須恵器杯蓋(287)はやや上面からの出土である。土師器類は破片が多く、住居廃絶後、埋没の過程で入ってきたものが多いものと思われる。

出土遺物　須恵器杯類には、法量がやや小さくて口縁部立ち上がりが非常に大きく、シャープな作りの287・288と、法量が大きくなって立ち上がりもやや短いものとなった289の二者がみられる。前者は

ＴＫ23型式併行期、後者はＭＴ15型式併行期に比定できよう。土師器では、甕・高杯・杯・手捏ね土器があり、甕はＳ字甕と外反系の甕の二形態が存在する。杯(290)は、体部が大きく内弯してきて口縁端部内面に面を持つものである。手捏ね土器(291)は、杯をミニチュアにしたような形態をとる。竈支柱となっていた甕の脚台部(297～299)は、余分な部分を打ち欠いた痕跡があり、支柱とするにあたって形を整えたものとみられる。最も下になっていた299が、他２点とくらべて僅かに大きい。その他、刃部をもたない用途不明の鉄製品が出土している。埋土のフルイ掛けによって、滑石製臼玉39個と、ガラス玉２個が出土した。

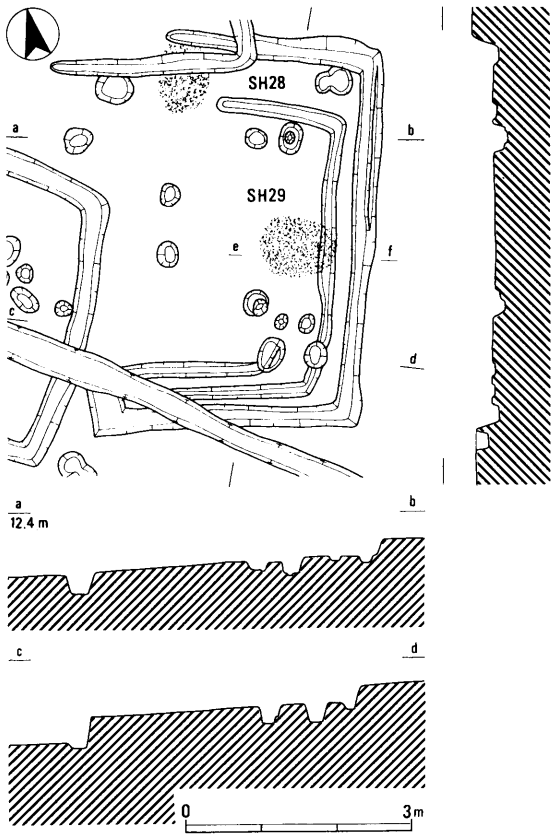
ＳＨ28～31　４基の住居が重複しているが、そのうちＳＨ28とＳＨ29が同一地点での重複で、その後北側へＳＨ30とＳＨ31とが建てられる。

ＳＨ28　東西3.7ｍ×南北5.5ｍの長方形プランを呈する。竈は、北壁中央内側にもつが、残りは良くなく、焼土の塊となっていることによってその存在が知れる程度である。ＳＨ30及びＳＨ31とも切り合い関係にあるが、本址の北側周溝及び竈はＳＨ30の周溝によって切られており、また西側周溝はＳＨ31の東側周溝によって切られていることから、本址がＳＨ30・31よりも古いことが確認できる。主柱穴は東側２本は明瞭であるが、西側のものは確認できなかった。床面の高さは、重複するＳＨ29床面よりも若干高い。周溝は、竈の下にも存在するらしい。

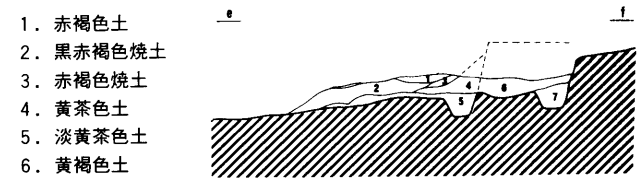
遺物出土状況　ＳＨ29との重複のため、床面の中央部分は飛ばされているものの、少数ながら良好な遺物の出土がある。住居の東北コーナーの部分で土師器甑(309)と杯(305)が出土したほか、本址に伴う周溝から出土した(303～304・306～308)。

出土遺物　須恵器杯身(303～304)は、ほぼ同大・同形で、口縁部の立ち上がりは大きく、シャープな作りであるが、304のほうがやや厚手である。ＴＫ23型式併行期の所産であろう。土師器杯(305～306)には、口縁端部に面をもつ305と、そのまま丸く収める306とがある。土師器甑(309)は、体部から口縁部が直線的に真っ直ぐ延び、口縁端部にヨコナデによる面をもつ。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉８個が出土した。

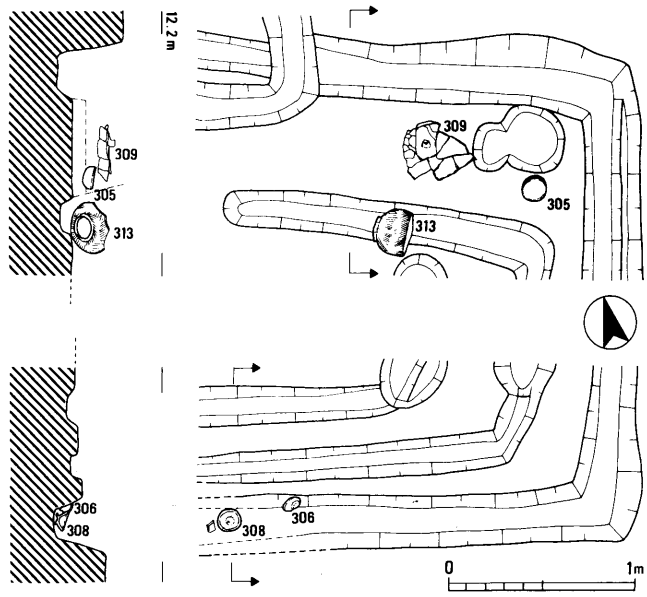
ＳＨ29　攪乱溝の存在や削平のため検出面の状況



第76図　ＳＨ28・29実測図（１：100）



第77図　ＳＨ29竈断面図（１：40）



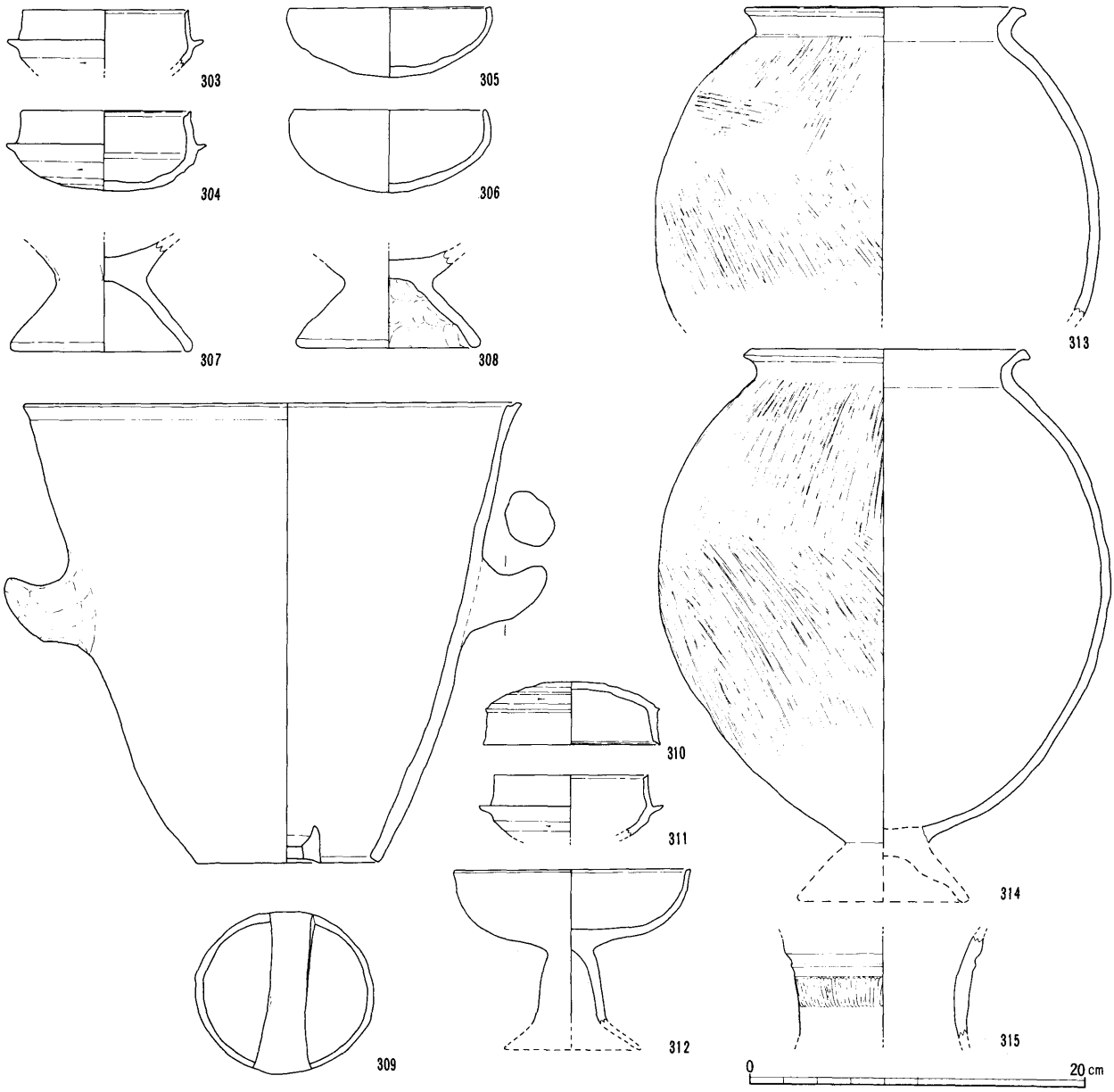
第78図　ＳＨ28・29遺物出土状況図（１：４）

が悪く、西側の状況は不明であが、東西2.3m以上×南北4.0mの大きさである。この竪穴住居は、SH28の検出時では確認できず、床面に到達した段階で周溝の存在から重複であることが判明したものである。竈は東竈で、支柱石は取り払われ、全体に壊されているが、その焼土がSH28の床面に乗りかかる状況であったことから、本址のほうがSH28よりも新しいことが確認できた。主柱穴4本は明瞭で、そのうちの1個はSH31床面で検出された。周溝は削平された部分を除き、全周する。南側周溝に平行するかたちでさらに内側に1状の溝が走っており、あるいはもう1棟の竪穴住居が重複して存在していた可能性も残る。

遺物出土状況　土師器S字甕(313)が住居東北部の周溝上で倒立状態で出土したほか、須恵器杯蓋(310)や土師器高杯(312)が周溝から出土した。

出土遺物　須恵器杯類(310～311)は、シャープで丁寧な作りで、SH28出土のものと大差ないものである。土師器高杯(312)は、杯部に屈曲点をもたず内湾しながら立ち上がるもので、口縁端部内側に面をもつ。須恵器頸部片(315)は、ヘラによる刻み列をもつもので、瑕とすれば上述の杯類よりも新しい所産であり、小破片であることからも、住居廃絶後の埋没の過程で混入したものであろう。埋土のフルイ掛けにより、滑石製臼玉2個が出土した。

SH30　SH28を切って建てられた東西3m以上

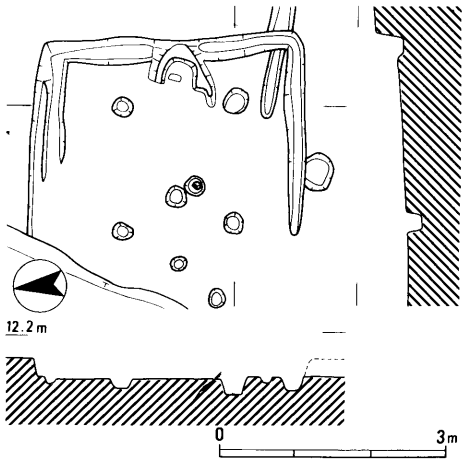


第79図　SH28・29出土遺物実測図（303～309；SH28，310～315；SH29）　(1：4)

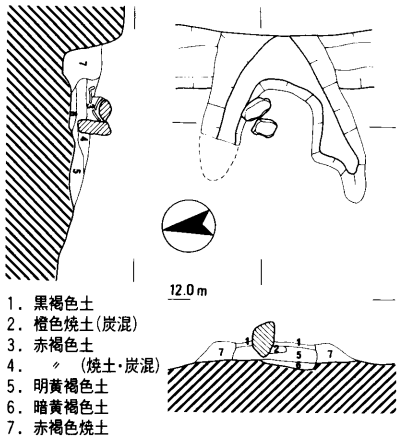
×南北3.6mの竪穴住居である。西側は削平のため周溝が遺存しておらず、住居の全体形は不明であるが、4本遺存した主柱穴を結ぶラインはほぼ正方形であり、東西長も南北長と同じ3.6m前後を想定して大過ないであろう。竈は、東壁中央内側にあり支柱石と袖部の一部が残る。周溝は、竈の下も含め、全周している。床面は、東側から西側にむかってかなり低く傾斜する。調査時の床面での柱穴の検出が見にくかったためかなり削り込んであり、図示してある床面よりも実際にはもう少し高かったものと思われる。

遺物出土状況　小さい住居でありながら、本址からは多くの良好な遺物群の出土があった。遺物の多くは、床面から若干浮いて出土（上述の床面の削り込みの分を勘案してもまだ高い）していたり、周溝内から出土(318・324・343)しているが、確実に本址の生活で使用された状態を残すと思われる遺物はあまり明確ではない。廃絶時にそれまでの生活品をそのまま残していったと考えるよりも、なんらかの理由で本址に遺物を廃棄していったと考えたほうが妥当性があろう。須恵器杯類に完形品の多いことや埋土からの臼玉の出土が多いことも考えると、生活の場としての住居廃絶後、祭祀等で二次利用されたことも考えられる。

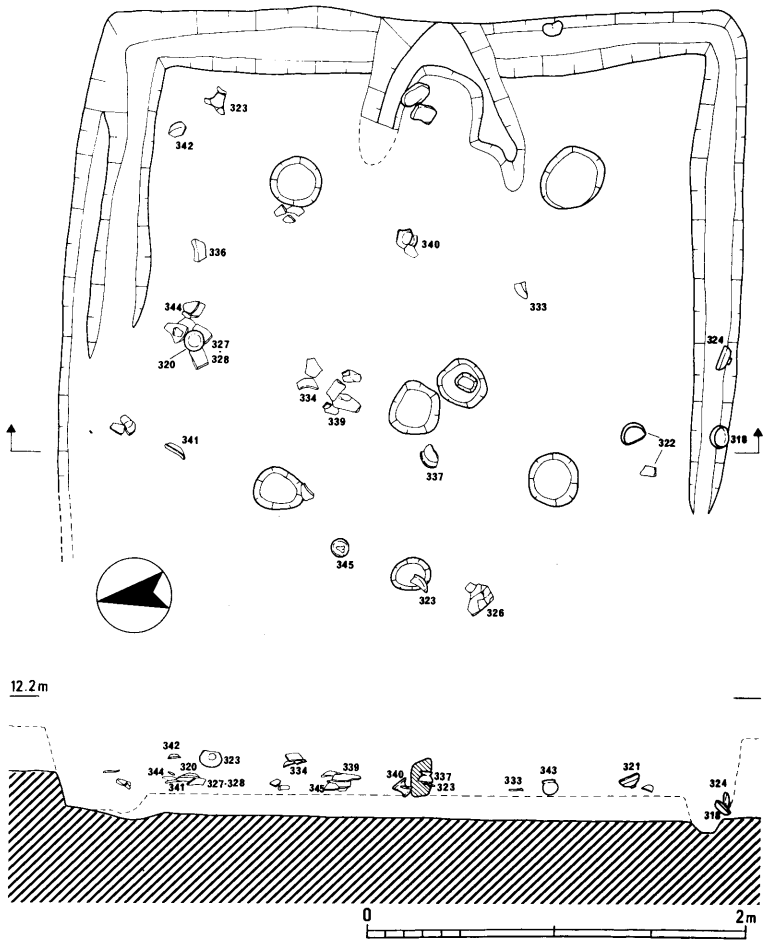
出土遺物　須恵器をみると、316～317は、蓋であるが、径が小さく、短頸壺の蓋である可能性がある。同様に、321～322も、台付短頸壺の蓋である可能性がある。杯蓋(318～319)は、天井部の3/4以上ロクロケズリが施された丁寧な作りであるが、稜の部分は沈線化の傾向にあり、新しい様相を示す。杯身(320)は、底部のロクロケズリは丁寧で、器形は丸みを帯びたものである。有蓋高杯(325)は、立ち上がりが大きくシャープな作りであるが、底部のロクロヘズリは1/2程度で、脚部はやや細いようである。有蓋高杯蓋(323～324)は、杯身蓋に比べ、ロクロケズリの範囲がやや狭いものとなっている。これらは、



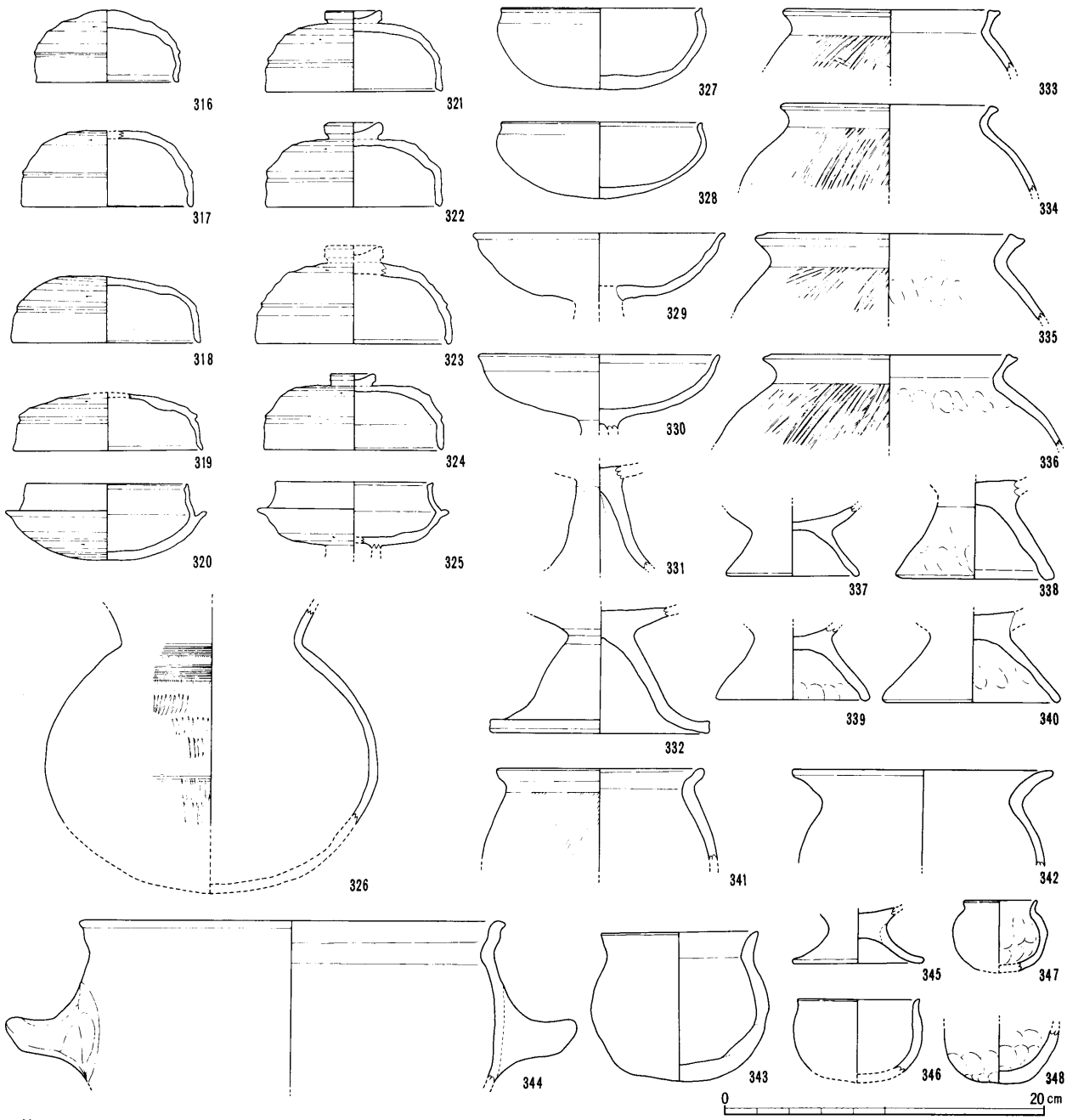
第80図　ＳＨ30実測図（1：100）



第81図　ＳＨ30竈実測図（1：40）



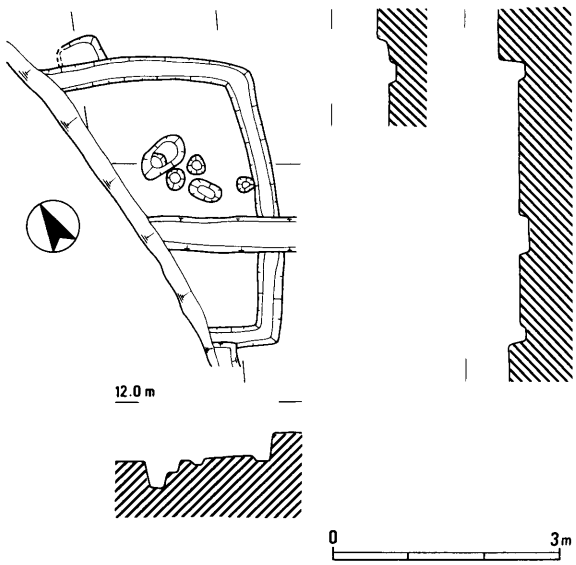
第82図　ＳＨ30遺物出土状況図（1：40）



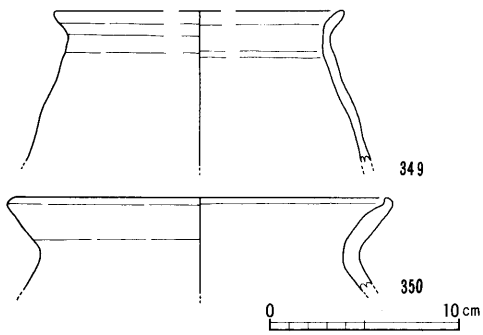
第83図　ＳＨ30出土遺物実測図（1：4）

やや時期幅をもつものであるが、基本的にはＭＴ15型式併行期を中心とした時期であろう。壺(326)は、やや下膨れの器形で、タタキを施した後に部分的にカキメを施す。土師器では、杯(327～328)、高杯(329～332)、Ｓ字甕(333～340)、甕(341～342)、甑(344)、小形壺(343)、器台？(345)、小形鉢(346)、手捏ね土器(347～348)と種類は豊富である。このうち、高杯脚には、脚柱部が真っ直ぐな331と、膨らんで大きく裾広がりになる332の二形態のがある。同様に甕でも、Ｓ字甕以外に、口縁部が短く内湾気味に立ち上がる341と、細長く外側へ大きく開く342の二形態がある。甑は、口縁部が外側へ屈曲するタイプである。埋土のフルイ掛けから滑石製臼玉が159個も出土し、これは稲生遺跡竪穴住居の臼玉出土数としては最高である。ただし、未製品や原石の出土はなく、あくまで製品ばかりである。

ＳＨ31　調査区のなかで最も低位(最下段)に位置する竪穴住居である。埋土が床面近くまで攪乱を受けている部分があり、また西側は削平を受けているが、東西３以上×南北4.0ｍで、北竈をもつ。主柱穴は、北東側のもののみ遺存する。周溝は、真っ直ぐではなく、中央部が外側へ僅かな膨らみをもつも



第84図　ＳＨ31実測図（1：100）



第85図　ＳＨ31出土遺物実測図（1：4）

のである。

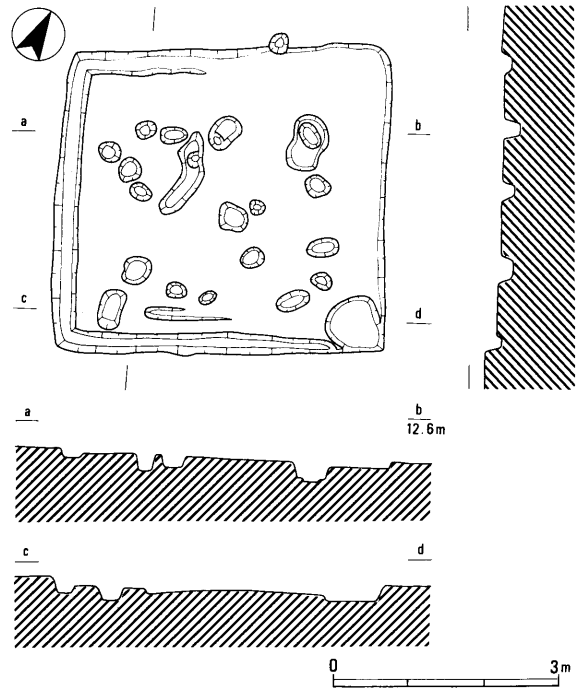
遺物出土状況　上部で攪乱された部分が大きく、出土状況的には不明な部分が大きい。竈や周溝部分からも、良好な遺物の出土はなく、本来的には廃絶時にあまり遺物を残していかなかった住居であったものと思われる。

出土遺物　図示しうるものは、覆土から出土した土師器甕２点のみである。349は、口縁部が緩やかに外反し、端部はそのまま丸く収めるもので、内外面はナデ調整によるものである。350は、口縁部が比較的長く、大きく外反し、端部はややつまみ上げられている。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉１個が出土した。

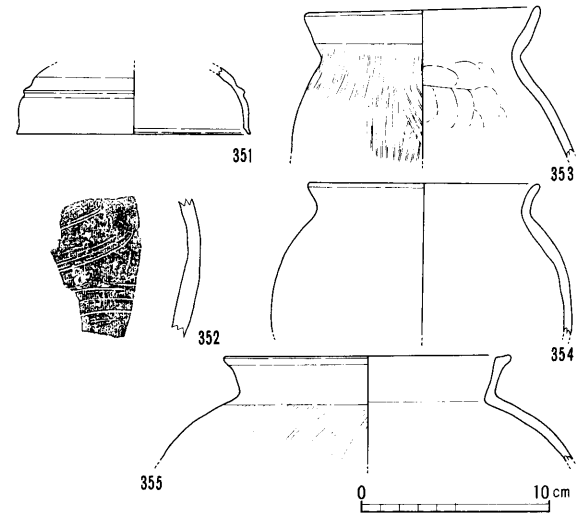
ＳＨ32　ＳＨ33とともに、大溝よりも南側に所在する竪穴住居である。東西4.5ｍ×南北4.1ｍの僅かに長方形プランの竪穴住居であるが、削平のため竈の位置は不明である。主柱穴４本は明瞭である。周溝は削平のためとばされている部分もあるが、基本的に存在するようである。南東隅の部分には、周溝と繋がる土坑が存在する。周溝の内側に不明瞭ながら細い溝が部分的に存在することや、主柱穴に一部切り合いがあること、ピットの数がやや多いことから、同一地点でさらにもう１棟重複していた可能性もあるが、確認はできなかった。

遺物出土状況　住居自体の残りがよくないため出土遺物はあまり多くないが、基本的には床面もしくはそれに近い部位から出土したほか、南東隅の土坑から須恵器杯蓋(351)が出土した。

出土遺物　須恵器杯蓋は、稜の部分が沈線化し、全体にシャープさに欠けるものである。破片のため細かい時期比定は難しいが、ほぼＭＴ15～ＴＫ10型



第86図　ＳＨ32実測図（1：100）



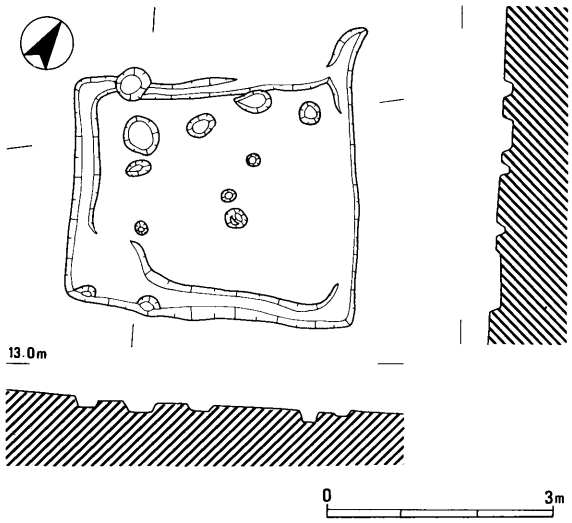
第87図　ＳＨ32出土遺物実測図（1：4）

式併行期の所産と考えられよう。352は須恵器で、櫛描の条線を施すが、器種等の詳細は不明である。甕(353～355)はそれぞれ形態が異なる。353は、口縁部が内湾気味に長細く立ち上がり、体部外面ハケ・内面ユビオサエを施したもの、353は口縁部が短く外反し、体部にはナデ調整を施したもの、355は系統的にはS字甕の系譜を引くものであろうが、口縁部は中細で直線化したものである。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉9個と、ガラス玉1個が出土した。

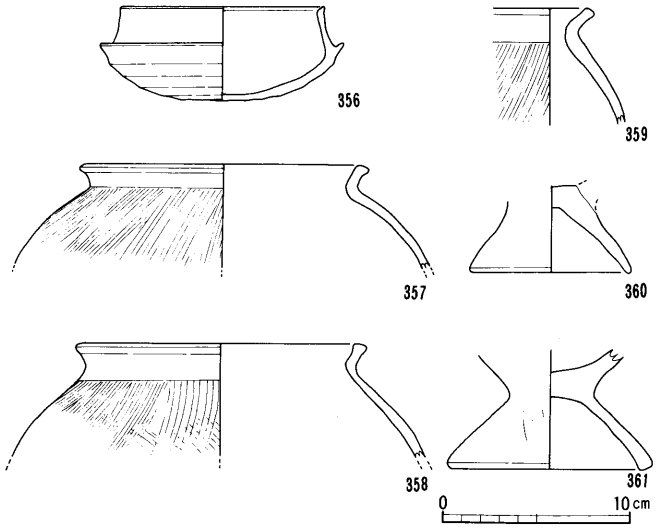
SH33　東西3.3m×南北3.9mのやや長方形を呈する小規模な竪穴住居である。削平のため、検出面が非常に浅く、遺存状況は悪い。このため、竈の位置など詳細は不明である。周溝は、全周するようであり、北側へ排水溝が延びる。

遺物出土状況　S字甕のうち、357・359～361は周溝からの出土である。須恵器杯身(356)は本址検出時に出土したものであるが、本来的には本址に伴っていたものと思われる。358のみ床面から出土した遺物である。

出土遺物　須恵器杯身(356)は、口縁部の立ち上がりも大きく、底部も3/4以上ロクロケズリされたものであるが、やや底部が丸みを帯びてきており、TK23～47型式併行期の所産であろう。S字甕口縁部(357～359)は、いずれも口縁部が短く、しっかりしたものである。埋土のフルイ掛けから、滑石製臼玉2個が出土した。



第88図　SH33実測図（1：100）

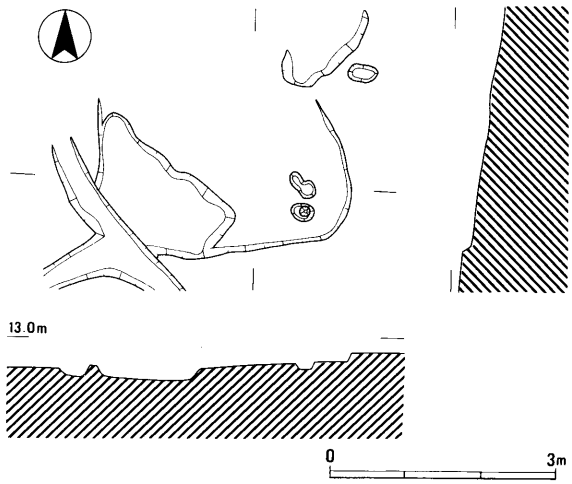


第89図　SH33出土遺物実測図（1：4）

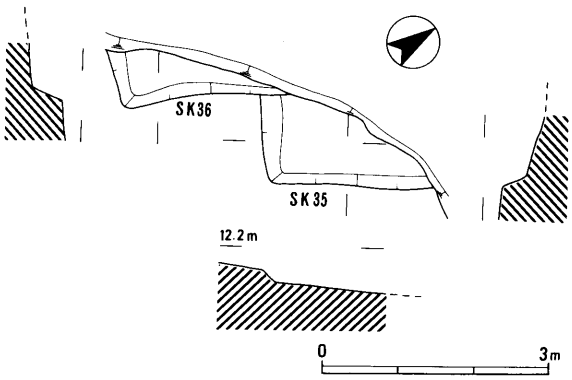
② 土坑

SK34　SH6の北側に所在する土坑で、削平・流出が著しく、プランを確定することは難しいが、東西3.3m×南北2m以上程度の大きさはある。竪穴住居の可能性もあるが、竈を示す焼土や周溝は確認できず、その可能性を指摘するに止める。出土遺物はなく、埋土のフルイ掛けでも臼玉等は出土しなかった。

SK35　SH8の西隣に所在し、SK36と重複するが、前後関係は不明である。削平のため、南西隅を検出しただけであるが、直角に曲がるコーナーをもっており、竪穴住居の可能性がある。ただし、周溝は確認できなかった。出土遺物はなく、埋土のフルイ掛けでも臼玉等の出土はみなかった。



第90図　SK34実測図（1：100）



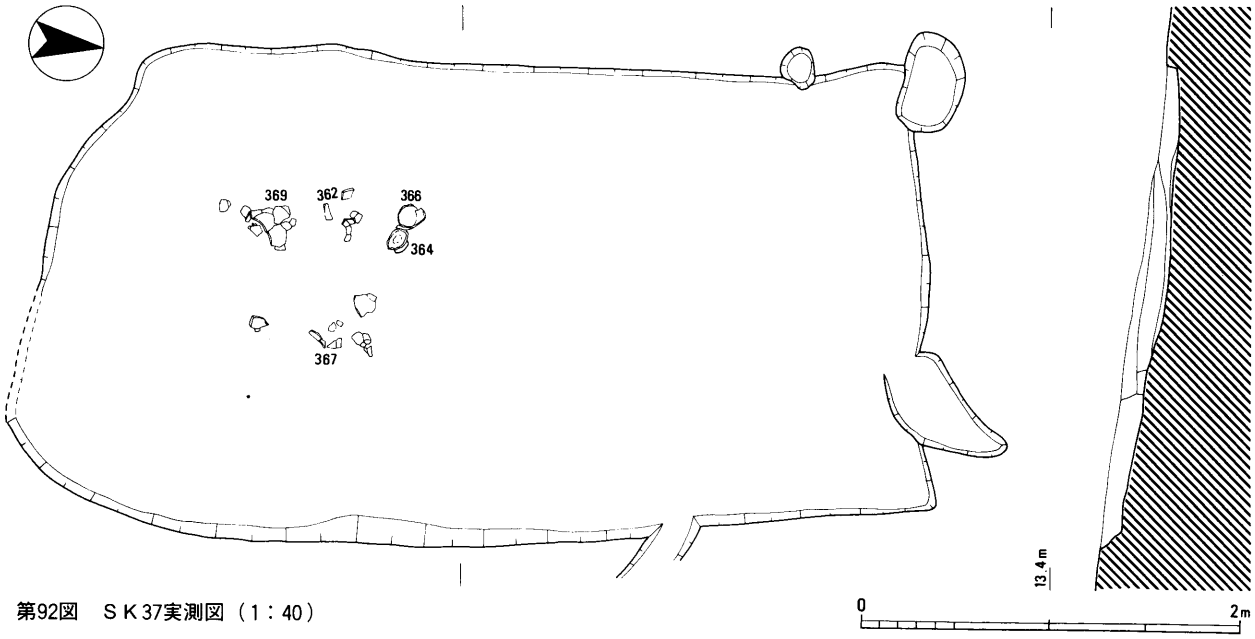
第91図　ＳＫ35・36実測図　（1：100）

ＳＫ36　ＳＫ35同様、削平のため、南西隅しか検出していないが、直角に曲がるコーナーをもち、竪穴住居の可能性もある。ただし、周溝は確認していない。出土遺物はなく、埋土のフルイ掛けでも臼玉等は出土しなかった。

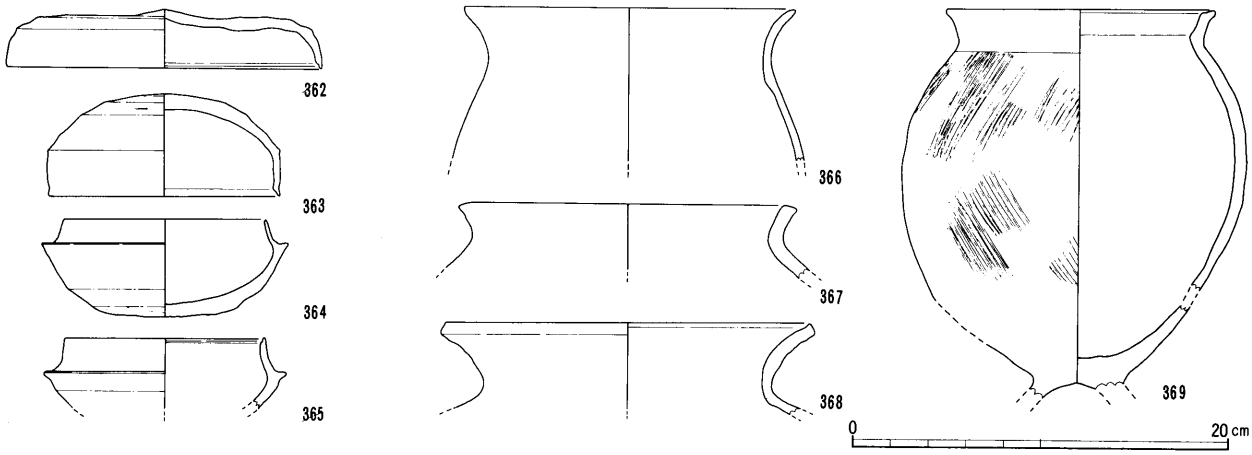
ＳＫ37　東西2.6ｍ×南北4.7ｍの長方形を呈し検出面から15cmと比較的浅い土坑である。ＳＨ９～11と重複しているが、切り合い関係からそれらよりも新しい。部分的な焼土の存在が見られる。周溝は存在せず、プラン的にも竪穴住居の可能性はない。プランでは確認できなかったが、土層をみると中央部に新しい切り込みがみられ、本遺構は２時期にわたって使用された可能性もある。

遺物出土状況　出土遺物の多くは、上述のように２時期使用されたと考えた場合、新しい時期に伴うものである。土師器には完形品はないが、これは本遺構がかなり削平を受けていたことと関係すると思われる。365 が遺構検出面で出土した他は、覆土から出土したものである。

出土遺物　須恵器杯蓋(362～363)は、器形・法量



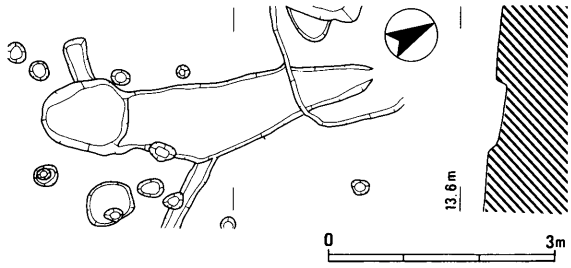
第92図　ＳＫ37実測図（1：40）



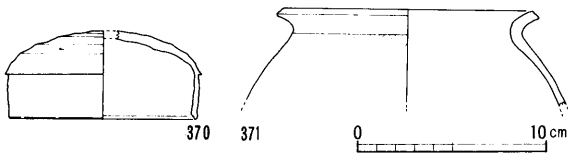
第93図　ＳＫ37出土遺物実測図（1：4）

ともに全く異なるものが出土している。362は径が広く、口縁部と天井部の境界がやや不明瞭なものであるのに対し、363は天井部が丸く、口縁部と天井部の境界が明瞭であり、伴出の杯身にも対応しうるものである。杯身(364～365)は、口縁部の立ち上がりのシャープさがなくなり、底部のロクロケズリも1/2程度になったものである。これらの土器は、TK10型式併行期を中心とした所産であろう。土師器は、甕が出土しただけであるが、S字甕もしくはその系統を引く土器(367・369)と、口縁部が外反し、そのまま丸く収める366・端部に面をもちややつまみ上げ気味になる368がある。ただし、埋土のフルイ掛けで臼玉等は出土していない。

SK38　SK37と重複する長径4.4m×短径1m・検出面からの深さ20cmの長楕円形の土坑で、切り合い関係からSK37よりも古い。出土遺物から、6世紀初頭前後の所産であろう。

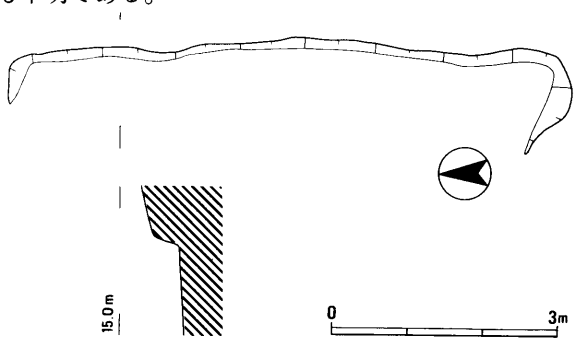


第94図　SK38実測図（1：100）



第95図　SK38出土遺物実測図（1：4）

SZ39　SH26の東隣に所在する、長径7.4m×短径1mの長方形を呈したテラス状の遺構である。周溝もなく、竪穴住居の残痕とは考え難く、その性格はいまひとつ不明である。出土遺物はなく、時期も不明である。



第96図　SZ39実測図（1：100）

③ 溝

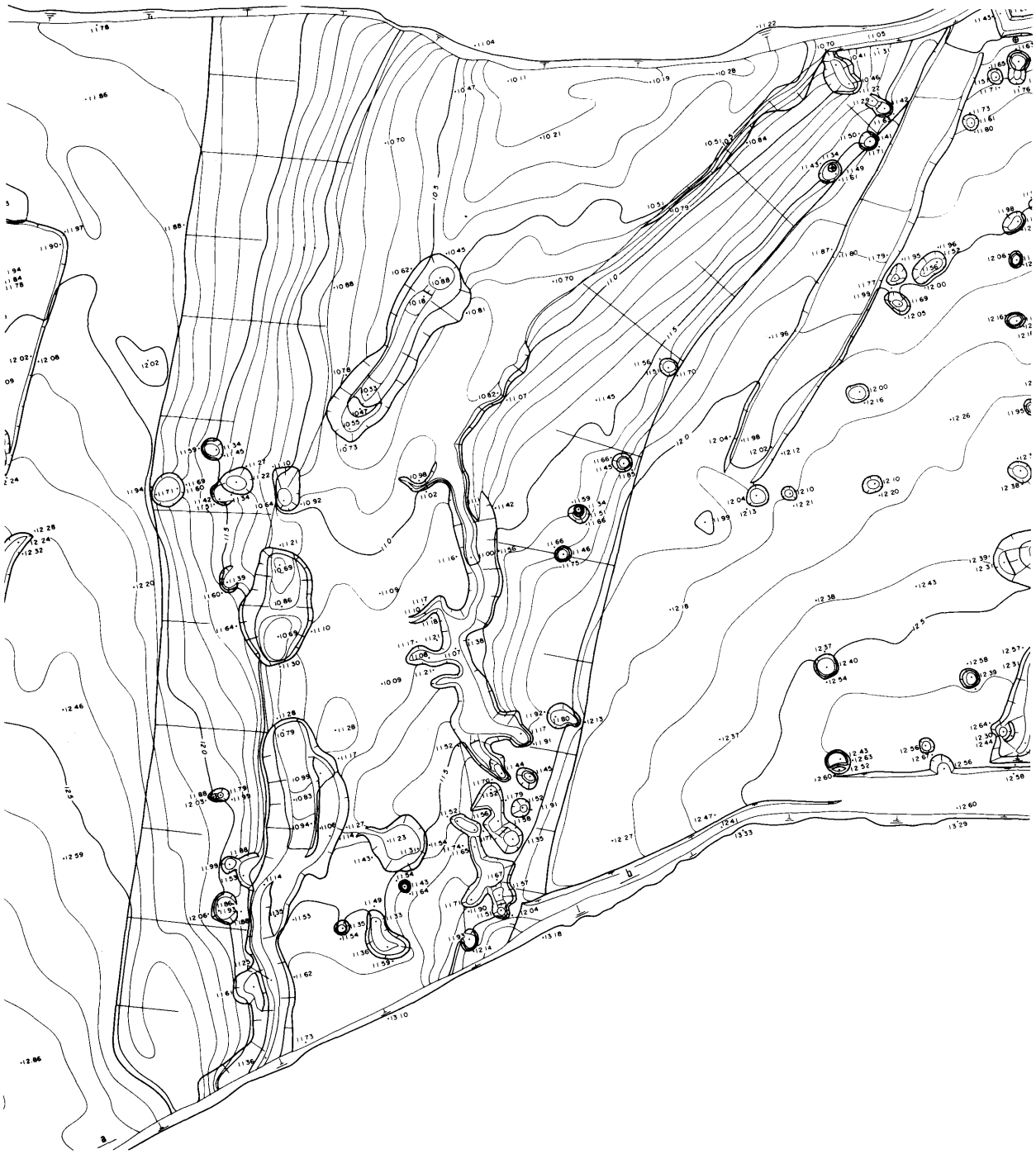
SD40　遺跡を南北に区切る東西方向の大溝で、東から西へ向かって流れる。調査区内では、長さ約13m・幅6.5m～10m・深さ約2mの大きさがあり当然調査区外へも広がるものである。溝の底面は比較的平らであり、その両側はさらに深く掘り込まれていて、小さな溝が底面両側を走っている。このうち左岸側の小溝は、部分的にトンネル状となっていた。底面にところどころ大形のピットが存在したため橋脚状の施設の存在も想定されたが、確証を得るには至っていない。遺存状況から、SD40は、北側の竪穴住居群の西面を回り込んで北側へ向かっているようである。大溝全体は谷筋に相当する部分であるが、人工的な手も加わっているものと思われる。

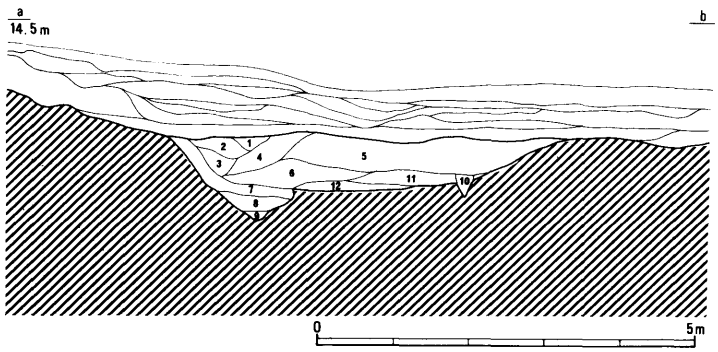
遺物出土状況　最終的に溝の分層を行ってはいるが、雨天による多量の出水や調査期間の制約によって、層位に従った厳密な取り上げは行っていない。ただ、発掘時の所見では、古い時期の遺物も新しい時期の遺物も混在して出土していたようである。それでも、溝の底に貼りつくような状態で出土したものとしては、二重口縁壺(373)や石製品(475)等がある。

出土遺物　大溝からは非常に多くの遺物が出土した。土師器・須恵器といった土器のほか、土製品や石製品も存在する。

372は、土製品である。剝落部分が大きく詳細は不明であるが、人形もしくは獣形を表現したものと思われる。図の上部には両側からの貫通しない刺突があるが、これは胴部と現在は欠損している腕部を小枝等で接続していた痕跡かとも思われる。

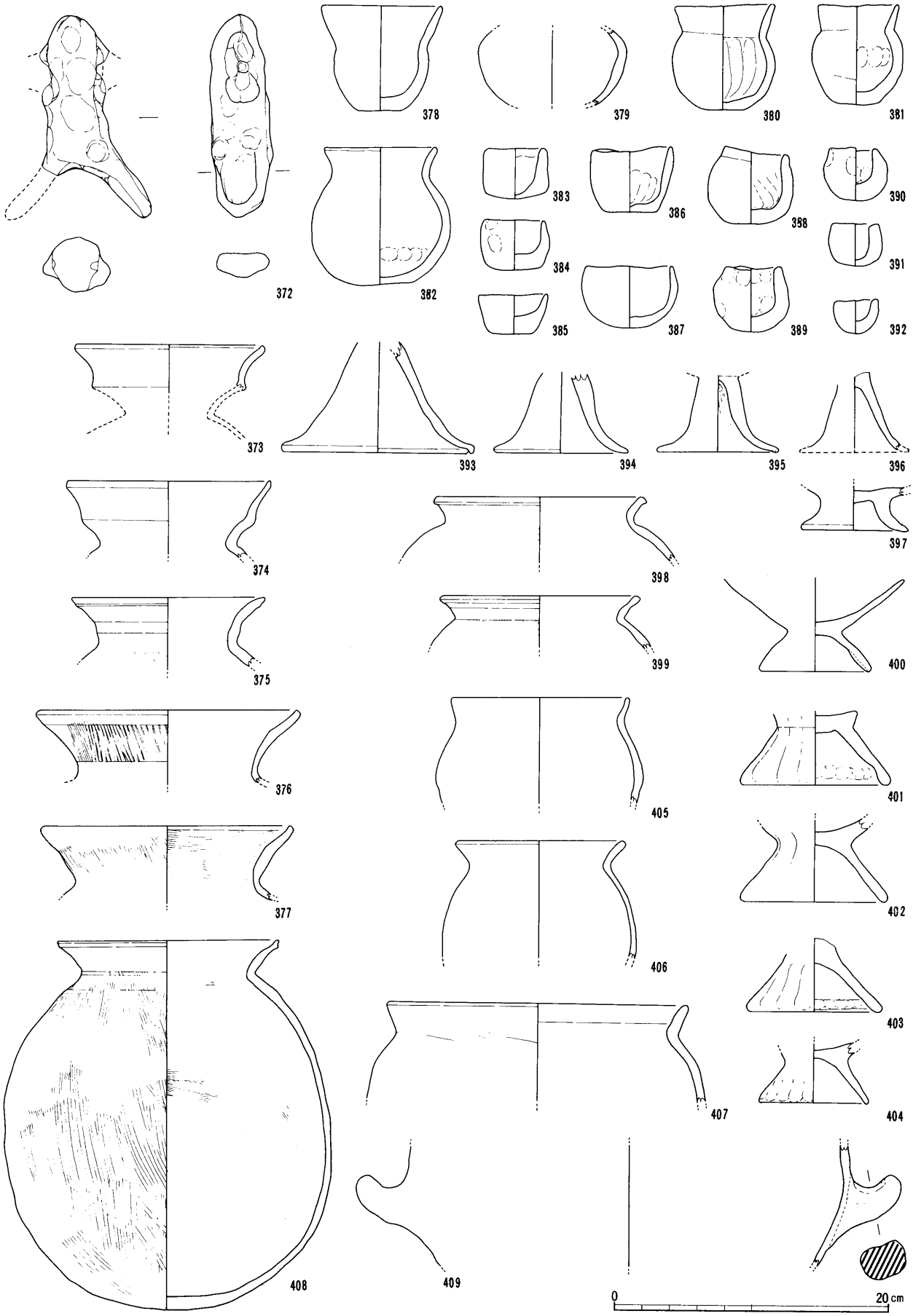
土師器では、二重口縁壺(373～374)・広口壺(375～377)・S字甕(398～404)・甕(405～408)・甑(409)・小形壺(378～382)・高杯(393～396)のほか、手捏ね土器(383～392)の出土量の多さが目立つ。397は、高杯もしくは器台状のものであろう。375は口縁部は単純化しているが、二重口縁壺の系統を引く土器であるかもしれない。378は、一見すると小型丸底壺であるが、底部は平底で、小形壺はいずれも粗製の作りである。S字甕の脚台部内面をみると、端部を内側へ折り返さないものに混じって、折り返すもの(400)も見られる。408は、外面ハケ調整のも



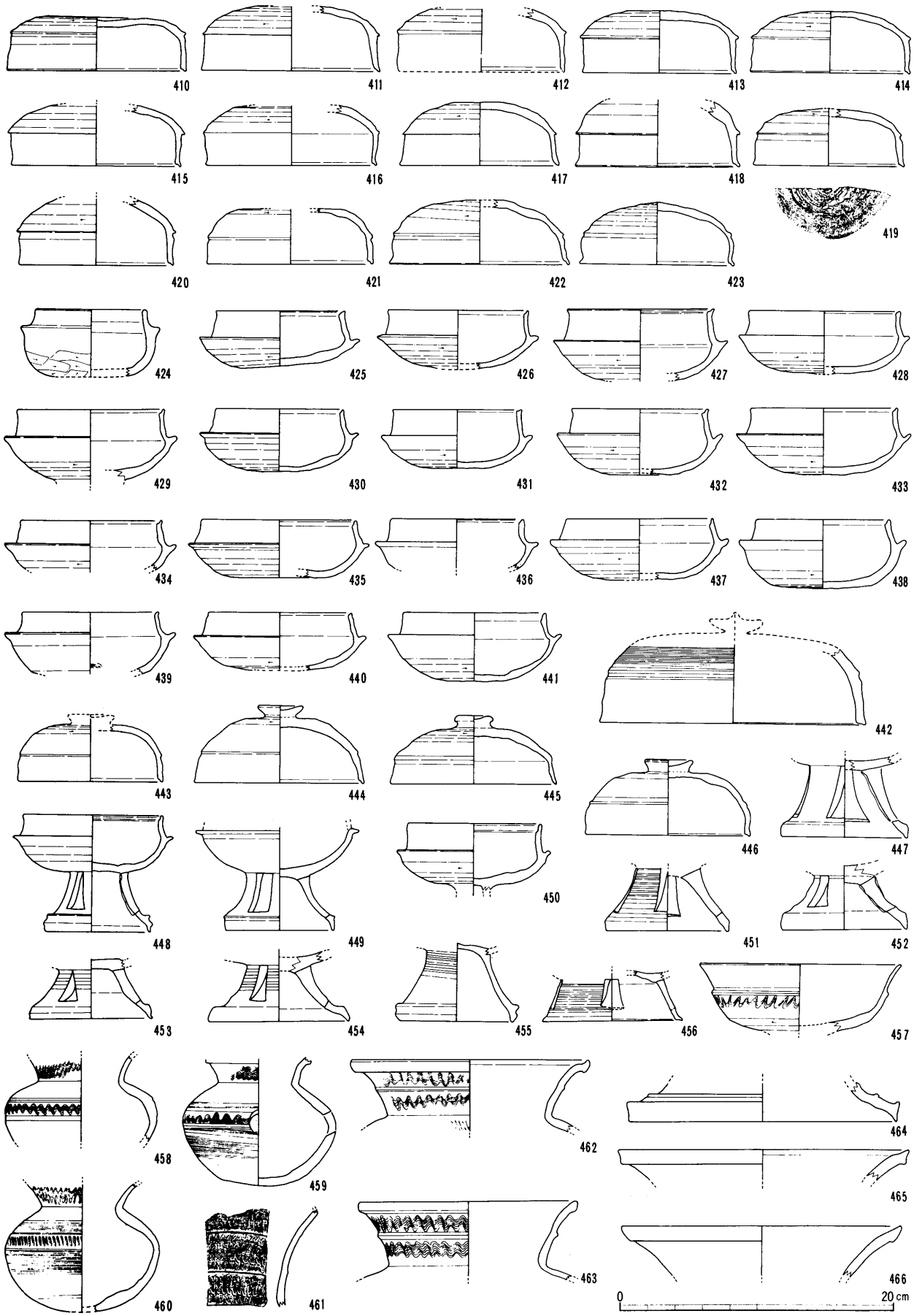


1．暗褐色土(炭混)
2．暗褐色土
3．黒灰褐色土(橙色粒含)
4．黒灰褐色土(炭混)
5．暗褐色土(土器片多数含)
6．褐色土(炭混)
7．にぶい橙色粘質土
8．黄褐色粘質土
9．暗褐色土(土器片多数含)
10．黒灰褐色土
11．暗褐色土(炭混)
12．灰褐色粘質土

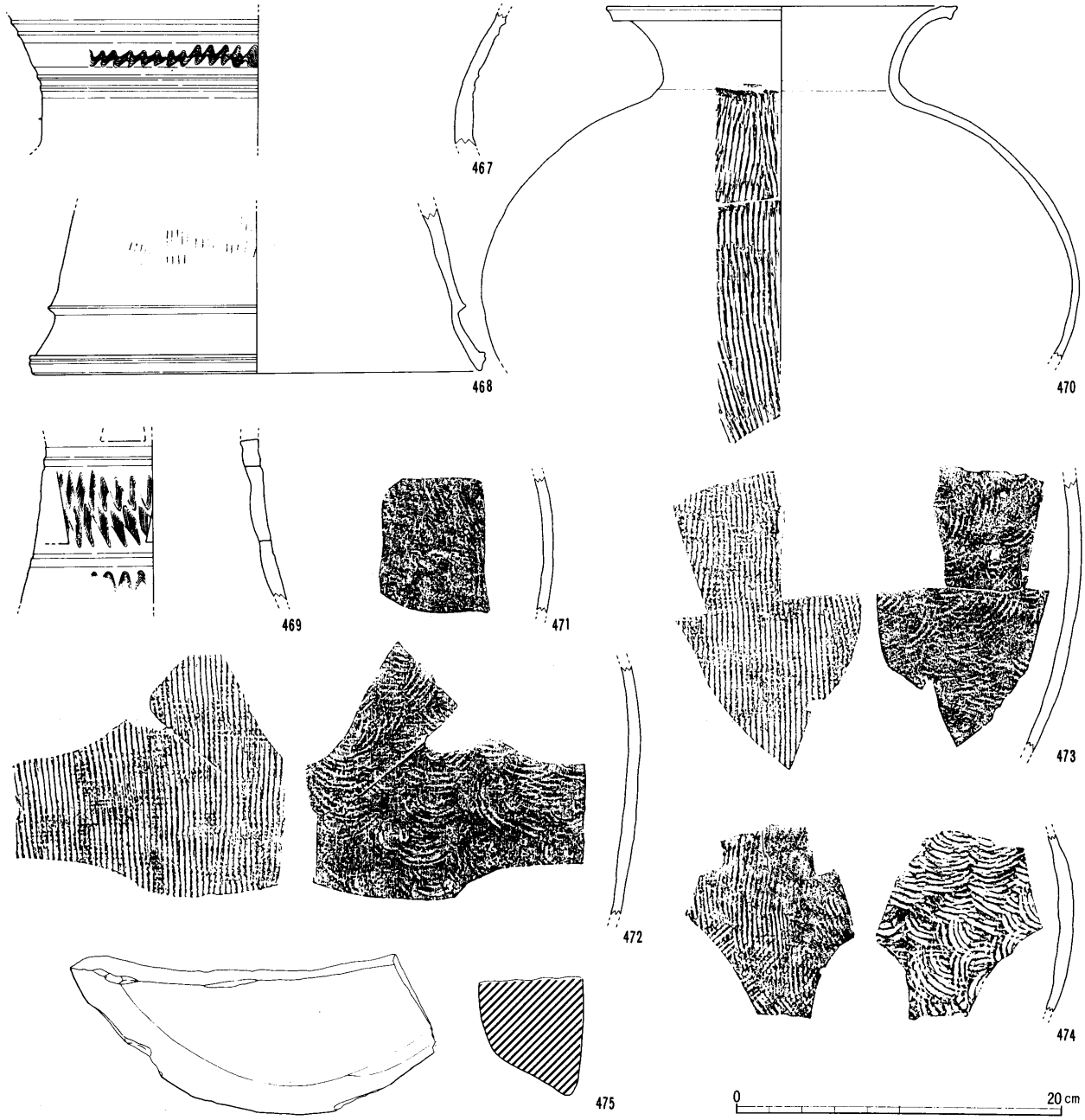
第97図　ＳＤ40実測図（1：100）



第98図　ＳＤ40出土遺物実測図（1：4，372のみ1：2）



第99図　ＳＤ40出土遺物実測図（1：4）



第100図　ＳＤ40出土遺物実測図（1：4）

ので、口縁部外面を上方につまみ上げており、やや新しい時期の所産である可能性が高い。

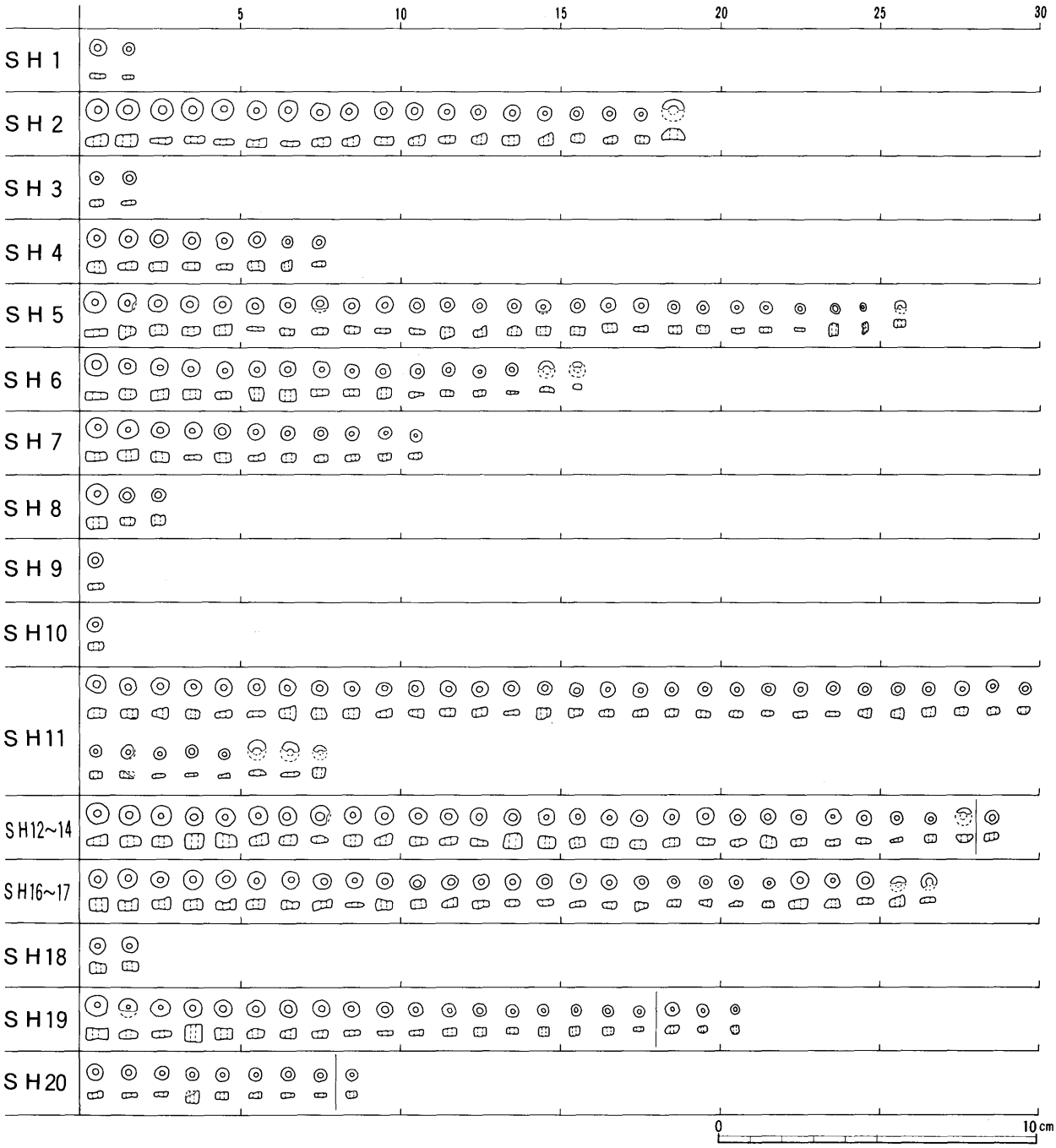
須恵器も多数出土したが、量的中心は杯蓋(410～423)や杯身(424～428.430～441)である。そのほか大形蓋(442)・有蓋高杯及びその蓋(429.443～450)・無蓋高杯(457)・高杯脚部(451～456.464)・鹿(458～461)・壺(462～463)・甕(465～467.470～474)・器台(468～469)がある。このうち杯類をみると、424は、口縁部を丸く収め、体部が深く、底部外面に静止ヘラケズリを施したもので、いわゆる「初期須恵器」の範疇に入るものであろう。こうした器形は、稲生遺跡出土品では他に存在しないが、その他の杯身や杯蓋でも、器形が偏平で口縁部の立ち上がりの非常に大きく、天井部（もしくは底部)外面のロクロケズリが3/4以上に及んでいるものも多い。高杯は、確認できる脚部はすべて短脚一段透かしの高杯である。442は、大形の蓋で、カキメを施す。壺は、口縁端部を肥厚し、口縁外面に２段にわたって波状文を施したものである。甕には、体部内面の叩きあて具痕をスリ消した471・半スリ消しの472～473・そのまま残した474があり、470は風化のため不明である。468は珍しい器形であり、天地逆とな

って口縁部片の可能性も残るものであるが、外面にタタキの痕跡をもつため底部の可能性をより強く考え、器台とした。出土した須恵器は、杯類を指標にするとＴＫ23～47型式併行期を中心とするが、その前後の時期のものも含んでおり、大溝の存続時期を知るうえで貴重な資料である。

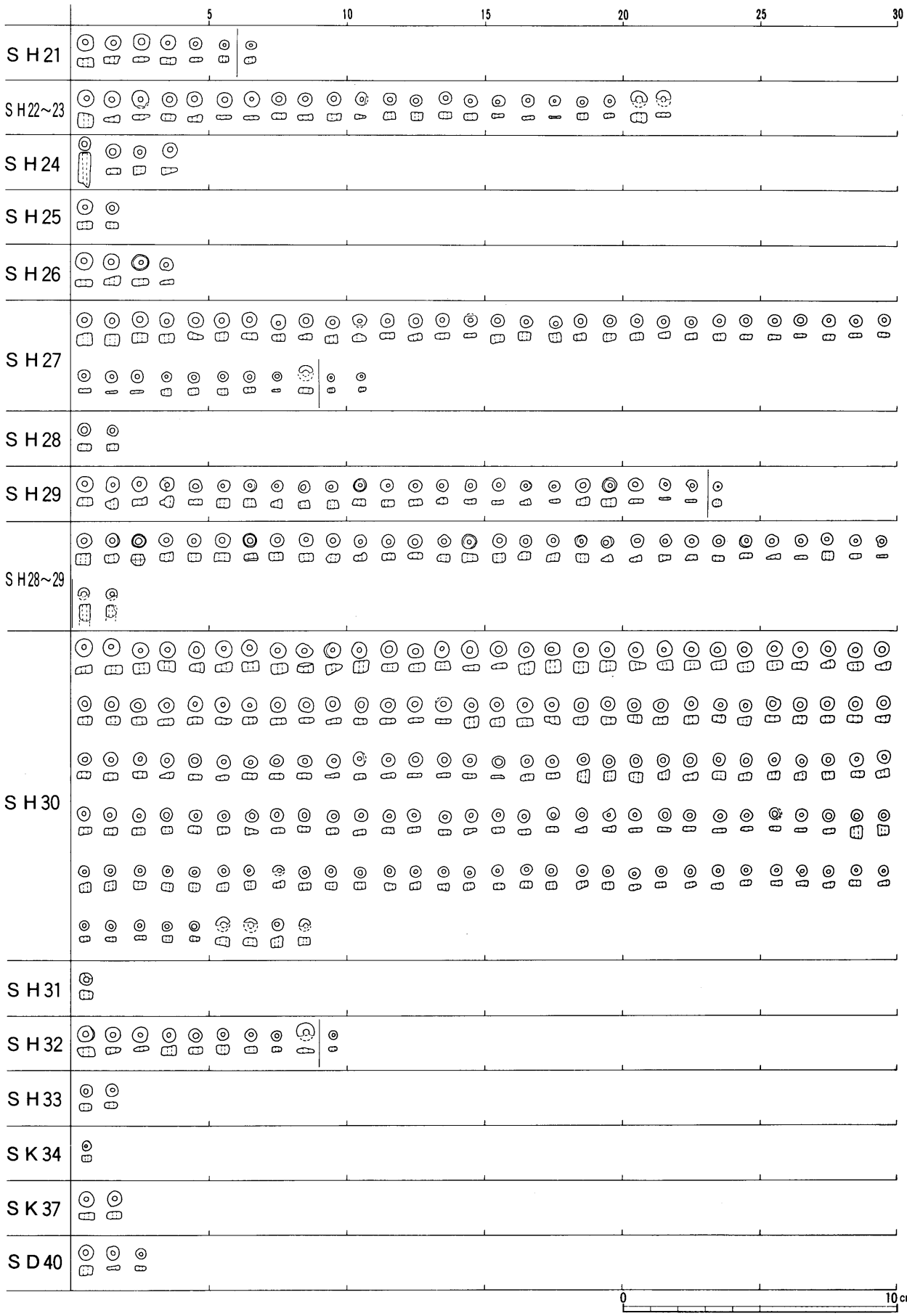
石製品は、欠損しているが、側縁部の形状は円形になるようである。摩擦痕があり、石臼である可能性が高い。

④　竪穴住居・土坑・溝出土の滑石・ガラス製品

竪穴住居と土坑の埋土はすべて水洗いによるフルイ掛けを実施した。その結果、重複部分を除くすべての竪穴住居から滑石製臼玉が、一部竪穴住居からはそれに加えて滑石製管玉（ＳＨ24）・ガラス玉が出土した。大溝（ＳＤ40）からは、３個の臼玉が出土したが、これは現場から持ちかえった土器の洗浄の過程で出土したものであり、土器の中へ入れられていた可能性も残るものである。大溝の埋土につい



第101図　各遺構出土白玉類実測図（縦線より後はガラス小玉）（１：２）



第102図　各遺構出土臼玉類実測図（縦線より後はガラス小玉）（1：2）

ては、土量が膨大なものとなるためフルイ掛けは実施しなかったが、実際に臼玉の出土があることから本来的には大溝にも多数存在していたものと思われる。

各々の遺構からの出土数は別表及び実測図に拠りたいが、竪穴住居からの出土数にはかなりのばらつきがみられる。すなわち、臼玉の出土が100以上の竪穴住居(ＳＨ30)・18個から35個のグループ・10個以下のグループである。規模の大きい住居は重複等がないかぎり基本的には18個から35個のグループに入るが、最も多数の臼玉が出土したＳＨ30は小さい竪穴住居である。また、ガラス玉の出土と臼玉の多寡は必ずしも対応せず、ＳＨ30からはガラス玉の出土はない。

滑石の原石や未製品は、どの遺構からも確認できず、本遺跡は製品のみを他遺跡からの供給に拠っていたものと判断される。

個々の臼玉は、同一竪穴住居内においても、大きさにばらつきがある。すなわち、径の広いものと狭いもの・厚みの厚いものと薄いものである。ＳＨ24出土の管玉は、形態的には臼玉をそのまま長くしたような形状である。ガラス玉は、全般的に臼玉よりもひとまわり小さく、その色調には、青・淡青・緑・緑青色等がみられる。

⑤　包含層出土遺物

当遺跡出土の包含層遺物は、量的にも多く、須恵器を中心として完形品が多いのが特徴である。これらは、表土下の黄土色系の土層及びその上面からの出土が最も多く、次いでその上下の層となる表土及び腐蝕土層と橙色土系の土層が続く。これらのなかには、竪穴住居等の遺構出土遺物の破片と接合したものや、包含層遺物を介して異なった竪穴住居から出土した遺物が接合したりするなど広範囲の接合関係がみられるものも多く存在した。これらは、その破片の残存状況や接合関係を見たうえで遺構出土遺物として戻したものもあるが、個体の大部分が包含層からの出土で、遺構からのものが小破片である場合は、包含層出土遺物として扱った。以下、特徴的な遺物を中心にみていこう。

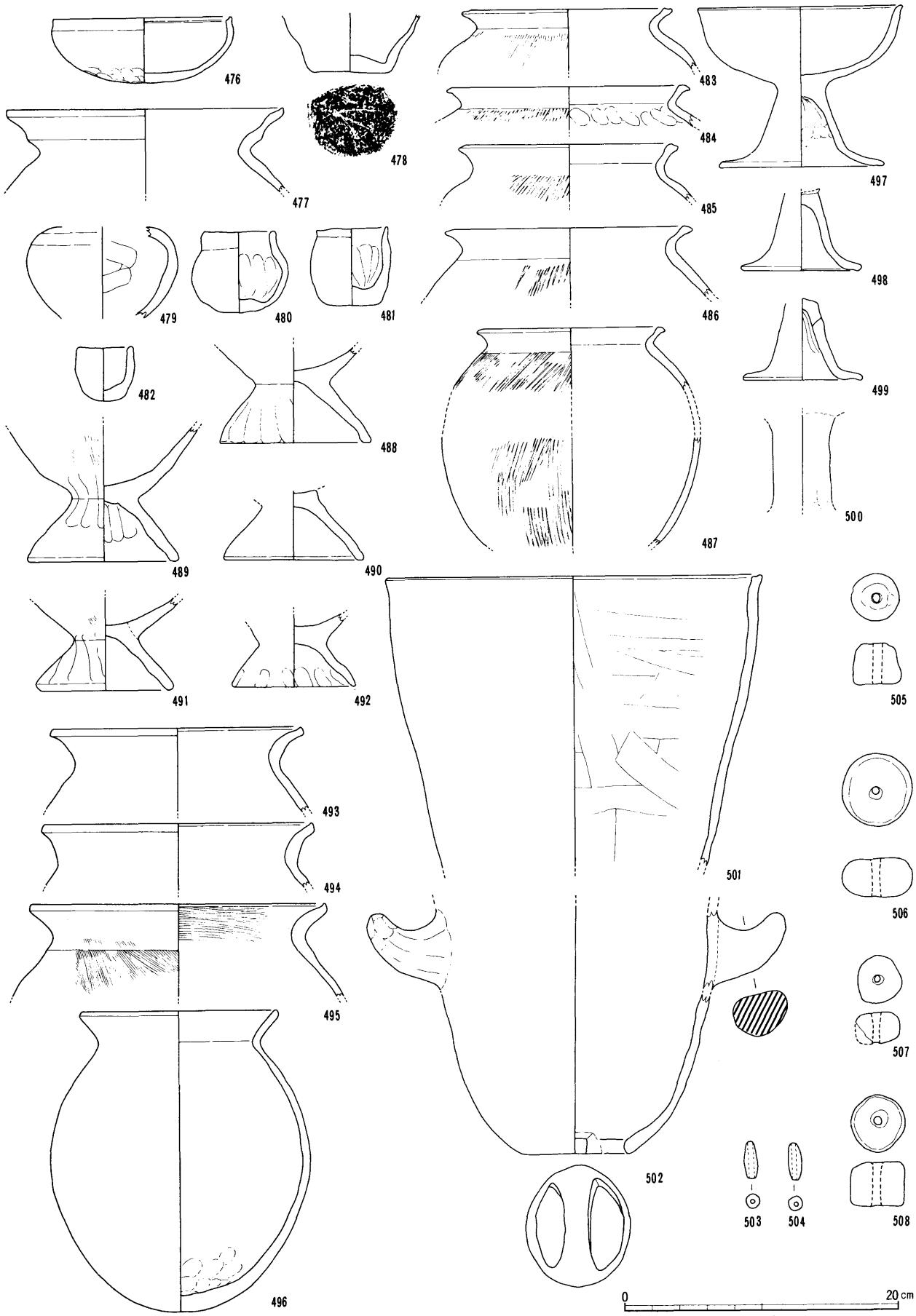
土師器類は、出土量としては多いが、山地性の遺跡のため残りが悪く、図示しえたものは少ない。種類的には竪穴住居や大溝出土のものと基本的に同じか、それよりむしろ少ないめであるが、口縁端部をややつまみ上げ、外面に面をもつ甕(495)や中実の脚柱をもつ高杯(500)等は、奈良時代前後の所産と思われ、本遺跡主要遺構の廃絶後に混入したものである。杯(476)の底部は明らかにオサエによる調整で、ケズリは施していない。

土製品は、いずれも土師質である。503～504は土錘である。紡錘形で、全体に小さい。505～508は紡錘車である。505のみやや台形状になるが、その他は断面長方形もしくは隅丸長方形状となる。

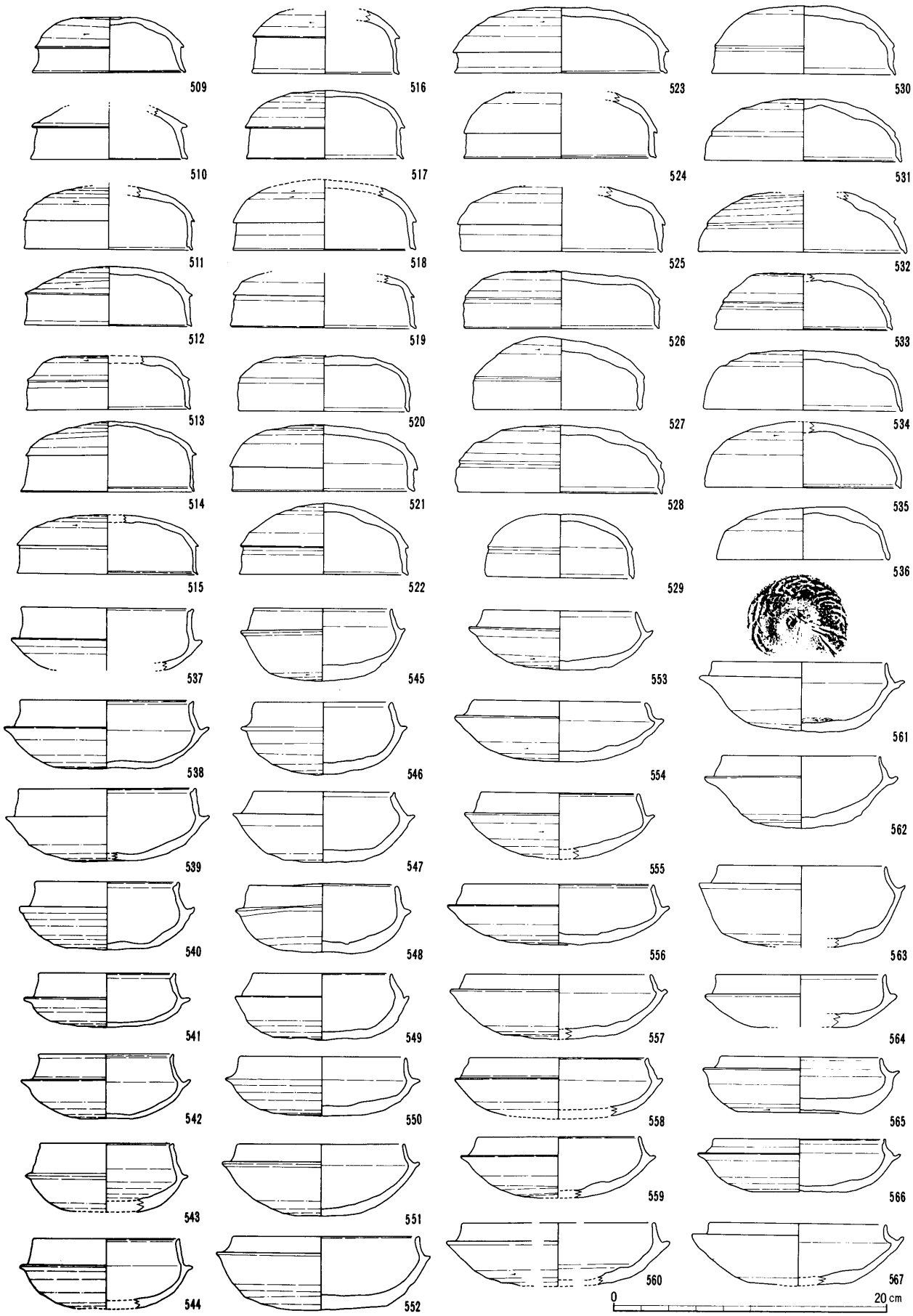
須恵器は、量・種類とも豊富で、資料的にも珍しいものを含んでおり、やや詳しく記述しよう。

杯類(509～567)は、立ち上がりが大きくロクロケズリによって天井(底)部が平らで、全体にシャープな作りのものから、立ち上がりが小さくロクロケズリも天井(底)部全体の1/3以下のものまで幅広く存在しており、量的に中心となる時期はＴＫ23～ＭＴ15型式併行期であるが、少数ながらＴＫ43～ＴＫ209型式に併行する時期のものも含んでいる。このうち杯蓋(509)は、天井部のほぼ全体をロクロケズリし、稜も鋭く口縁部が外開きとなるもので、その他のものとややその作りを異にしている。法量が小さくあるいは杯以外のものの蓋である可能性を残すものである。杯身では、537～541はいずれも口縁部の立ち上がりが非常に大きいものであるが、このうち538は、口縁端部の内傾が僅かである。548は焼け歪みをもった個体である。561は、底部内面に同心円のあて具痕が残るものである。杯および杯蓋の口縁端部の形状をみると、比較的古い個体は内側に段をもつものが一般的であるが、少数ながら段というよりはむしろ端部内面に沈線が入るような個体も存在する(540や542等)。新しい時期のものは、端部を丸くおさめるものが多い。

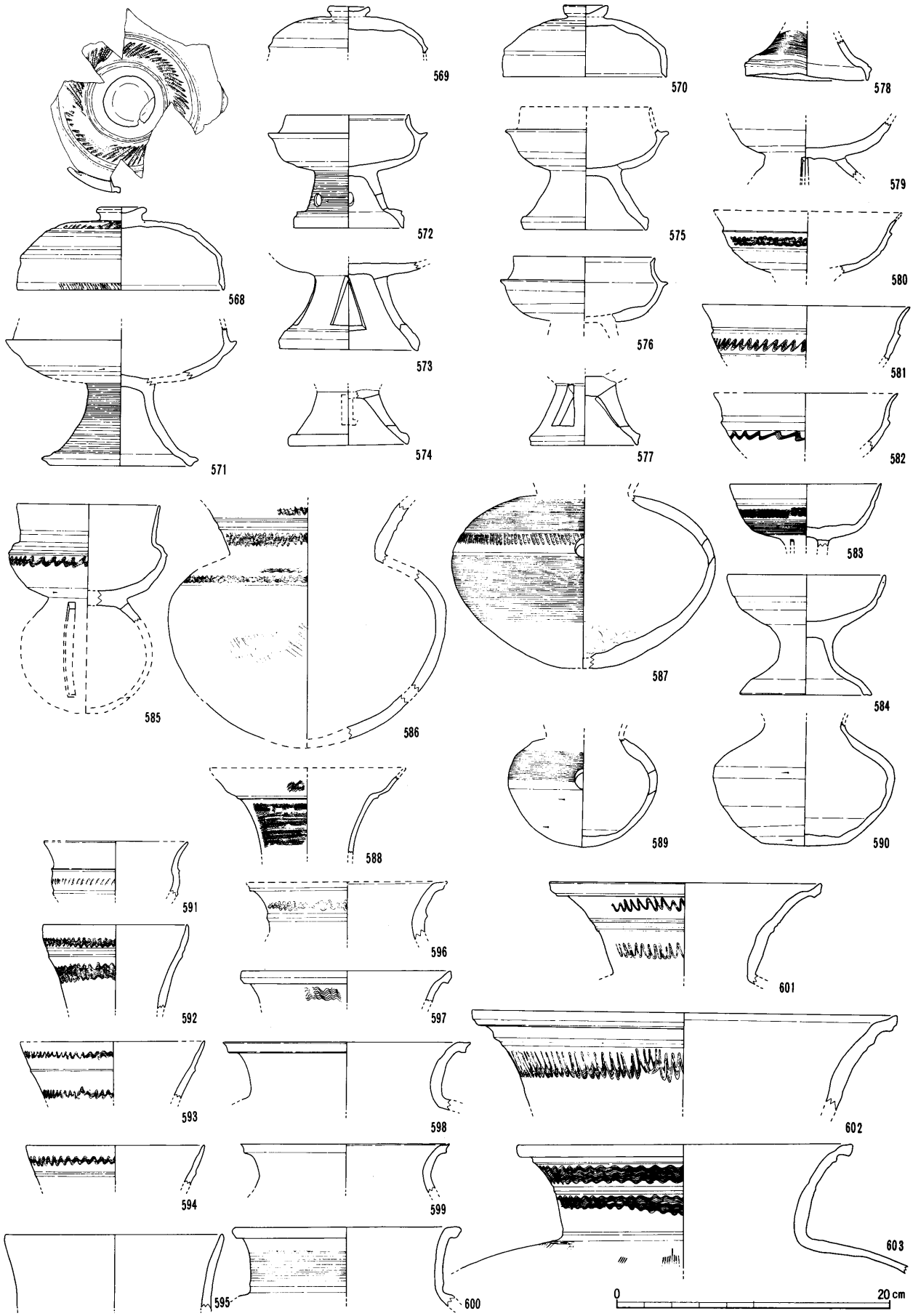
高杯(568～584)は、完形となるものは少ないが、非常に興味深い資料が存在する。まず、有蓋高杯蓋のうち、568は天井部に沈線間に挟まれるかたちで櫛状工具による刺突列の装飾があり、口縁端部外面にも刻み列が存在する。口縁部と天井部を分ける稜は鈍い。脚部をみると、カキメを施して円孔をもつもの(572)・三角透かしのもの(573)・台形透かしの



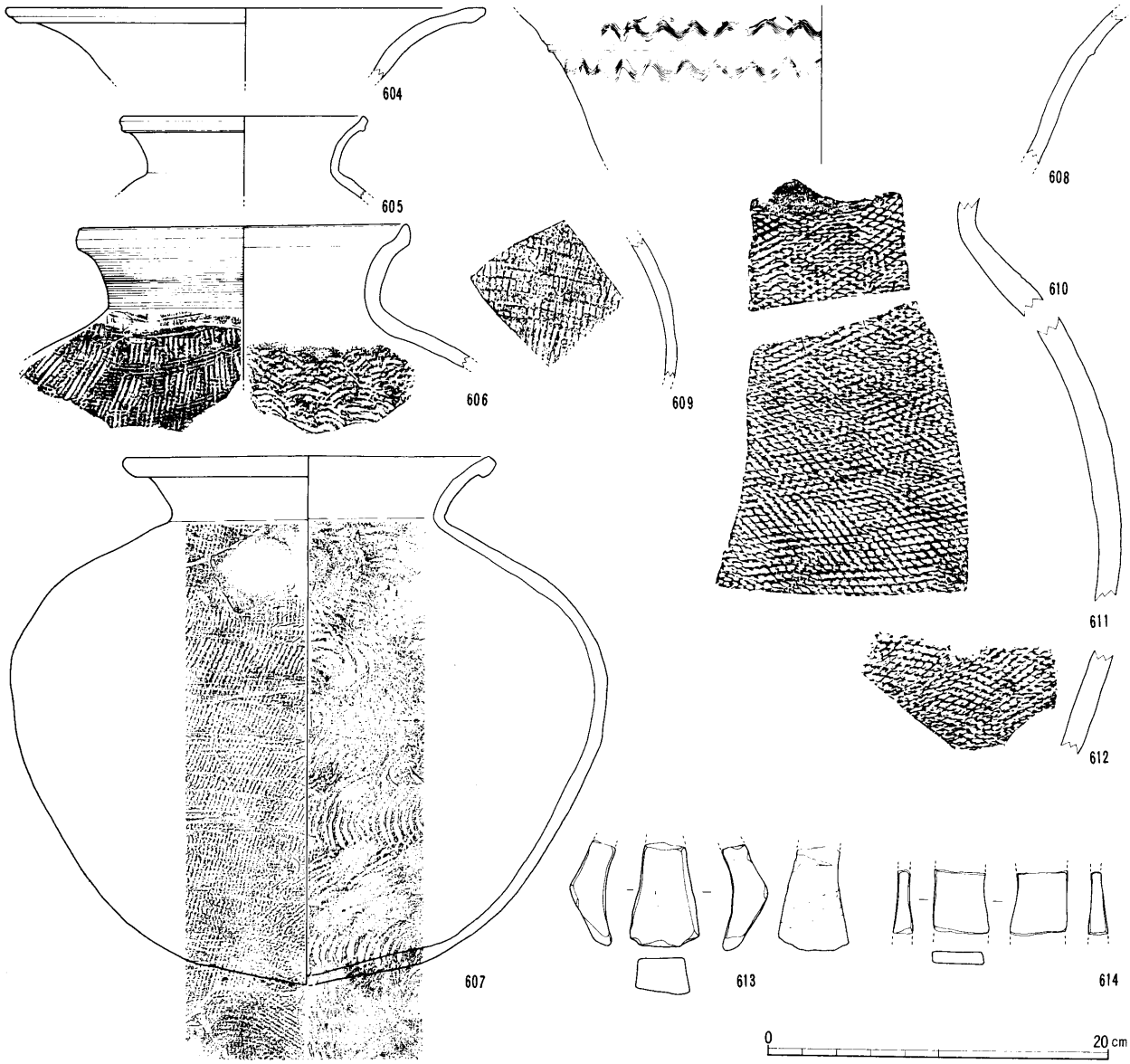
第103図　包含層出土遺物実測図（1：4）



第104図　包含層出土遺物実測図（1：4）



第105図　包含層出土遺物実測図（1：4）



第106図　包含層出土遺物実測図（1：4）

もの(577)・長方形透かしになるらしいもの(579)のほか、破片のため詳細不明であるが方形透かしの下部が横へ突出するもの(574)がみられる。出土した高杯は短脚のものが中心であるが、無蓋高坏(583)はおそらく長脚二段透かしになるものと思われる。584は時期が新しくなって長脚のものが短脚化したものとも思われるが、脚裾は内湾し、端部が面をもってしっかりと立つ個体である。

585は、小壺の下に、方形透かしをもつ台部が連結するものである。上部に乗る小壺は、肩部に2条の沈線をもち、その下に櫛描波状文を施す。台部は大部分が欠損しているが、3方の方形透かしをもつようであり、遺存部の屈曲状況から球形になると推定される。さすれば、透かし入り球形の台部に本来的には土玉が入った「鈴台小壺[5]」であろう。

586～590は、残存状況によっては円孔の見られないものもあるが、本来的には甑になるものと思われる。このうち、586と587はいわゆる「大形甑」である。

591～595は、器種がいまひとつ不明の口縁部を一括した。591 は、小破片のため詳細は不明であるが、体部に刻み列をもった短頸壺で、あるいは脚台が付くかもしれない。

壺・甕類(596～612)では、610 ～611(同一個体の可能性が高い) がまず注目できるものである。口縁部は欠損するが、体部は全体に厚手で、内面はナデ

消し、外面に格子タタキを施すものである。いわゆる「初期須恵器」である可能性がある。その他のもののなかでは603がやや古いと思われるもので、低いながらも口縁直下に断面三角形の突帯が入り、その下に低い隆帯を挟んで２段に櫛描波状文を施したものである。607はほぼ完形品で、口縁部が玉縁化している。

613～614は砥石である。ともに、欠損部分以外の全面に研磨による擦痕が認められる。

⑥　集落成立以前の遺物

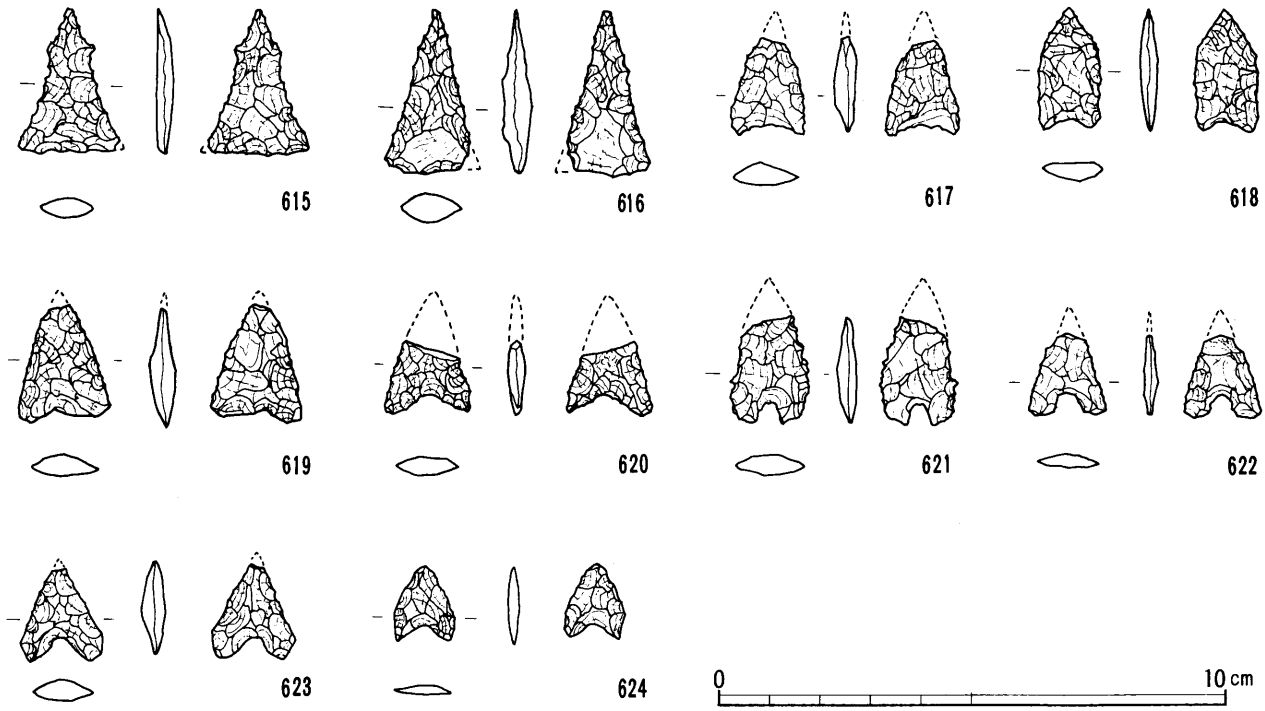
竪穴住居埋土や包含層から出土した遺物のうち、明らかに集落(古墳時代)成立以前の所産である石鏃(615～624)について報告する。

全部で10点出土していてすべてサヌカイト製と思われる。それぞれの明確な時期は限定しえないが、比較的風化は進んでいないようである。形態的にはいずれも茎部をもたない無茎鏃であり、平面形から615と616が平基無茎鏃、617～624が凹基無茎鏃である。

もう少し細かくみると、平基式では、616は平面形が二等辺三角形を呈するのに対し、615は先端部がさらに内側へ屈折するアクセントを有する。

凹基式では、基部が緩やかに内側に弧を描くような617や618、三角状を呈する620や623～624、抉りを入れたような621～622という形態差がみられる。

以上は遺構に伴うものではないが、ＳＨ12やＳＨ17の床面には、性格不明の土坑が存在しており、これらが住居に伴う貯蔵穴等でなく前代(縄文時代)の陥し穴であった可能性もあり、こうした場合、出土石鏃のうちのいくつかはこれに関連していたかもしれない。ただ、形態や大きさにはばらつきも大きく、615や616をはじめ、比較的大きいものを中心に、弥生時代の所産でるある可能性のあるものも存在する。621のように側縁部がギザギザとしたものもあり、全体として、縄文後期以降弥生時代までのいずれかの時期に属する可能性が高い。



第107図　包含層等出土石鏃実測図（2：3）

3．遺構・遺物のまとめと考察

稲生遺跡の調査では、５世紀末から６世紀初頭を中心として若干量のその前後の時期を含む遺構・遺物が出土した。検出した遺構は、竪穴住居33基と大溝１、少数の土坑があり、ピット類は掘立柱建物としてまとまらなかった。竪穴住居とその遺物は、今後の集落構成や竪穴住居単位での土器組成の研究において不可欠の資料となるであろう。大溝の出土遺物や包含層出土の遺物も、須恵器を中心としたまとまった資料であり、今後の北勢地域の当該遺物研究にとって、須恵器窯出現をにらんで貴重な成果を提供したものと思われる。以下、稲生遺跡の調査成果をまとめ、次にそれによって提起される問題について、考察を加えてみたい。

（１）遺構について

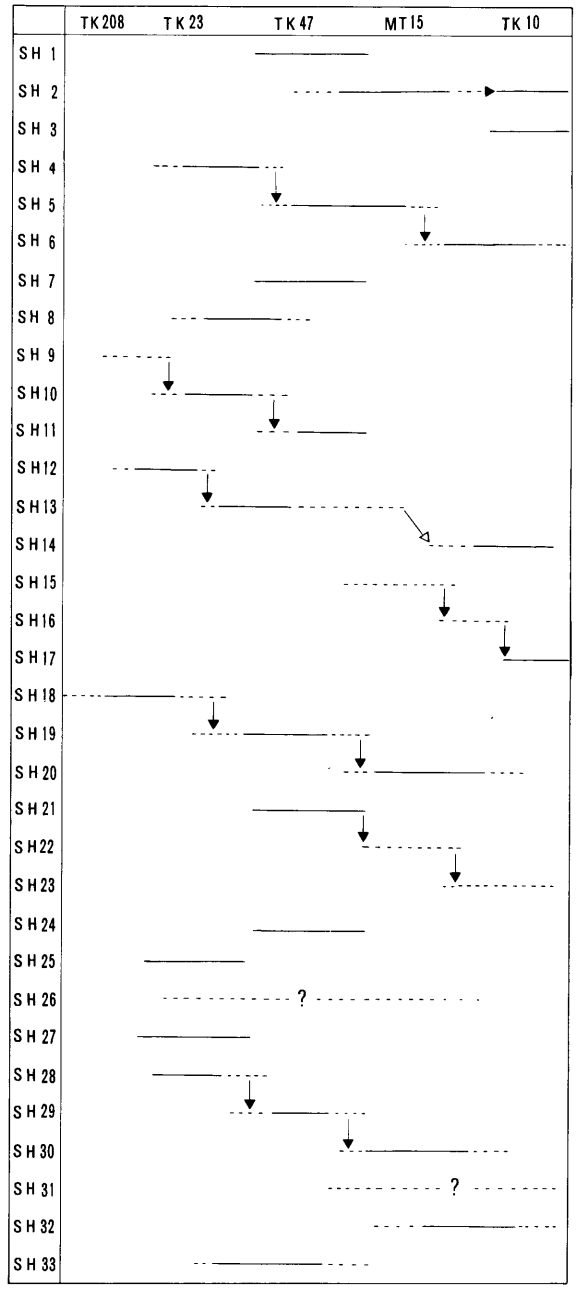
①　住居の存続時期

表に示したのが出土須恵器に基づいた竪穴住居の存続表である（先の事実報告も含め、ここでは大阪・和泉地域での須恵器編年に基づいている。このことは後述）。出土遺物からみると、大形甕が出土したＳＨ18とＳＨ９・ＳＨ12が最も古い竪穴住居と判断されるグループであり、その初現は一部ＴＫ208型式～ＴＫ23型式併行期に遡るものと思われる。その後、それらの建て替えも含めて竪穴住居数は増加していく。集落としての最盛期はＴＫ47型式併行期で、最低でも８基の竪穴住居がその型式の須恵器の出土をみており、さらにあと２～３基が同時期の可能性がある。ただし、同一型式の須恵器の出土のみをもってすべての住居が同時存在とまでは限定できず、須恵器一型式存続時間内での若干の住居の建て替えの可能性も考慮しておく必要がある。その後、ＴＫ10型式併行期までの竪穴住居の存在が確認できる。その段階での確実な竪穴住居数は５基であり、集落としての縮小傾向が認められるが、大溝や包含層からは数は少ないながらもさらに少し新しい須恵器も認められることから、そうした時期の竪穴住居が調査区外（その場合、南北はほぼ集落の端を押さえている）に存在していた可能性も残る。

②　竪穴住居の存在形態について

すでに『遺構の概要』や『各節』で詳説したが、稲生遺跡の竪穴住居の存在形態には、単独で存在するもの（ａ類）・隣接地へ切り合いを重ねていくもの（ｂ類）・同一地点での建て替え（ｃ類）の３類型が認められる。

このうち、まずｃ類についてみてみると、出土遺物からも個々の存続には連続性があるようであり、



竪穴式住居時期別存続表

同一の居住集団による建て替えと判断してよいであろう。個々に連続性があるのか、あるいは偶然の累積によるものか、存在形態を云々するには最も不安定要素の強いｂ類についても、ＳＨ４とＳＨ５は遺物のうえでも連続性が認められる。また、単独で存在するａ類のなかでも、ＳＨ２は建て替えとはいえないまでも住居を拡張して比較的長期間その住居に居住していたものと思われる。また、ＳＨ32とＳＨ33も、重複関係こそないものの大溝南側の遺構の希薄な部分で隣接する２基の竪穴住居であり、時期的にも前後関係とみられることから同一の居住集団によるものの可能性も高い。

調査区内は、竪穴住居による遺構密度は高いものの、明確な遺構のない空閑地も存在する。そうした地点に住居設営を展開することなく、同一地点もしくは隣接地点への重複を重ねることは、宅地の同一地点での固定化と評価できるものであろう。こういった例は、山田猛氏によると、畿内およびその周辺では７世紀初頭に一般化すると指摘されている[6]が、稲生遺跡においては、狭い傾斜地に多数の竪穴住居が集中するという立地上の特徴や単独で存在する竪穴住居の存在もあるものの、総じてみれば集落形成の当初（５世紀後半）から宅地としての固定化が認められる。このことを、各住居造営集団（単位集団）が当初から宅地の永続的占有（＝私有）意識を自律的に達成していた結果とみるか、住居造営地の狭小さに起因する集団内部での集団規制的なものとみるか、あるいはその両方が合わさったものとみるかは評価の分かれるところである。しかし、稲生遺跡とは同じ中ノ川流域に属する遺跡である伊奈富遺跡[7]（６世紀初頭前後）や稲生東遺跡[8]（６世紀中葉）でも集落形成の当初から竪穴住居の重複が認められることから、稲生遺跡のような状況は、当地においてはかなり早い段階から顕在化していた可能性が高いものと思われる。

単独に存在する竪穴住居は、ＳＨ27と長期間使用されたと思われるＳＨ２を除き、規模の小さいものが中心で、集落形成の当初には存在していない。従って、これらは、当初存在した各住居造営集団が拡大する過程で新たに分かれて造られていったものと思われる。

③　竪穴住居について

ａ．構造

竪穴住居のプランはいずれもほぼ正方形を基調としている。その構築にあたっては、①．地面を掘削してプランを決め、②．周囲に周溝と必要ならば排水溝を掘り、③．粘質土による貼床を施し、④．竈を構築する、という手順をとっている（ただし、どの段階で柱を据えたかは遺構から判断できない）。

ｂ．竈

重複等で遺存状況の悪い竪穴住居を除き、すべての住居跡で竈の敷設が認められる。最も古い竪穴住居の一群であるＳＨ18・９・12についても、重複を受けているため明瞭な形での竈の遺存はかったが、壁際や周溝埋土の焼土の存在から竈が存在したであろうことは推察できる。しかも、住居跡中央部での炉の存在を示す焼土の痕跡もない。したがって、稲生遺跡においては集落形成の当初から竪穴住居での竈の採用を認めてよいであろう。

竈の構造は、いずれも本体が住居壁内側に接して置かれ、煙道部のみ住居外へ出るものである（煙道部が削平のため飛ばされている住居跡も多い）。煙道部が遺存していたものはＳＨ24・26・27で、遺存状況は悪かったがＳＨ17でも遺構検出時においては確実に煙道部を確認することができた。煙道部の長さは、住居壁から60～100cmである。最も遺存状況のよかったＳＨ27では、住居壁にトンネルを穿って竈の煙を外へ排出する状況が明らかになったが、本来的には他の住居においても同様の構造を取っていたものと思われる。竈袖部は粘土もしくは粘質土のみを用いて構築され、石による補強はない。竈の方位は、北もしくは東側である。

ｃ．遺物出土状況

住居床面及び埋土での遺物の残存をみると、多量の遺物が出土したＳＨ５・12・30などは床面から遊離した遺物が多く、廃絶時もしくは埋没過程での遺物の廃棄を想定した。床面直上からの出土遺物が認められたのは、比較的出土量の少ない住居に多く、ＳＨ２・５等は廃絶時にそれまで使用していた一部遺物をそのまま残していったものとも考えられる。

住居内での何らかの祭祀行為に関連すると思われる遺物の遺存については後述する。

番号	規模 東西×南北(m)	規模 面積(m²)	竈	切り合い関係	出土須恵器の年代	白玉	ガラス玉	備考
1	3.7×3.7	13.7	東	単独	TK47	2		
2	5.6×5.8	32.5	北	単独	TK47～TK10	19		住居改修か？鉄製鎌出土
3	3.5×3.0	10.5	東	単独	TK10（上面）	2		
4	4.4×4.3	18.9	北	4→5→6	TK23	8		不明鉄製品出土
5	5.7×5.7	32.5	東		TK47～MT15	26		
6	4.6×4.6	21.2	北東		TK10	16		
7	5.0×4.6	23.0	北東	単独	TK47	11		
8	4.1×4.0	16.4	北東	単独	TK23～TK47	3		砥石出土
9	4.5×4.3	19.4	東	9→10→11	—	10		
10	不明		北？		TK23	1		
11	4.1×4.0	16.4	北		TK47	38		滑石製勾玉・紡錘車出土
12	5以上×5.5	27.5以上	北？	12→13→14	TK208～TK23	28	1	
13	4.5×5.0	22.5	東？		TK23			
14	5前後		？		MT15～TK10（古いものも混じる）			
15	4.7×5.1	24.0	北	15→16→17	MT15？（古いものも混じる）			
16	4.1×4.0	16.4	北		—	27		
17	4.7以上×4.5	21.2以上	北		TK10			
18	5.5×5.9	32.5	北	18→19→20	TK208～TK23	2		
19	3.5以上×4.5	17.2以上	北		—	18	3	
20	4.5×4.7	21.2	北		TK47～MT15	8	1	
21	2.5以上×5.0		？	21→22→23	TK47	6	1	おそらく東竈か？砥石出土
22	4.8×5.0	24.0	北		—	22		
23	4.5×4.9	22.1	北		TK10？			
24	3.5×3.2	11.2	東	単独	TK47	4		
25	1.8以上×4.1		？	27→25	TK23	2		
26	2.8以上×3.9		東	単独	—	4		
27	5.2×5.2	27.0	東	27→25	TK23	39	2	煙出が住居壁からトンネル状に外へ抜ける。砥石・鉄製工具？出土
28	2.3以上×4.0		東	28→29→30 31は古いか？	—	2		
29	3.7×5.5	20.4	北		TK47	23	1	SH28・29で別に白玉32
30	3以上×3.6		東		MT15	159		
31	3以上×4.0		北		—	1		
32	4.1×4.5	18.5	？	単独	MT15～TK10	9	1	
33	3.3×3.9	12.9	？	単独	TK47	2		

竪穴住居一覧

④ その他

平野部に所在する遺跡と比べて溝や土坑の数が相対的に少ないめに感じるが、溝の場合は丘陵斜面のため雨水等は竪穴住居内に溜まった分以外はとくに溝を掘削せずとも地形に沿って下方へ排出されていくことがその要因としてあげられるし、土坑の場合は調査範囲の問題（調査区外に所在する可能性）と集落で不要となった遺物は大溝（ＳＤ40）に投棄されていたためと思われる。

（２）稲生遺跡にみる祭祀の状況

稲生遺跡の各竪穴住居からは、フルイ掛けの結果総数524個にも及ぶ滑石製臼玉（あとガラス小玉10個が存在する）が出土し、また調査の過程でも滑石製の双孔円板や勾玉が出土した。滑石製の遺物は、これも稲生遺跡の竪穴住居や大溝から広く出土している手捏ね土器と並び、従前から祭祀に関わる遺物とされてきたものである。こうした滑石製遺物の竪穴住居跡からの出土は、稲生遺跡と同様に住居跡埋土フルイ掛け調査を実施した亀山市大鼻遺跡[9]においても多くの住居跡で認められてきたものである。

これらを含め、稲生遺跡で確認できた祭祀に関わると思われる事象を箇条書きにして示せば以下のとおりである。

1．ほぼ全ての竪穴住居からの滑石製臼玉（一部竪穴住居はさらにガラス玉）及び手捏ね土器の出土（ただし臼玉類は埋土）。
2．特定の竪穴住居からの滑石製勾玉及び双孔円板の出土。
3．ＳＨ５の竈支柱石上へ須恵器杯身が伏せ置かれていこと。
4．ＳＨ７の竈前面へ須恵器杯蓋が倒立していたこと。
5．ＳＨ27では、住居の残存がよいわりには竈の袖が全く遺存しておらず、意図的に破壊された可能性があること。
6．大溝からの滑石製臼玉及び手捏ね土器、獣形（あるいは人形）土製品の出土。

以上が発掘により明らかになったのであるが（４のみは必ずしも祭祀に対応するかどうかは現状では不明）、それ以外の確認事項として、やや消極的な論法ながら

7．少なくとも調査範囲内においては、群馬県子持村の黒井峯遺跡で確認されたような特定の場所で祭祀行為を行ったと思われる痕跡[10]は発見されなかったこと。

があげられる。

このうち、稲生遺跡で確認できる祭祀は、大きくいうと、

ａ－住居跡に伴う祭祀（１．２から）
ｂ－ａに含まれるのであるが、さらに限定して竈に係わる祭祀（３～５から）

の二つが想定され、集落全体でなされたと思われる祭祀は未確認である。大溝からの「祭祀遺物」の出土については、それが祭祀行為後の当該遺物の大溝への投棄によるものか、大溝で行われた祭祀によるものかは出土状況があまりいい状態でないこともあって不明である。以下、稲生遺跡での祭祀に係わると判断される事象のうち、住居内で行われた祭祀行為について、他遺跡の例もふれつつその一端にふれてみたい。

① 住居跡出土の臼玉

稲生遺跡の竪穴住居から出土した臼玉はすべて埋土のフルイ掛けによるものであり原位置を保っていたものは存在しない。そのため、厳密にはそれが本来の竪穴住居に伴うものなのか、後の混入によるものかは確定できない。しかし、同じく埋土フルイ掛けを実施した土坑にはほとんど臼玉の出土をみない（ＳＫ34とＳＫ37からはごく少量の臼玉の出土があるが、このうちＳＫ34は竪穴住居の可能性も残すものである）ことから、稲生遺跡の竪穴住居出土の臼玉は、本来それに伴っていたと考えられる。

現在のところ、三重県下において、臼玉をはじめとする滑石製品が出土する竪穴住居は５世紀後半から６世紀代の古墳時代後期の時期を中心とする（一部奈良時代まで残るか）。臼玉は非常に小さい遺物であり、いくらかたまって出土しても西日本のような粘質系の埋土の多い地域ではよほど状況が良くないと発掘時に原位置を捉えることは難しい。そのため、埋土フルイ掛けを実施していない場合には、仮に臼玉が存在していても発見されず、その住居からの臼玉の出土はなしということにされてきた可能性

が高い。実際、多数の臼玉が出土した稲生遺跡や大鼻遺跡においても、フルイ掛けを実施していなければ、竪穴住居からの臼玉の出土は確認されなかったであろう。稲生遺跡も大鼻遺跡も取り立てて特殊な遺跡ということはなく、規模の大小や細かい遺跡の性格差はあるにせよ通常の集落遺跡の枠内で捉えられるものである。また、極めて状況の良い場合には稲生遺跡や大鼻遺跡以外の遺跡（これとて特別な遺跡ではない）で臼玉が確認できたものもあり、これらを勘案すると、少なくとも当地域の当該時期（5世紀後半から6世紀前半）の竪穴住居においては、滑石製品のうちの臼玉については本来的に保持していたとみるのが妥当であろう。

では、竪穴住居から出土する臼玉はどのようにして使用に供されていたのであろうか。幸運にも臼玉の出土状態を知ることができる興味深いいくつかの例を県外例も交えてみてみよう。

1．鈴鹿市伊奈富遺跡[11]　稲生遺跡から約500ｍ東側に所在する遺跡で、稲生遺跡と同時期の古墳時代後期の竪穴住居5基が発掘された。このうち、1号住居跡の北隅の床面上の15×40㎝の範囲から臼玉10個が出土し、これを囲む40×70㎝の範囲で炭細片が発見された。臼玉と炭を一連のものと捉えた場合、火に係わる行為も想定される。

2．上野市北堀池遺跡[12]　上野盆地中央部の木津川西岸に立地する縄文時代から中世に至る複合遺跡で古墳時代のものとしては54基の竪穴住居や水田・大溝等が発見された。このうち、古墳時代後期の竪穴住居であるＳＢ3024の床面からは、臼玉20数個（概報所収の写真から）が数珠つなぎの状態で発見された。またこの時期は、ＳＢ3024ほど状況は良くないものの、他の竪穴住居からの玉類の出土もめだっている。

3．京都府舞鶴市桑飼上遺跡[13]　由良川右岸に位置する遺跡で、古墳時代後期のすべての竪穴住居で臼玉の出土がみられ、一部住居からは滑石製の双孔円板や勾玉も出土している。このうち、竪穴住居1からは、臼玉23個が床面上からかたまった状態で出土している。

遺跡から出土する滑石製品のうち、特に臼玉については、土器等の容器類に入れられて出土する場合・他の滑石製品や土器と共に溝や敷石や地面にかたまって置かれたかたちで出土する場合・同じく土器等と共に土坑から埋納された状態で出土する場合（この場合、それらのうちのいくつかは土壙である可能性もある）といった出土状況を示すことが多い。住居跡から出土する場合についていえば、少なくとも三重県およびその周辺の遺跡では、土器等に入れられて出土するというよりは、床面上にかたまって（あるいは糸等で数珠繋ぎにして）置いたことが多かったようである。ただし、竪穴住居出土例以外では、土器等の容器に入れられて出土することも多々あり、この限りではない。

②　竈に係わる祭祀

竈に対しての祭祀的行為は、本遺跡の場合、特定の住居で竈内もしくは竈内の支柱石上に土器を伏せるというかたちをとる。また、比較的遺存状況の良い住居跡でも、竈が完存している例は無く、せいぜい袖部下部が残るのみであることから、完全ではないにしても、住居廃絶時に竈が破壊された可能性も存在する。ただし、基本的に支柱石が意図的に抜き去られているという事例は確認できなかった。

ＳＨ5の竈では、支柱石の上を覆うように須恵器杯身が伏せられた状況で置かれていた。これは、寺沢知子氏によって明らかにされた住居廃絶時の竈の機能を停止する時の「杯伏せ型」の竈への祭祀的行為[14]と考えることができる。こうした事例が確認される住居は、稲生遺跡ではＳＨ5のみである。

ＳＨ7では、竈焚き口付近に須恵器杯蓋が内面を上にしておかれていた。ＳＨ7は、出土遺物は少なく、住居廃絶時にほとんどのまともな遺物は持ち出されたと考えられるが、この土器のみは完形で残されており、支柱石を覆うというかたちは取らないものの、竈廃絶時の何らかの祭祀的行為に係わる可能性が高いものと思われる。

また、竈の破壊に係わるもの[15]としては、住居同士の重複もなく、煙出しも良好に遺存したＳＨ27において、竈の袖部が全く残存していなかったことを代表としてあげることとする。ここでは、支脚と考えられる台付甕の脚台部3個は重ねた状況でそのまま出土していることから、竈本体の破壊を意図して袖部が取り払われたものと思われる。それ以外の住

居についても同様のことが行われた可能性もあるが、住居同士の重複や遺存状況の制約から、確定的なことはいえない。

県内では、以上のような例のうち、ＳＨ５と類似の事例として、名張市壇・柏原遺跡竪穴住居12[16]がある。ここでは、竈内に大小の土師器高杯が伏せられた状態で出土した事例がある（なお、この住居跡からは、滑石製双孔円板１個のほか土師器高杯30数個が出土している）。ここでは、支柱石は存在しておらず、報告では伏せられた高杯自体が支脚の役割があったものと考えられているが、寺沢氏によると支脚を抜き去った後に杯を伏せた例も存在することを指摘されており、本例もそれに含まれるものと思われる。

③　若干の考察

以上のように、竈での祭祀的行為も含め、住居内祭祀についての実態の一端が明らかになったことと思う。とくに、住居跡出土の臼玉については、５世紀～６世紀については、フルイ掛け調査の実施状況や稲生・大鼻両遺跡の状況等から、それを住居内で祭祀に供されることが当地域においてはある程度一般化できるものと考えた。

臼玉を中心とする滑石製品の出土が、具体的にどのような意図をもって祭祀行為に供されたかは定かではない。それ以前に、これが住居構築に伴うのか廃絶に伴うのかあるいは住居での生活途中に伴うのかも不明である。ただ、出土位置が確認できるものが貼り床下とかでなく床面上であり、それがそのまま遺存していることは、少なくともそうした場合については、住居廃絶時に何らかの行為が行われたことを暗示している。ただし住居跡出土の臼玉のすべてではないであろう。一般論としていえば、滑石製品はカミへの供献品としての役割が付与されていることから、竈やあるいは「イエの神」といったものに対しての供献品としての意味が与えられていた場合もあったかと推察されるのみである。

ところで、そうした祭祀行為は、量的な多寡はともかく、基本的にほとんどの住居跡で認められるものであった（百個を超える出土量をもつ住居もあるが、伊奈富遺跡や北堀池遺跡の事例からも10～20個程度をひと単位としていたことが多かったものと思われる）。つまり、各竪穴住居毎での「祭祀」である。これは、稲生遺跡においては、基本的にすべての住居跡に竈が存在するという事実や、同一地点での建て替えが多く、宅地の固定化がみられるということとともに、衣・食・住のみならず、祭祀単位においても竪穴住居毎の独立性が高かったものと評価することができよう。このことは、少なくとも古墳時代後期の鈴鹿川流域では、竪穴住居毎という小さな単位が、たんに消費単位というだけではなくそれ以上の生活上の単位として、階層分化が進行していたという解釈も想定しうるのではなかろうか。ただし、それが歴史理論上の「世帯共同体」といったものや古代籍帳に現れる「房戸」といったものとどのように対応するかは筆者の力量をこえており、判断できない。

そして、大溝から出土した手捏ね土器をはじめとする祭祀に係わると思われる遺物群は、上記の祭祀単位のさらに上位単位（例えば集落全体）による祭祀行為によって用いられたものと思われる。

（３）稲生遺跡出土の須恵器について

竪穴住居と並んで本遺跡で特筆できるものは、各竪穴住居や大溝、包含層を中心に膨大な量が出土した須恵器である。これは、通常の当該時期の集落遺跡に比べ、非常に多い出土量といえるであろう。遺跡の性格を考えるうえでも重要な資料であるだけでなく、当地域の須恵器出現を考えるうえでも有用と思われる。ここでは、発掘資料の事実を確認するとともに、県内の同時期の須恵器窯跡出土資料や県外資料とも対比しつつ、稲生遺跡出土須恵器の系譜およびその特質について考えてみたい。

①　器種組成

稲生遺跡出土の須恵器の器種をみてみよう。竪穴住居出土のものに限れば、その器種はかなり限定されたものになる。まず竪穴住居出土の須恵器をみてみよう。

竪穴住居出土の須恵器のなかで最も基本的なものは杯（杯蓋含）である。これはほぼすべての竪穴住居で認められる。次いですべての住居で存在するというわけではないが、有蓋高杯と壺・甕類が多い。聰を出土した住居の割合はかなり低くなるが、集落

形成の初期の竪穴住居であるＳＨ18からは大形瑳が出土している。無蓋高杯はＳＨ23から１点出土した程度で、有蓋高杯に比べて明らかに少ない。また、ＳＨ31出土の316と317は、坩もしくは短頸壺の蓋の可能性がある。

大溝や包含層出土のものも含めると、稲生遺跡からは上記以外の器種として、大形杯蓋(442)・器台(469)・鈴台小壺(585)等が出土しており、杯蓋であるが装飾付のもの(568)も存在する。壺・甕類の大きさのバリエーションも多い。量的には極めて少ないものの、器台や県下では３例目の出土となった鈴台小壺等、出土須恵器のなかに集落遺跡からはあまり出土せず通常は古墳から出土する器種が含まれていることも注目される。

さて、発掘例自体がまだ少ない鈴台小壺はいうまでもないことであるが、稲生遺跡から出土した３点の大形瑳は、県下で発掘調査された須恵器窯跡では未だ発掘例のないものである。大形瑳が普遍的にみられる和泉地域では、大形瑳はＴＫ208型式まで一定量みられ、その後ＴＫ23型式ではほとんど衰退することが指摘されている[17]。そこでの編年観をもとに稲生遺跡出土の大形瑳をみると、体部下半にカキメを充填する包含層出土の587は中村浩氏による編年のＩ型式３段階に、体部下半に平行タタキの痕跡を残すＳＨ18出土の232と包含層出土の586は和泉地域での当該器種の衰退期である２型式４段階（ＴＧ39－Ⅲ号窯）に相当しようか。しかし尾張地域ではいま少しこの器種が残存するようであり、なお検討の必要がある。

② 出土須恵器の系譜

いわゆる初期須恵器の時期はともかく、稲生遺跡の中心時期である５世紀末～６世紀初頭を前後する時期は、当地における地方窯の成立期である。県内では、久居古窯址群[18](久居市)・小杉大谷古窯址[19](四日市市)という２か所の須恵器窯が比較的詳細が知られており、それ以外では稲生遺跡と近接する稲生古窯址群や津市法ヶ広窯跡[20]・安濃町内多窯跡[21]等がその頃の所産である。このうち、久居古窯址群（全４基）と稲生古窯址群の一部が、陶邑古窯址群編年のＴＫ23型式に遡るとさている。伊勢湾西岸の窯は埴輪並焼窯であることが多く、古墳樹立の還元焔焼成の埴輪の量やバリエーションからすると、伊勢地域ではさらに多くの未確認の窯の存在が推測でき、この時期以降の在地での須恵器生産はかなり一般化していたものと思われる。

稲生遺跡出土の須恵器についてみれば、体に厚ぼったく、天井部のロクロケズリの丁寧さに比べて天井と口縁部の境の稜の鈍いものが多い。これらは、基本的には地方窯成立後の地元産である可能性が高い。胎土的にも、搬入品というよりは在地産とみられるものが多い（一部に搬入品であるの可能性もあるものも存在する)。そうした場合、いまひとつ実体が不明なところも多いが、稲生遺跡とは同じ地域である稲生古窯址との関連が当然想定される。

ところで、これまで三重県内の５～６世紀の遺跡で出土する須恵器の時間的な位置づけは、大阪和泉地域（陶邑古窯址群）での編年成果に基づいて記述してきたことが多かったようである。今回の報告についても同様である。

しかし一方、三重県内でも伊勢地域は地理的には尾張地域に近く、その地においては東山古窯址群という５～６世紀を通じて操業される古窯址群が存在しており、そこでの須恵器の型式変化は和泉地域とはやや様相を異にしていることが知られている。尾張地域の須恵器は、最も普遍的な器種である杯身・杯蓋についていうと、「古い技法の残存」として捉えられることが指摘されており[22]、和泉地域と比べて天井部のロクロケズリが新しい時期まで残存することや、口縁部と天井部の境界の稜の退化過程の遅いこと等が具体例としてあげられる。従って、例えば尾張系の杯身や杯蓋を和泉地域での視点でみてしまうと、「一見古そうに見えても実は新しい」という事態が生じることになる。

こうした齟齬をなくすためには、出土須恵器が和泉地域の流れで捉えられるものなのか、あるいは尾張地域の流れで捉えられるものなのかを明らかにしなくてはならない。そして、最終的には、それらを踏まえたうえで当該地域での窯跡資料に基づいた各地域毎の小地域編年を確立する必要がある。

ここでは、以上のような問題意識に基づいて、稲生遺跡出土の須恵器についてみていくこととし、地方への須恵器波及の実体を探りたい。

和泉地域に比べ、尾張地域の須恵器生産の実体は良好な窯資料にあまり恵まれてこなかったためいまひとつ不明な点が多かった。しかし、最近の研究によって、「尾張型須恵器[23]」「東山系須恵器[24]」とでも呼ぶべき特徴的な須恵器の実体が明らかになりつつある。特に小林久彦氏は、5世紀末～6世紀初頭の東海地方の須恵器（最も一般的な器種である杯身・杯蓋・高杯について）の製作技法な特徴を検討された結果、和泉地域（陶邑窯）の直接あるいは間接的な影響を受けて成立した窯として伊勢・三河・遠江の諸窯があり、これに対して独自の生産体制で須恵器生産を行った窯として尾張をあげ、前者を「陶邑系須恵器」、後者を「東山系須恵器」と呼称した。小林氏によると、「陶邑系須恵器」では杯の口縁部端部に段をもつことや高杯の脚部がハの字状にほぼ直線的に開いてスカシ孔をもつこと等があげられるのに対し、「東山系須恵器」では杯の口縁端部は内側やや下が凹線状あるいは沈線状となることや高杯の脚部と杯部の接合部が細く筒状となって脚裾が大きく外反しスカシ孔を持たないこと等があげられるという。以上のことは、ほぼ是認できる内容と思われるので、次にそうした視点を中心として、稲生遺跡出土の須恵器をみてみよう。

まず特徴を簡単に捉えることのできる高杯をみてみよう。稲生遺跡出土の高杯は、例外も存在するものの基本的には脚部がハの字に真っ直ぐに伸び、スカシ孔を持つものが一般的である。なかにはやや脚部が開き気味のものもあるが、この程度であれば陶邑古窯址群でも類例が散見できる。

杯では、6世紀中葉前後の新しい時期は口縁端部を丸く収めるものが多いが、古い時期の所産と思われる個体では、基本的に口縁端部には段を持つものが中心である。また、6世紀中葉前後の杯身や杯身の底部内面にいわゆる同心円文スタンプの残る個体が散見できる(図示したのは419と561のみであるが、これ以外でも存在する)。これは、陶邑古窯址群をはじめ近畿ではしばしば認められるものであるが、尾張ではないこともないがほとんどみられないという[25]。

また甕についてみても、口縁外面中央に突線が入りその上下に波状文を施す462～463・601～603等は、和泉地域では一般的にみられる器形といえよう。

以上のようなことから、稲生遺跡出土の須恵器は基本的に三重県内の久居古窯址群や小杉大谷窯等の須恵器がすでに指摘されてきた[27]ように、基本的には尾張地域よりも和泉地域（陶邑古窯址群）の須恵器との関連が強く見られるものと思われる。伊勢地域独自の編年が確立されていない現在、稲生遺跡出土須恵器の編年的位置づけに和泉地域での成果に拠ったのも以上の理由による。

しかし、杯類の口縁端部のやや下がった部位が凹線状あるいは沈線状になる尾張的要素をもった個体も少数ながら存在する。高杯でも脚部にスカシ孔を持たない個体も存在する。特に450は、口縁端部に甘い凹線が入り、脚上部は細く筒状になっているうえに、胎土的にも他の土器とは明らかに異なり、尾張方面からの搬入の可能性がある。

こうしたことは、稲生遺跡出土の須恵器が、当該時期の県内の他の窯跡や古墳の出土遺物同様、基本的に和泉・陶邑窯の技術的影響を受けつつも、尾張地域とも若干の交流のあったことを示すものと思われる。そして、主に6世紀代に入る個体の中には、異常に口径が大きくなる個体(362)が存在するなど当地独自と思われる地域色も発現している。器種では、鈴台小壺もそうした流れのなかで捉えられるものであろう。

（4）終章ー稲生遺跡出現の背景ー

最後に、稲生遺跡の性格と、出現の背景を考え、まとめとしたい。

稲生遺跡出現を考えるには、まず5世紀後半～6世紀にかけての中ノ川流域の遺跡の動向を把握する必要がある。

中ノ川流域は、『位置と環境』でもみたように、古墳時代前中期には赤郷古墳や経塚古墳等の首長墓と推定される古墳が存在し、中ノ川流域でも首長の系譜が辿れるが、より北を流れる鈴鹿川流域に比べると規模が小規模で、同時期の集落にしても特別有力なものは今のところ発見さていない（遡って弥生時代でも同様)。これは、中ノ川が開析した平地部が鈴鹿川等に比べて狭いこととも関連しそうであるが、このことは、古墳時代前中期では、首長墓が発

生する程度の地域勢力の成長は認められるものの、とりたてて大規模なものではなかったと考えることができよう。

それに対して、古墳時代後期以降から律令期にかけての中ノ川流域には、飛躍的といっていいほど有力な遺跡の出現や前代に比べての発達が見られる。まず古墳では、首長墓クラスというてんでは西高山1号墳程度で、北側の鈴鹿川流域に比べて相変わらず見劣りするが、群集墳や中小古墳は非常に充実するようになり、寺谷古墳群等内容的にも優秀な古墳群が営まれるようになる。集落でみるとさらにこの傾向は顕著で、稲生遺跡や伊奈富遺跡がこの時期から活発な集落形成を開始するのを始め、郡山遺跡群や末野C遺跡、長畑遺跡といった大規模な遺跡が存在している。

こうした古墳時代後期以降の当地域の発展の背景として、当時の最先端技術のひとつである須恵器生産が中ノ川左岸では稲生古窯址群、そして右岸では県下最大の徳居古窯址群で操業が開始されたこととも密接に関連するであろう。つまり、須恵器生産開始に伴う在地集落の新たな出現あるいは再編といった可能性である。とくに稲生遺跡や伊奈富遺跡の集落形成時期は、近傍に所在する稲生古窯址群の操業開始時期とほぼ軌をいつにしており、注目される。稲生遺跡で、前代からの系譜をもたず、短期間に当初から竈をもった竪穴住居が33基（未調査区を含めるとそれ以上）も造られる背景として、直接的な関連はともかく、窯跡との地理的近接さからいっても須恵器生産と何らかの関わりを想定することはあながち不可能なことではないであろう。

稲生遺跡から出土した須恵器は、当該時期の集落の出土としては非常に多い量であり、住居毎の須恵器出土量も多い。個々の遺物をみても、548等、焼け歪みをもった須恵器も出土している。こうしたことも、上記のてんを補強するものといえよう。

そして、以上のような考えが妥当であるならば、集落の最盛期である5世紀末～6世紀初頭よりも遡る須恵器(424・610～612等）の存在は、稲生遺跡がこの地域では最も古い時期の須恵器生産に関わる遺跡であることを暗示しているとともに、周辺部には現状で確認されている以外にも当地としての初期の須恵器窯が存在した可能性があり、稲生古窯址群は現状で確認されているものよりもいま少し大規模な生産地であったように思われる。

（穂積裕昌）

〔註〕

① 小玉道明「伊奈富遺跡」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会　1967年
② 『鈴鹿市史』第1巻　1981年
③ 同上
④ 以下、基本的に須恵器の編年観は、田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966年
⑤ 県下の類例には、鈴鹿市出土例（明確な出土地不明、前掲註②）と名張市根冷4号墳出土例（『三重の考古遺物』三重の考古遺物編集委員会　1986年）がある。
⑥ 山田猛「7世紀初頭における集落構成の変質」『考古学研究』第28巻3号　考古学研究会　1981年
⑦ 前掲註①に同じ
⑧ 伊藤克幸『稲生東遺跡発掘調査報告』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市文化財調査会　1975年
⑨ 三重県教育委員会『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅴ　大鼻（4次）・堀越（2次）遺跡』1989年
⑩ 洞口正史・能登健『黒井峯遺跡(2)』子持村教育委員会　1985年
⑪ 前掲註①に同じ
⑫ 三重県教育委員会『北堀池遺跡発掘調査概要(3)』1979年
⑬ 岸岡貴英ほか『京都府遺跡調査報告書　第19冊 桑飼上遺跡』㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993年
⑭ 寺沢知子「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ 1992年
⑮ 同上
⑯ 田阪仁「名張市赤目町　壇・柏原遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1984年
⑰ 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981年
⑱ 小玉道明『久居古窯跡群発掘調査報告』久居古窯跡群発掘調査団　1968年
⑲ 小玉道明『小杉大谷窯跡発掘調査報告』四日市市教育委員会　1974年
⑳ 岡田登「三重県津市垂水発見の埴輪窯について」『皇學館論叢』15－2　皇學館大学　1982年
㉑ 津市教育委員会所蔵、村木一弥氏の御教示による。
㉒ 山田邦和「須恵器・その地域性」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ　1982年
㉓ 岩崎直也「尾張型須恵器の提唱」『信濃』39－4　信濃史学会　1987年
㉔ 小林久彦「伊勢湾周辺における須恵器の地域性」『三河考古』創刊号　1988年
㉕ 同上
㉖ 斎藤孝正氏の御教示による。
㉗ 田辺昭三「須恵器生産の諸画期」『日本美術工芸』392　1971年
㉘ 鈴鹿市教育委員会『中ノ川流域の考古学』1993年

遺物観察表

稲生遺跡　No.1

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
1	60-2	SH1	須恵器 杯蓋	口径11.3 器高4.7	ロクロナデ	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	やや粗　～2mmの長石・石英多	3/5	
2	60-1	〃	〃 杯身	口径9.5 器高4.8	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ後ナデ	灰白	やや密	1/3	
3	60-3	〃	土師器 S字甕台部	底径9.7	——	風化	橙	粗　～5mmの長石かなり多	台部完形	
4	60-4	〃	〃 S字甕	口径13.4	ヨコナデ	外　ハケメナデ 内　ナデ	橙	やや粗 雲母細砂	1/4	
5	169-1	SH2	鉄製品	長5.5 幅3.2 厚0.5	——	——	——	——	一部	手鎌か？
6	11-1	〃	須恵器 有蓋高杯蓋	最大径13.3	——	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密	最大径の1/4	
7	15-4	〃	〃 杯蓋	口径12.6	ロクロナデ	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	明青灰	密	2/5	
8	16-3	〃	〃 〃	口径11.8	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密	1/4	
9	15-2	〃	〃 〃	口径12.6	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ不定方向ナデ	灰	密	2/5	
10	15-1	〃	〃 〃	口径13.6 器高3.9	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密	1/2	
11	11-2	〃	〃 〃	最大径13.7	——	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	並	最大径の2/3	
12	16-1	〃	〃 〃	口径14.0 器高4.8	ロクロナデ	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密	完形	
13	12-5	〃	〃 〃	口径14.0 器高5.1	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	明青灰	密	〃	
14	11-6	〃	〃 〃	口径13.6cm 器高3.4cm	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	暗青灰	密	〃	
15	13-3	〃	〃 杯身	——	〃	ロクロナデ	青灰	密	小片	
16	13-1	〃	〃 〃	口径10.6	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密	1/4	
17	15-3	〃	〃 〃	口径14.4 器高4.5	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　青灰 内　にぶい褐	密	1/2	
18	16-2	〃 （覆土）	〃 〃	口径12.2	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密	完形	
19	13-2	〃	〃 壺	口径16.0	〃	——	灰白	密	口縁部の1/2	
20	12-2	〃	土師器 杯	口径12.0	風化のため不明	風化のため不明	橙	やや密	ほぼ完形	
21	12-3	〃	〃 壺	底径3.8	——	〃	外　黒褐 内　橙	やや粗　～3mmの長石・石英・黒色鉱物粒	底部完形	
22	12-1	〃	〃 甕	口径18.6	風化のため不明	——	浅黄橙	密	1/10	
23	17-1	〃	〃 〃	口径22.2 器高33.5	外ナデ 内ナデ、ヨコハケ	外　ハケメ 内　指オサエ	にぶい黄橙	やや密 ～1mmの砂粒	4/5	
24	14-1	〃	〃 S字甕台部	底径9.2	——	外　ナデ 内　指オサエ	浅黄橙	粗	底部の3/4	
25	14-6	〃	〃 S字甕	口径16.6	ナデ	外　ハケメ 内　ナデ	橙	並	口部の1/10	
26	14-3	〃	〃 S字甕台部	底径8.8	——	外　ナデ 内　風化のため不明	橙	並 ～6mmの小石	台部完形	
27	14-5	〃	〃 〃	底径10.0	——	外　ナデ 内　指オサエ	浅黄橙	密 ～4mmの小石	〃	
28	13-5	〃	〃 〃	底径10.0	——	外　風化のため不明 内　指オサエ	橙	並 ～4mmの小石	〃	
29	13-4	〃	〃 〃	底径9.7	——	外　ナデ 内　風化のため不明	橙	粗 ～4mmの小石	〃	
30	12-4	〃	〃 甑把手	——	——	ナデ	橙	やや粗	小片	
31	18-1	SH3	須恵器 杯蓋	口径14.6	ロクロナデ	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密 ～2mmの小石	口径の1/3	
32	18-2	〃	土師器 S字甕台部	底径10.4	——	ナデか？	灰白	粗 ～4mmの小石	台部の1/3	
33	18-6	〃	〃 手づくね土器	口径5.6	指オサエ	指オサエ	橙	密	2/3	
34	18-3	〃	〃 高杯	口径13.5	ナデ	ナデ	赤	密 ～1mmの長石	口縁部ほぼ完形	
35	18-5	〃	〃 〃	——	——	ナデ	明赤褐	密 ～4mmの長石	一部	
36	19-1	〃	〃 〃	口径28.6	ヨコナデ	ヨコナデ 部分的にケズリ？	橙	やや粗 ～5mmの長石等	口縁部ほぼ完形	

遺物観察表

稲生遺跡　No.2

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
37	53-2	SH4	須恵器 有蓋高杯蓋	口径11.7 器高5.3	ロクロナデ	外 2/3ロクロケズリ・ロクロナデ 内 ロクロナデ	灰白	やや粗 1～2mmの長石少	ほぼ完形 体部一部欠	
38	54-2	〃	〃 杯蓋	口径12.4 器高4.6	〃	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	密 1～2mmの長石少	1/2	
39	54-4	〃	〃 〃	口径11.7	〃	外 1/2ロクロケズリ 内 ロクロナデ	外 灰 内 にぶい黄橙	並	2/5	
40	53-3	〃	〃 〃	——	〃	外 2/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰白	並 ～1mmの石英・長石やや多	天井部の2/5	
41	53-4	〃	〃 杯身	口径8.6 器高4.6	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ・ナデ	灰	粗 ～4mmの石英・長石やや多	ほぼ完形 口縁一部欠	
42	54-1	〃	〃 〃	口径10.6 器高4.2	〃	外 全面ロクロケズリ 内 ロクロナデ・ナデ	青灰	密 1mmの石英・長石少	1/2	
43	51-4	〃	〃 高杯	口径11.1 底径8.8 高さ9.1	〃	外 ロクロナデ・1/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	紫灰	密 1～2mmの白砂	ほぼ完形 口縁一部欠	
44	54-3	〃	〃 高杯脚部	底径8.4	——	ロクロナデ	明青灰	密 1mmの長石多	脚部の1/4	
45	51-3	〃	〃 甕	口径9.8 器高9.75	ロクロナデ	外 ロクロナデ・1/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	明灰色	密 ～4mmの石	ほぼ完形	
46	50-1	〃	〃 甕	口径14.6 器高11.3	〃	外 タタキメ・ナデ 内 タタキメ・ロクロナデ	灰	密	口縁部完形	
47	56-4	〃	土師器 高杯脚部	底径7.9	——	風化のため不明	橙	密 1mmの長石数個	ほぼ完形 底径部一部欠	
48	56-5	〃	〃 〃	底径10.6	——	〃	〃	粗 ～2mmの砂粒やや多	〃	
49	57-1	〃	〃 〃	底径12.8	——	〃	明赤褐	並	1/2	
50	55-4	〃	〃 壺	——	——	風化のため不明	浅黄橙	粗 ～1mmの細砂多	一部	
51	55-2	〃	〃 二重口縁壺	口径16.2	風化のため不明	外 ハケメ 内 風化のため不明	にぶい橙	やや粗 ～2mmの長石少	口縁部の1/5	
52	57-2	〃	〃 甕	口径9.3	ヨコナデ	外 ハケメ 内 ナデ	浅黄橙	並 細砂少	口縁部の2/5	
53	56-2	〃	〃 〃	——	風化のため不明	風化のため不明	〃	やや粗 1mm以下の細砂多	1/4	
54	56-1	〃	〃 〃	口径15.8	〃	〃	〃	やや粗 ～1mmの砂粒少	口径の1/5	
55	55-1	〃	〃 S字甕	口径15.0	ヨコナデ	外 ハケメ 内 風化のため不明	黄橙	やや粗 ～2mmの長石少	口径の3/5	
56	55-5	〃	〃 S字甕台部	底径7.9	——	風化のため不明	浅黄橙	やや粗 ～2mmの石英・長石少	台部の4/5	
57	51-1	〃	〃 〃	底径8.0	——	ナデ・指オサエ	淡橙	1～2mmの砂	1/2	
58	56-3	〃	〃 〃	底径8.0	——	〃	黄橙	やや粗 1mm以下の細砂多	台部の2/3	
59	51-2	〃	〃 〃	底径10.1	——	〃	橙	～1mmの砂	台部完形	
60	55-3	〃	〃 〃	底径9.0	——	風化のため不明	黄橙	並 1mm以下の長石・石英の細砂多	台部の2/3	
61	59-1	〃	〃 甕	——	——	〃	明赤褐	やや密	底部完形	
62	52-1	〃	〃 〃	口径16.2 器高31.1	風化のため不明	〃	黄橙	1～2mmの白砂多	ほぼ完形 胴部一部欠	
63	58-1	〃	〃 甑	——	——	〃	浅黄橙	粗 1～2mmの長石・石英多	一部	
64	24-1	〃	〃 〃	口径34.0	指オサエ・ナデ	〃	橙	密 ～1mmの石英・長石少	口径の2/5	
65	53-5	〃	〃 手づくね土器	口径7.4	指オサエ	指オサエ	橙	やや密	1/3	
66	58-2	〃	〃 〃	口径4.1 器高3.6	ナデ	〃	〃	密 長石微粒	ほぼ完形	
67	169-5	〃	鉄製品	——	——	——	——	——	小片	刀子の柄か？
68	169-4	〃	〃	——	——	——	——	——	一部	鎌刃先の一部か？
69	22-3	SH5	須恵器 杯蓋	口径10.6 器高4.5	ロクロナデ	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	やや粗 ～4mmの長石・石英多	1/4	
70	23-1	〃	〃 〃	口径12.8	〃	外 全面ロクロケズリ 内 ロクロナデ	外 灰 内 灰白	密 2mmの石英微粒の長石少	1/10	
71	22-1	〃	〃 〃	口径11.6 器高5.2	〃	外 2/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	明青灰	やや密 ～5mmの長石・石英多	1/2	
72	25-3	〃	〃 〃	口径11.0 器高4.8	〃	外 1/3ロクロケズリ？ 内 ロクロナデ	浅黄	粗 2mm前後の石英少	ほぼ完形	

遺物観察表

稲生遺跡　No.3

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
73	21-3	SH5	須恵器 杯身	口径10.4 器高5.4	ロクロナデ	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密 1mm以下の細砂	ほぼ完形 口縁一部欠	
74	22-2	〃	〃 〃	口径10.0 器高5.1	〃	外　風化のため不明 内　ロクロナデ	灰白	やや密　～2mmの長石・石英少	2/3	
75	22-4	〃	〃 〃	口径9.2	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密～　1mmの長石・石英少	1/10以下	
76	22-5	〃	〃 〃	口径12.0	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	密	1/2	
77	23-2	〃	〃 高杯脚部	底径9.4	―	ロクロナデ	灰白	密　1mm以下の細砂少	底径の1/4	
78	25-1	〃	土師器 甕	口径11.6	風化のため不明	風化のため不明	外　明褐 内　褐	粗	口径の1/10	
79	23-4	〃	〃 S字甕台部	底径8.0	―	〃	淡橙褐	やや粗	台部の3/5	
80	23-5	〃	〃 〃	底径7.0	―	指オサエ	橙褐	粗　～3mmの長石・石英多	台部の2/3	
81	23-6	〃	〃 〃	底径7.6	―	風化のため不明	茶褐	粗　～3mmの長石・石英やや多	台部の1/2	
82	25-4	〃	〃 〃	底径8.6	―	外　指オサエ 内　風化のため不明	淡黄	並	台部完形	
83	27-2	〃	〃 〃	底径8.4	―	風化のため不明	黄橙	粗 ～5mmの小石多	底径の2/5	
84	27-1	〃	〃 〃	底径10.0	―	〃	〃	やや粗 ～4mmの小石少	台部の1/3	
85	23-3	〃	〃 〃	底径9.5	―	〃	淡褐	粗　～3mmの長石・石英を少	台部ほぼ完形 底径部一部欠	
86	25-2	〃	〃 〃	―	―	〃	橙	粗	一部	
87	25-5	〃	〃 〃	底径9.6	―	〃	浅黄橙	やや粗　～2mmの石英・長石を多	台部完形	
88	26-3	〃	〃 高杯脚部	―	―	ナデ	〃	並	一部	
89	25-6	〃	〃 〃	―	―	風化のため不明	明赤褐	粗	〃	
90	26-1	〃	〃 壺	―	―	〃	橙	やや粗	〃	
91	26-2	〃	〃 〃	―	―	〃	浅黄橙	並	底部完形	
92	53-1	〃	須恵器 甕	口径20.8	ロクロナデ	―	にぶい黄橙	並　～2mmの石英を少	口縁部の2/5	
93	21-01	〃	〃 〃	口径19.3	ロクロナデ	外　タタキメ 内　ロクロナデ	灰白	並	口縁部の1/5	
94	20-1	〃	〃 〃	―	―	外　全面タタキメ 内　ロクロナデ	外　灰白 内　浅黄橙	〃	2/3	
95	27-3	〃	土師器 甑	口径29.2 底径24.8	風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙	やや粗　～4mmの小石やや多	口縁部の1/10 底径部の1/3	
96	49-1	SH6	須恵器 杯蓋	口径13.8 器高4.6	ロクロナデ	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密	ほぼ完形	
97	49-4	〃	〃 〃	口径16.4	ロクロナデ	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	〃	1/5	
98	48-1	〃	〃 有蓋高杯蓋	―	―	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ不定方向のナデ	外　灰白 内　明青灰	～3mmの小石	一部	
99	49-2	〃	〃 杯身	口径11.8 器高5.1	ロクロナデ	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	暗青灰	～2mmの小石多	ほぼ完形	
100	49-5	〃	〃 〃	口径11.3～11.9	ロクロナデ	〃	外　青灰 内　暗青灰	～4mmの小石多	ほぼ完形	
101	49-3	〃	〃 〃	口径8.5 器高3.9	ロクロナデ	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ不定方向のナデ	暗青灰	～2mmの小石多	ほぼ完形	
102	48-2	〃	〃 壺	口径11.6～12.2	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰	～3mmの小石	口縁部の3/5	
103	48-3	〃	土師器 二重口縁壺	口径13.6	ナデ	―	橙	～3mmの石英	口縁部の1/10	
104	47-3	〃	〃 手づくね土器	口径5.8 器高4.9	ナデ	指オサエ、ナデ	にぶい橙	並	ほぼ完形	
105	48-4	〃	〃 甕	口径13.2	ナデ？	外　ハケメ 内　ナデ？	外　浅黄橙 内　灰褐	7mmの石	口縁部の1/2	
106	47-1	〃	〃 〃	底径8.1	―	指オサエ、ハケメ	橙	3～4mmの白石	胴部下半1/4欠　台部完形	
107	46-3	〃	〃 〃	口径14.2	風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙	粗　～5mmの石英・長石等	口縁部の1/3	
108	46-4	〃	〃 〃	口径18.5	ナデ	外　ハケメ 内　ナデ	〃	やや粗　～5mmの石英・長石等	口縁部の1/5	

遺物観察表

稲生遺跡　No.4

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
109	46-1	SH6	土師器 S字甕台部	底径9.6	——	風化のため不明	灰黄	粗 ～5mmの石英・長石	台部の1/2	
110	47-2	〃	〃 〃	底径8.8	——	〃	にぶい橙	やや粗	台部完形	
111	46-2	〃	〃 〃	底径9.1	——	〃	橙	やや粗 ～5mmの石英・長石	台部の3/5	
112	28-2	SH7	須恵器 杯蓋	口径11.4 器高4.8	ロクロナデ	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	密 ～1mm長石等	ほぼ完形	
113	29-4	〃	〃 〃	口径12.0	〃	外 1/2ロクロケズリ 内 ロクロナデ	外 青灰 内 灰	密 ～1mmの長石	〃	
114	29-1	〃	〃 〃	口径12.8	〃	外 全面ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	密	口縁付の1/5	
115	29-3	〃	〃 杯身	口径10.8	〃	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	〃	密 4mmの石英	1/10	
116	28-1	〃	土師器 壺	口径17.6	ナデ	外 ハケメ 内 指オサエ、ナデ	橙	粗 ～5mmの小石	口縁部の1/4	
117	31-2	SH8	須恵器 杯蓋	口径11.2	ロクロナデ	外 2/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	青灰	密 ～2mmの石英を含む	口縁部の1/5	
118	31-3	〃	〃 杯身	口径10.6	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	外 灰 内 灰白	密 ～1.5mmの黒点	口縁部の1/3	
119	31-4	〃	〃 〃	口径9.4	〃	外 1/2ロクロケズリ 内 ロクロナデ	明青灰	やや粗	口縁部の2/5	
120	32-3	〃	土師器 S字甕	口径12.8	ナデ	外 ハケメ 内 ナデ	浅黄橙	粗 ～3mmの石英・長石等	口縁部の1/5	
121	32-2	〃	〃 〃	口径13.2	〃	〃	〃	やや粗 ～6mmの石英・長石等	口縁部の1/10	
122	32-1	〃	〃 〃	口径14.6	〃	〃	黒褐	やや粗 ～7mmの石英等	〃	
123	33-1	〃	〃 〃	口径18.0	〃	〃	浅黄橙	粗 ～5mmの石英・長石等	口縁部の1/5	
124	31-5	〃	〃 S字甕台部	底径8.4	——	外 ナデ 内 指オサエ	〃	密 ～4mmの長石等	台部 ほぼ完形	
125	31-6	〃	〃 〃	底径10.2	——	風化のため不明	〃	密 ～2mmの長石等	台部 ほぼ完形	
126	167-2	〃	砥石	幅6.0 厚2.0	——	——	——	——	一部	3面に使用痕有り
127	39-2	SH9	土師器 S字甕	口径18.2	風化のため不明	風化のため不明	淡黄	並 ～1mmの石粒	1/4	
128	40-1	SH10	〃 〃	口径13.4	ヨコナデ	外 1/2ハケメ 内 風化のため不明	浅黄橙	粗～3mmの小石かなり多い	ほぼ完形 体部・台部一部欠	
129	34-7	〃	須恵器 杯蓋	口径11.4 器高4.1	ロクロナデ	外 ほぼ全面ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰白	やや密 ～1mmの石粒	1/2	
130	34-2	SH11	滑石製品 紡錘車	直径3.65～3.75 高さ1.1 孔の直径0.65～0.8	——	——	——	——	ほぼ完形	
131	34-1	〃	〃 勾玉	長さ4.2 厚0.35 孔の直径0.15	——	——	——	——	〃	
132	38-4	〃	須恵器 壺	口径18.0	ロクロナデ	外 タタキメ 内 ロクロナデ	灰	やや密 ～1mmの長石	口縁部の1/4	
133	38-2	〃	〃 杯蓋	口径11.7 器高4.6	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	〃	やや粗 ～1mmの長石	ほぼ完形	
134	38-5	〃	〃 〃	口径11.6	〃	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰白	やや密 ～1mmの石粒	口縁部の1/5	
135	35-3	〃	〃 高杯脚部	底径9.3	——	ロクロナデ	灰	〃	底径部の1/8	
136	38-1	〃	土師器 杯	口径15.5	ナデ？	ナデ？	赤	〃	口縁部の1/10	
137	36-2	〃	〃 高杯	——	——	風化のため不明	橙	やや粗 ～1mmの石粒多	一部	
138	36-3	〃	〃 小形壺	——	——	〃	外 黄橙 内 橙	やや密 ～1mmの石粒	〃	
139	35-2	〃	〃 小形甕	口径11.0	ヨコナデ	〃	赤	並 ～1mmの石粒	口縁部の1/5	
140	37-1	〃	〃 S字甕	口径14.4	ナデ	外 ハケメ 内 風化のため不明	浅黄橙	並 ～2mmの石粒	口縁部の1/20	
141	34-5	〃	〃 〃	口径12.2	ナデ？	風化のため不明	外 黄橙 内 淡黄	並 ～1mmの石粒	口縁部の1/4	
142	37-2	〃	〃 〃	口径12.2	ナデ	外 ハケメ 内 ナデ	黄	やや密 ～1mmの石粒	口縁部の1/4	
143	35-4	〃	〃 〃	口径13.5	〃	外 ハケメ 内 風化のため不明	外 灰白 内 浅黄橙	やや粗 ～1mmの石粒	口縁部の1/5	
144	36-1	〃	〃 〃	口径15.6	〃	外 ハケメ 内 ナデ	黄灰	並 ～1mmの石粒	口縁部の1/8	

遺物観察表

稲生遺跡　No.5

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
145	34-6	SH11	〃 〃	口径17.3	ヨコナデ	外　ハケメ 内　ナデ	外　灰白 内　明黄褐	並 ～1mmの石粒	口縁部の1/4	
146	35-6	〃	〃 〃	口径12.4	ナデ	風化のため不明	外　赤橙 内　橙	粗 ～2mmの石粒	口縁部の1/6	
147	37-3	〃	〃 S字甕台部	底径9.8	——	〃	淡黄	並 ～1mmの石粒	台部完形	
148	35-5	〃	〃 〃	底径9.6	——	〃	黄橙	並	底径部の1/6	
149	36-4	〃	〃 〃	底径7.9	——	外　風化のため不明 内　ナデ、指オサエ	淡橙	やや密 ～1mmの長石等	底径部の3/4	
150	35-1	〃	〃 〃	底径9.6	——	外　ナデ、指オサエ 内　ナデ	橙	並 ～1mmの石粒	底径部の1/2	
151	38-3	〃	〃 〃	底径8.0	——	風化のため不明	黄橙	〃	〃	
152	8-2	SH12	須恵器 杯身	口径11.6	ロクロナデ	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	やや粗 ～2mmの石粒	口縁部の2/3	
153	1-4	〃	〃 〃	口径11.5 器高5.0	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	～2mm長石等	ほぼ完形	
154	4-2	〃	〃 甕	口径19.7	〃	外　波状文、カキメ 内　ロクロナデ	暗青灰	～2mmの小石	口縁部の1/4	
155	5-1	〃	土師器 高杯	——	——	風化のため不明	橙	精密 ～1mmの小石少	一部	
156	5-3	〃	〃 器台？	——	——	〃	浅黄橙	密 ～2mmの小石少	1/4	
157	2-11	〃	〃 甑・把手	——	——	——	浅黄	やや密 ～2mmの石粒	一部	
158	7-1	〃	〃 二重口縁壺	口径23.0	風化のため不明	風化のため不明	にぶい黄橙	やや粗 ～2mmの長石等	2/5	
159	5-2	〃	〃 壺底部	底径10.0	——	〃	浅黄橙	やや粗 ～2mmの小石粒	底径部の1/10	
160	7-6	〃	〃 S字甕	口径16.4	ヨコナデ	外　ハケメ 内　ナデ？	浅黄	やや粗　～3mmの長石・石英	口縁部の1/5	
161	5-4	〃	〃 〃	口径16.5	ヨコナデ	外　ハケメ 内　ナデ	にぶい黄橙	やや粗　～4mmの石英・長石	口縁部の1/5	
162	1-1	〃	〃 〃	口径18.2	風化のため不明	風化のため不明	〃	並 ～6mmの長石等	口縁部の1/6	
163	1-3	〃	〃 〃	口径16.1 底径8.7	ヨコナデ	外　ハケメ、ナデ？ 内　ナデ・指オサエ	浅黄橙 橙	やや粗	口縁部の4/5 台部は完形	
164	2-8	〃	〃 S字甕台部	底径7.8	——	指オサエ、ナデ	橙	やや粗　～7mm長石・石英	台部完形	
165	2-1	〃	〃 〃	底径7.7	——	風化のため不明	にぶい橙	粗 ～4mmの長石等	台部の4/5	
166	2-7	〃	〃 〃	底径10.2	——	外　風化のため不明 内　指オサエ	浅黄橙	やや粗　～3mmの長石・石英	台部の2/3	
167	7-4	〃	〃 〃	底径7.6	——	ナデ、指オサエ	〃	やや粗　～4mmの小石多い	台部の1/3	
168	7-3	〃	〃 〃	底径9.8	——	〃	〃	やや粗　～4mmの石粒少し	台部完形	
169	2-2	〃	〃 〃	底径7.6	——	風化のため不明	浅黄橙	やや密 ～2mmの小石	台部の2/3	
170	5-7	〃	〃 〃	底径8.8	——	指オサエ、ヨコナデ	にぶい橙	精密　～2mmの長石・石英・クサレ礫	台部完形	
171	2-6	〃	〃 〃	底径8.1	——	外　風化のため不明 内　ナデ、指オサエ	〃	並 ～3mmの長石等	〃	
172	2-3	〃	〃 〃	底径9.6	——	ナデ、指オサエ	にぶい黄橙	やや粗 ～7mm小石	〃	
173	2-4	〃	〃 〃	底径8.4	——	風化のため不明	にぶい橙	やや粗　～3mmの長石・クサリ礫等	〃	
174	2-5	〃	〃 〃	——	——	〃	にぶい橙 灰褐	やや粗　～4mmの小石粒多い	台部ほぼ完形 端部一部欠	
175	5-6	〃	〃 〃	底径10.0	——	ナデ、指オサエ	にぶい黄橙	～2mmの長石・雲母多い	台部完形	
176	7-2	〃	〃 〃	底径9.8	——	〃	浅黄橙	やや粗 ～6mmの小石	台部の5/6	
177	10-4	SH13	須恵器 杯蓋	口径12.0 器高3.7	ロクロナデ	外　ほぼ全面ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白 灰	密 ～1mmの黒点	1/2	
178	8-6	〃	〃 〃	口径13.9	〃	〃	灰白	密 ～1mmの石粒	1/10	
179	8-3	〃	〃 〃	口径11.1	〃	〃	青灰	並　黒斑を含む ～1mmの石粒多い	1/4	
180	7-5	〃	〃 杯身	口径11.2	〃	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	やや密 ～2mmの長石等	1/4	

遺物観察表

稲生遺跡　No.6

遺物番号	登録番号	遺構(出土位置)	器種	法量(cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
181	4-4	SH13	土師器 小形甕	口径12.2	風化のため不明	風化のため不明	にぶい橙	粗 ～3mmの長石多	1/4	
182	8-5	SH14	須恵器 杯蓋	口径12.7	ロクロナデ	外　1/3ロクロケズリ、ナデ	青灰	やや密 ～1mmの石粒	1/7	天井部内面にあて具痕あり
183	3-3	〃	〃 〃	口径14.8	〃	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	～1mmの石粒	口縁部の1/2	
184	3-2	〃	〃 〃	口径14.4	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	密	口縁部の1/6	
185	3-4	〃	〃 〃	口径13.6	〃	ロクロナデ	暗青灰	〃	〃	
186	3-6	〃	〃 杯身	口径10.4	〃	〃	灰	〃	口縁部の1/10	
187	9-5	〃	〃 〃	口径11.6 器高4.5	〃	外　ロクロナデ一部未調整 内　ロクロナデ	青灰	並 ～1mmの石粒	ほぼ完形	
188	3-1	〃	〃 〃	口径11.6	〃	ロクロナデ	外　暗青灰 内　灰	密	口縁部の1/6	
189	1-5	〃	〃 高杯	口径15.1 底径10.6 器高8.75	〃	外　ロクロナデ、3/4以上ロクロケズリ　内　ロクロナデ	灰	～2mmの砂粒	ほぼ完形	
190	3-5	〃	〃 〃	口径12.4	〃	外　ロクロナデ、2/3ロクロケズリ　内　ロクロナデ	〃	やや粗 小石	1/4	
191	4-3	〃	土師器 S字甕	口径9.6	ヨコナデ	外　ハケメ 内　ナデ	浅黄橙	精密	口縁部の1/3	
192	6-1	〃	須恵器 甕	口径18.2	ロクロナデ	外　カキメ、タタキメ 内　青海波文	暗灰	～4mmの長石等	口縁部の1/2	
193	10-5	〃	〃 壺	——	——	外　カキメ、ロクロケズリ、ロクロナデ　内　ロクロナデ	外　灰 内　暗青灰	やや粗 ～1mmの小石	1/4	
194	4-1	〃	〃 〃	——	——	ロクロナデ	灰白	並	〃	
195	6-2	〃	〃 高杯脚部	底径11.1	——	外　カキメ 内　ロクロナデ	灰	精密 ～2mmの長石	脚部ほぼ完形　一部欠	
196	2-12	〃	土師器 甑、把手	——	——	——	浅黄	並 ～3mmの小石	——	
197	1-2	〃	〃 S字甕	口径17.2	風化のため不明	風化のため不明	橙	並 ～4mmの小石	口縁部の1/4	
198	5-5	〃	〃 〃	口径14.6	ヨコナデ	外　ハケメ 内　ナデ	浅黄橙	やや密	〃	
199	2-10	〃	〃 S字甕台部	底径8.2	——	指オサエ	橙	やや粗 ～5mm小石	台部完形	
200	10-3	SH12～14埋土	須恵器 杯蓋	口径11.9	ロクロナデ	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	やや密 ～1mmの石粒	1/5	天井部内面に同心円あり
201	8-4	〃	〃 杯身	口径13.0	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	並 ～1mmの長石	1/5	
202	10-2	〃	〃 〃	口径11.3	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	並 ～1mmの石粒	1/4	
203	10-1	〃	〃 〃	口径12.1	〃	〃	青灰	やや粗 ～1mmの石粒	1/5	
204	6-3	〃	〃 高杯脚部	底径9.0	——	ロクロナデ	淡灰	並 ～2mmの長石等	脚部の1/4	
205	9-4	〃	土師器 杯	——	ナデ	ナデ	赤	並 ～1mmの石粒	一部	
206	166-5	〃	砥石	幅4.2 厚3.3	——	——	——	——	〃	
207	2-14	〃 (上面)	〃 手づくね土器	口径3.5 器高4.1	指オサエ	指オサエ	淡黄灰	黒斑有　～2mmの長石・クサリ礫	完形	
208	2-13	〃 (〃)	滑石製品 双孔円板	直径2.6 厚0.35　孔の直径0.05～0.1	——	——	——	——	〃	側面、面取り
209	43-2	SH15	須恵器 杯蓋	——	——	ロクロナデ	灰白	並　長石の細砂やや多	小片	
210	42-2	〃	〃 杯身	——	ロクロナデ	外　ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	並　～1mmの長石やや多	〃	
211	44-1	〃	〃 〃	——	——	風化のため不明	にぶい黄橙	密　～1mmの石英・長石少	杯部完形	
212	43-6	〃	土師器 S字甕台部	底径9.6	——	〃	浅黄橙	やや粗～3mmの長石・石英をやや多	台部ほぼ完形 底径部一部欠	
213	42-4	SH16or17	須恵器 杯蓋	——	ロクロナデ	外　ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密 ～1mmの長砂	小片	
214	42-5	〃	〃 〃	——	〃	ロクロナデ	外　灰 内　灰白	並　～1mmの長石やや多	〃	
215	42-1	〃	〃 〃	——	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密	2/3	
216	42-3	SH16	〃 杯身	口径9.8	〃	外　ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　灰 内　灰白	密 長石の細砂少	最大径の1/10以下	

遺物観察表

稲生遺跡　No.7

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
217	41-3	SH16or17	須恵器 杯身	口径13.2 器高5.5	ロクロナデ	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	明青灰	やや粗 ～2mmの長石多	口縁部の 2/3	
218	41-2	〃	〃 高杯	底径8.8	——	外 カキメ 内 ナデ	青灰	並 ～0.5mmの長石	脚部の4/5	
219	42-6	〃	〃 杯蓋	——	ロクロナデ	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰白	密	一部	
220	43-4	〃	〃 甕	口径13.5	外 波状文 内 ロクロナデ	——	外 灰 内 灰白	〃	口縁部わずか	
221	44-4	SH16	土師器 甕	口径11.2	風化のため不明	風化のため不明	橙	並～やや粗 ～4mmの石英・長石少し	口縁部の 2/3	
222	43-1	SH16or17	〃 S字甕	口径14.4	ヨコナデ	外 ハケメ 内 ナデ	浅黄橙	並 1mmの石英と長石細砂	口縁部の 1/10以下	
223	45-3	SH17	〃 S字甕台部	底径9.5	——	ナデ	橙	並 ～2mmの石英・長石やや多い	台部完形	
224	43-5	〃	〃 杯	口径12.0 器高4.8	ナデ	風化のため不明	外 にぶい橙 内 浅黄橙	並 2～3mmの長石・石英少し	ほぼ完形 口縁部1/2欠	
225	44-3	SH16	〃 高杯	——	——	〃	橙	密 ～1mmの長石・石英と赤茶色の鉱物粒	一部	
226	45-2	SH16or17	〃 壺	底径8.0	——	〃	外 橙 内 黄橙	並 ～2mmの石英・長石多い	底径部の 1/5	
227	45-1	SH17	〃 甕	口径24.6	ナデ？	〃	外 黒褐色 内 橙	密 ～1mmの石英・長石	口縁部の 1/5	
228	41-4	SH16or17	須恵器 杯蓋	口径13.4 器高3.8	ロクロナデ	外 1/2ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	やや密	ほぼ完形	
229	43-3	〃	〃 甕	口径11.5	外 波状文、ロクロナデ 内 ロクロナデ	——	黄灰	密 長石・黒雲母の微細粒多い	口縁部わずか	
230	44-2	〃	土師器 S字甕	口径14.7	風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙	並 長石の細砂やや多い	口縁部1/4	
231	61-4	SH18	須恵器 杯身	口径9.6 器高4.2	ロクロナデ	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	淡灰	やや密 黒斑粒	口縁部の 1/2	
232	63-5	〃	〃 大形甕？	——	——	外 刺突文、波状文、タタキメ 内 ロクロナデ	灰白	密 ～2mmの小石やや多い	一部	
233	66-2	〃	土師器 S字甕台部	底径10.8	——	風化のため不明	淡橙	粗 ～3mmの石英・長石を多い	台部完形	
234	69-1	〃	〃 甕	口径17.1	ヨコナデ	外 ハケメ 内 ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	粗 細砂やや多い	口縁部の 1/2	
235	61-1	SH19	須恵器 杯蓋	口径11.2	ロクロナデ	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	淡灰	やや粗 ～2mmの長石・石英	口縁部の 1/3	
236	62-1	〃	〃 杯身	口径12.0	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	密	1/10	
237	62-4	〃	〃 椀？	口径9.7	〃	外 ほぼ全面ロクロケズリ 内 ロクロナデ	淡灰	〃	1/3	
238	64-7	〃	土師器 甕	底径6.7	——	風化のため不明	淡橙	やや粗 ～2mmの砂粒多	底径部完形	
239	64-6	〃	〃 S字甕台部	底径9.9	——	〃	外 浅黄橙 内 橙	やや粗 ～1mmの砂粒少	〃	
240	63-3	〃	〃 〃	底径9.3	——	指オサエ	橙	粗 ～2mmの長石多	台部ほぼ完形 底径部一部欠	
241	67-2	SH20	須恵器 杯蓋	口径14.8 器高5.4	ロクロナデ	外 2/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	外 暗青灰 灰白内 青灰	並 ～1mmの砂粒多	3/5	
242	66-1	〃	〃 〃	口径10.5 器高4.5	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	淡灰	やや密 長石・黒斑粒	1/2	
243	67-3	〃	〃 杯身	口径13.0	〃	外 ほぼ全面ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	並 ～2mmの砂粒	1/10以下	
244	67-1	〃	〃 〃	口径11.2	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	淡灰	やや粗 ～2mmの長石	2/5	
245	68-5	〃	土師器 S字甕	口径15.4	ヨコナデ	外 ハケメ 内 ナデ	黄橙	粗 ～4mmの小石	〃	
246	64-1	〃	〃 〃	口径16.9	〃	外 ハケメ 内 風化のため不明	明黄褐	やや粗 ～1mmの砂多い	口縁部の 1/4	
247	66-5	〃	〃 甕？	口径29.2	風化のため不明	風化のため不明	橙	粗 ～4mmの長石・石英多い	口縁部の 1/10以下	
248	68-4	〃	〃 高杯脚部	底径8.2	——	外 風化のため不明 内 ケズリ、ナデ	明赤褐	密	脚部ほぼ完形 底径部ほぼ欠	
249	64-4	〃	〃 S字甕台部	底径8.6	——	風化のため不明	黄橙	粗 ～4mmの長石少	台部ほぼ完形 底径部一部欠	
250	68-2	〃	〃 〃	底径8.2	——	〃	浅黄橙	やや粗 ～1mmの小石多	台部の2/5	
251	68-1	〃	〃 〃	底径10.4	——	〃	〃	〃	台部の1/2	
252	64-3	〃	〃 〃	底径6.1	——	外 ナデ 内 風化のため不明	にぶい黄橙	密 細砂少し	〃	

遺物観察表

稲生遺跡　No.8

遺物番号	登録番号	遺構(出土位置)	器種	法量(cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
253	66-3	SH18or20	須恵器 杯蓋	口径12.3	ロクロナデ	外　ほぼ全面ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　灰白 内　灰	密 ～4mmの長石少	1/10	
254	62-3	〃	〃 高杯脚部	底径9.5	——	ロクロナデ	淡灰	密	脚部の4/5	
255	65-4	〃	〃 杯蓋	口径10.5	ロクロナデ	外　ほぼ全面ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	並 ～2mmの砂粒少	1/5	
256	61-2	〃	〃 〃	口径12.4 器高4.2	〃	〃	淡白	密	口縁部の 2/5	
257	61-3	〃	〃 杯身	口径12.0 器高5.0	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	淡黄灰	〃	口縁部の 1/4	
258	65-3	〃	〃 〃	口径14.0	〃	外　ほぼ全面ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	並　～3mmの長石等少し	1/5	
259	63-4	〃	〃 高杯脚部	底径11.7	——	ロクロナデ	灰	やや粗 ～2mmの小石多	脚部の1/4	
260	166-3	SH21	砥石	幅1.7 厚1.45	——	——	——	——	一部	
261	73-4	〃	須恵器 ？	——	ロクロナデ	——	灰	やや密 ～2mmの長石	小片	
262	72-2	〃	土師器 S字甕台部	底径7.8	——	ナデ、指オサエ	にぶい橙	〃	台部ほぼ完形　一部欠	
263	72-1	〃	須恵器 杯蓋	口径13.4 器高4.9	ロクロナデ	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	明緑灰	密	ほぼ完形	
264	73-3	SH23	〃 高杯	口径11.8	〃	外　カキメ風ナデ？ 内　ロクロナデ	外　暗灰 内　淡灰	密 長石微粒	杯部1/7	
265	72-5	〃	土師器 杯	口径11.6 器高4.3	ヨコナデ	風化のため不明	橙	精密 雲母、長石微粒	ほぼ完形 一部欠	
266	73-5	〃	〃 高杯	——	——	〃	黄橙	やや粗 ～6mmの小石粒	一部	
267	72-8	〃	〃 高杯脚部	底径4.2	——	ナデ	橙	密 ～2mm小石粒	脚部3/5	
268	72-4	〃	〃 S字甕	口径15.6	ナデ	外　ハケメ 内　ナデ	〃	やや密 ～8mmの小石	肩部の1/4	
269	72-6	〃	〃 〃	口径13.4	ヨコナデ	〃	〃	やや粗 ～6mmの長石等	口縁部の 1/4	
270	73-1	〃	〃 〃	口径16.4	〃	〃	浅黄橙	密 ～1mmの長石	口縁部の 1/8	
271	73-7	〃	〃 甕？	口径22.7	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	密 ～3mmの小粒	口縁部の 1/10	
272	72-3	〃	〃 S字甕台部	底径8.5	——	指オサエ	〃	やや粗 ～4mmの長石等	台部完形	
273	72-9	〃	〃 〃	底径10.0	——	ナデ、ハケメ	〃	やや密 ～5mmの長石	〃	
274	73-2	〃	〃 壺	口径16.0	ナデ	外　ハケメ？ 内　ナデ	〃	やや密 ～4mmの小石	口縁部の 1/3	
275	85-4	SH24	須恵器 杯蓋	口径12.5	ロクロナデ	？	灰	並 ～2mm長石等	口縁部の 1/8	
276	85-6	〃	〃 杯身	口径10.5 器高5.0	〃	外　ほぼ全面ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	やや密 ～4mmの長石多	5/6	
277	85-3	〃	〃 甕	口径16.0	〃	——	〃	やや粗 ～3mmの小石粒	口縁部の 1/6	
278	85-2	〃	土師器 S字甕台部	底径10.7	——	指オサエ	淡橙	やや粗　～4mmの長石等の小石粒多	台部完形	
279	85-5	〃	〃 S字甕	口径19.4	ヨコナデ	外　ハケメ 内　ナデ	浅黄橙	やや粗　～4mmの長石・石英等多	口縁部の 1/8	
280	85-1	〃	〃 甕	口径22.1	〃	ナデ	黄	やや粗　～3mmの長石等の小石粒多	口縁部の 1/5	
281	86-3	SH25	須恵器 杯身	口径10.0	ロクロナデ	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密 ～1mmの砂	口縁部の 1/4	
282	86-2	〃	土師器 小形鉢	口径10.2	ヨコナデ？	風化のため不明	橙	密 砂粒若干	2/5	
283	86-1	〃	〃 S字甕	口径16.0	ヨコナデ	外　ハケメ 内　ナデ	外　にぶい黄橙 内　浅黄橙	やや粗　～4mmの長石・石英の砂粒	口縁部の 1/3	
284	87-2	SH26	〃 S字甕台部	底径10.7	——	風化のため不明	浅黄橙	～3mmの長石・石英等多い	台部ほぼ完形　一部欠	
285	87-3	〃	〃 〃	底径10.2	——	〃	〃	～4mmの小石	台部完形	
286	87-1	〃	須恵器 短頸壺？	——	——	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	淡灰	密 長石・微粒	1/4	
287	70-5	SH27	〃 杯蓋	口径11.9 器高4.7	ロクロナデ	外　ほぼ全面ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密	1/8	
288	70-7	〃	〃 杯身	口径10.3 器高4.5	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	やや粗 ～4mmの長石等	ほぼ完形	

遺物観察表

稲生遺跡　No.9

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
289	70-6	SH27	須恵器 杯身	口径12.0 器高4.1	ロクロナデ	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	～2mmの砂少量	ほぼ完形	
290	71-2	〃	土師器 杯	口径12.3 器高5.1	ヨコナデ	風化のため不明	明褐	やや密 ～2mmの小石少	2/5	
291	71-5	〃	〃 手づくね土器	口径6.0	〃	ナデ	橙	密 ～1mmの長石等	1/4	
292	71-1	〃	〃 高杯脚部	底径8.8	——	ナデ、ヨコナデ	にぶい橙	精密 ～1mm長石少量	脚柱2/3 裾先1/8	
293	71-4	〃	〃 甕	口径16.6	風化のため不明	風化のため不明	淡黄	やや粗 ～7mmの小石	口縁部の 1/5	
294	71-3	〃	〃 S字甕	口径12.4	ヨコナデ	外 ハケメ 内 ナデか？	にぶい黄橙	並 ～4mmの小石	口縁部の 2/5	
295	71-7	〃	〃 〃	口径15.6	〃	外 ハケメ 内 ナデ	淡黄	粗 ～4mmの小石粒	口縁部の 1/4	
296	71-6	〃	〃 〃	口径16.2	〃	〃	浅黄橙	やや密 ～2mmの長石等少し	口縁部の 2/5	
297	70-2	〃	〃 S字甕台部	底径10.1	——	ナデ、指オサエ	にぶい黄橙	密 ～2mmの長石等	台部完形	
298	70-3	〃	〃 〃	〃	——	〃	橙	〃	〃	
299	70-4	〃	〃 〃	底径10.5	——	〃	淡黄	やや粗 ～3mmの石英・長石等多い	〃	
300	70-1	〃	〃 〃	底径10.2	——	ナデ	〃	粗 ～4mmの長石等	底径部の 1/7	
301	169-2	〃	鉄製品	幅1.0 厚0.3～4	——	——	——	——	一部	
302	169-3	〃	〃 〃	幅1.05 厚0.55	——	——	——	——	一部	
303	81-2	SH28	須恵器 杯身	口径9.8	ロクロナデ	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	並 石粒	1/4	
304	81-4	〃	〃 〃	口径10.0 器高4.7	〃	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	暗青灰	～3mmの石英・長石	1/2	
305	84-4	〃	土師器 杯	口径12.0 器高4.1	ナデ	ナデ	赤	やや密 ～1mmの石粒	ほぼ完形	
306	84-5	〃	〃 〃	口径11.4 器高4.8	〃	〃	〃	やや粗 ～4mmの長石・石英	2/3	
307	84-3	〃	〃 S字甕台部	底径10.2	——	〃	淡橙	～1mmの石粒	台部ほぼ完形	
308	84-1	〃	〃 〃	〃	——	指オサエ、ナデ	淡黄	〃	台部ほぼ完形 一部欠	
309	80-1	〃	〃 甑	口径29.3 底径10.9 器高26.9	風化のため不明	風化のため不明	にぶい黄橙	～3mmの小石多	口縁部の 1/2	
310	81-1	SH29	須恵器 杯蓋	口径10.6 器高3.7	ロクロナデ	外 ほぼ全面ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	密	3/5	
311	81-3	〃	〃 杯身	口径9.2	〃	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	暗緑灰	並 ～1mmの石粒	1/5	
312	84-6	〃	土師器 高杯	口径14.0	ナデ	ナデ	橙	密 ～4mmの小石	1/5	
313	82-1	〃	〃 S字甕	口径15.4	ヨコナデ	外 ハケメ 内 風化のため不明	浅黄橙 にぶい黄橙	並 ～4mmの砂粒をやや多い	1/2	
314	83-1	〃	〃 〃	口径15.8	〃	外 ハケメ、ナデ 内 ナデ	浅黄橙 黄橙	密 少量の石	台部以外ほぼ完形	
315	81-5	〃	須恵器 壺？	——	外刺突文、ロクロナデ 内ロクロナデ	——	青黒	～1mmの石粒	2/3	
316	78-5	SH30	〃 短頸壺の蓋？	口径8.8 器高4.4	ロクロナデ	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰白	精密	4/5	
317	79-3	〃	〃 〃	口径10.4	〃	外 1/2ロクロケズリ 内 ロクロナデ	外 灰白 内 淡黄	～1mmの石粒	1/4	
318	79-4	〃	〃 杯蓋	口径11.8 器高4.1	〃	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	外 青灰 内 緑灰	粗 ～2mmの石粒	完形	
319	79-1	〃	〃 〃	口径11.8	〃	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ、不定方向のナデ	外 青黒 内 青灰	密	1/5	
320	79-5	〃	〃 杯身	口径10.0 器高4.7	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	青灰	並 ～1mmの石粒	1/2	
321	78-2	〃	〃 台付短頸壺の蓋	口径10.9 器高4.7	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	密 砂粒	1/2	
322	78-3	〃	〃 〃	口径10.8 器高5.15	〃	外 2/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	外 明オリーブ 灰 内 灰白	密	2/3	
323	78-4	〃	〃 有蓋高杯蓋	口径12.0	〃	外 1/2ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	精密 砂粒	2/5	
324	78-1	〃	〃 〃	口径11.2 器高4.7	〃	外 2/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	〃	密 砂粒	ほぼ完形	

遺物観察表

稲生遺跡　No.10

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
325	79-2	SH30	須恵器 有蓋高杯	口径9.8	ロクロナデ	外 1/2ロクロナデ 内 ロクロナデ	灰白	～2mmの石粒	1/3	
326	76-2	〃	〃 壺	——	——	外 タタキメ、カキメ 内 風化のため不明	灰	並 ～3mm長石等	1/8	
327	77-7	〃	土師器 杯	口径12.4 器高5.0	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	橙	やや密 わずかに小石	1/2	
328	77-6	〃	〃 〃	口径12.4 器高4.8	ナデ	ナデ	〃	〃	〃	
329	75-1	〃	〃 高杯	口径15.4	ヨコナデ	〃	〃	密 ごくわずかに小石	口縁部の1/4	
330	77-1	〃	〃 〃	口径15.0	ナデ	〃	褐	並	杯部の1/6	
331	75-2	〃	〃 高杯脚部	——	——	風化のため不明	橙	密	1/4	
332	77-2	〃	〃 〃	底径13.8	——	ヨコナデ、ナデ	〃	並	脚部ほぼ完形	
333	74-3	〃	〃 S字甕	口径12.4	ナデ	外 ハケメ 内 ナデ	淡褐	〃	口縁部の1/6	
334	75-5	〃	〃 〃	口径12.7	ヨコナデ	〃	淡橙	〃	口縁部の1/4	
335	74-4	〃	〃 〃	口径15.0	ナデ	〃	淡褐	〃	口縁部の2/5	
336	74-1	〃	〃 〃	口径14.8	ナデ	〃	〃	〃	口縁部の1/6	
337	77-9	〃	〃 S字甕台部	底径8.4	——	ナデ	にぶい黄橙	やや粗 ～4mmの長石等多い	台部ほぼ完形	
338	74-5	〃	〃 〃	底径9.9	——	ナデ、指オサエ	淡褐	やや密 ～4mm小石少し	〃	
339	77-10	〃	〃 〃	底径9.6	——	〃	浅黄橙	密 長石微粒	台部の1/2	
340	74-6	〃	〃 〃	底径11.5	——	〃	淡黄	やや密 ～2mmの長石少し	台部ほぼ完形	
341	74-2	〃	〃 甕	口径12.6	ヨコナデ、ナデ	外 ハケメ 内 ナデ、指オサエ	淡褐	並	口縁部の1/6	
342	75-4	〃	〃 〃	口径16.2	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	橙	やや粗 ～1mmの長石、クサリ礫、雲母微粒	口縁部の1/10以下	
343	75-6	〃	〃 小型壺	口径9.8 器高9.1	風化のため不明	風化のため不明	〃	密 ～2mmの小石少量	完形	
344	76-1	〃	〃 甑	口径25.8	ヨコナデ	ナデ	淡褐	並	口縁部の1/5	
345	77-8	〃	〃 器台？	底径8.2	——	ナデ	〃	密	杯部欠	
346	77-4	〃	〃 小型鉢	口径7.6	ナデ	〃	〃	〃	1/5	
347	77-3	〃	〃 手づくね土器	口径4.6	ナデ	外 ナデ 内 指オサエ	〃	並	1/2	
348	75-3	〃	〃 〃	——	——	指オサエ	〃	～0.5mmの石粒	底部完形	
349	90-2	SH31	〃 甕	口径19.6	ヨコナデ	——	〃	やや密	口縁部の1/5	
350	90-1	〃	〃 〃	口径15.0	ナデ	ナデ	〃	やや密	口縁部の1/8	
351	88-4	SH32	須恵器 杯蓋	口径12.4	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰	やや密 粗粒やや多い	口縁部の2/5	
352	88-5	〃	〃 不明	——	——	櫛描の条線	灰	やや密 ～2mmの砂粒少	少片	
353	88-2	〃	〃 甕	口径12.2	ヨコナデ	外 ハケメ 内 指オサエ、ナデ	橙	やや密 石英細砂少	口縁部ほぼ完形	
354	88-3	〃	〃 〃	口径12.1	風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙 にぶい橙	やや密 ～4mmの小石	口縁部の2/5	
355	88-1	〃	〃 〃	口径15.1	ヨコナデ	外 ハケメ 内 ナデ	にぶい橙	並 ～2mmの長石・石英	口縁部ごくわずか	
356	89-4	SH33	須恵器 杯身	口径10.8 器高4.9	ロクロナデ	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	並 ～2mmの長石・石英	4/5	
357	89-1	〃	土師器 S字甕	口径15.4	ヨコナデ	外 ハケメ 内 ナデ	橙	やや粗 ～5mmの小石粒多い	口縁部の1/3	
358	89-2	〃	〃 〃	〃	〃	〃	浅黄	密 ～2mmの長石等少量	口縁部の1/4	
359	89-6	〃	〃 〃	——	〃	〃	浅黄橙	やや密 ～1mm長石等少し	1/10以下	
360	89-3	〃	〃 S字甕台部	底径8.6	——	ナデ	浅黄	密 ～4mmの長石	台部ほぼ完形	

遺物観察表

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
361	89-5	SH30	土師器 S字甕台部	底径10.8	——	ナデ	黄橙	並 ～4mmの小石粒	台部完形	
362	115-3	SK37	須恵器 杯蓋	口径16.6 器高3.2	ロクロナデ	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密 ～4mmの石英を少	口縁部の 1/5	
363	115-1	〃	〃 〃	口径12.2 器高5.4	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　灰 内　灰白	密	口縁部の 2/5	
364	115-6	〃	〃 杯身	口径10.6 器高5.2	〃	外　1/2ロクロケズリ、ヘラケズリ　内　ロクロナデ	外　暗青灰 内　青灰	～1mm以下の石粒	3/5	
365	115-2	〃	〃 〃	口径10.4	〃	外　ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	やや密　～4mmの石英・長石	口縁部の 1/5	
366	114-1	〃	土師器 甕	口径17.6	風化のため不明	風化のため不明	にぶい橙	密 5mmの小石少	1/4	
367	115-5	〃	〃 S字甕	口径16.4	〃	——	橙	粗 ～3mmの長石	口縁部の 1/2	
368	115-4	〃	〃 甕	口径19.2	ヨコナデ	——	〃	やや粗	口縁部の 1/4	
369	114-2	〃	〃 S字甕	口径14.2	〃	外　ハケメ 内　風化のため不明	にぶい橙	やや粗　～7mmの石英・長石等	1/4	
370	116-2	SK38？	須恵器 杯蓋	口径9.8	ロクロナデ	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密	1/4	
371	116-1	〃	土師器 S字甕	口径13.0	ヨコナデ	外　ハケメ 内　ナデ	灰褐	やや密 ～2mmの長石	口縁部の 1/3	
372	94-1	SD40	不明	高7.4 幅2.4 厚2.0	——	——	浅黄橙	やや密	一部	
373	94-3	〃	土師器 二重口縁壺	口径13.5	ヨコナデ	——	橙	やや粗　～1mmの細粒多い	口縁部の 3/5	
374	104-3	〃	〃 〃	口径14.8	風化のため不明	——	〃	～2mmの小石粒	口縁部の 1/7	
375	96-6	〃	〃 広口壺	口径13.9	ヨコナデ	外　ハケメ 内　ナデ	にぶい橙	やや粗　～1mmの砂粒多い	口縁部の 1/5	
376	111-2	〃	〃 〃	口径18.8	外　ハケメ 内　ナデ	——	にぶい黄橙	並 ～1mmの石粒	口縁部の 1/6	
377	99-1	〃	〃 〃	口径18.0	ハケメ	——	〃	やや密　～1mmの長石等やや多い	口縁部の 3/5	
378	104-2	〃	〃 小型壺	口径8.8 器高7.5	風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙	やや粗　～5mmの小石粒多い	ほぼ完形	
379	112-2	〃	〃 〃	——	——	〃	外　橙 内　浅黄橙	やや粗 ～1mmの石粒	一部	
380	91-9	〃	〃 〃	口径7.1 器高7.5	ヨコナデ	指オサエ、ナデ	橙	やや粗　～1mmの長石、石英やや多い	ほぼ完形 口縁一部欠	
381	91-2	〃	〃 〃	口径5.7 器高7.2	〃	〃	橙 にぶい橙	密 細砂多い	ほぼ完形 口縁1/2欠	
382	91-12	〃	〃 〃	口径7.9 器高9.9	〃	ナデ	橙	やや密 ～1mmの小石多	ほぼ完形 口縁3/5欠	
383	91-5	〃	〃 手づくね土器	口径4.1 器高3.6	ナデ	指オサエ、ナデ	にぶい赤褐	密 ～1mmの細砂少	2/3	
384	91-3	〃	〃 〃	口径4.2 器高3.6	〃	〃	浅黄橙	やや密　～4mmの砂粒やや多い	ほぼ完形	
385	104-5	〃	〃 〃	口径5.0 器高2.9	〃	ナデ	黄橙	精密	〃	
386	91-11	〃	〃 〃	口径5.7 器高4.7	〃	指オサエ、ナデ	橙	密 ～1mmの小石少	ほぼ完形 口縁1/3欠	
387	91-6	〃	〃 〃	口径6.4 器高4.5	風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙	やや粗　～5mmの長石・石英多い	ほぼ完形 口縁一部欠	
388	91-7	〃	〃 〃	口径4.6 器高5.5	ヨコナデ	指オサエ、ナデ	浅黄橙	やや密 ～1mmの細砂多い	完形	
389	91-4	〃	〃 〃	口径3.8 器高4.7	指オサエ	〃	橙	やや粗～並 ～1mmの砂粒多	〃	
390	91-1	〃	〃 〃	口径3.3 器高3.7	ナデ	〃	〃	やや密 ～2mmの砂粒多	〃	
391	91-10	〃	〃 〃	口径3.3 器高3.0	〃	ナデ	橙 にぶい橙	やや密 ～1mmの細砂多	ほぼ完形 口縁1/2欠	
392	91-8	〃	〃 〃	口径2.9 器高2.4	〃	〃	橙	密 ～1mmの細砂多	完形	
393	94-2	〃	〃 高杯脚部	底径13.8	——	風化のため不明	〃	密 細砂多い	脚部の1/2	
394	95-3	〃	〃 〃	底径9.5	——	〃	〃	やや粗　～1mmの砂粒やや多い	脚部の3/5	
395	112-4	〃	〃 〃	底径8.7	——	〃	赤橙	密 ～1mmの石粒	脚部の1/2	
396	94-5	〃	〃 〃	——	——	〃	橙	密	1/4	

遺物観察表

稲生遺跡　No.12

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
397	99-2	SD40	土師器？	底径7.8	——	風化のため不明	橙	密 細砂少し	脚部の2/5	
398	99-4	〃	〃 S字甕	口径15.0	ヨコナデ	外 ハケメ 内 風化のため不明	浅黄橙	やや粗 ～5mmの砂粒多	口縁部の1/4	
399	104-4	〃	〃 〃	口径14.6	〃	〃	にぶい橙	並 ～1mmの長石等	〃	
400	94-4	〃	〃 S字甕台部	底径7.9	——	風化のため不明	淡橙	やや密 ～3mmの長石・石英多い	台部の4/5	
401	96-5	〃	〃 〃	底径10.6	——	ナデ、指オサエ	淡橙 にぶい橙	やや密 ～1mmの砂粒やや多い	台部の1/2	
402	96-3	〃	〃 〃	底径10.4	——	風化のため不明	淡橙	密 ～5mmの石粒やや多い	台部の1/2	
403	95-2	〃	〃 〃	底径9.4	——	指オサエ、ナデ	浅黄橙	やや密 ～2mmの砂粒やや多い	台部ほぼ完形 一部欠	
404	99-3	〃	〃 〃	底径7.9	——	風化のため不明	淡赤橙	やや密 ～7mmの長石・石英多い	台部完形	
405	96-4	〃	〃 甕	口径12.6	風化のため不明	〃	浅黄橙	やや密 ～1mmの細砂少	口縁部わずか	
406	104-1	〃	〃 〃	口径12.4	ヨコナデ	ナデ	橙	精密	1/4	
407	99-5	〃	〃 〃	口径21.3	風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙	やや粗 ～5mmの石英・長石多い	口縁部の1/5	
408	101-1	〃	〃 〃	口径15.9 器高26.6	ヨコナデ	ハケメ、ナデ	黄橙	並 ～2mmの砂少し	ほぼ完形 口縁2/3欠	
409	95-1	〃	〃 甑	——	——	風化のため不明	外 浅黄橙 内 灰	粗 ～6mmの砂粒やや多い	——	
410	106-1	〃	須恵器 杯蓋	口径13.0 器高3.95	ロクロナデ	外 ほぼ全面ロクロケズリ 内 ロクロナデ	青灰	～3mmの石粒	ほぼ完形 口縁部1/3欠	
411	108-1	〃	〃 〃	口径13.0	〃	〃	暗青灰	～2mmの長石等	2/5	
412	106-6	〃	〃 〃	——	〃	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	～2mmの石粒	〃	
413	103-2	〃	〃 〃	口径11.2 器高4.5	〃	外 ほぼ全面ロクロケズリ 内 ロクロナデ、ナデ	〃	並 ～2mmの長石・石英等多い	ほぼ完形 一部欠	
414	106-3	〃	〃 〃	口径11.7 器高4.4	〃	〃	〃	やや粗 ～3mmの石粒	3/5	
415	107-5	〃	〃 〃	口径12.3	〃	〃	灰白	～2mmの石粒	2/5	
416	108-3	〃	〃 〃	口径12.0	〃	外 1/2ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	～2mmの長石等	1/4	
417	108-5	〃	〃 〃	口径11.5 器高4.55	〃	外 2/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰白	～1mmの石粒	1/3	
418	102-4	〃	〃 〃	口径11.9	〃	〃	外 灰黄褐 内 灰白	〃	1/5	
419	110-5	〃	〃 〃	口径11.0	〃	外 1/2ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	密 ～2mmの長石	2/5	内面に工具痕あり(同心円か？)
420	105-2	〃	〃 〃	口径11.2	〃	外 ほぼ全面ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰白	～2mmの石粒	1/4	
421	107-3	〃	〃 〃	口径12.0	〃	外 1/2ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰	～2mmの長石等	〃	
422	106-4	〃	〃 〃	口径13.0	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	外 灰 内 灰白	～4mmの石粒	2/3	
423	102-5	〃	〃 〃	口径11.3 器高4.5	〃	〃	暗青灰	粗 ～1mmの石粒	1/4	
424	103-1	〃	〃 杯身	口径7.5～8.0	〃	外 2/3手持ちヘラケズリ 内 ロクロナデ	灰	～3mmの長石・石英等	〃	
425	106-2	〃	〃 〃	口径9.器高4.81	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	〃	～1mmの石粒	4/5	
426	112-3	〃	〃 〃	口径10.2	〃	外 3/4以上ロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰白	並 ～1mmの石粒	1/3	
427	105-6	〃	〃 〃	口径10.6	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	〃	～1mmの石粒 黒色石粒	1/4	
428	108-4	〃	〃 〃	口径11.0	〃	〃	〃	～1mmの石粒	1/3	
429	105-5	〃	〃 有蓋高杯	口径10.6	〃	外 2/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	〃	〃	1/5	
430	110-3	〃	〃 杯身	口径9.2	〃	外 3/4ロクロケズリ 内 ロクロナデ	〃	密 ～1mmの石粒	口径部の1/8	
431	108-6	〃	〃 〃	口径9.4	〃	〃	青灰	～1mmの石粒	1/4	
432	107-4	〃	〃 〃	口径9.8	〃	〃	〃	～2mmの石粒	1/3	

遺物観察表

稲生遺跡　No.13

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
433	102-3	SD40	須恵器 杯身	口径10.7 器高4.75	ロクロナデ	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	～1mmの石粒	1/5	
434	109-2	〃	〃 〃	口径10.2	ロクロナデ	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　灰白 内　オリーブ灰	～1mmの石粒	1/4	
435	110-1	〃	〃 〃	口径11.2	〃	外　ほぼ全面ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	やや密 ～1mmの石粒	1/3	
436	105-3	〃	〃 〃	口径9.6	〃	ロクロナデ	外　暗灰黄 内　灰	～1mmの石粒	〃	
437	109-4	〃	〃 〃	口径10.6	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	〃	4/5	
438	108-2	〃	〃 〃	口径9.8	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	～1mmの長石	1/4	
439	106-5	〃	〃 〃	〃	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	暗青灰	～1mmの石粒	2/5	内面底部に同心円文有
440	105-1	〃	〃 〃	口径10.4	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密	〃	
441	109-6	〃	〃 〃	口径10.3 器高4.95	〃	〃	青灰	～1mmの石粒	1/5	
442	103-4	〃	〃 大形蓋	口径19.4	〃	外　カキメ 内　ロクロナデ	灰	～5mmの長石等	1/8　口縁一部残存	
443	109-5	〃	〃 有蓋高杯蓋	口径10.4	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	～1mmの石粒	1/4	
444	107-1	〃	〃 〃	口径12.3	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	緑灰	～2mmの長石	〃	
445	111-1	〃	〃 〃	口径12.1	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	やや粗 ～1mmの石粒	1/5	
446	109-3	〃	〃 〃	口径12.0	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	～2mmの石粒	1/2	
447	102-1	〃	〃 高杯脚	底径9.2	——	ロクロナデ	灰	～1mmの長石等	2/5	
448	105-4	〃	〃 有蓋高杯	口径10.0 器高8.35 底径7.5	ロクロナデ	〃	青灰	～1mmの石粒	底径の1/2	
449	98-6	〃	〃 〃	底径7.9	——	〃	灰白	やや密 ～1mmの細砂	脚部の2/3	
450	102-2	〃	〃 〃	口径9.7	ロクロナデ	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	～1mmの石粒	2/5	外面、ヘラケズリの部分は灰白・緑灰・褐色がマーブル状になる
451	102-6	〃	〃 高杯脚	底径8.9	——	外　カキメ 内　ロクロナデ	灰白	やや粗 ～1mmの石粒	1/8	
452	110-6	〃	〃 〃	底径9.0	——	ロクロナデ	〃	並 ～1mmの石粒	1/7	
453	107-2	〃	〃 〃	底径8.8	——	外　カキメ 内　ロクロナデ	灰	～2mmの石粒	3/4	
454	110-2	〃	〃 〃	底径10.2	——	〃	〃	やや粗 ～1mmの石粒	1/6	
455	107-6	〃	〃 〃	底径8.2	——	〃	青灰	～2mmの石粒	3/4	
456	110-4	〃	〃 〃	底径10.2	——	〃	外　暗灰 内　灰白	並 ～1mmの石粒	1/10	
457	103-3	〃	〃 無蓋高杯	口径14.6	ロクロナデ	外　波状文、ロクロケズリ 内　ロクロナデ	暗灰	やや粗　～2mmの長石・石英多い	1/8	
458	98-4	〃	〃 甕	——	——	外　波状文、ロクロナデ 内　ロクロナデ	灰	密	1/4	
459	98-2	〃	〃 〃	——	——	外　波状文、カキメ、ロクロナデ　内　ロクロナデ	灰白	並	体部完形	
460	98-3	〃	〃 〃	——	——	外　波状文、カキメ、刺突文、ナデ　内　ロクロナデ	灰	やや密 ～1mmの砂粒多	1/5	
461	97-3	〃	〃 〃	——	——	外　波状文 内　ロクロナデ	外　暗青灰 内　青灰	密	小片	
462	98-1	〃	〃 壺	口径17.3	外　波状文 内　ロクロナデ	外　タタキメ 内　ロクロナデ	灰	やや密　～3mmの砂粒やや多い	2/5	
463	103-5	〃	〃 〃	口径16.0	〃	ロクロナデ	〃	～2mmの長石等	〃	
464	98-5	〃	〃 脚	底径19.5	——	〃	外　灰 内　灰白	密	1/10以下	
465	112-1	〃	〃 甕	口径21.4	ロクロナデ	——	外　灰白 内　青灰	やや密 ～1mmの石粒	〃	
466	109-1	〃	〃 〃	口径20.5	〃	——	灰白	～1mmの石粒	1/10	
467	97-1	〃	〃 〃	——	外　波状文、ロクロナデ 内　ロクロナデ	——	外　灰 内　灰白	やや密 ～1mmの砂粒多	1/10以下	
468	103-6	〃	〃 器台	底径27.2	——	外　タタキメ？ 内　ロクロナデ	灰	やや密 長石微粒多い	1/8	

遺物観察表

稲生遺跡　No.14

遺物番号	登録番号	遺構(出土位置)	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部(杯部)	調整技法の特徴 体部(脚部・底部)	色調	胎土	残存度	備考
469	97-2	SD40	須恵器 器台	——	——	外　波状文、ロクロナデ 内　ロクロナデ	外　灰白 内　灰	密 ～2mmの砂粒少	2/3	
470	100-1	〃	〃 甕	口径21.6	ロクロナデ	外　タタキメ 内　風化のため不明	灰白	密 ～1mmの細砂	口縁の1/2	
471	92-2	〃	〃 〃	——	——	外　タタキメ、スリ消シ 内　ナデ	外　青灰 内　灰	密	少片	
472	92-1	〃	〃 〃	——	——	外　タタキメ、半スリ消シ 内　タタキメ、半スリ消シ	外　灰 内　灰白	〃	〃	
473	93-1	〃	〃 〃	——	——	〃	灰白	〃	〃	
474	93-2	〃	〃 〃	——	——	外　タタキメ 内　タタキメ	〃	密 ～1mmの長石少	〃	
475	168-1	〃	石製品 石臼	——	——	——	——	——	一部	
476	144-3	A-P21、包	土師器 杯	口径12.8 器高4.7	ヨコナデ	外　指オサエ、ナデ 内　ナデ	橙	密 ～3mmの小石少	3/5	
477	134-1	A-N24、〃	〃 壺	口径20.0	風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙	粗　～2mmの長石・石英等多い	口縁の1/5	
478	123-3	A-K1、2、〃	〃 〃	底径5.6	——	〃	橙	やや密 ～1mmの砂粒	底部ほぼ完形	底部外面に木葉模様痕有
479	126-3	B-F5、〃	須恵器 甕?	——	——	外　ロクロケズリ、ロクロナデ 内　ナデ	浅黄橙	密 ～1mmの細砂少	1/4	
480	117-8	B-K2、〃	土師器 手づくね土器	口径5.0 器高5.8	ナデ	指オサエ、ナデ	明赤褐	密 ～1mmの細砂多	ほぼ完形	
481	117-7	南トレンチ、〃	〃 〃	口径5.0 器高5.6	風化のため不明	外　風化のため不明 内　指オサエ	橙	やや密 ～1mmの細砂	〃	
482	117-3	A-L25、〃	〃 〃	口径3.9 器高3.9	指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	浅黄橙	密 ～1mmの細砂	〃	
483	144-1	A-P22、〃	〃 S字甕	口径14.0	ヨコナデ	外　ハケメ 内　ナデ	明黄褐	やや粗 ～6mmの石粒	口縁部の2/5	
484	143-3	A-023、〃	〃 〃	口径17.0	〃	外　ハケメ 内　指オサエ	外　灰白 内　灰黄褐	～1mmの石粒	1/5	
485	139-3	B-J4、〃	〃 〃	口径14.8	〃	外　ハケメ 内　ナデ	浅黄橙	粗 ～5mmの長石	口縁部の2/5	
486	148-3	A-I24、〃	〃 〃	口径16.6	〃	外　ハケメ 内　風化のため不明	淡黄	粗 ～2mmの石粒	1/5	
487	133-4	A-M24、〃	〃 〃	口径12.7	〃	外　ハケメ 内　ナデ	浅黄橙	やや密　～3mmの石英・長石	口縁部の1/2	
488	139-1	B-I4、〃	〃 S字甕台部	底径10.8	——	指オサエ	〃	やや粗 長石の細砂少	台部完形	
489	133-3	A-M25、〃	〃 〃	底径10.6	——	指オサエ、ナデ	外　浅黄橙 内　褐灰	やや粗　～2mmの長石やや多	台部ほぼ完形　一部欠	
490	146-3	A-X19、〃	〃 〃	底径10.2	——	風化のため不明	浅黄橙	密 ～1mmの長石粒	台部の4/5	
491	126-5	A-Q25、〃	〃 〃	底径9.4	——	外　指オサエ、ハケメ？ 内　ナデ	にぶい橙	密 ～3mmの砂粒	台部完形	
492	137-6	B-K1、〃	〃 〃	底径8.8	——	ナデ、指オサエ	黄橙	密 ～1mmの石粒	〃	
493	142-1	A-024、〃	〃 甕	口径18.0	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙	密 長石微粒	口縁の3/4	
494	142-2	〃、〃	〃 〃	口径19.2	〃	〃	〃	密	口縁の2/3	
495	142-3	〃、〃	〃 〃	口径21.2	外　ヨコナデ 内　ハケメ	外　ハケメ 内　ナデ	橙	密 長石微粒	口縁の3/5	
496	150-2	A-P21、〃	〃 〃	口径14.1 器高21.7	ヨコナデ	外　指オサエ、ナデ 内　ナデ	〃	密 ～0.5mmの石粒有	ほぼ完形	
497	33-2	B-I1、〃	〃 高杯	口径15.0 底径12.0 器高11.5	ナデ	外　ナデ 内　ナデ、指オサエ	〃	密 雲母微粒	〃	
498	142-4	A-024、〃	〃 高杯脚部	底径8.8	——	ナデ	〃	密	脚部の3/5	
499	139-2	B-J3、〃	〃 〃	底径8.5	——	外　風化のため不明 内　ヨコナデ、シボリ痕	〃	やや粗 ～1mmの長石	脚部ほぼ完形 底径部3/5欠	
500	139-4	B-J4、〃	〃 〃	——	——	風化のため不明	浅黄橙	やや粗　～1mmの石・細砂	一部	
501	150-1	A-P21、〃	〃 甑	口径27.4	ヨコナデ	ナデ？	淡黄橙	やや密 ～4mmの小石粒	口縁の2/5	
502	147-1	A-J24、〃	〃 〃	底径7.6	——	風化のため不明	黄橙	並 ～1mmの石粒	底部完形	
503	117-4	A-K23、〃	土錘	直径1.0～1.1 長さ2.65	——	——	にぶい橙	密	完形	
504	117-6	A-K22、〃	〃	直径1.0 長さ2.7	——	——	灰褐	〃	ほぼ完形	

遺物観察表

稲生遺跡　No.15

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
505	117-5	東側アゼ	土製紡錘車	直径3~3.6 幅3.1	——	ナデ	灰黄褐 にぶい橙	密	一部欠	
506	117-2	A-021、包	〃	直径5.1~5.3 幅2.8	——	風化のため不明	橙 浅黄橙	〃	完形	
507	132-3	A-023、〃	〃	直径3.2 幅2.2	——	——	橙	粗 細砂多	2/3	
508	117-1	A-024、〃	〃	直径3.9~4.1 幅3.2	——	——	黄灰	密 ~1mmの細砂多	ほぼ完形	
509	132-4	B-H3、〃	須恵器 杯蓋	口径11.1 器高3.9	ロクロナデ	外　ほぼ全面ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密 ~1mmの長石	〃	
510	144-4	A-021、〃	〃 〃	口径11.4	〃	外　ほぼ全面ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　灰 内　灰白	やや粗 ~2mmの砂粒多	1/5	
511	136-1	A-K24、〃	〃 〃	口径12.2	〃	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密 ~1mmの石粒	1/6	
512	128-2	B-P1、〃	〃 〃	口径12.1 器高4.3	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	やや密 ~1mmの砂粒多	4/5	
513	131-2	B-H45、〃	〃 〃	口径12.0	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	〃	1/5	
514	141-1	A-M24、〃	〃 〃	口径12.6 器高5.1	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　青灰 内　灰	やや密 ~2mmの長石	1/2	
515	124-1	B-P1、〃	〃 〃	口径13.1	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密	1/4	
516	124-3	A-S8、〃	〃 〃	口径10.7	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密 1mmの砂粒	口縁の1/4	
517	135-1	A-L24、〃	〃 〃	口径11.3 器高4.95	〃	〃	明青灰	~1mmの石粒	1/10	
518	139-5	B-L2、〃	〃 〃	口径13.2	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　青灰 内　明青灰	密	〃	
519	130-3	A-N22、〃	〃 〃	口径13.4	〃	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密 ~1mmの砂粒	口縁の1/10	
520	142-5	A-023、24、〃	〃 〃	口径12.4 器高4.0	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	やや密 ~2mmの長石少	2/5	
521	138-1	A-L24、〃	〃 〃	口径13.4 器高4.8	〃	〃	青灰	~2mmの小石	ほぼ完形	
522	123-6	B-H2、〃	〃 〃	口径12.2 器高5.1	〃	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　青灰 内　灰	やや密 ~2mmの石英・長石多	3/5	
523	132-5	I-4 トレンチ中央、〃	〃 〃	口径15.4 器高4.8	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	やや密 ~2mmの砂粒	2/5 口縁部ほぼ欠	
524	137-5	A-K·L25、〃	〃 〃	口径13.9	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	~1mmの石粒	1/10	
525	137-2	A-K25、〃	〃 〃	口径14.7	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	〃	2/5	
526	142-9	A-Q24、〃	〃 〃	口径14.2 器高4.0	〃	〃	青灰	密　~1mmの長石微粒	〃	
527	145-1	A-M23、〃	〃 〃	口径12.2 器高5.2	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	明青灰	粗	ほぼ完形	
528	41-5	〃	〃 〃	口径15.0 器高4.8	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	やや密 ~0.5mmの長石	口縁の1/8	
529	29-5	B-J1、〃	〃 〃	口径10.8 器高4.5	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	粗 ~4mmの小石	ほぼ完形	内面に2mm程の植物茎らしき痕跡有
530	145-2	A-M23 A-N25、〃	〃 〃	口径13.4 器高4.9	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密	〃	
531	137-3	A-K25 A-KL25、〃	〃 〃	口径14.3 器高4.45	〃	〃	〃	~1mmの石粒	1/6	
532	136-3	A-K25 A-L25、〃	〃 〃	口径15.1	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密 ~1mmの長石等	3/4	
533	135-5	A-K24 A-K25、〃	〃 〃	口径12.9	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密	1/10	
534	123-7	B-H3、〃	〃 〃	口径14.5 器高4.3	〃	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　青灰 内　灰白	密 細砂多い	1/2	
535	123-5	B-H2・3、〃	〃 〃	口径14.2	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密 ~1mmの細砂	〃	
536	142-8	A-024、〃	〃 〃	口径12.6	〃	外　2/3未調整 内　ロクロナデ	〃	~2mmの長石等多い	ほぼ完形	
537	123-2	B-I2、〃	〃 杯身	口径12.6 器高4.9	〃	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	やや密 細砂多い	1/4	
538	131-4	北側土手	〃 〃	口径12.4	〃	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密　~2mmの長石やや多い	口縁の1/4	
539	135-4	A-K25 A-K12、包	〃 〃	口径12.9	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	~2mmの石粒	1/10以下	
540	148-1	A-J25、〃	〃 〃	口径10.4 器高4.9	〃	〃	明オリーブ灰	やや密 ~1mmの石粒	2/3	

遺物観察表

稲生遺跡　No.16

遺物番号	登録番号	遺構(出土位置)	器種	法量(cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
541	143-4	A-022、包	須恵器 杯身	口径9.8 器高4.9	ロクロナデ	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	暗緑灰	～1mmの石粒	1/5	
542	128-4	B-P1 A-P25、〃	〃 〃	口径9.8 器高4.6	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密	1/2	
543	140-1	B-I2、包	〃 〃	口径9.6	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密 ～1mmの長石	1/10	
544	131-3	表採	〃 〃	口径10.6	〃	〃	灰白	密 ～4mmの長石	1/3	
545	126-2	A-Y20、包	〃 〃	口径10.0 器高5.2	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　灰白 内　灰	やや密 ～1mmの長石	2/3	
546	133-2	A-M25 A-M24、〃	〃 〃	口径10.0 器高5.1	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	やや密　～5mmの長石やや多い	口縁部の3/5	
547	142-7	A-Q24、〃	〃 〃	口径10.2 器高5.0	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	やや粗　～3mmの小石粒多い	1/3	
548	132-1	南トレンチ	〃 〃	口径10.9 器高4.9	〃	外　1/3未調整、1/3ロクロケズリ　内　ロクロナデ	灰	やや密　～4mmの長石等多い	完形	
549	132-6	A-Q24 A-Z25、包	〃 〃	口径10.1 器高4.8	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密 ～1mmの砂粒少	1/3	
550	124-2	C-A16、〃	〃 〃	口径12.0 器高4.3	〃	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　青灰 内　明青灰	密　～1mmの長石の細砂	2/5	
551	128-3	B-P1 A-M24、〃	〃 〃	口径12.1 器高5.2	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密 ～1mmの細砂	〃	
552	130-2	A-M25 B-J4、〃	〃 〃	口径13.5 器高5.3	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　オリーブ 灰　内　赤灰	やや密 ～1mmの細砂多	1/2	
553	133-1	A-L23 A-M24、〃	〃 〃	口径11.2 器高4.3	〃	〃	青灰	やや密　～3mmの砂粒やや多	2/3	
554	118-2	B-S5、〃	〃 〃	口径12.6 器高4.3	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰 暗青灰	密	ほぼ完形	
555	123-4	B-H3、〃	〃 〃	口径11.4	〃	外　ほぼ全面ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密 黒褐色の細砂	1/3	
556	135-6	A-L24、〃	〃 〃	口径13.8 器高4.35	〃	外　3/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	～1mmの石粒	1/5	
557	135-2	B-K1、〃	〃 〃	口径13.5	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	～2mmの石粒	〃	
558	139-6	B-M1、〃	〃 〃	口径13.0	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密 ～2mmの長石	1/10	
559	131-1	B-H3、〃	〃 〃	口径11.7	〃	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密 ～1mmの細砂	2/5	
560	149-4	A-K23、〃	〃 〃	口径14.0前後	〃	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	並	底体部の1/6	
561	149-1	A-L24 A-K23、〃	〃 〃	口径12.6 器高5.0	〃	外　1/4ロクロケズリ 内　ロクロナデ、同心円	外　青灰 内　紫灰	やや粗　～1mmの長石等多	口縁の1/4	内面底部に同心円文後にナデの痕跡有
562	136-2	A-L25 A-K25、〃	〃 〃	口径11.5 器高5.2	〃	外　1/3未調整 内　ロクロナデ	明青灰	並 ～1mmの石粒	1/6	
563	124-4	不明	〃 〃	口径12.1	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	明青灰 青灰	密	1/3	
564	131-5	B-H3、包	〃 〃	口径12.3	〃	ロクロナデ	灰	〃	口縁部の1/10以下	
565	149-3	A-L23、包	〃 〃	口径11.8 器高4.0	〃	外　1/2未調整、1/4ロクロケズリ　内　ロクロナデ	紫灰 灰	やや密	底体部の1/2	外面底部はヘラ切痕か？
566	123-1	B-H3、包	〃 〃	口径12.4 器高3.8	〃	外　1/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	密 ～2mmの砂粒少	1/2	
567	137-4	A-KL24 A-KL25、〃	〃 〃	口径12.8	〃	外　1/3未調整 内　ロクロナデ	灰白	～1mmの石粒	1/7	
568	136-4	A-K25 A-K24、〃	〃 有蓋高杯蓋	口径15.0 器高5.95	〃	外　刺突文、ほぼ全面ヘラケズリ　内　ロクロナデ	灰	密 ～1mmの砂粒少	1/10	
569	135-3	A-L24 A-M23、〃	〃 〃	——	——	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰	～2mmの石粒	2/3	
570	148-2	B-I1、〃	〃 〃	口径11.9 器高5.15	ロクロナデ	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	外　褐灰 内　明緑灰	粗 ～1mmの砂粒	1/4	
571	148-4	A-J25、〃	〃 有蓋高杯	底径10.1	——	外　ロクロケズリ、カキメ 内　ロクロナデ	外　黒・灰 内　灰赤	並 ～1mmの砂粒	1/10	
572	126-1	〃	〃 〃	口径8.9 底径8.0 器高8.2	ロクロナデ	外　1/2ロクロケズリ、カキメ　内　ロクロナデ	青灰	密 長石の細砂	脚部完形 杯部1/3	
573	127-3	A-L22、〃	〃 高杯脚部	底径10.0	——	ロクロナデ	灰白 灰	密　～1mmの長石や黒い砂粒多	脚部の1/2	
574	128-7	A-K23、〃	〃 〃	底径8.6	——	〃	灰	密　～1mmの長石・石英	脚部の1/4	
575	146-4	A-W19、〃	〃 有蓋高杯	底径9.0	——	外　1/2ロクロケズリ 内　ロクロナデ	〃	並 ～4mmの小石粒	脚部ほぼ完形	
576	11-3	B-L1、〃	〃 〃	口径10.35	ロクロナデ	外　3/4以上ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	粗 ～4mmの小石	口縁の2/5	

遺物観察表

稲生遺跡　No.17

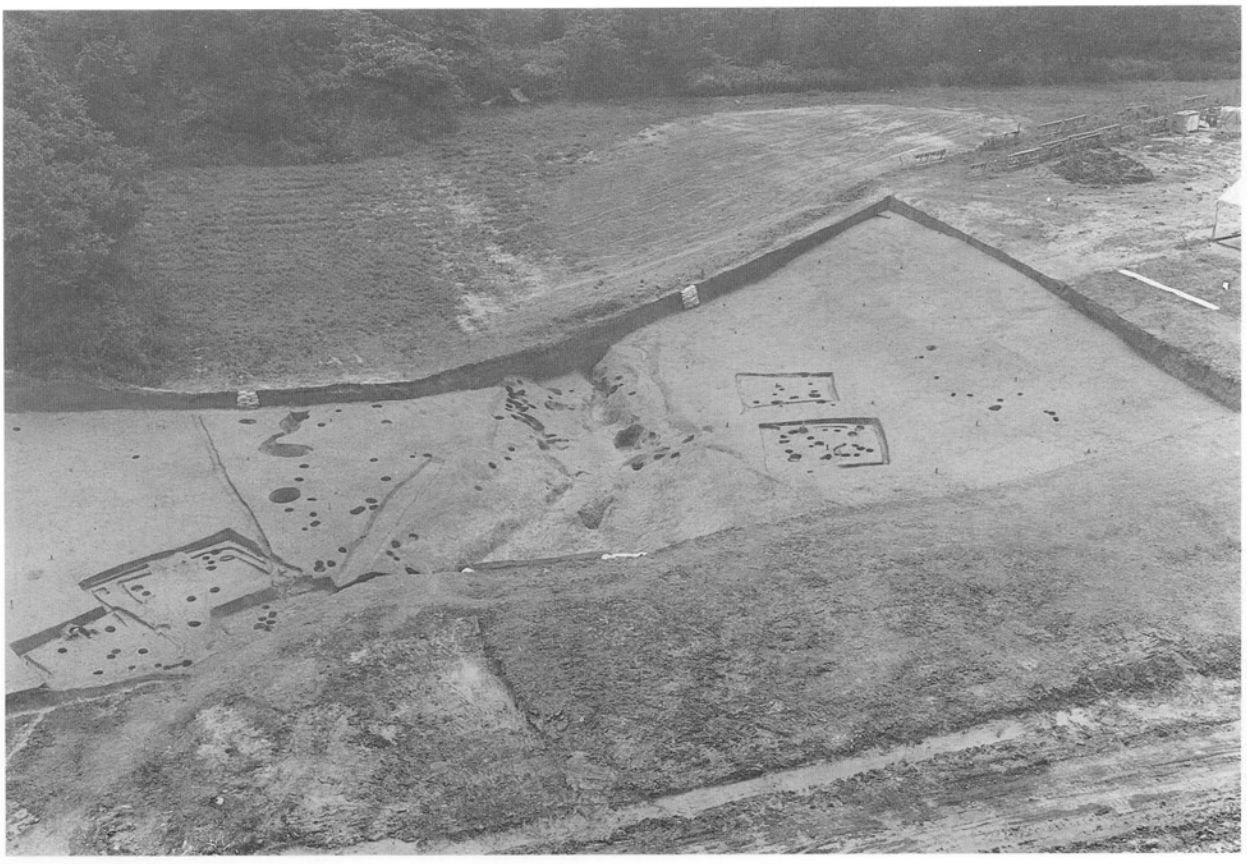
遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)	調整技法の特徴 口縁部（杯部）	調整技法の特徴 体部（脚部・底部）	色調	胎土	残存度	備考
577	145-3	A-M21、包	須恵器 高杯脚部	底径8.0	——	ロクロナデ	灰	並 ～3mmの長石	脚部ほぼ完形	
578	125-2	A-M23、〃	〃 〃	底径8.9	——	外　カキメ 内　ロクロナデ	〃	やや密 ～1mmの砂粒多	脚部の2/5	
579	131-6	B-H3、〃	〃 〃	——	——	外　ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白	密 ～1mmの砂	1/4	
580	120-3	A-024、〃	〃 無蓋高杯	——	——	外　ロクロケズリ、波状文 内　ロクロナデ	外　青灰 内　灰白	やや密 ～1mmの細砂多	〃	
581	125-4	A-J25、〃	〃 〃	口径15.1	ロクロナデ	外　波状文 内　ロクロナデ	灰	密 ～1mmの細砂	口縁部の1/10	
582	125-5	B-G4、〃	〃 〃	口径13.3前後	〃	〃	灰白	やや密 ～1mmの長石	口縁部の1/10以下	
583	120-2	A-Q25、〃	〃 〃	口径11.0	〃	外　波状文、カキメ 内　ロクロナデ	外　灰 内　灰黄	密　～1mmの細砂やや多	杯部の1/2	
584	129-2	B-H3、〃	〃 〃	口径11.4 底径9.4 器高8.6	〃	ロクロナデ	灰白	密 細砂多	脚部1/2 杯部2/5	
585	127-2	A-021、〃	〃 鈴台小壺	口径10.3	〃	外　波状文、ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰白 灰	やや密　～4mmの長石等砂粒	1/2	
586	122-1	A-N25 B-P1 B-M1、〃	〃 甕？	——	外　波状文 内　ロクロナデ	外　波状文、タタキメ 内　工具による横ナデ	灰白	密 ～2mmの長石	2/3	
587	144-2	A-P21 A-Q21、〃	〃 〃	——	——	外　カキメ、刺突文、ナデ 内　指オサエ、ロクロナデ	灰	密 細砂少	〃	
588	121-1	B-K3、〃	〃 〃	——	——	外　波状文 内　ロクロナデ	外　灰 内　灰白	密 ～1mmの細砂少	1/4	
589	128-1	A-P25、〃	〃 〃	——	——	外　カキメ、ロクロケズリ 内　ロクロナデ	青灰 紫灰	やや密　～7mmの長石等やや多	体部完存	
590	125-6	B-P1 A-P24 B-01 A-P25 A-L24、〃	〃 〃	——	——	外　2/3ロクロケズリ 内　ロクロナデ	灰	密　～2mmの砂粒やや多	体部の1/2	
591	128-5	A-P22、〃	〃 短頸壺？	口径10.4前後	ロクロナデ	外　刺突文 内　ロクロナデ	〃	密 ～2mmの長石	口縁部の1/10以下	
592	120-5	B-L1、〃	〃 不明	口径10.4	外　波状文 内　ロクロナデ	——	外　灰 内　暗灰	密　～1mmの細砂やや多	2/5	
593	125-1	B-K1、〃	〃 〃	口径13.4前後	〃	——	〃	〃	口縁部の1/10以下	
594	120-4	不明	〃 〃	口径12.9	〃	——	灰 暗灰	〃	口縁部の2/5	
595	130-1	I-4C トレンチ中央	〃 〃	口径15.8	ロクロナデ	——	灰白	密 細砂多い	口縁部の1/10	
596	128-6	A-Q25、包	〃 壺	口径14.4前後	外　波状文 内　ロクロナデ	——	〃	密 ～1mmの長石少	口縁部の2/5	
597	125-3	A-L24、〃	〃 壺（甕）	口径15.1	〃	——	灰	やや密 ～1mmの細砂少	口縁部の1/10以下	
598	134-2	A-M25、〃	〃 甕	口径17.9	ロクロナデ	——	灰白	〃	〃	
599	140-2	B-H2 B-H3 B-I3、〃	〃 壺（甕）	口径15.1	〃	——	浅黄橙	密	口縁部の1/3	
600	127-5	B-G3、〃	〃 〃	口径16.2	外　カキメ 内　ロクロナデ	——	暗青灰	〃	口縁部の2/5	
601	129-3	A-023 A-022、〃	〃 〃	口径19.6	外　波状文 内　ロクロナデ	——	灰白	密　～3mmの長石やや多い	口縁部の1/10	
602	119-1	A-Q25 A-P24、〃	〃 甕	口径30.8	〃	——	灰	密 ～2mmの砂粒少	口縁部の1/5	
603	119-2	B-P1、〃	〃 〃	口径24.3	〃	外　ハケメ 内　ロクロナデ	外　灰黄 内　灰	密 ～1mmの長石少	口縁部の2/5	
604	129-1	A-023、〃	〃 〃	口径27.8	ロクロナデ	——	灰白	密　～1mmの細砂やや多	口縁部の1/10	
605	127-4	B-P1、〃	〃 壺	口径14.0	〃	ロクロナデ	暗青灰	〃	口縁部の1/4	
606	30-1	A-L24 A-N24、〃	〃 甕	口径19.2	外　カキメ 内　ロクロナデ	外　タタキメ 内　同心円文	〃	やや粗	口縁部の1/2	
607	113-1	A-024 A-M24 A-N23、〃	〃 〃	口径21.0 器高31.2	ロクロナデ	外　タタキメ 内　同心円文（半スリ消シ）	灰	～2mmの石粒	ほぼ完形	
608	120-1	B-P1 A-P24 A-Q25、〃	〃 〃	——	外　波状文 内　ロクロナデ	——	外　暗青灰 内　灰	やや密　～1mmの長石・石英や黒色の細砂	1/4	
609	146-7	A-W19、〃	〃 甕？	——	——	外　タタキ 内　ロクロナデ	淡灰	密	小片	
610	121-3	A-P23 A-022、〃	〃 〃	——	——	外　タタキメ 内　ロクロナデ	外　灰白 内　灰	密 ～5mmの石粒多	〃	
611	121-4	A-N24、〃	〃 〃	——	——	〃	〃	密 ～6mmの石粒	〃	
612	121-2	A-024、〃	〃 〃	——	——	〃	外　灰 内　灰白	密　～2mmの砂粒やや多	〃	

PL5

調査前全景（西から）

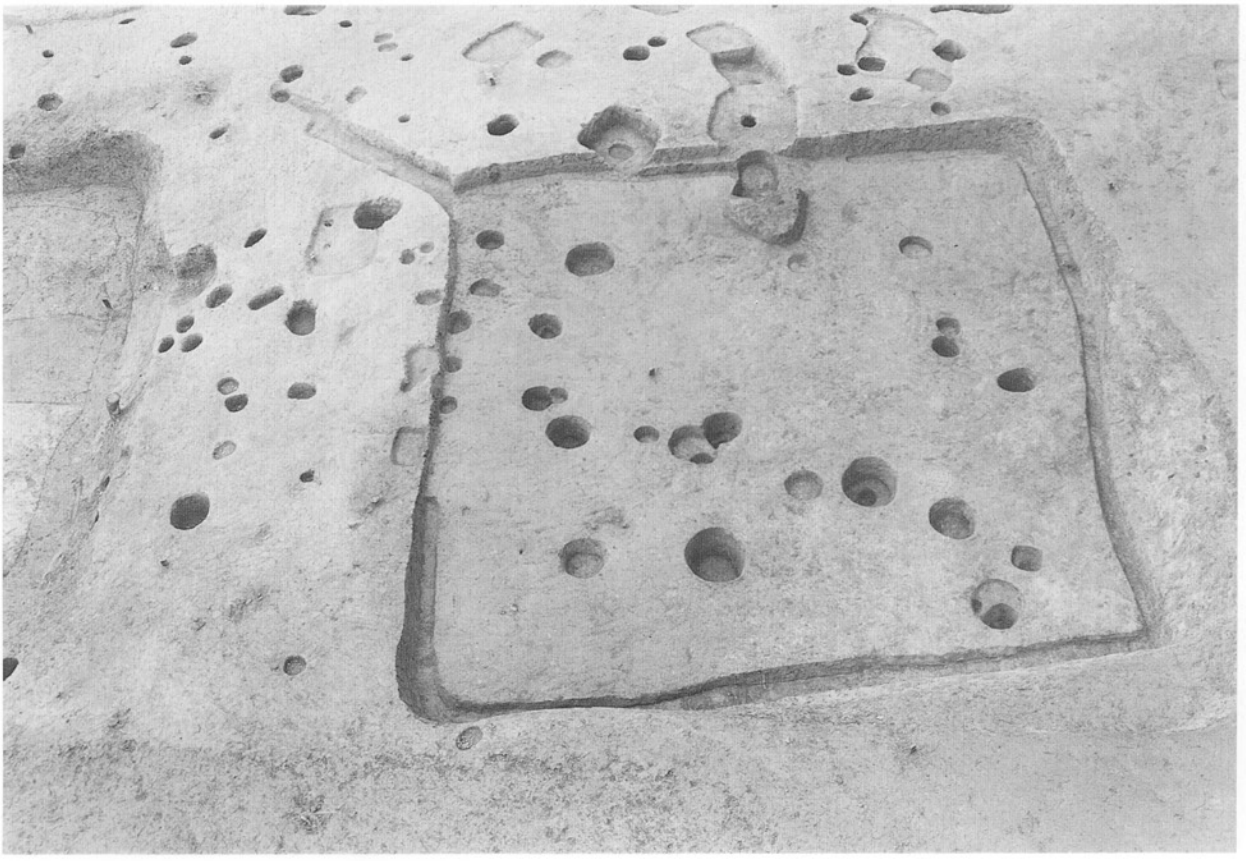
調査後全景（西から）

調査区北半完掘状況（西から）



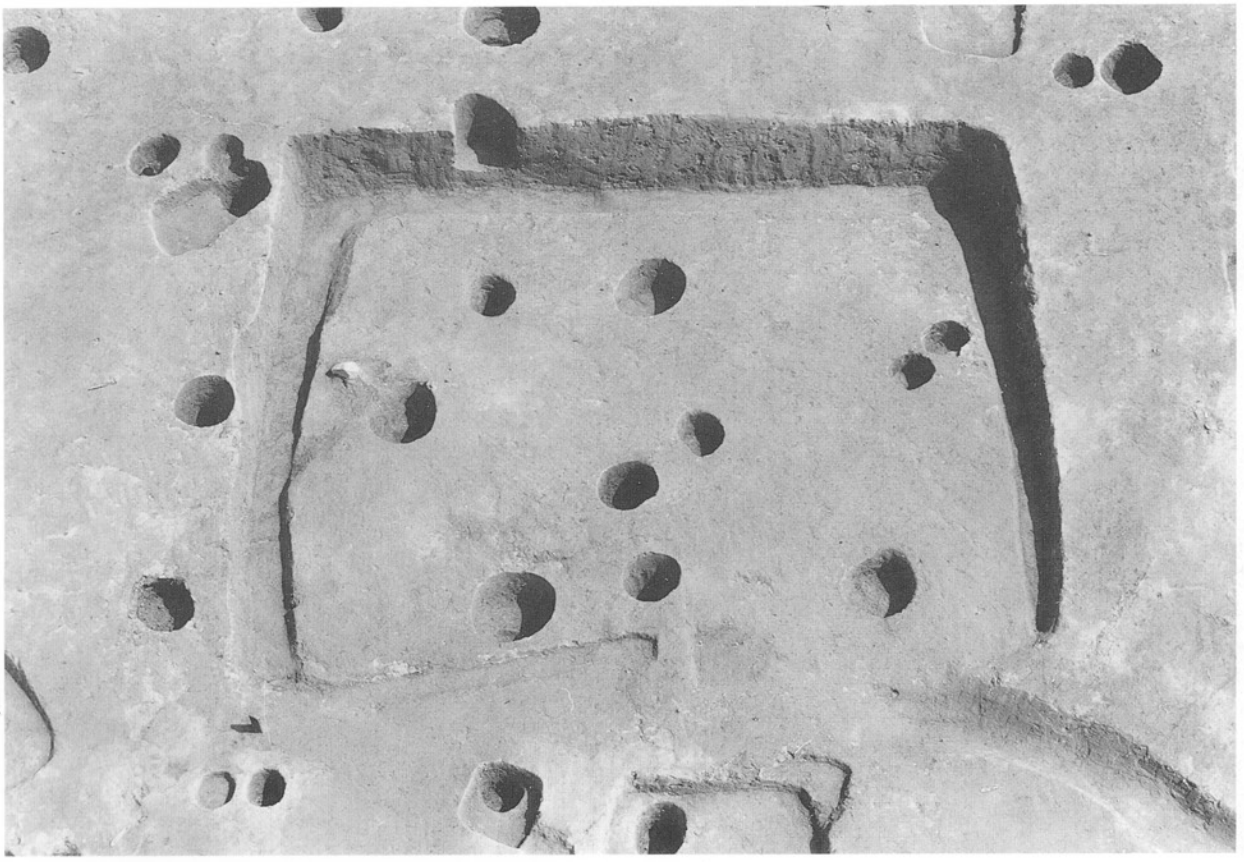
調査区南半完掘状況（西から）

ＳＨ１（南から）



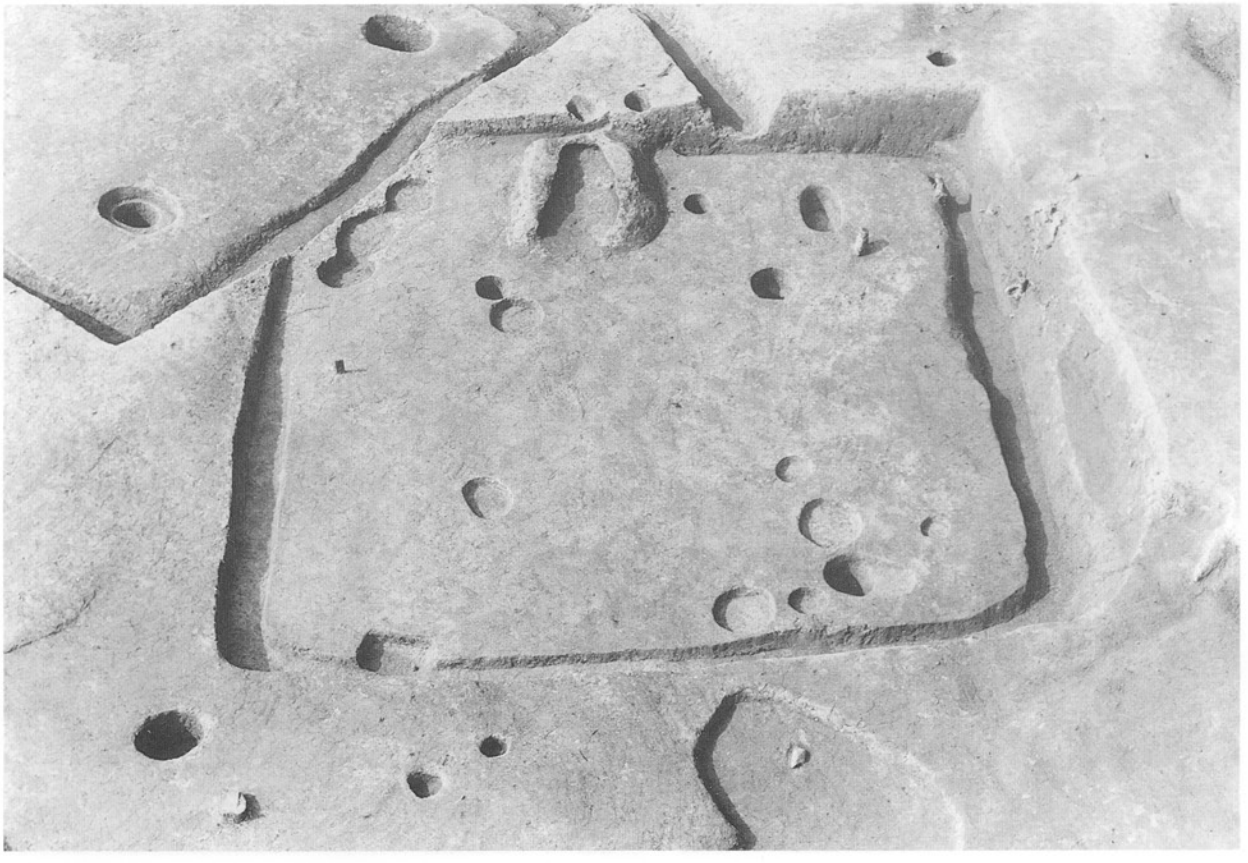
ＳＨ２（南から）

ＳＨ３遺物出土状況（右奥の甕脚台の下に竈支柱石、南から）



ＳＨ３（北から）

ＳＨ４遺物出土状況（北から）

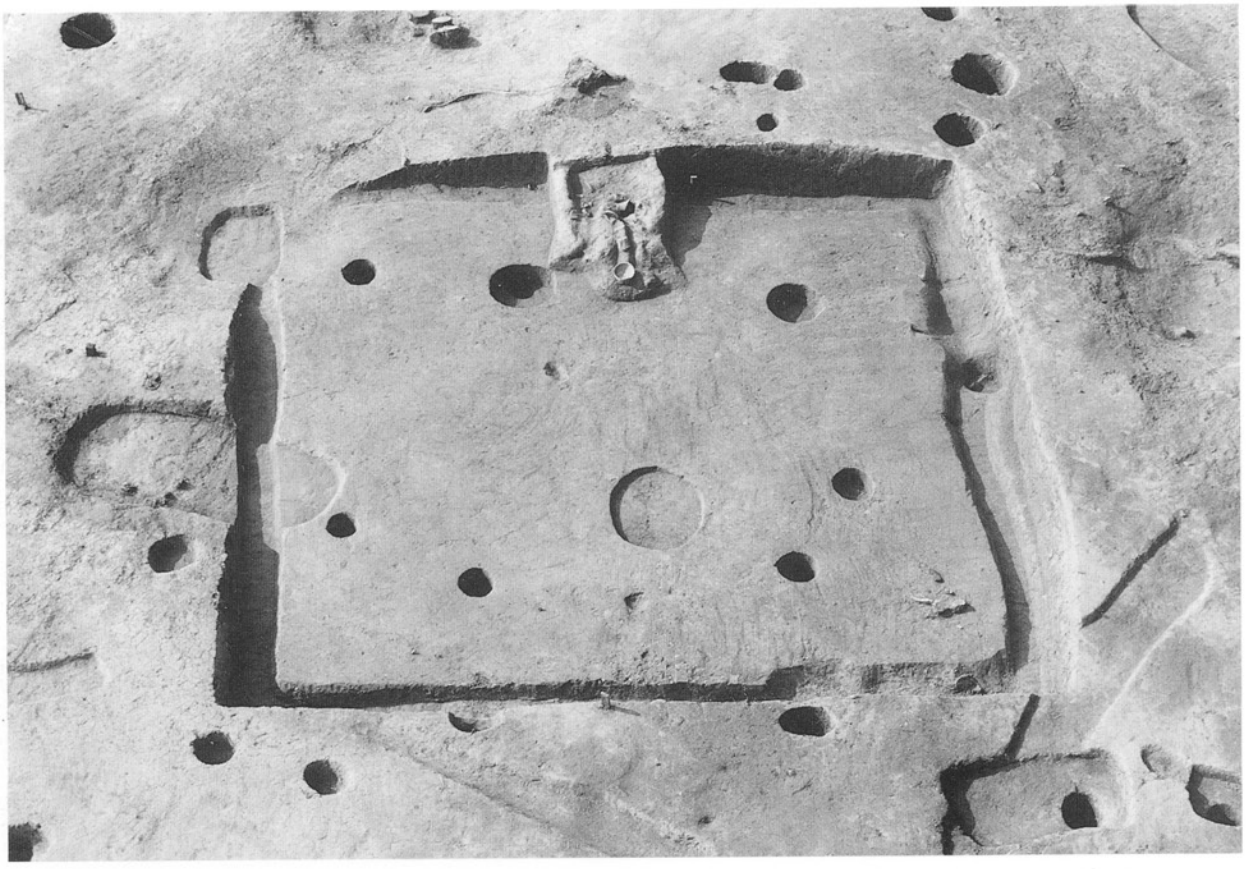


ＳＨ４（南から）

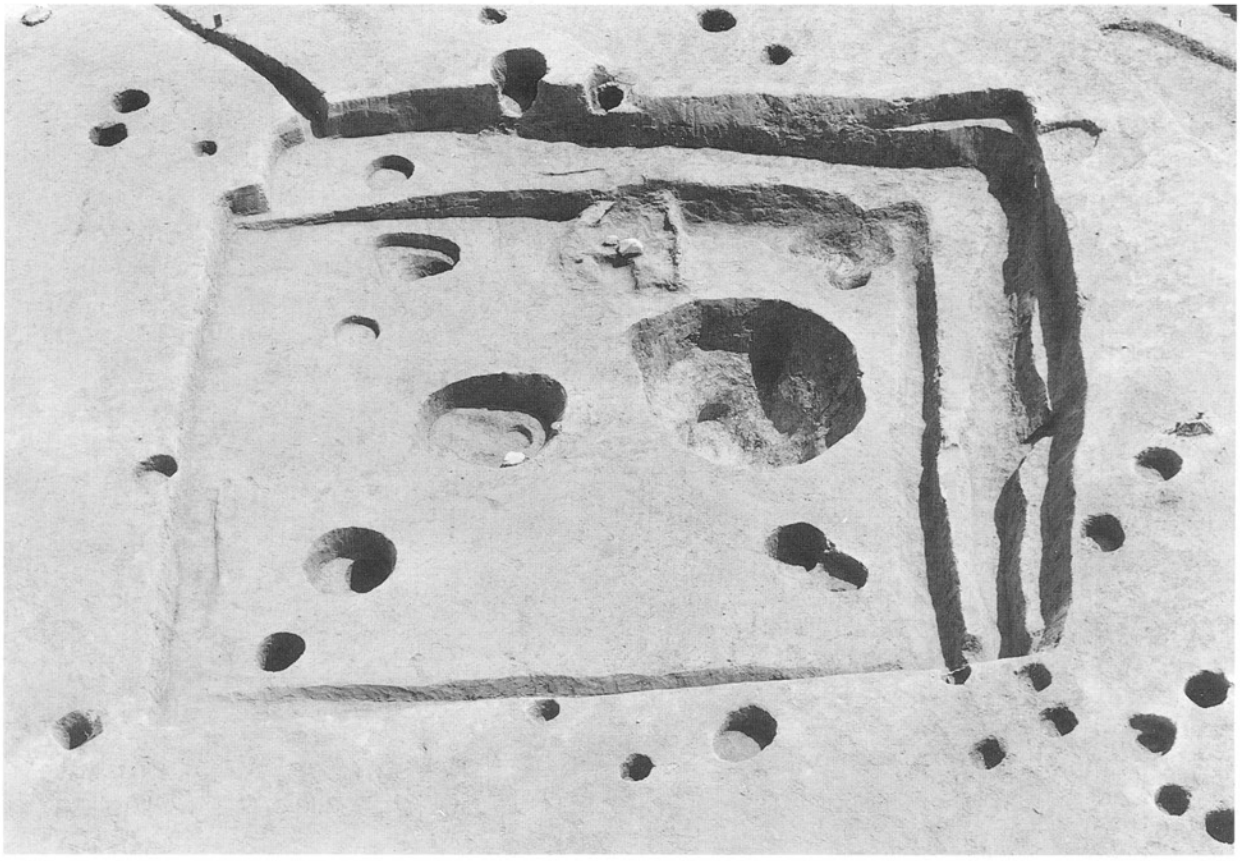
ＳＨ５竈支柱石の上を覆う須恵器杯身（西から）

ＳＨ６（南西から）

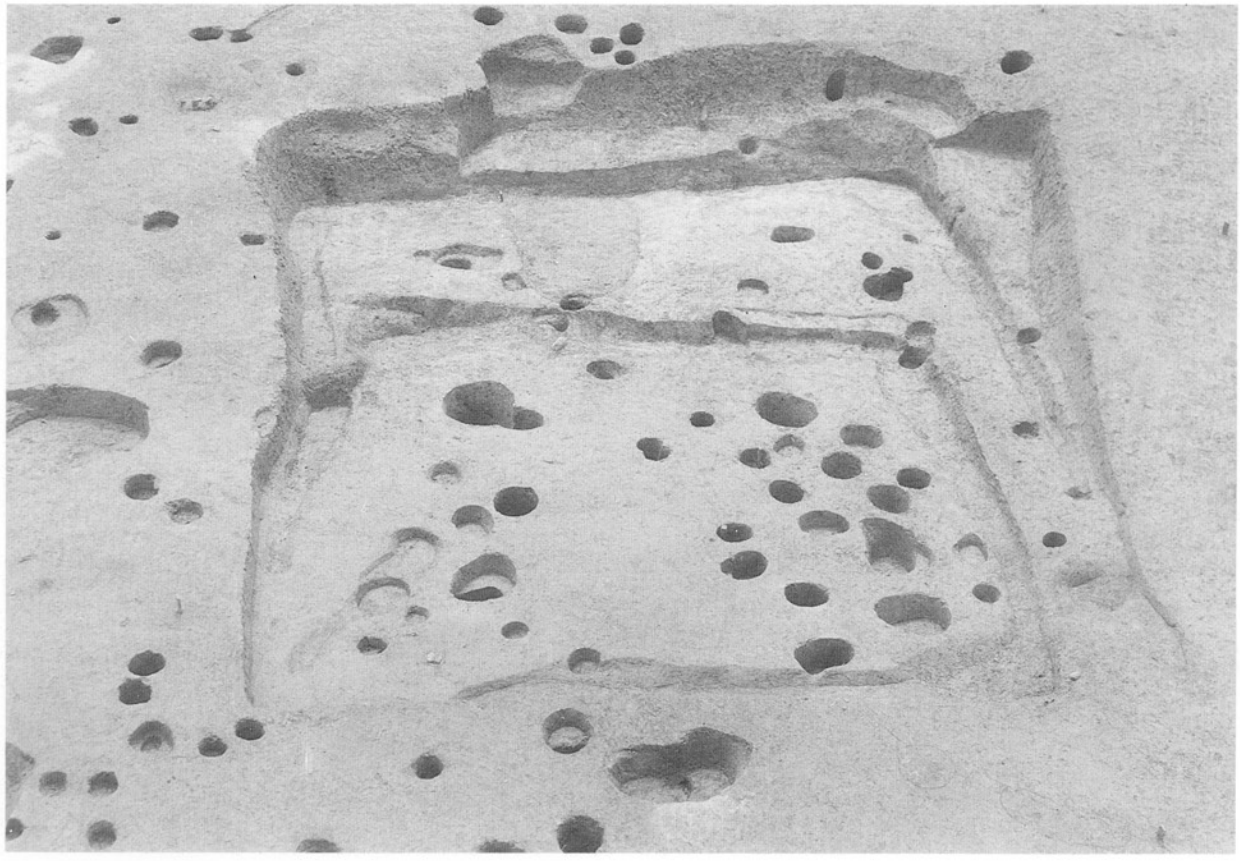
ＳＨ７竈（東から）



ＳＨ７（南から）

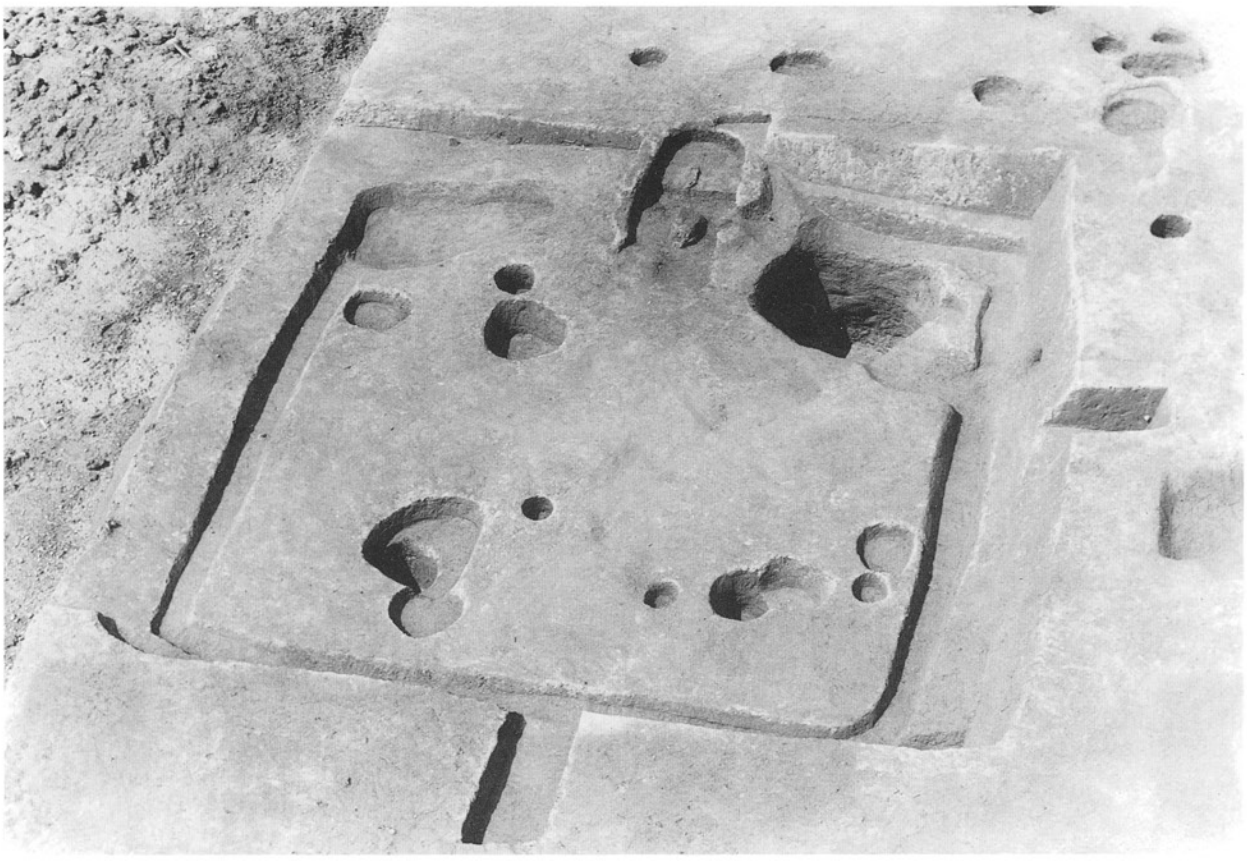


SH9～11（西から）

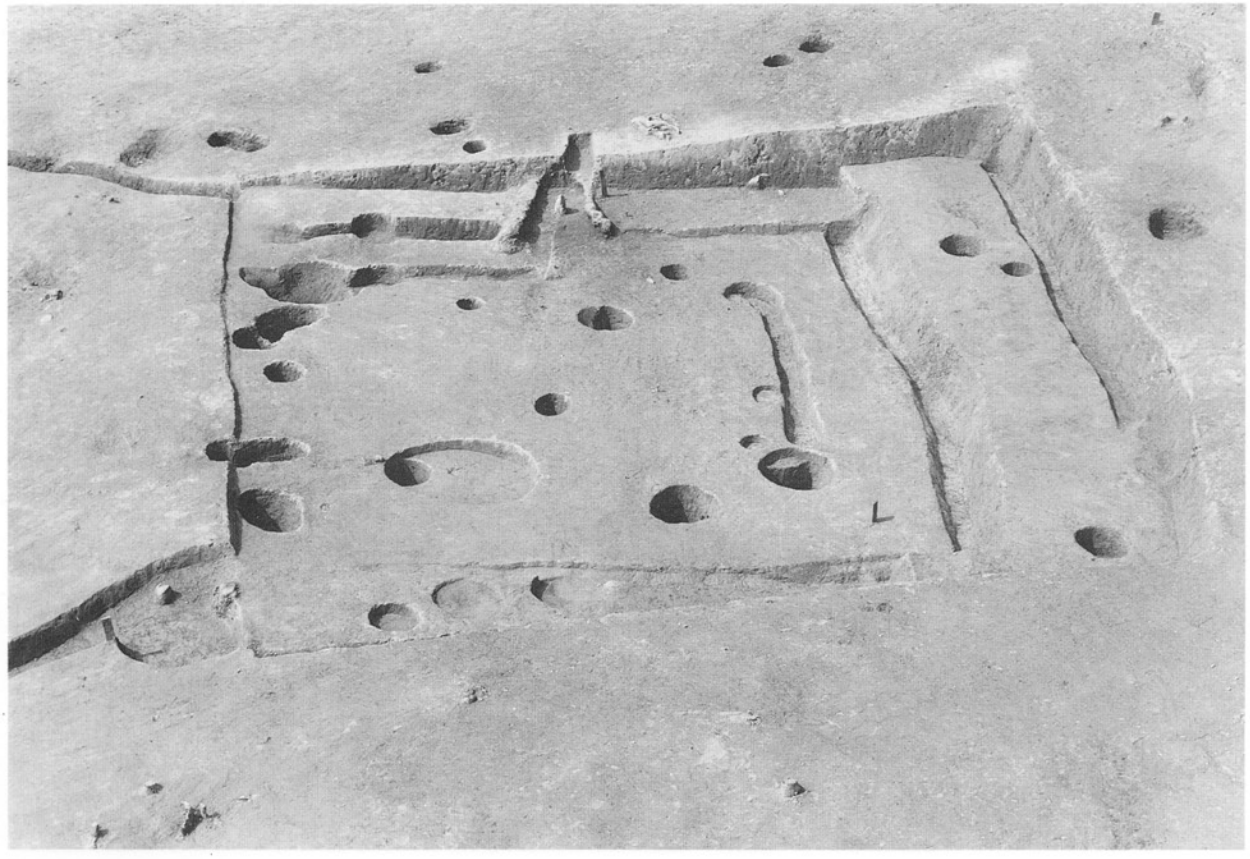


SH12～14（西から）

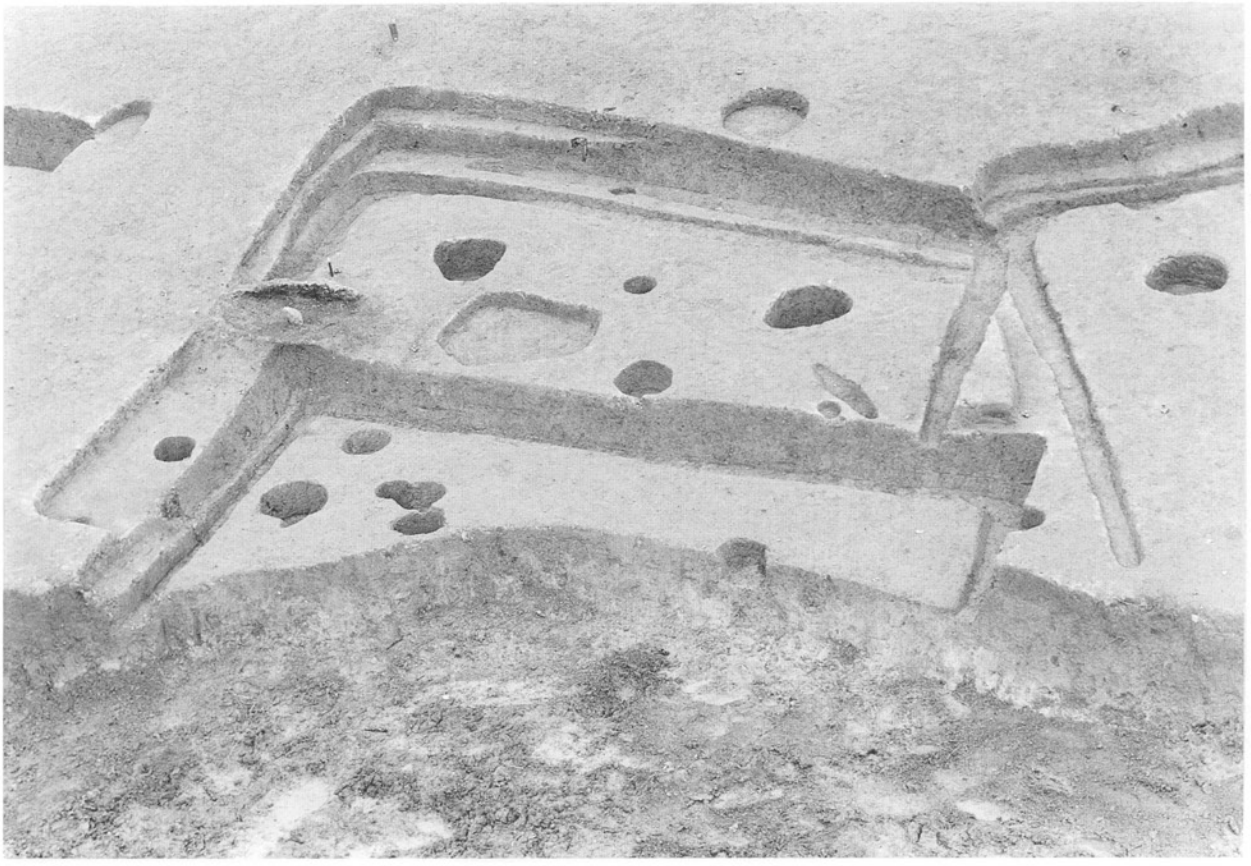
PL13



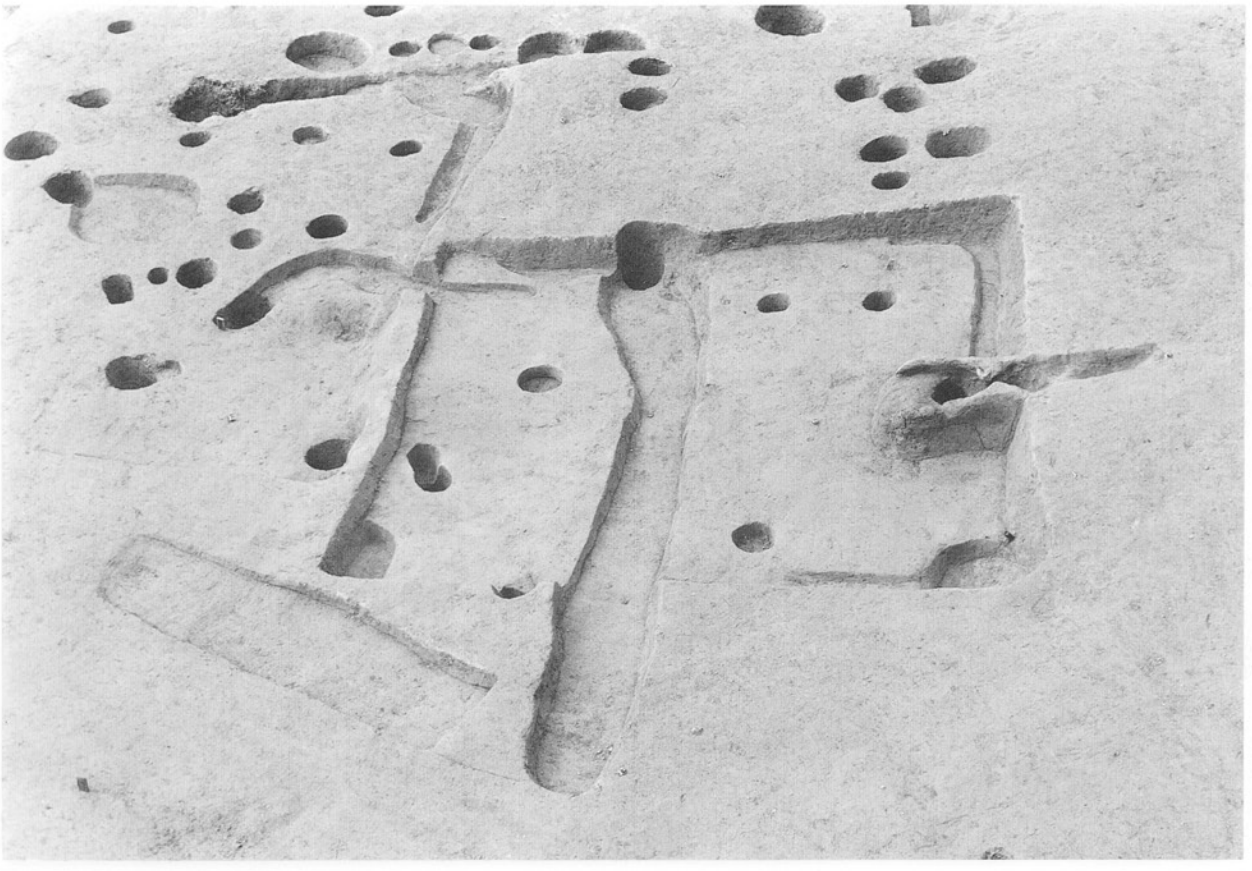
SH15～17（南から）



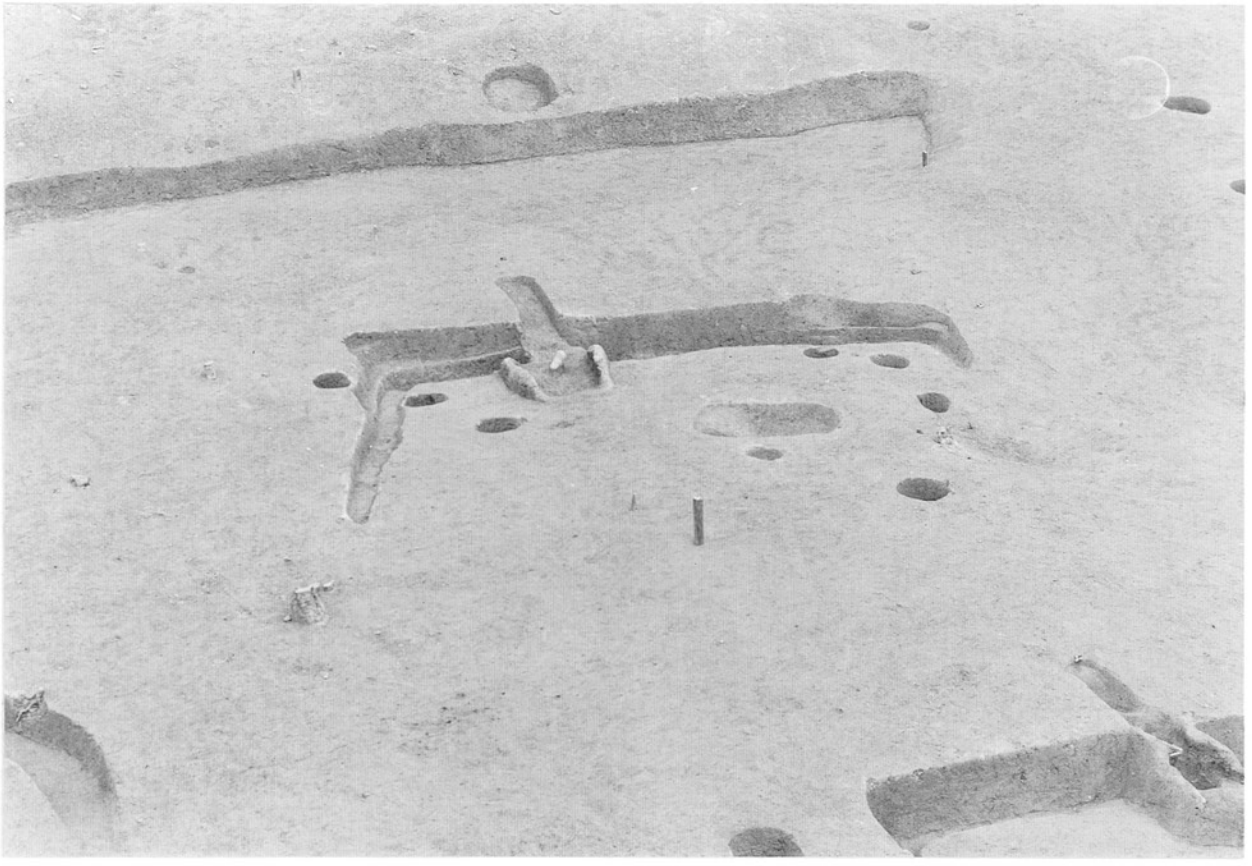
SH18～20（南から）



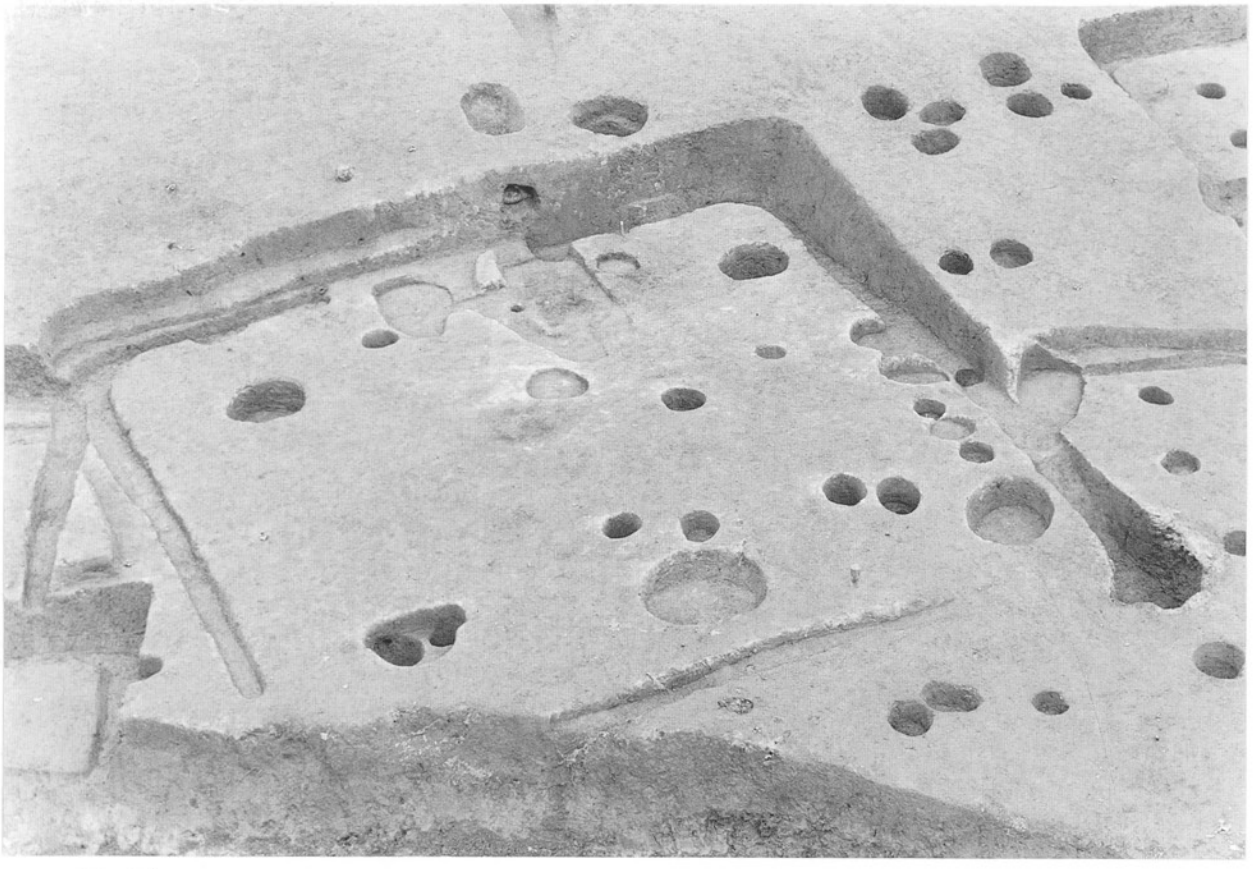
SH21～23（西から）



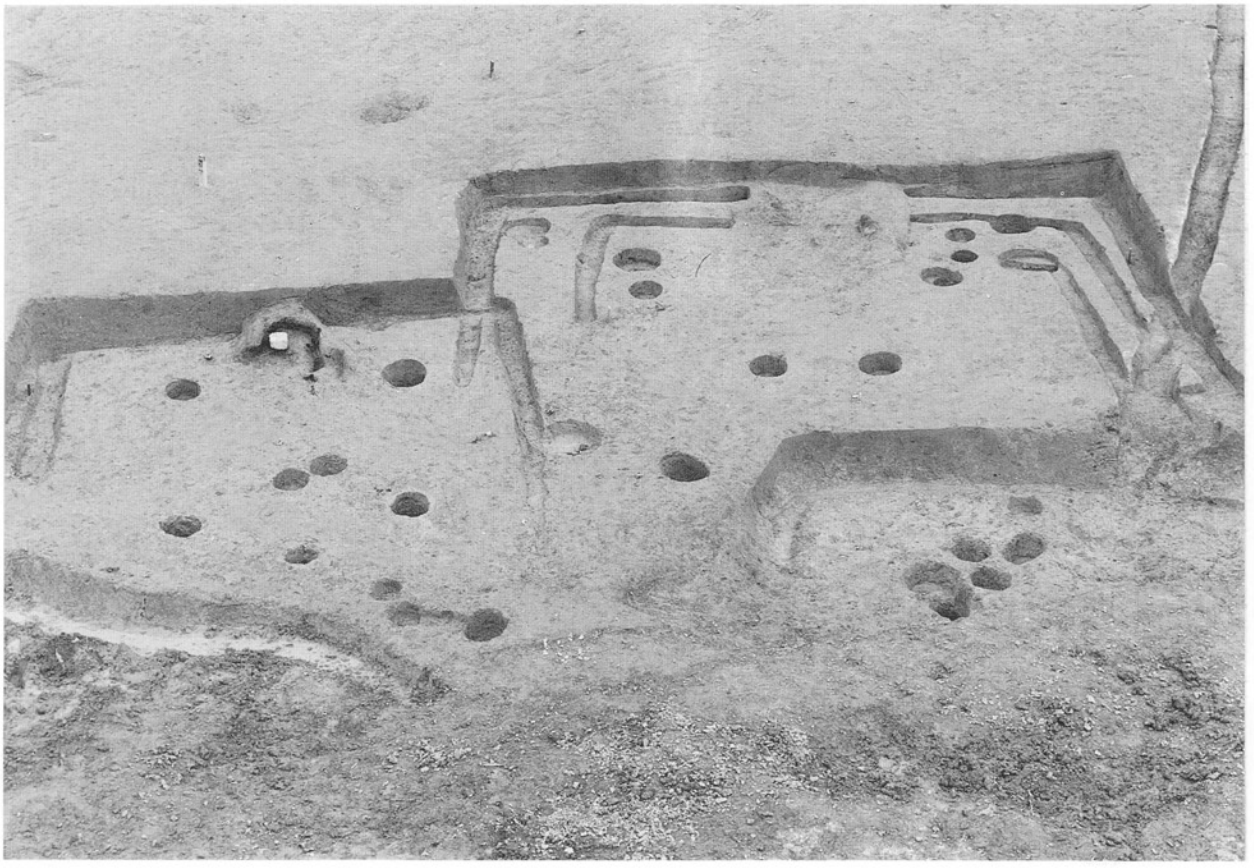
SH24（右）・25（左）（南から）



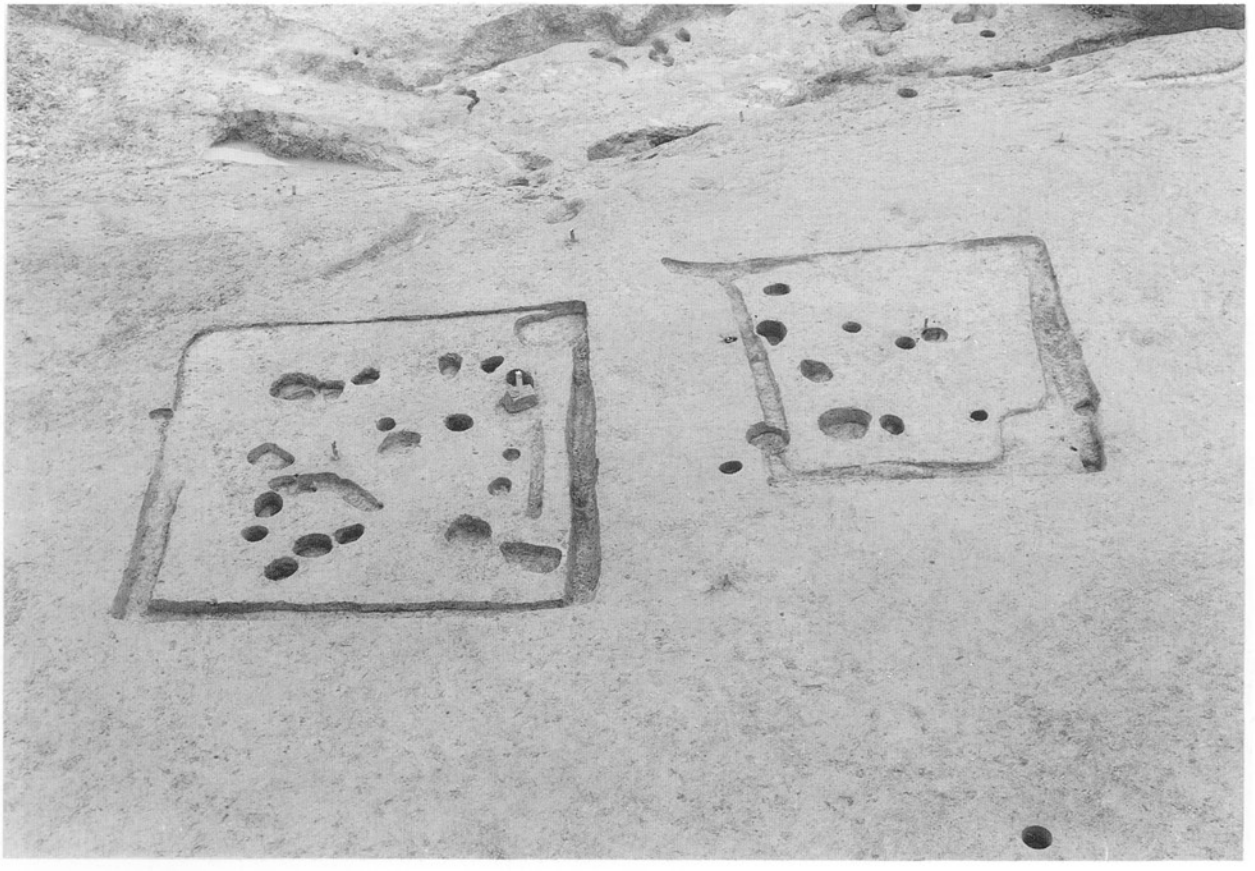
ＳＨ26（手前右はＳＨ24，西から）



ＳＨ27（西から）



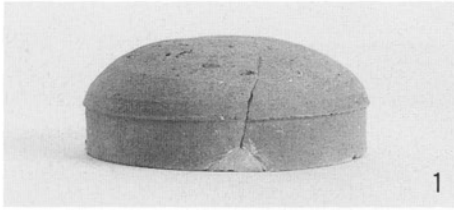
SH30（左）・28～29（中央）・31（右下）（西から）

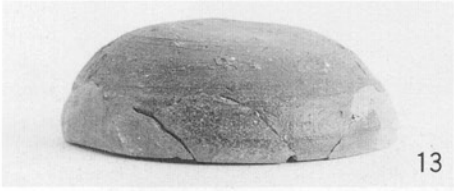


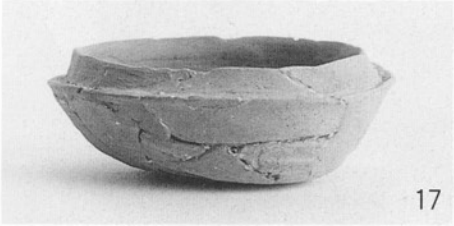
SH32（左）・33（右）（南から）

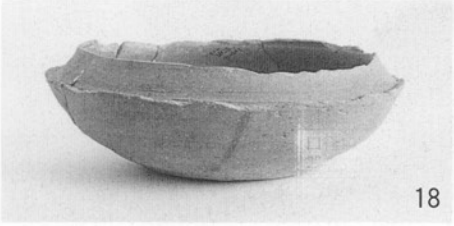
完成した中勢道路（右）と未調査のまま造成された稲生遺跡（北から）

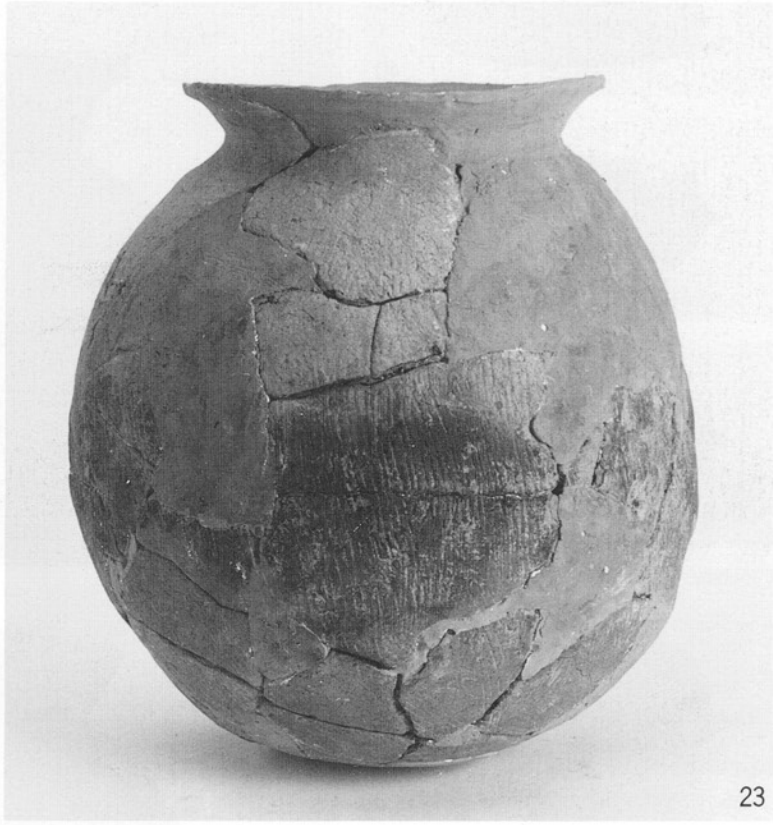
同上（南から）











出土遺物（1：3）

PL19

39

40

41

42

64

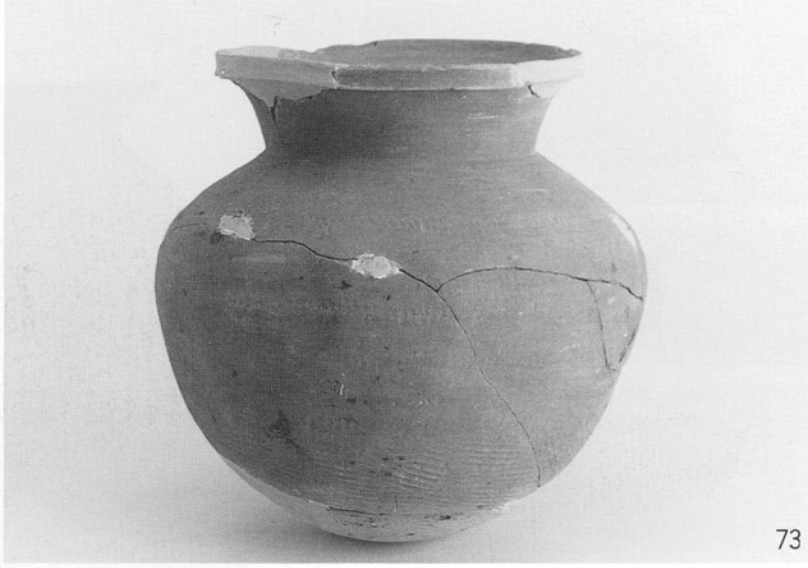
68

69

93

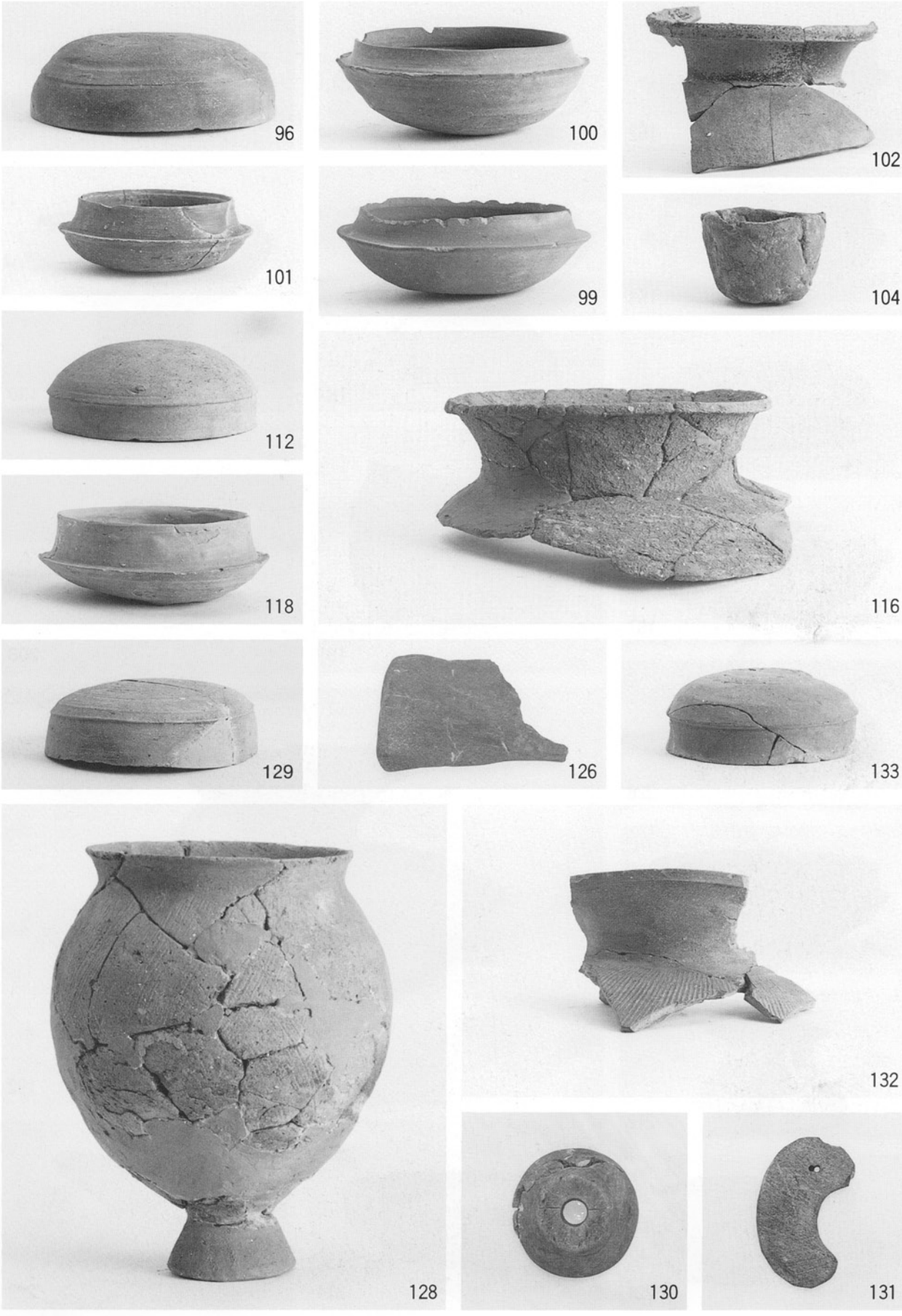
70

72


73

89

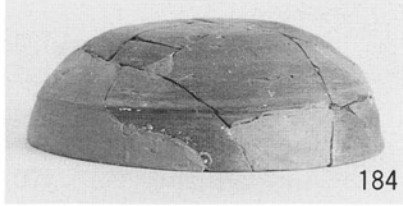
出土遺物（1：3）

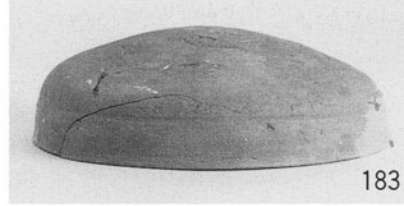


出土遺物（130・131のみ2：3、その他は1：3）

P L21

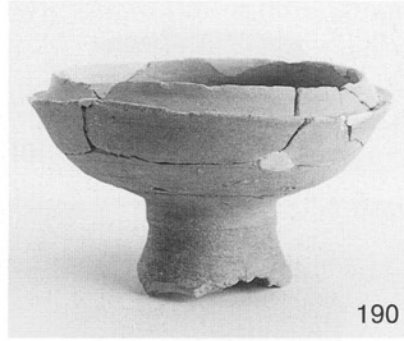
152


184

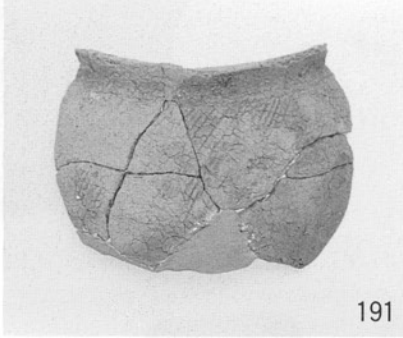

183

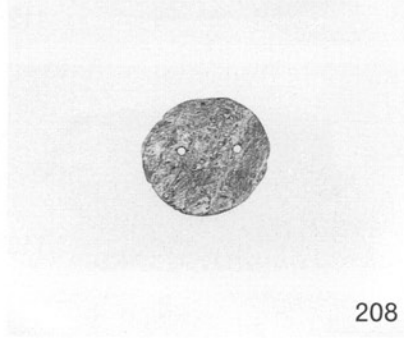
153

187


190

177


191


208

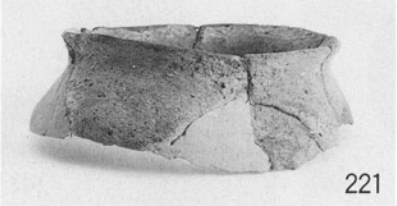
187

228

192

217

218

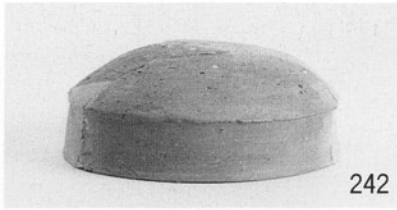

221

224

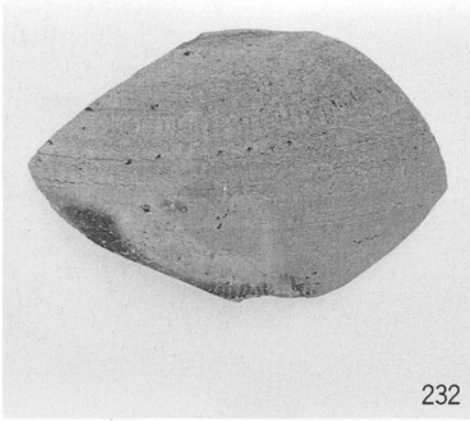
223

出土遺物（208のみ２：３、その他は１：３）

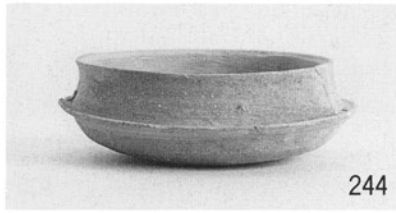
231

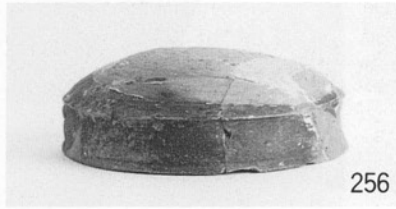

242

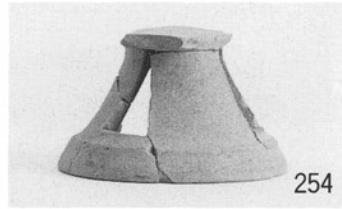
241

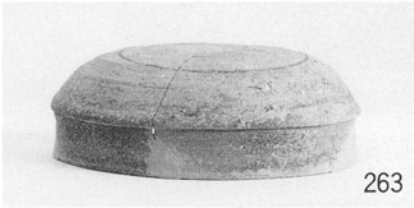

232

237


244


256

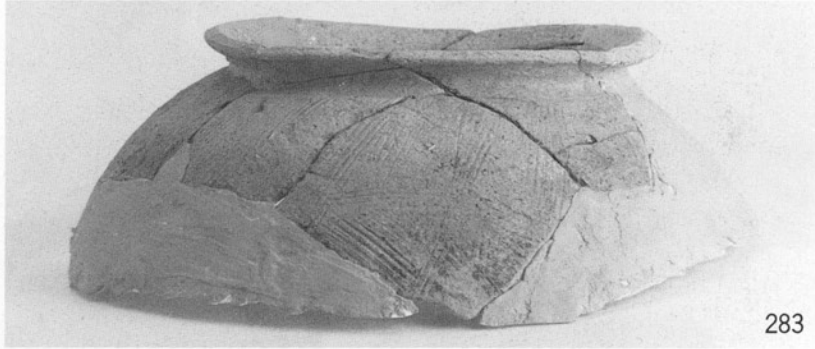

254


263

265

276

282


283

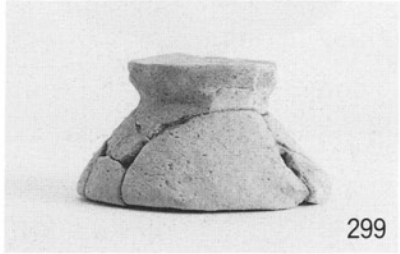
290

287

298

289

288


299

出土遺物（1：3）

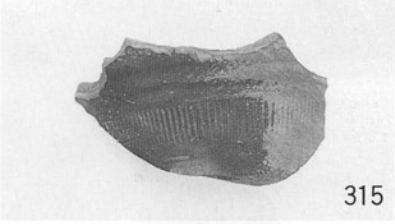
305

306

304

307

310

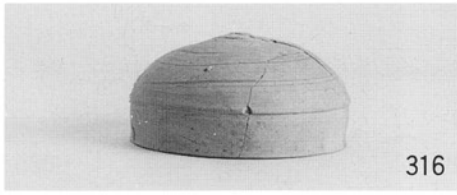

315

312

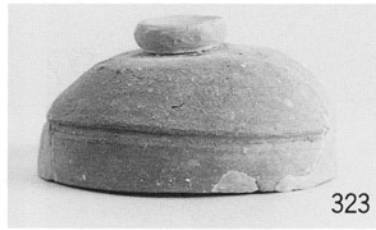
309

314

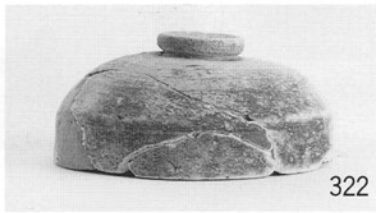
出土遺物（1：3）


316

321


323

318


322

324

320

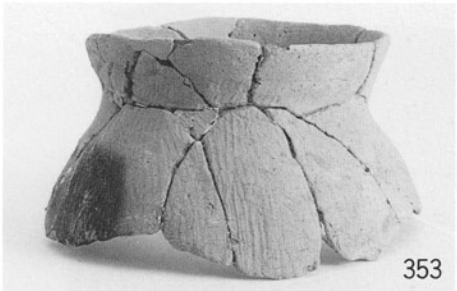
327

343

332

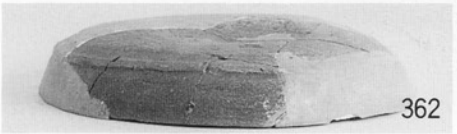
328

345


353

356

364

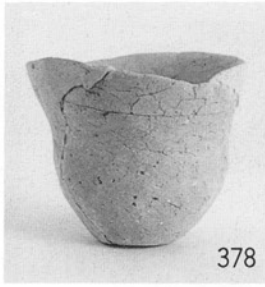

362

369

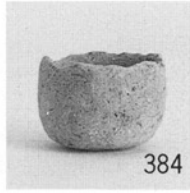
出土遺物（1：3）

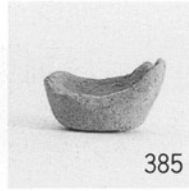
P L25

372


378

383


384


385

386

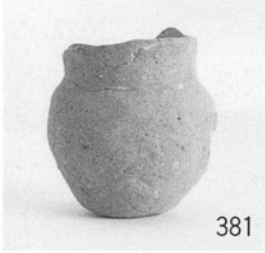
387

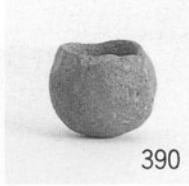
380

388

389

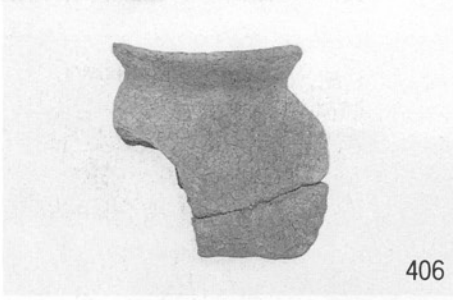
382

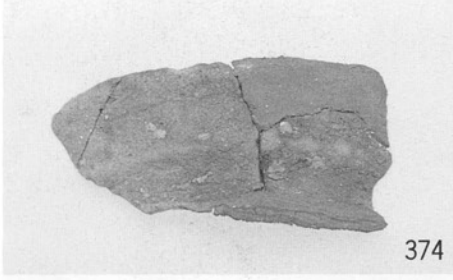

381

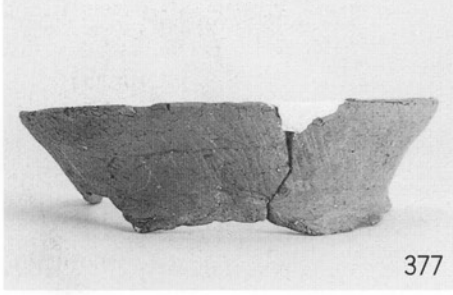

390

391

392


406

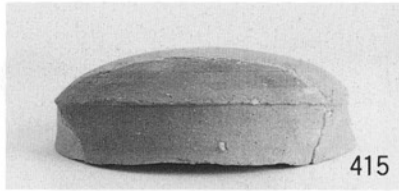

374


377

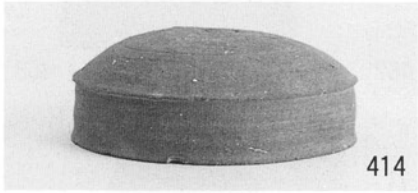
408

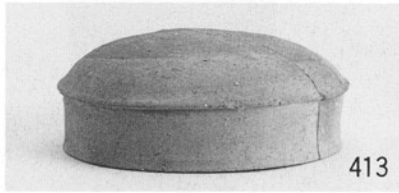
出土遺物（1：3）

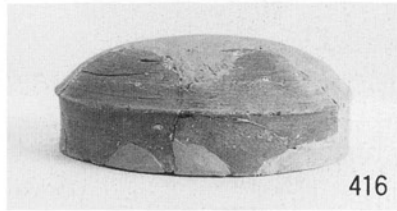
410


415

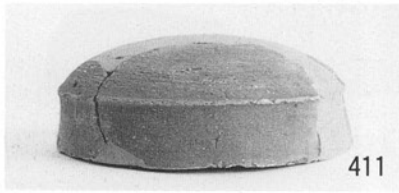
419


414

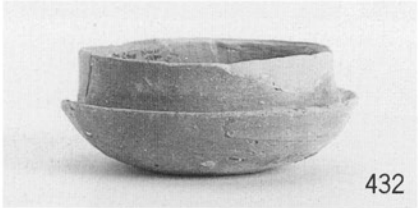

413


416

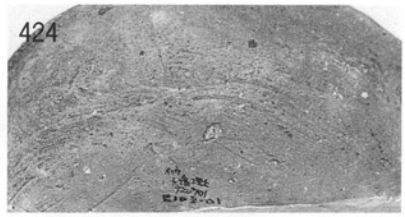
423


411

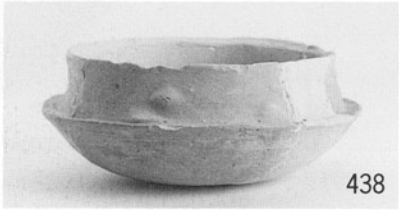
424


432

433


424

425

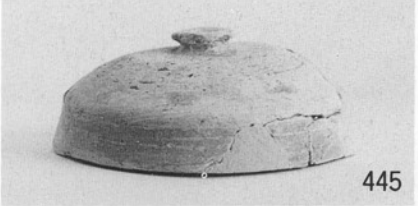

438

430

431

444

446


445

450

455

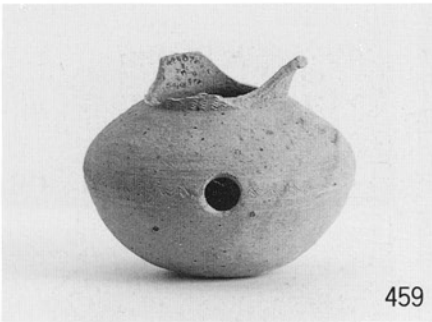
448

447

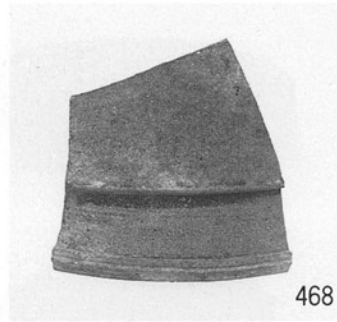
453

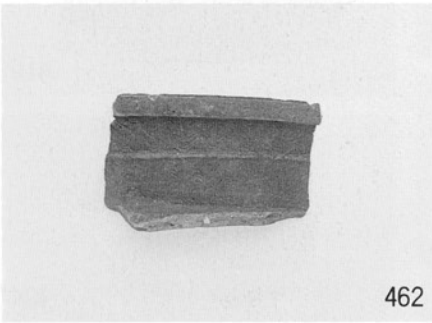
出土遺物（1：3）

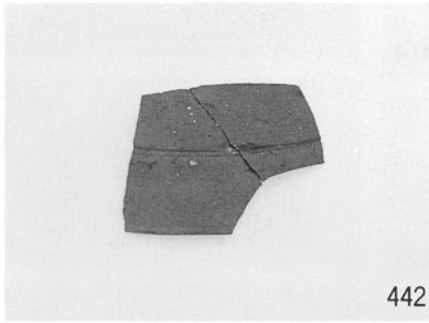
PL27

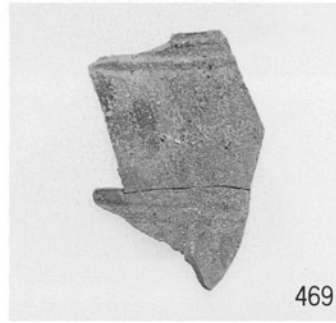

459

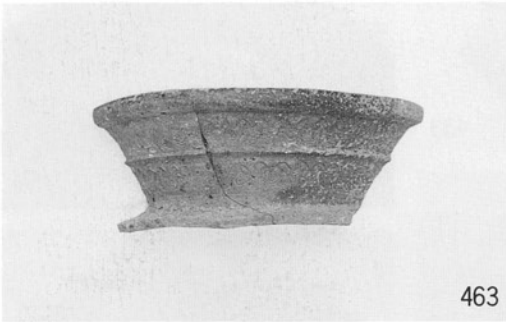
467

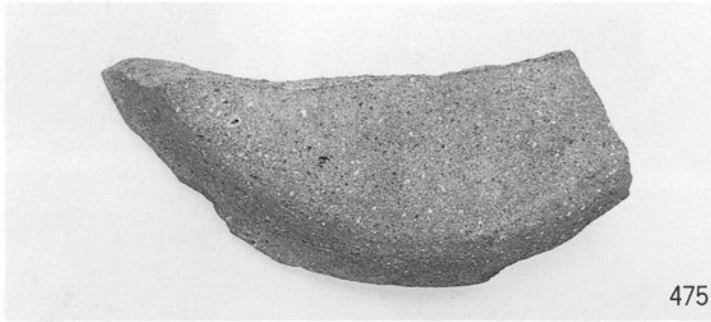

468


462


442


469


463


475

470

出土遺物（1：3）

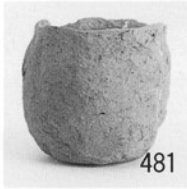
476

482

496

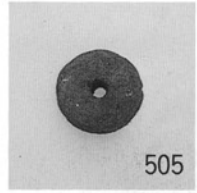
497

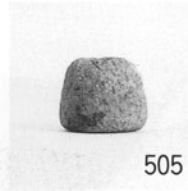
480

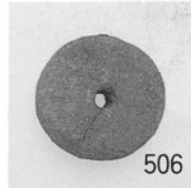

481

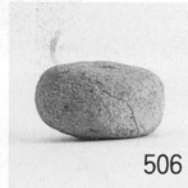
489

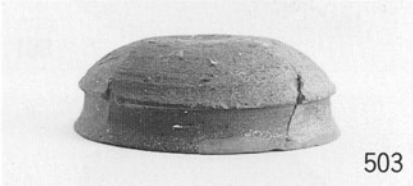
488

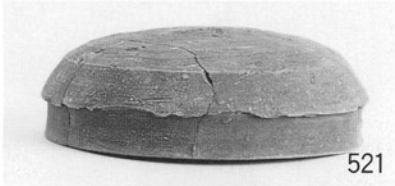

505

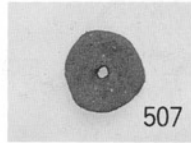

505


506


506

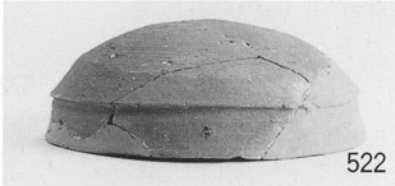

503

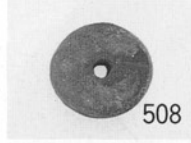

521


507

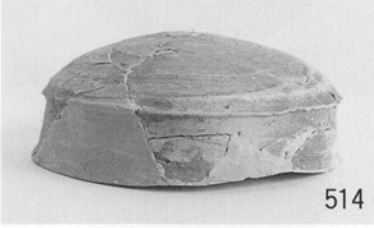
507

512

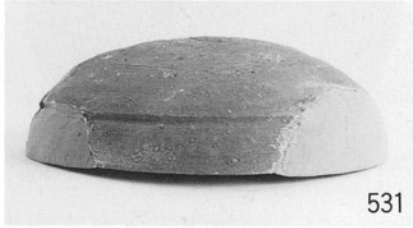

522


508

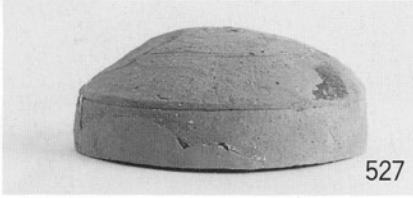
508

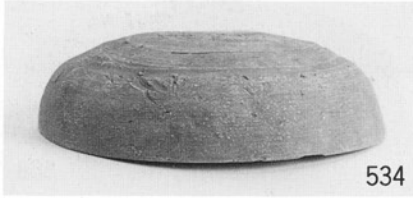

514

526


531

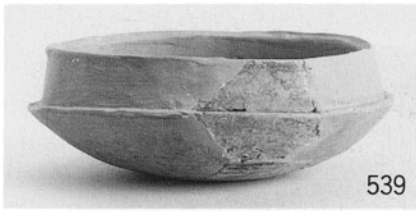
517


527


534

出土遺物（1：3）

P L29


539

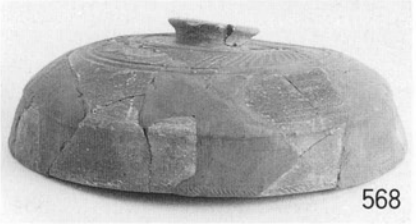
540

543

545

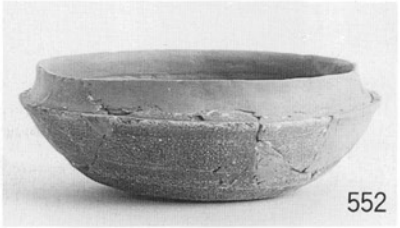
570

568


568

546

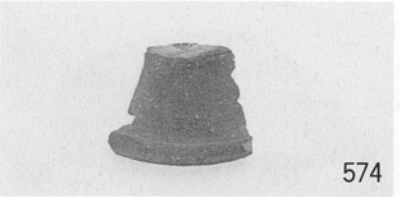
548


552

553

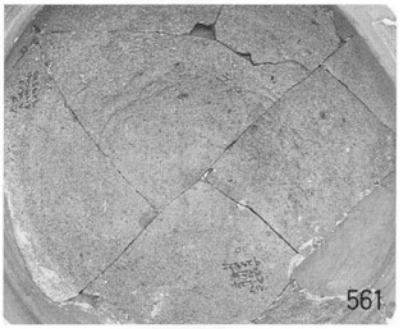
572

573

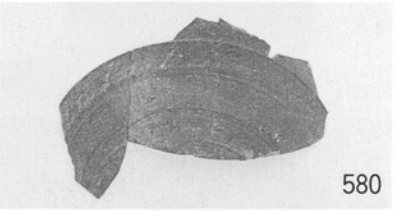

574

554

565


561

561


580

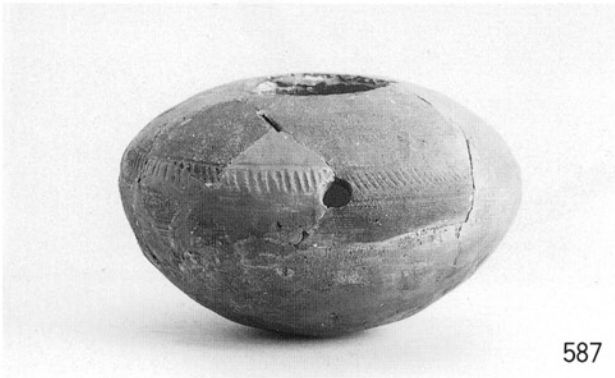
583

584

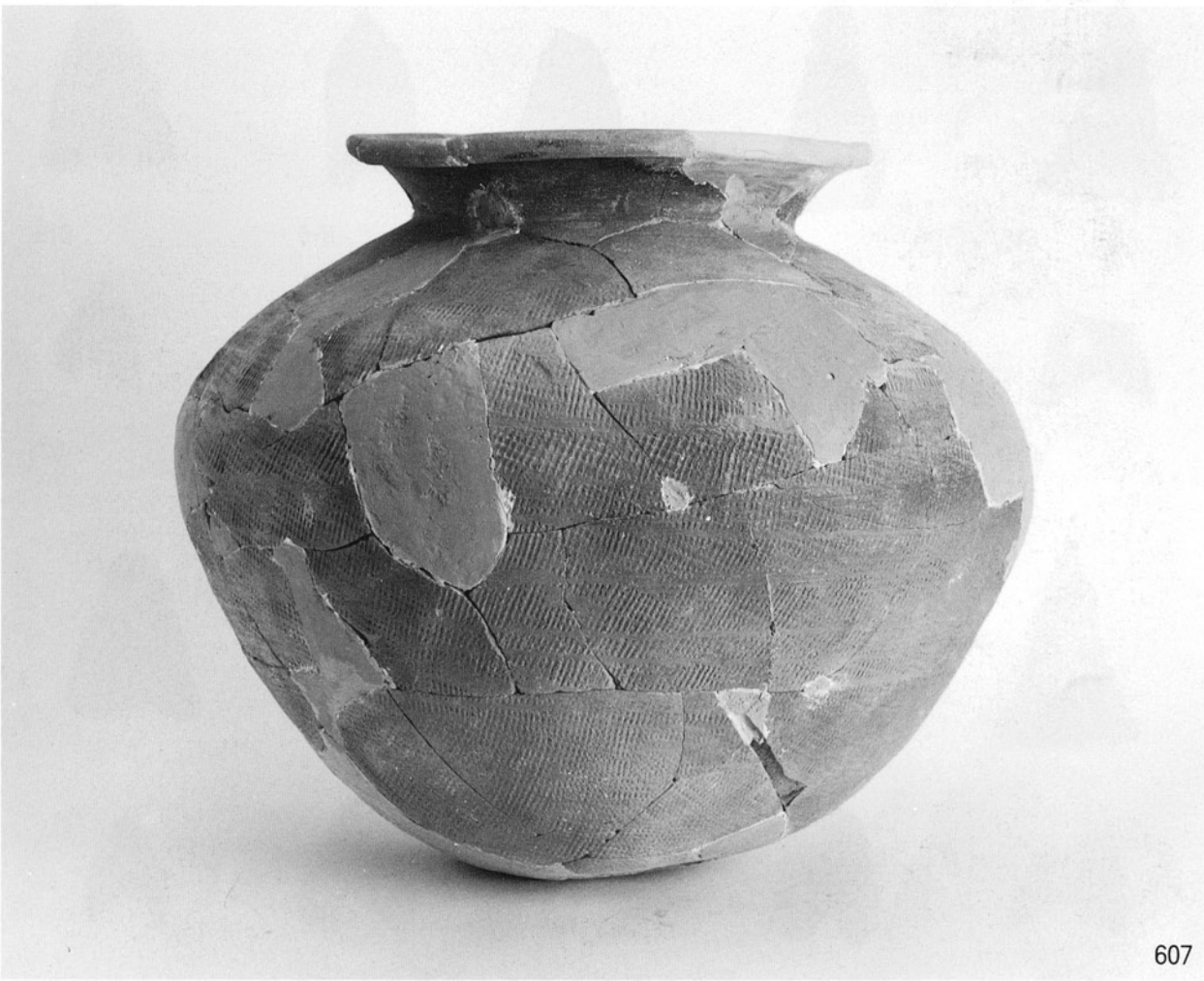
出土遺物（1：3）

585

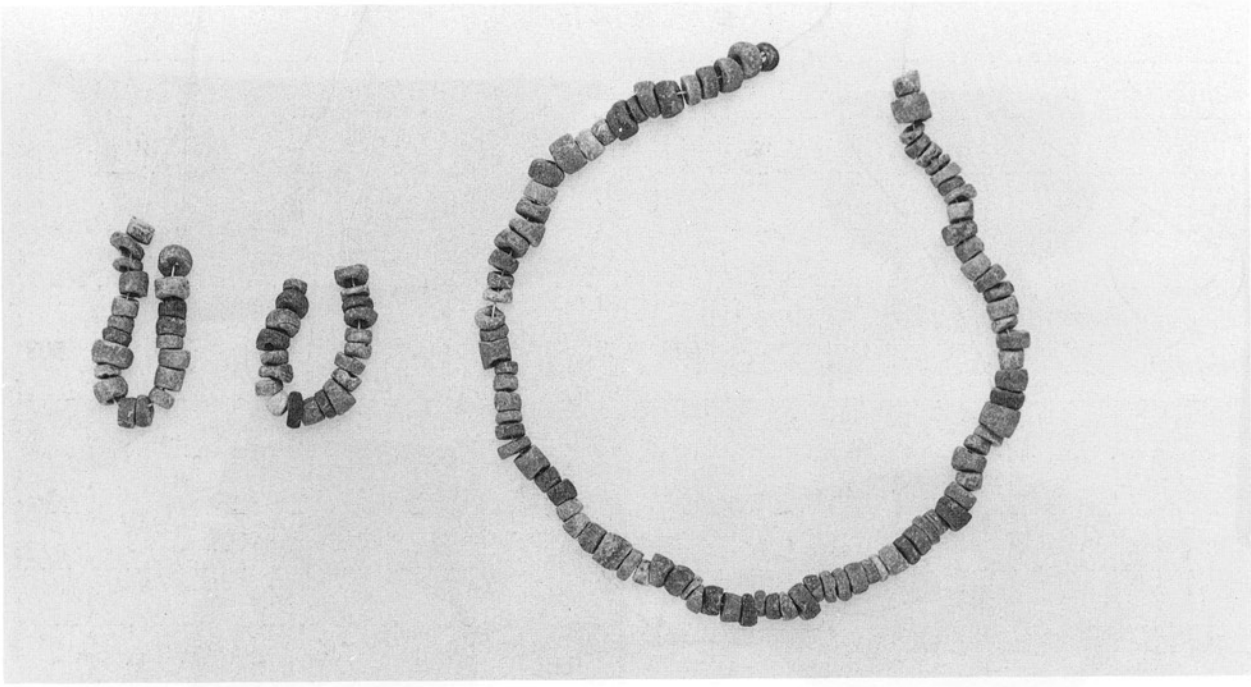
603


587

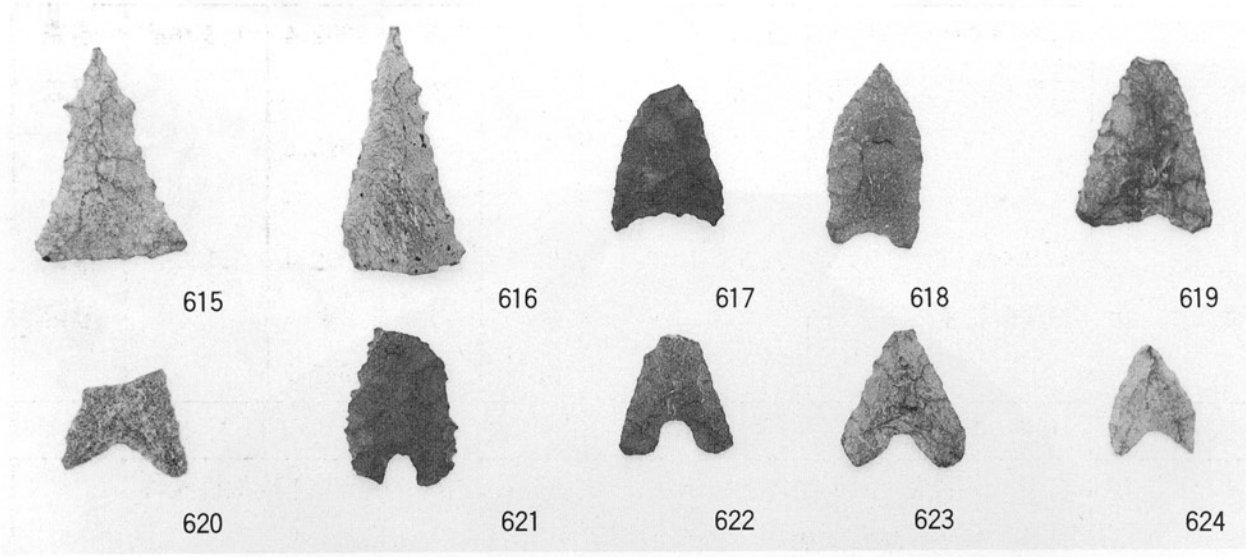
611


607

出土遺物（1：3）



ＳＨ30出土滑石製臼玉（実大）



包含層出土石鏃（実大）

報告書抄録

ふりがな	いっぱんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろ(ろくこうく)けんせつじぎょうにともなうみなみだにいせき・いのういせきはっくつちょうさほうこく
書名	一般国道２３号中勢道路(６工区)建設事業に伴う南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	115－6
編著者名	穂積裕昌・小菅文裕
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒 515－03　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 05965－2－1732
発行年月日	西暦1995年８月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査 期間	調査面 積 m²	調査 原因
南谷	みえけんすずかしいのうちょう 三重県鈴鹿市稲生町	24207	240	34° 49′ 55″	136° 32′ 43″	1992.4 ～ 1992.6	1,300m²	道路 建設
稲生	みえけんすずかしいのうちょう 三重県鈴鹿市稲生町	24207	391	34° 50′ 50″	136° 33′ 0″	1992.4 ～ 1992.7	2,100m²	道路 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南谷	集落	弥生 （後期）	竪穴住居　2 溝　3 土坑　1	弥生土器	高地性集落
稲生	集落	古墳 （後期）	竪穴住居　33 溝　1 土坑　5 不明遺構　1	須恵器 土師器 滑石製勾玉・双孔円板・臼玉	遺跡名変更 旧名称 稲生Ｉ４号窯 竪穴住居からの須恵器出土量多い

平成7(1995)年8月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年4月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告115-6

一般国道23号中勢道路(6工区)建設事業に伴う

南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告

1995年8月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　㈲ 第一プリント社